# 根 来 寺 坊 院 跡

—根来地区普通農道整備事業に伴う
根来寺坊院跡発掘調査—

1989 年 3 月

(財)和歌山県文化財センター

# 根来寺坊院跡

—根来地区普通農道整備事業に伴う
根来寺坊院跡発掘調査—

1989年3月

(財)和歌山県文化財センター

山内全景（航空写真）

Ⅲ-1区全景（北から）

Ⅲ-2区全景（北から）

Ⅲ-1区SB-01全景（北から）

Ⅲ-2区埋甕遺構03（北から）

Ⅳ－2 区全景（南西から）

Ⅲ－1 区漆椀出土状況

# 例　　言

1．本書は、根来地区普通農道整備事業に伴う根来寺坊院跡発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、岩出町より委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

3．調査組織については下記のとおりである。

【和歌山県文化財センター】

| | |
|---|---|
| 事務局長 | 鍋島　伊津夫 |
| 事務局次長 | 菅原　正明 |
| 埋蔵文化財課長 | 辻林　　浩 |
| 埋蔵文化財課技師 | 村田　　弘 |
| 管理課長 | 松田　正昭 |

【調査委員】

牛川　喜幸、岡田　英男、羯磨　正信、巽　三郎、都出　比呂志、藤沢　一夫（各氏とも和歌山県文化財保護審議委員）

4．発掘調査は、昭和59年度から昭和61年度までを辻林・村田が、昭和62年度を村田が担当した。また調査に当たっては、窪田雅秀・田伏高朗・福本啓雅の助力を得た。

5．本書の遺物実測・トレースには村田のほか上野道代・谷口敦子・玉井朱美があたった。
また、遺構・遺物の写真撮影は村田が担当した。

6．本書の遺物実測図と遺物図版に付した番号は一致する。また、遺物の実測図は原則として1/3で掲載したが石造遺物など大きなものについては、1/6を使用した。これらには個々にスケールを付している。ただし、遺物写真については任意の大きさである。

7．本書の執筆は本文については村田が、付章については菅原が担当し、村田が編集した。

# 本　文　目　次

第Ⅰ章　根来寺の地理的環境と歴史 …… 1

第１節　地理的環境と遺跡の範囲 …… 1

第２節　根来寺の歴史 …… 3

第Ⅱ章　調査に至る経緯 ……11

第Ⅲ章　調　　査 ……12

第１節　調査地点と調査の概要……12

第２節　Ⅰ区の調査 ……15

第３節　Ⅱ区の調査 ……37

第４節　Ⅲ区の調査 ……63

第５節　Ⅳ区の調査 ……99

付　　章 ……113

根来寺の油倉 ……113

# 巻頭図版目次


巻頭図版１　山内全景（西上空から）

巻頭図版２　Ⅲ-１区全景（北から）・Ⅲ-２区全景（北から）

巻頭図版３　Ⅲ-１区SB-01全景（北から）・Ⅲ-２区埋甕遺構03（北から）

巻頭図版４　Ⅳ-２区全景（南西から）・Ⅲ-１区漆椀出土状況


# 図 版 目 次


図版―１　１　Ⅰ-１区　全景（南から）　２　Ⅰ-２区　全景（西から）

図版―２　１　Ⅰ-４区　全景（南から）　２　Ⅰ-３・４区　全景（南から）

図版―３　１　Ⅰ-３区　SE-01（南から）　２　Ⅰ-４区　SD-04（南から）

図版―４　１　Ⅱ-１区　全景（南から）　２　Ⅱ-１区　全景（北から）

図版―５　１　Ⅱ-２区　全景（南から）　２　Ⅱ-２区　全景（北から）

図版―６　１　Ⅱ-１区　SE-03（南から）　２　Ⅱ-２区　SE-04（北から）

図版―７　１　Ⅱ-２区　SV-04・05（南から）　２　Ⅱ-２区　SV-04・05　SD-20（東から）

図版―８　１　Ⅱ-２区　SD-15（西から）　２　Ⅱ-１区　SD-09（西から）

図版―９　１　Ⅱ-１区　道（SS-01）・側溝（SD-08）・石敷１（南から）

２　Ⅱ-１区　SV-02（南西から）

図版―10　１　Ⅲ-１区　全景（南から）　２　Ⅲ-１区　全景（北から）

図版―11　１　Ⅲ-１区　北側　SK-25・SV-07・08・09（南西から）

２　Ⅲ-２区　全景（北から）

図版―12　１　Ⅲ-２区　埋甕遺構-03（南から）

２　Ⅲ-１区　SB-01全景（北から）

図版―13　１　Ⅲ-１区　SB-01内　礎石・杭列（北から）

２　Ⅲ-１区　SB-01中央部（北から）

図版―14　１　Ⅲ-３区　全景（南から）　２　Ⅲ-３区　全景（北から）

図版―15　１　Ⅲ-３区　石段（南から）　２　Ⅲ-３区　埋甕遺構-04（北から）

図版―16　１　Ⅲ-３区　北側　SV-15・16（西から）

２　Ⅲ-３区　SD-34（東から）

図版―17　１　Ⅳ-１区　墓石検出状況（北から）　２　Ⅳ-１区　SE-09（北から）

図版―18　１　Ⅳ-２区　調査前風景（南西から）　２　Ⅳ-２区　全景（南西から）

図版―19　１　Ⅳ-２区　南側　SV-17・SD-41（南西から）

２　Ⅳ-２区　全景（北東から）

図版―20　１　Ⅳ-２区　SD-44～47合流部（北東から）

２　同上蓋石除去後（北東から）

図版―21　Ⅰ-１・２区包含層出土の遺物

図版—22　Ⅰ－3区第4層出土の遺物
図版—23　Ⅰ－3区遺構出土の遺物
図版—24　Ⅰ－4区出土の遺物
図版—25　Ⅱ区第1層出土の遺物
図版—26　Ⅱ区第2層出土の遺物
図版—27　Ⅱ区焼土混入土出土の遺物
図版—28　Ⅱ区包含層出土の遺物
図版—29　Ⅱ区遺構出土の遺物（SD-08）
図版—30　Ⅱ区遺構出土の遺物（SD-11・15～22・SK-7）
図版—31　Ⅱ区遺構出土の遺物（SK-02・04）
図版—32　Ⅱ区遺構出土の遺物（SK-04・05・07・16）
図版—33　Ⅱ区遺構出土の遺物（SE-03・SV-02）
図版—34　Ⅲ区第1層出土の遺物
図版—35　Ⅲ区第2層出土の遺物
図版—36　Ⅲ区包含層・遺構出土の遺物（SB-01上層）
図版—37　Ⅲ区遺構出土の遺物（SB-01上層）
図版—38　Ⅲ区遺構出土の遺物（SB-01上層）
図版—39　Ⅲ区遺構出土の遺物（SB-01下層）
図版—40　Ⅲ区遺構出土の遺物（SB-01下層）
図版—41　Ⅲ区遺構出土の遺物（SB-01下層）
図版—42　Ⅲ区遺構出土の遺物（SD-29・32・34　SK-25）
図版—43　Ⅲ区遺構出土の遺物（SD-29・32・34　SK-25）
図版—44　Ⅳ区第1層出土の遺物
図版—45　Ⅳ区第1層・暗灰色粘質土・第2層出土の遺物
図版—46　Ⅳ区第2層・Ⅳ-1・2区遺構出土の遺物

# 挿図目次

図1　遺跡の範囲……1
図2　紀伊名所図会に描かれた根来炎上の様子……8
図3　紀伊名所図会に描かれた近世の根来山内……9
図4　調査区位置図……13
図5　Ⅰ区調査区位置図……15
図6　Ⅰ－1・2区遺構平面・土層図……15
図7　Ⅰ－3・4区遺構平面図……16
図8　SD-03実測図……17
図9　SD-07実測図……17

図10　SX-01実測図……17
図11　SE-01実測図……18
図12　Ⅰ-3区下層遺構平面図……18
図13　Ⅰ-1・2区包含層出土遺物……19
図14　Ⅰ-3区包含層出土遺物……20
図15　Ⅰ-3区第4層出土遺物(1)……21
図16　Ⅰ-3区第4層出土遺物(2)……23
図17　第4層出土土師質皿法量表……23
図18　Ⅰ-3区SD-01出土遺物……24
図19　Ⅰ-3区SE-01上層・中層出土遺物……25
図20　Ⅱ-3区SE-01下層出土遺物……27
図21　SE-01下層出土土師質皿法量表……27
図22　Ⅰ-4区包含層出土遺物……29
図23　Ⅰ-4区SD-04出土遺物……30
図24　SD-05実測図……31
図25　時期別土師質皿法量分布……33
図26　遺構別土師質皿口径・器高平均数値一覧表……34
図27　12c～16cにおける土師質皿の口径推移表……34
図28　Ⅱ区調査位置図……37
図29　Ⅱ-1区石敷1実測図……38
図30　Ⅱ-1・2区遺構平面図……39・40
図31　SD-15実測図……41
図32　SD-09実測図……41
図33　Ⅱ-1区入口部実測図……41
図34　井戸SE-03実測図……42
図35　井戸SE-04実測図……43
図36　石垣SV-04・5、溝SD-20実測図……43
図37　Ⅱ区第1層出土遺物……45
図38　Ⅱ区第2層出土遺物……47
図39　Ⅱ区焼土混入土出土遺物……49
図40　Ⅱ区焼土層出土遺物……51
図41　Ⅱ区包含層出土遺物……52
図42　Ⅱ区SD-08出土遺物……54
図43　Ⅱ区SD-11、15～22出土遺物……55
図44　Ⅱ区SK-02出土遺物……57
図45　Ⅱ区SK-04出土遺物……58

図46　II区SK-05・06・07・16出土遺物……59
図47　II区SE-03上層・中層・掘形出土遺物……61
図48　II区SV-02・04裏込出土遺物……62
図49　III区調査区位置図……63
図50　III-1・2区遺構平面図……64
図51　井戸SE-07実測図……65
図52　井戸SE-08実測図……65
図53　SX-02実測図……66
図54　SB-01実測図……67
図55　石垣SV-06実測図……68
図56　埋甕遺構-03実測図……69
図57　石段実測図……70
図58　III-3・4区遺構平面図……71
図59　埋甕遺構-04実測図……73
図60　SD-34実測図……74
図61　III区第1層出土遺物(1)……76
図62　III区第1層出土遺物(2)……77
図63　III区第2層出土遺物(1)……79
図64　III区SV-09付近土層模式図……80
図65　III区SV-09付近包含層出土遺物……80
図66　III区SV-11付近土層模式図……81
図67　III区SV-11付近包含層出土遺物……81
図68　III区SB-01上層出土遺物(1)……83
図69　III区SB-01上層出土遺物(2)……85
図70　III区SB-01上層出土遺物(3)……87
図71　III区SB-01下層出土遺物(1)……89
図72　III区SB-01下層出土遺物(2)漆器……90
図73　III区SD-29・32・34出土遺物……91
図74　III区SK-25出土遺物(1)……93
図75　III区SK-25出土遺物(2)……94
図76　III区SK-29・35・36・37・39出土遺物……95
図77　III区埋甕遺構-03出土遺物……96
図78　III区埋甕遺構-04出土遺物(1)……97
図79　III区埋甕遺構-04出土遺物(2)……98
図80　IV区調査区位置図……99
図81　井戸SE-09実測図……100

図82　Ⅳ-１・２区遺構平面図 ……101・102
図83　SD-44～47実測図 ……103
図84　Ⅳ-２区と坊院敷地の復元図……104
図85　井戸SE-10実測図 ……105
図86　Ⅳ区第１層出土遺物 ……107
図87　Ⅳ-１区暗灰色粘質土出土遺物……108
図88　Ⅳ区第２層出土遺物 ……109
図89　Ⅳ区-１区遺構出土遺物……110
図90　Ⅳ区-２区遺構出土遺物……111

# 写真目次

写真１　覚鑁上人坐像……3
写真２　根来寺大塔……7
写真３　山内から出土した鉄砲玉……8
写真４　大塔に残る弾痕……8
写真５　調査地全景……12
写真６　SD-04……15
写真７　SD-05……31
写真８　第４層土師質皿出土状況……32
写真９　石敷路面（大門付近）……38
写真10　人形手青磁碗……48
写真11　象嵌青磁……53
写真12　漆椀出土状況……66
写真13　SD-34……74
写真14　鍔および匙……91
写真15　茎石出土状況 ……100
写真16　石垣下の排水口 ……105

# 根 来 寺 坊 院 跡

# 第１章　根来寺の地理的環境と歴史

## 第１節　地理的環境と遺跡の範囲

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は、紀伊国と泉州の境、現在の行政区画で言えば和歌山県の北部、那賀郡岩出町に所在する。

岩出町の北側には、大阪府との境を成す和泉山脈が東西に横たわっており、根来寺はその一峰である一乗山の南麓と南側の前山と称される独立山塊状の山に狭まれた狭小な平地部と谷筋に位置する。このような両側を山に囲まれた地形は、天然の要害としての条件を備えたものであると言えようし、事実、このことを裏づけるようにこれまでの発掘調査においても前山西端の山頂部、和歌山平野を一望する地点には櫓台と考えられる遺構や前山の稜線上には岩盤を整形した土塁の跡が検出されている。このことは、中世、根来寺が僧兵と呼ばれる武装集団を擁していたことと無縁ではない。つまり、中世の根来寺は単に宗教活動を行う寺院としてだけでなく、武装集団を擁した城砦的な側面をも合わせ持った寺院であったことを物語るものと言えよう。

いまひとつ地理的要因で根来寺にとって重要な点は、交通の要衝に立地しているという点である。現在、根来の西側を大阪方面へと通じる県道岩出・泉佐野線が通っているが、この道は往時の根来街道に相当するものであり、古くから泉州へ抜ける道すじに当っていた。

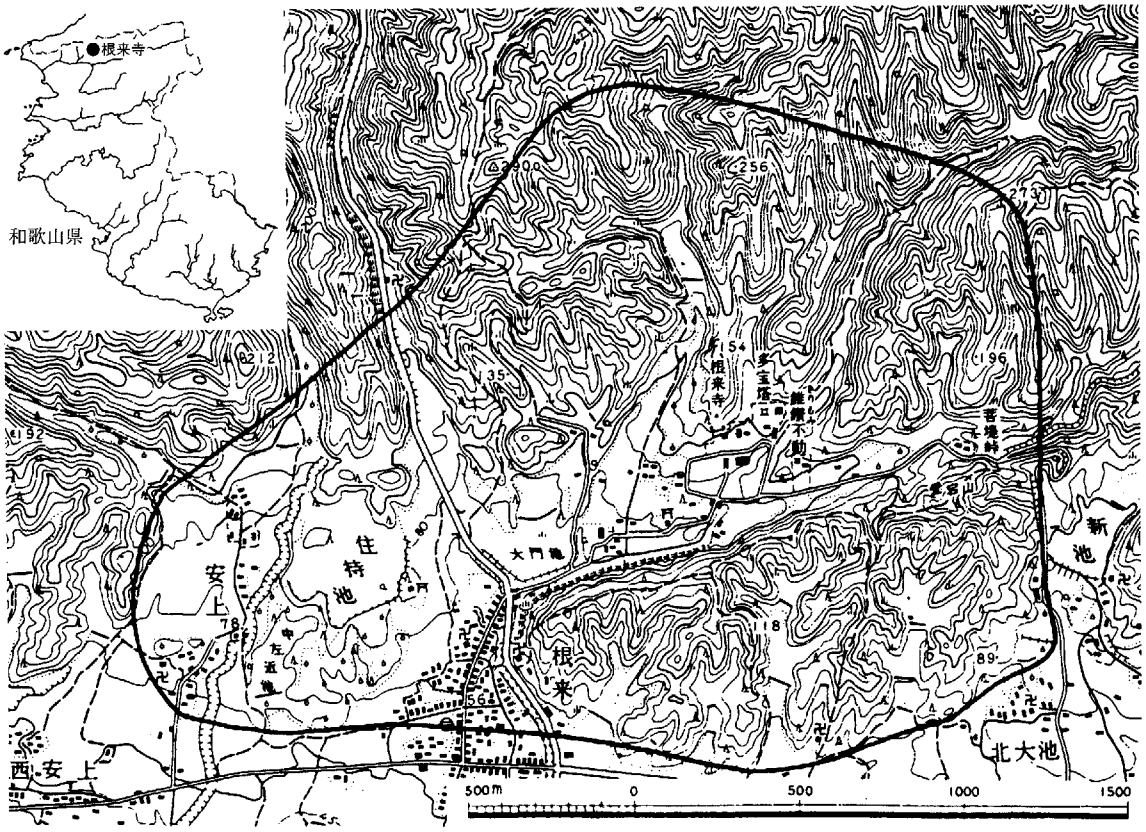



図１　遺跡の範囲

このことは、後述するように根来寺が泉南地域への勢力の伸長をはかる上で非常な利点となったであろうし、室町時代後期には商業地として栄える堺とを結ぶ道として重要な役割を担なったものと思われる。

また、前山の南側、和泉山脈の山裾から紀の川北岸の河岸段丘や小扇状地は古くから開発がすすんだ地域であるが、この地域を古くは南海道が東西に走り、近世になると淡島街道や大和街道といった主要道が通じていた。

さらには、これらの道の南側を流れる紀の川の水運をも考え併せれば、根来寺はまさに交通至便の地にあったものといえよう。

気候的には、比較的温暖の地であり、山険しく冬は厳寒の地である高野山に比べればはるかに居住に適した地である。ただ、当遺跡周辺は瀬戸内気候区に属し、年間降水量は1400ミリ程度と県内でも最も雨の少ない地域である。このことは、中世以降、根来寺の周辺でいくつもの溜池が造営されたり、用水をめぐる論争が頻繁に起り、そのつど根来寺が積極的な働きをなしたことと無縁ではないものと思われる。

現在、根来寺の遺跡の範囲として考えられているのは、図１にも図示したように、寺域の東側に展開する町屋部分を含めれば、東西3.5km、南北2.0kmにも及ぶ広範囲なものである。もとより開山当初からこのような広い範囲にわたって院や坊が並んでいたわけではなく、全盛期を迎えた15世紀後半から天正の兵火によって焼亡するまでの寺域がほぼこの範囲に相当するものと考えている。

遺跡の範囲内では、当調査を含め昭和51年度以来継続して発掘調査が行われているが、これによって開山当初の範囲やその後の盛衰についておおまかではあるが判明しつつあり、また、山内では立地条件により、敷地面積や遺構、遺物の出土状況に差異が見出されることなども判明している。

これらの詳細については次節で詳しく述べることにしたい。

**註**

(1) 最近では中井　均氏がこのような根来寺の城砦的側面をとりあげ紹介している。[遺跡の防御的評価――寺院と城郭の関わりを中心として――]（滋賀県教育委員会『敏満寺遺跡』1988）

(2) 古墳時代の遺跡としては八幡塚古墳・黒土古墳・三味塚古墳群などがあり、奈良時代の遺跡としては西国分寺跡や紀伊国分寺、官衙の可能性が指摘されている岡田遺跡などがある。

(3) 旧南海道を継承するもので、紀の川の北岸、粉河から根来を経て加太に達する道であり、加太の淡嶋神社への参詣道として利用されたためこの名がある。

(4) 近世、和歌山城下と大和・伊勢方面をむすぶ要道、和歌山城下の京橋を起点とし、紀の川南岸を東行し、岩出の渡しで北岸に渡り粉河町井田で淡島街道と合流したのち古南海道の行程を大和へと抜ける。

(5) 溜池の大部分は近世以降の築造であるが、「中左近池」などは室町時代後期、和泉熊取の中家が築造に当ったものとされる。

## 第2節　根来寺の歴史

新義真言宗の総本山として知られる根来寺の歴史を述べるにつけては宗祖であり創建者でもある覚鑁というひとりの高僧とその前史として彼の高野山での活動について触れることからはじめねばならないであろう。覚鑁についての伝記類はきわめて少なく、覚鑁自身が述べたとされる「述懐詞」なるものが残されてはいるが、その生涯にわたって詳らかにされたものではない。また、後世においてはいくつかの伝記・縁起類が残されているが、そのうちもっとも古いものでも根来山内において覚満が記したとされる「霊瑞縁起」（2巻）であり、これとても覚鑁寂後150年近くを経た正応五年（1292）のことで、彼の生涯を眺めるにはあまりにも資料が少ない状況である。

こうした資料的な制約のなかで、これまでに研究されてきた覚鑁の生涯をたどれば概ね次のようになるであろう。

覚鑁は平安時代の後期、嘉保二年（1095）、肥前の国知津之荘（現在の佐賀県鹿島市とされる）の総追捕使伊佐平次兼元と同国の有徳の娘との間に生まれたとされる。生来仏道をよろこぶ子どもであったといわれ、幼い頃より仏道に帰依し、十三歳で京都の仁和寺成就院へ入った。ここでは寛助大僧正にその才を認められたという。さらにその翌年には、南都興福寺に留学し、法相三論を学ぶ。再び仁和寺に戻り、十六歳のときに出家する。その後ふたたび南都に行き、興福寺・東大寺などで学んだとされる。

いわばこの時期の覚鑁は十三歳で上洛して以降、ひたすら教理を極めんと勉学にいそしんでいた時期と言えよう。

このような覚鑁に転機が訪れるのは、永久二年(1114)、覚鑁二十歳の時である。この年、覚鑁は成仏せんと欲し住み慣れた京洛を離れ、高野山へ上る。

高野山にあっては、幾人かの師の許に通い事相の秘談を授けられたり、求聞持法を修したりと真言行者としての深智の開発を目的に修行に専念していたとされる。この高野山において覚鑁上人が行ったもっとも大きな事業は「伝法会」の復興にあったと言えよう。伝法会とは、春と冬の二季にわたって行う学問の研修会とでも言うべきものであり、春は修学会と名づけ秘密の経学を授け、冬は練学会と称し文義の誤りを糾すというものである。

この伝法会は、もともと真言宗の開祖である空海亡き後、師の空海に接していた弟子である実恵僧都や真然僧正がその志を継いで興したものであるが、久しく途絶えていたものである。

覚鑁がこの復興を思い立ったのはいつの頃からは判然としないが、その経済的基盤を確保するために紀伊国那賀郡石手村の荒野を開発して、その立券を国司に要請したのが大治元年（1126）であることを思えば少なくともその数年

**写真1　覚鑁上人坐像**

前から企てていたことはまちがいのないところであろう。この立券および目的とする伝法会の復興についてはその後もさまざまな紆余曲折を経ることになるのだが、その強い意志と白河法王、さらに鳥羽上皇の厚い庇護も得て、次第に形を整えて行くことにる。

具体的にいえば、伝法会を修する道場である伝法堂を擁する寺院、すなわち伝法院の開創は大治4年（1130）に、その翌年には伝法堂そのものも出来上がっていたものと考えられる。この堂宇は当初一間四方の小規模な建物であったが、参加者が次第に多くなったため、新たに三間四方の堂宇を建て、さらに鐘楼・経蔵も並べ建てるという大規模な結構をおこなう。いわゆる高野山における大伝法院の完成である。この事業の遂行に当たっては、鳥羽上皇の並々ならぬ手厚い庇護があったとされる。

こうした高野山上での華々しい活躍は伝法会の隆盛とともに覚鑁の名声を高め、鳥羽上皇の庇護はますます盛んなものとなり、長承元年（1132）には大伝法院領としてあらたに院宣を賜り、石手・山崎・岡田・山東・弘田庄を、また御願寺である密厳院領として相賀庄の寄進を受けることになる。まさに覚鑁にとっては、絶頂期にあったと言えよう。

しかしながらこうした覚鑁の活躍はしだいに高野山にあった旧来の勢力——金剛峯寺方から反感を買うこととなる。もとより覚鑁の目的は共通する宗祖である空海の素意を体しての伝法会の復興であり、高野山（金剛峯寺）の隆盛を思ってのことであろうが、金剛峯寺方からみれば、伝統や従来の慣習を無視したものであり、感情的なしこりが覚鑁および大伝法院方への非難となって表出したものと言えよう。

**表1　根来寺関係略年表**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1090頃 | 寛治年中 | | 那智修行者根来坊、根来の地に豊福寺建立 |
| 1095 | 嘉保 | 2 | 覚鑁（幼名・伊左弥千歳）肥前国（知津庄）に生れる |
| 1107 | 嘉承 | 2 | 覚鑁、上洛し仁和寺成就院寛助大僧上のもとへ入る（13歳） |
| **1114** | **永久** | **2** | **覚鑁、高野山へ入る（20歳）** |
| 1128 | 大治 | 1 | 平為里、石手村を伝法会復興のために寄進（根来要書上） |
| 1129 | | 4 | 石手庄を伝法院領とする院宣（要書上） |
| **1130** | | **5** | **覚鑁、伝法令を興し、高野に伝法院建立** |
| 1132 | 長承 | 1 | 大伝法院領として石手・山崎・岡田・山東・弘田庄及び大伝法院末寺豊福寺、密厳院領として相賀庄寄進の院宣（要書上） |
| 1135 | 保延 | 1 | この頃、高野山内において大伝法院方への非難高まる |
| 1139 | | 5 | 覚鑁、金剛峰寺方の非難を避け、一時弘田庄豊福寺（現在の根来寺の地）に高野より下る |
| **1140** | | **6** | **覚鑁、根来豊福寺にこれ以降止住** |
| 1142 | 康治 | 1 | 志富田郷を大伝法院領とする国司庁宣（要書上） |
| **1143** | | **2** | **根来豊福寺山内に神宮寺・円明寺建立供養。同年12月12日覚鑁入滅** |

こうした非難の声が大きくなる中で、覚鑁は座主職を弟子に譲り、外部との接触を一切断ち、無言の行に入る。この行は四年の長き渡るものであったが、その間も両者の対立は埋め難く、結願後も不穏な情勢は続いていた。

保延六年(1140)、相賀庄の問題から両者が一触即発の事態に陥り、覚鑁はこれを避けるため離山を決意し、根来の地に赴く。覚鑁が離山するに当たって、根来の地を選んだ理由は、根来が大伝法院領である弘田庄にあることと、この地にすでにあった豊福寺が大伝法院の末寺であったことによるものであろう。ともかくこの離山後、再び高野山に戻ることはなく根来に止住することとなる。この離山、およびその後の根来寺での情況は不明であるが、覚鑁を慕うかなりの弟子が行動をともにしたであろうし、根来の地においても活発な活動がなされていたと想像するには難くないであろう。いずれにせよ、この覚鑁の離山、根来止住が根来寺としてのスタート地点と言うことができるであろう。ただし根来にはすでに述べたように豊福寺と呼ばれていた寺がこれ以前から存在したとされており、まったくの無人の世界、未開発の地ではなかったと思われる。ただ、これまでの発掘調査で見る限り根来山内ではこの時期の遺物はほとんど見つかっておらず、名実ともに覚鑁をもって根来がスタートしたと考えてよい状況であり、後述するに当たって仮にこれ以前を根来とは直接関係のないという意味も込めて根来0期と呼んでおきたい。

さて、このような経緯のもとで、根来に住むこととなり、豊福寺のなかに円明寺・神宮寺を建て、活動を開始した覚鑁ではあったが、在住することわずか三年で病に倒れ、康治二年（1143）12月にその生涯を根来・円明寺で

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1145 | 久安 | 1 | 山東庄、日前国懸宮造営の国役賦課について相論（要書下） |
| 1146 | | 2 | 志富田庄を大伝治院領とする院宣（要書上） |
| 1168 | 仁安 | 3 | 大伝法院、金剛峰寺両寺対立（裳切騒動） |
| | | | このころ、高野山内において金剛峰寺方と大伝法院方の相論が相次ぎ、焼き打ちがおこなわれるなど対立が激化する |
| 1286 | 弘安 | 9 | 大湯屋騒動、大伝法院方根来へ大挙離山、高野山への帰山禁止される |
| **1288** | **正応** | **1** | **頼瑜、大伝法院及び大伝法院方の諸寺籍を根来に移籍** |
| 1309 | 延慶 | 2 | 栄厳、根来寺禅定院で翌年にかけて平家物語（延慶本）を書写 |
| 1336 | 建武 | 3 | 足利尊氏、根来衆徒に援軍派遣要請（三宝院文書） |
| 1337 | | 4 | 和泉国信達庄を大伝法院領として寄進（三宝院文書） |
| 1369 | 正平 | 24 | 頼豪、「束草集」編纂 |
| | | | このころ、根来において金剛菩薩像などの造仏がさかんにおこなわれる |
| 1460 | 正 | 1 | 用水相論により根来衆、守護畠山義就と対立（碧山日録） |

終えることとなる。

覚鑁の死後、行動を共にしてきた弟子たちのその後の動向については、よく分かっていないが、円明寺を核として根来山内において引き続き活動していたものと思われる。一方、高野山においても覚鑁の離山、そして死後も大伝法院は存続しており、活動は続けられていた。しかし依然として本寺方との争いは尽きず、対立の構図を残したままであった。こうした緊張状態は、先にも述べたように学問あるいは教義上の対立というよりも両者の感情的な対立であったようで、伝法院方の服装が華美に過ぎるといったようなことから双方の武力対立が起こる（裳切騒動・1168）、また、同じく伝法院方が作ろうとしていた湯屋が大きすぎるといったことで再度武力衝突（大湯屋騒動・1286）に至るといったような有様であった。

とくにこの大湯屋騒動は大伝法院方の壊滅的な敗北に終わり、この事件を契機として伝法院方の衆徒は大挙高野山を離山し根来へと走る。本寺方の圧力もあり帰山できない状況に追い込まれる。ここに至って、伝法院方は、高野山での活動をあきらめ、正応元年(1288)、大伝法院方の諸機能および寺址のことごとくを根来へと移籍する。

この思い切った改革を成したのは、当時大伝法院の学頭であった俊音房頼瑜であった。これにより覚

―フロイス著『日本史』より

堺の付近を和泉の国(と称するが)、その彼方には、国を挙げて悪魔に対する崇拝と信心に専念している紀伊の国なる別の一国が続いている。その国には一種の宗教（団体）が四つ五つあり、そのおのおのが大いなる共和国的存在で、昔から同国ではつねにその信仰が盛んに行われて来た。いかなる戦争によってもこの信仰を滅ぼすことができなかったのみか、ますます大勢の巡礼が絶えずその地に参詣していた。（中略）

第三番目の宗派ないし宗団は（やはり）一部の仏僧（が構成するもの）であり、根来衆と称する。（中略）

都に隣接した諸国（に住む）日本の武将や諸侯は、互いに交戦する際、ゲルマン人のようにこれらの僧侶を傭兵として金で傭って戦わせた。彼らは軍事にはきわめて熟知しており、とりわけ鉄砲と弓矢にかけては、日頃不断の訓練を重ねていた。そして（戦場においては）自分たちに有利な条件を傭す側に（容易に）屈するものであった。

彼らの寺院なり屋敷は、日本の仏僧（の寺院）中、きわめて清潔で黄金に包まれ絢爛豪華な点において抜群に優れている。そしてその寺院なり住居が清潔であればあるほど、（一方では）彼らは生活において忌むべき人間（に堕落しているもの）である。

彼らは（根来の）宗団内に留まって戦に参加していない時には、他の仏僧らと同様に偶像崇拝ならびにその宗派の儀式に従っていた。

彼らはその地を訪れる巡礼者たちを懇切丁寧にもてなし、二、三日間無料で食事を提供した。（中略）その他にどうして二千もの寺院があり得るかと疑われないためには〔それどころか多くの人は、かならずと言ってよいほど、根来衆の寺だけで三千あるとさえ言っていた〕、（次の事情を）理解（してもらっておく）必要がある。これら一万人の仏僧らが唯一の僧院の中で一人の上長の許で暮らしていたと考えるべきでない。（彼らは）そのようではなく、二、三、あるいは、四里にわたる清浄で広大にして優美な盆地に（展開して住んで）いたのである。そこでは主だった仏僧らは自分たちの坊を有し、それらにはきわめて大きい囲いや施されていた。彼らの一人は同所に本山を構え、弟子にあたる仏僧ら、自分の屋敷、厠、配膳所、広間、居間、さらに収入に応じた多数の小さい山寺を有し、なおその他にも多数の寺が上記の房以外の地に散在していた。彼らの間に見られる夥しい数の高位の仏僧らによって（寺数は）増えており、少なくとも我らが今までに見て来た事実、およびそれに類した事柄に徴すれば、これらの寺院がいとも多かったことはなんら疑いの余地はない。

（中央公論社版　松田毅一　川崎桃太　訳）

鑁以来、150年余に及ぶ高野山における大伝法院の幕は閉じられ、教団としての再スタートが根来で切られることとなる。覚鑁が根来に止住して以後、この頼瑜による再スタートまでの期間（約150年）を根来Ⅰ期としておく。

覚鑁により再スタートを切った根来では、頼瑜のあとも後継者に恵まれ、円明寺を核とした学問研鑽の熱は盛んとなり、しだいに教団としての隆盛期を迎えることとなる。この時期、三尊像などの造仏事業も盛んとなり、これらを安置するためにも必要であり、悲願でもあった大伝法院の建立、併せて伽藍整備などもなされている。大伝法院の建立時期については、判然としないが、遅くとも14世紀の末には完成を見ていたものとされる。さらに100年後の15世紀末には、現在も残っている大塔の立柱を執り行なっている。当然、この時期には山内には数多くの宗徒が住むようになり、子院の数も増えたものと思われる。なお、現在、根来寺は宗派として“新義真言宗”と称されているが、この“新義”なる言葉もこの頃から使われ出したと言われている。こ

**写真2　国宝根来寺大塔**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1496 | 明応 | 5 | 大塔心柱立柱（心柱銘文） |
| 1504 | 永正 | 1 | 和泉守護細川氏と根来寺和解（政基公旅引付） |
| 1536 | 天文 | 5 | 根来山内の常住方、客方両能化対立（能化相論之状） |
| 1543 | | 12 | 杉ノ坊、津田監物ら種ケ島銃を伝える（鉄砲記）（鉄砲由緒書） |
| **1547** | | **16** | **大塔完成（立柱から51年）** |
| 1568 | 永正 | 11 | 根来衆、織田信長に味方、三好三人衆と戦う（信長公記） |
| 1577 | 天正 | 5 | 根来衆、織田信長に味方、雑賀攻めに参加（信長公記） |
| 1584 | | 12 | 根来衆、雑賀とともに岸和田城を攻略するが敗退 |
| **1585** | | **13** | **豊臣秀吉、紀州攻め、根来寺炎上大伝法院の一画及び山門を残し焼失** |
| 1587 | | 15 | 豊臣秀長、大和郡山城に山門を移築（多聞院日記） |
| **1600** | **慶長** | **5** | **徳川家康、根来寺再興を許可（義演准后日記）** |
| 1602 | | 7 | 根来寺に学侶・行人僧の帰山が相次ぐ（根来寺院血脈） |
| 1610 | | 15 | 浅井幸長、大伝法堂丈六三尊像返還 |
| 1615 | 元和 | 1 | 復興院坊59坊（学侶坊8、行人坊51）（浅野家文書） |

の頼瑜以降、大塔の立柱が執り行われる約200年間を根来II期としておきたい。

さて、このように隆盛を誇っていた根来寺ではあったが、こうした繁栄の最中にもさまざまな問題は生じていた。ひとつは世俗権力との結びつきという対外的な問題である。とくに建武以来室町幕府との結びつきは強く、寄進を受ける代わりに幕府と縁の深い醍醐三宝院の門跡が根来寺の座主を相伝するといったことにもなっていた。その後戦国期に入ると、信長からの派遣依頼に応え、兵を送るなど各地の戦いに加わるという動きを見せる。

いまひとつは、内的な問題として山内における常住方と客方の対立という問題があった。根来の学徒衆は山内で出家した常住方と呼ばれる一派と各地から根来に留学していた客方と呼ばれる一派があったが、この両者が“能化”と言われる役職をめぐって山内を二分する形で対立する。さらに学問を主にする学侶とよばれる層とその雑役に預かる行人とよばれる層とに分かれていた。本来行人は学侶のために役をとるものであったが、戦乱の世にあって次第に武装を固め、山内にあっては学侶方を圧する力をもつとともに、対外的に戦闘におよぶといった行動をとるようになっていった。俗に言われる根来の僧兵である。

このようなことから、開祖覚鑁が目指し、あるいは頼瑜がその礎を築いた学問の研修の場としての根来寺といった風潮はしだいに薄れ、きわめて世俗的な集団となっていったと言えよう。

ただ、こうした学問的な荒廃が根来寺の衰微に直接結びついたわけではない。むしろこの時期は世俗と結びつくことで、経済的な繁栄を謳歌するとでもいう時期であり、前頁に付した当時日本に来ていた宣教師であるフロイスの本国への書簡に記されているように、この時期の根来寺のかなりの繁栄が看て取れるのであろう。

しかしこのような栄華を極めていた根来寺も天正13年(1585)、羽柴秀吉により壊滅

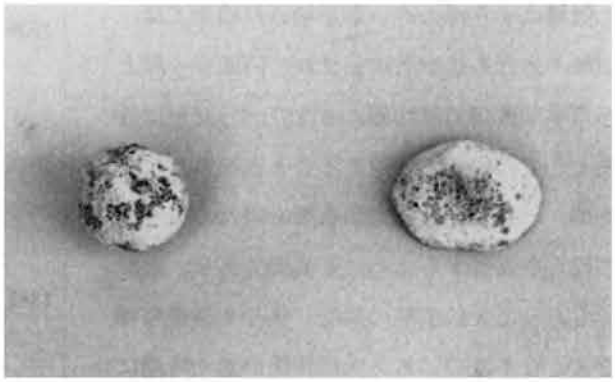


写真3　山内から出土した鉄砲玉

写真4　大塔に残る弾痕

図2　紀伊名所図会に描かれた根来寺炎上の様子

的な打撃を受ける。直接的な動機は、先の小牧・長久手の戦いで根来が徳川方についたことが原因であろうが、信長亡き後、天下一統を狙う秀吉にとって武装勢力である根来寺は紀州を平定するうえで雑賀衆とともに排除しておかねばならない存在であったと言えよう。

根来側は岸和田・泉南でこれを迎え撃ったが、出城はあえなく落城し、この報が伝わるや、根来山内の宗徒はいち早く四散したと言われており、秀吉軍は難なく根来に入り、その夜、山内各所から火の手が上がり、二昼夜にわたった火災で、大塔・大師堂・大門などいくつかの建物を遺し、全山ことごとく灰燼に帰した。いわゆる“天正の兵火”と呼ばれるものであり、この紅蓮の炎の中に中世根来寺の栄光と繁栄が燃え尽きた瞬間であった。大塔立柱からこの天正の兵火までのおよそ

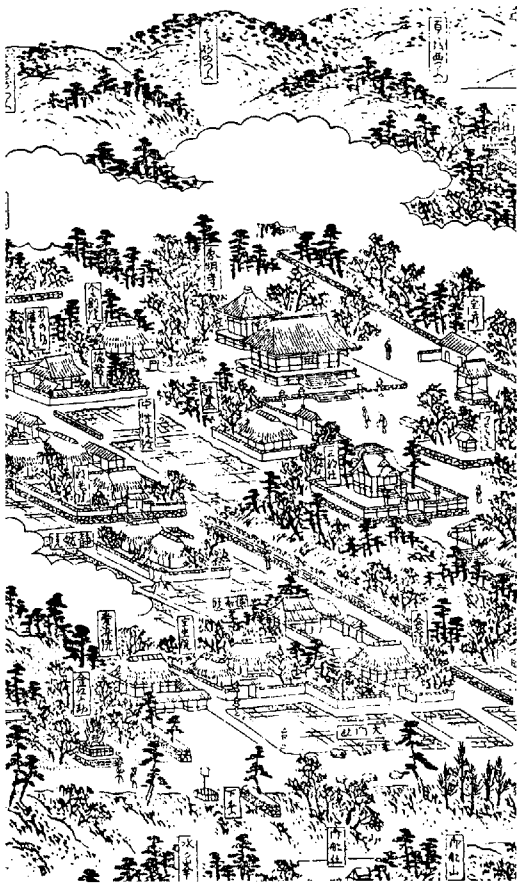


**図3　紀伊名所図会に描かれた近世の根来寺山内**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1633 | 寛永 | 10 | 復興院坊78坊（定条条之事） |
| 1636 | | 13 | 智積院日誉「根来破滅因縁」著述 |
| 1677 | 延宝 | 5 | 行人方12坊追放（伝法院絵図） |
| 1690 | 元禄 | 3 | 覚鑁に興教大師の大師号追号 |
| 1707 | 宝永 | 4 | 護持院隆光、根来復興勧進願出。このころ86坊復興 |
| 1710 | | 7 | 隆光の根来復興勧進願出、許可される（隆光僧正日記） |
| 1739 | 元文 | 4 | 根来寺復興勧化許可願出（桃井家文書） |
| 1751 | 宝暦 | 1 | 紀州藩主徳川宗直、行人方追放、両学頭制復活 |
| 1789 | 寛政 | 1 | 山内有住寺院31カ寺（無住62カ寺） |
| 1797 | | 9 | 字頭法住、藩主治宝に根来寺大伝治院再建の願い出（再建意趣） |
| 1798 | | 10 | 法主、不動堂梵鐘鋳造、奥の院興教大師御廟造立 |
| 1799 | | 11 | 清信院（藩主重倫生母）奉納厨子大塔に納入 |
| 1800 | | 12 | 吹上御殿（清信院旧居）を本坊として移築 |
| **1821** | **文政** | **4** | **法恕、大伝法堂再建普請着工（縁由略記）** |
| 1827 | | 10 | 大伝法堂再建落慶供養、丈六三尊像修理完成開眼供養（墨書銘、栄性） |

200年間を根来III期としておく。

このように突如として繁栄を断たれただけに根来寺の復興はままならないものがあった。

復興許可さえなかなかおりず、この間、兵火の難を逃れ離山していた当時の能化であった専誉と玄宥は各地を遍歴した後、それぞれ大和の長谷寺と京都の智積院に新義の法灯を掲げ新たな活動を開始する。一方、本家の根来寺では、兵火後15年を経た慶長５年(1600)になってようやく徳川家康から復興許可がでる。天正の兵火による焼亡からこの復興許可が出るまでの期間は、わずか15年であるが、根来寺に空白が生じる期間であり、これを根来IV期としておきたい。

復興許可を契機として根来寺には帰山僧があいつぎ、しだいに山内は活況を呈しはじめる。しかし帰山した僧たちも自分たちの住坊を再建し維持するのがせいいっぱであり、本格的な再建、あるいはかつてのように伝法院を核とした学問の研鑽、隆盛にはほど遠い状況であったと言えよう。

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | 清信院奉納厨子を大日如来像胎内に安置 |
| 1835 | 天保 | 6 | 大門再建着手 |
| 1852 | 嘉永 | 5 | 大門落慶供養（棟札） |
| 1872 | 明治 | 5 | 豊山・智山両本山に所属 |
| 1886 | | 19 | 根嶺座主職の称号復活 |
| 1945 | 昭和 | 20 | 単立寺院として独立 |
| 1953 | | 28 | 新義真言宗設立 |
| 1962 | | 37 | 本坊（吹上御殿）焼失 |
| 1972 | | 47 | 新義真言宗総本山となる |
| 1980 | | 55 | 大伝法堂丈六三尊像調査、根来寺坊院跡本格的発掘調査始まる |

こうした中で、先に触れた新義の法灯を掲げた京都の智積院・奈良の長谷寺の力添えや元和５年以降は紀州徳川家の手厚い保護を受けることにもなり、当時の資料からその数字を追えば、坊院の数は寛永10年（1633）に78、元禄２年（1689）に80、さらに下った宝永（1710）には86のと言った具合に漸次増加していった。また、悲願でもあった大伝法院の再建（1826）や大門の再建（1845）も成し遂げられた。

この復興期、復興許可の下りた慶長５年以降、江戸時代の終わりまでを根来Ｖ期としておく。なお、根来寺は徳川幕府瓦解以後、その保護者を失い、明治・大正と衰退を余儀なくされる。とくに昭和20年の大戦後は従来から関係の深かった智積院（智山派）・長谷寺（豊山派）の支配から離脱し単立寺院としての歩みを余儀なくされ、寺域を維持するのさえ苦しい状況下に置かれていた。こうした中で、宗祖覚鑁の御廟所でもあり新義真言宗の祖山でもある根来寺の復興を願う声が地元のみならず新義の法灯を掲げる諸寺院からも起こり、昭和47年には宗派の総本山と定められ真言宗新義派の中枢となって新たな歩みをはじめている。

# 第II章　調査に至る経緯

新義真言宗の総本山として知られる根来寺は、和泉山脈の麓と前山と称されている独立山塊状の丘陵に囲まれた東西に細長い山間の地に所在している。

最盛時には、この狭い山間の地に数百という坊院が建ち並び、繁栄を誇っていたとされているが、天正13年（1585）の羽柴秀吉による紀州平定の過程で焼き討ちに遭い、ほとんどの堂塔坊舎が焼失するという壊滅的な被害を受けた。その後、江戸時代に入ると紀州徳川家の庇護のもと、いくつかの坊院も復興するが、明治期には再度廃れはじめた。とりわけ第二次大戦後の農地改革においてそれまで根来寺が所有していた敷地の大部分が山内に居住していた農家に払い下げられることになり、この山間の地には農地が拡大することとなった。

農地としての利用状況は、戦後まもなくは水田が大部分であったが、近年、蜜柑・八朔といった柑橘の栽培が盛んとなり、一部では苺のハウス栽培も行われ始めている。こうした農業のさらなる活性化・基盤整備をはかるため、岩出町では地元の要望もあり、山内の桃坂谷を縦貫する農道の拡幅工事が計画された。

当地付近は、根来山内ではもっとも幅が広く、奥深い谷であり、往時には数多くの坊院が建てられていたと想定される地区に当たっており、また、現在の農道は往時の道を踏襲している可能性の高いことが考えられた。

このため、町当局と和歌山県教育委員会で埋蔵文化財取り扱いについて事前の協議・調整がなされた。その結果、当該地は、根来寺の中でもきわめて重要な箇所に相当することから、本来は現状保存が望ましいところではあるが、営農基盤の整備上必要な工事であることも事実であり、工事に際しては基本的には拡幅部分のみならず現有道路下も含めた全面において埋蔵文化財の調査を実施し記録保存を行うこと、また工事に伴う石垣は関知石を用いて積むなど周囲の景観を考慮して行うことなどが合意された。

調査は工事の進捗状況に併せて、昭和59年度から昭和62年度まで４次に渡って実施され、延長約690ｍ、面積約2,600㎡について行われた。

その後、昭和63年度に発掘調査で出土した遺物の整理作業を実施し、本報告書を刊行することとなった。

# 第Ⅲ章　調　　査

## 第１節　調査地点と調査の概要

前述したように調査は山内の中でも最も奥深く広い谷である蓮華谷のほぼ中央を縦断して通る農道の拡張工事に伴うものであり、調査地点は図４でも図示したようにほぼ現有の農道部分に相当する。

調査区の平均幅は４ｍほどで、延長距離はおよそ690ｍである。調査区の南端部で標高88ｍ、北端部ではおよそ116ｍと、比較的緩やかな傾斜となっている。

なお、調査地点については、これとは別に各年次毎（Ⅰ～Ⅳ区）に詳細な位置図を図示したのでこれらを参考されたい。

調査は、調査区の幅が４ｍと狭小なため、院もしくは坊の一区画そのままの調査に及ぶことはなく、また遺構についてもその一部をかすめる調査が大部分であり、その全容を明らかにするには至らなかった。しかし大きく見れば、蓮華谷の中央部に細長い調査トレンチを設定したような形の調査となったわけで、検出した遺構や個々の成果とは別に、この谷における塔頭寺院の在り方、時期的な消長を推定する上で貴重な資料を得ることができたものと考えている。

今回の調査の中で特筆すべき点は、まず道の問題点があげられる。この蓮華谷は、かねてから天正13年の秀吉による根来攻めの際の浸入路であったと言い伝えられてきたところであるが、現有の農道がその道を踏襲しているのか否か、道幅もその当時のものかといった問題があった。

写真５　調査地全景

調査の結果は、大部分において現有の農道が往時の道と踏襲しているが、調査区の中央部と北端では現有とは異なるルートを通っていたことが判明した。

道幅については、およそ2.2ｍであり片側に側溝を伴うこと、路面の一部には石敷を施すなどの施設が設けられていることが判明した。

この他、検出した遺構には石組の井戸や暗渠排水溝、土塀の基礎部分、石垣、備前の大甕を埋設した貯蔵施設などがある。

このうちⅡ区で検出した石組の井戸は直径2.2ｍを測るもので、これまでの山内の調査で検出した井戸の中では最大規模を有するものである。その大きさや、道に隣接して作られているなど従来の井戸の在り方とはやや様相を異にするものであり、ひとつの塔頭に属するものではなく共有の井戸であった可能性も考えられる。

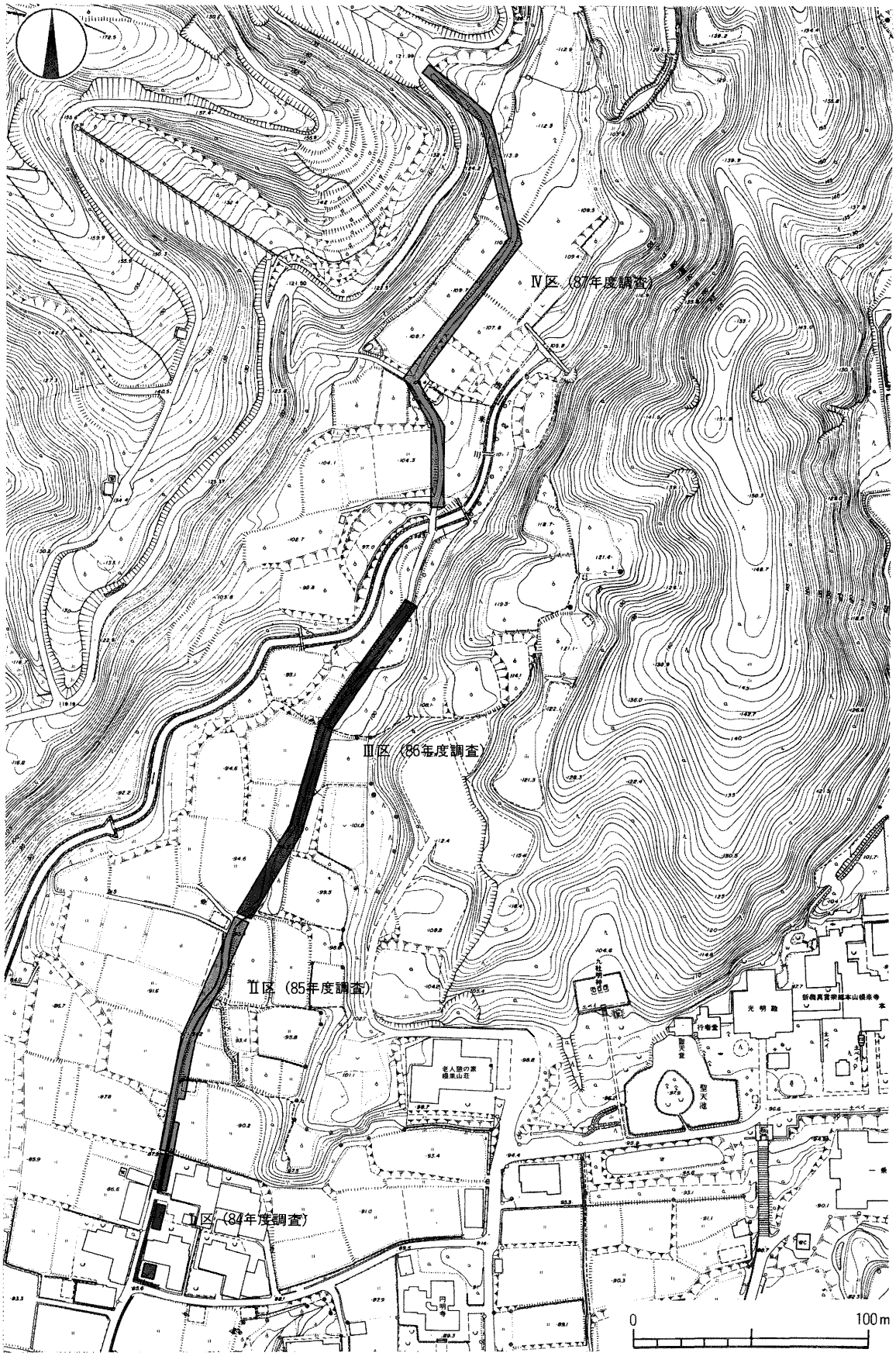



図 4　調査区位置図

反面、上記のような大きな井戸とは対照的に、この谷筋においては、直径40～50cmほどの小さな井戸の多いことが特徴であった。これはこの谷における湧水の度合なのか、あるいはこの谷に立地する塔頭の性格を反映したものなのか、今後の課題となるものと思われる。

その他、特筆すべき遺構としては、備前の大甕を複数個埋設した貯蔵施設がある。これは従来から甕ピットと称され根来山内では数多く検出され、他の中世遺構でも検出されている遺構であるが、今回III区で検出したものは、40～50cm大の大きな石を用いて周囲を堅固にかこったものであり、この種の遺構の新たな類例として注目される。

出土遺物については、調査区の大部分が往時の道と重複していたため、その出土量は調査面積に比して少ない状況であった。

主な遺物には、中世のものとしては中国製の青磁碗、白磁皿、染付皿、備前、瀬戸、常滑などの国産陶器、土師器の皿、瓦質のこね鉢といった日常雑器があり、近世のものとしては、伊万里の染付製品、唐津の鉢などが出土している。

この他に鉄砲の玉や金銅製の六器など中世の根来寺のイメージを髣髴させるような遺物も小量ながら出土しており、III区の厚く堆積した炭層の中からは、漆の椀、皿がまとまって出土した。根来の漆については広く喧伝されているにもかかわらず、これまでの調査では出土例がきわめて乏しく残りの良いものではなかったが、今回の出土品は残りが良く、出土状況から時期も限定できるものである。さらにこの製品の外底部には、いずれも［理性院］と院名が漆書されており、発掘調査から寺院跡を比定するという成果をあげることができたものである。

これらの遺構・遺物全体から見れば、この蓮華谷は立地条件のよいこともあって、古くから坊院の造営がなされていたことが推察される。とりわけ谷の入口部付近、今回の調査区で言うⅠ区付近は、開山の地である円明寺にもほど近いこともあってか、遅くとも14世紀の初めには塔頭寺院が展開したものと考えられる。

また、近世の遺物も多く出土していることから、天正の丘火により焼亡したものの、その後の復興は順調であり、この谷筋においては想像していた以上に近世にも多くの塔頭が営まれていたことが窺える状況であった。

## 第2節　Ⅰ区の調査

### 1．遺　　構

昭和59年度に実施した調査であり、全調査区の南端部分に相当する。大門から北東約100m、谷の入口部付近にあたり、標高は88m前後を測る。

この付近には民家が建っており、とくに調査対象区の南側部分は道もすでにコンクリート舗装がなされ生活道として利用されていることなどから全面発掘は行えず、図5にも図示したように小さなトレンチを設定して調査に当った。以下、各小区ごとに記述する。

#### a．Ⅰ-1区

表土及び第1層から近世の遺物が出土しているが、近世の遺構についてはすでに削平を受けており検出し得なかった。検出した遺構には中世の石垣がある。

**石　　垣**（SV-01）

南側に面をもつもので、基底部から2段分、およそ40cmほどが残存していた。西側は撹乱を受けており不明だが、周囲の現況からおそらく敷地を区画する石垣であり、西南隅近くに相当する部分と考えられる。この石垣の下（南側）には天正の兵火によると考えられる焼土が押し出されたかたちで堆積しており兵火直前まで機能していたことが推定される。

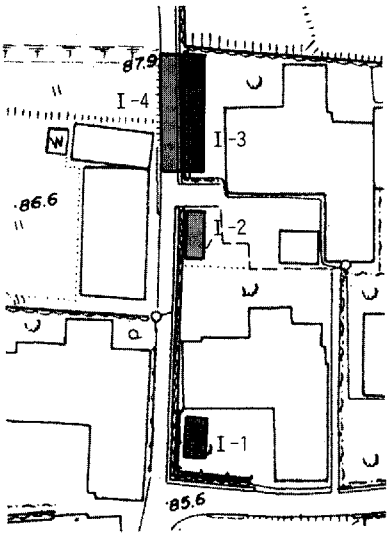



図5　Ⅰ区調査区位置図

#### b．Ⅰ-2区

**溝**（SD-01）

幅約20cmを測る石組の溝である。蓋石を欠くがおそらく暗渠排水溝であったものと思われる。底部には扁平な緑泥片岩が敷

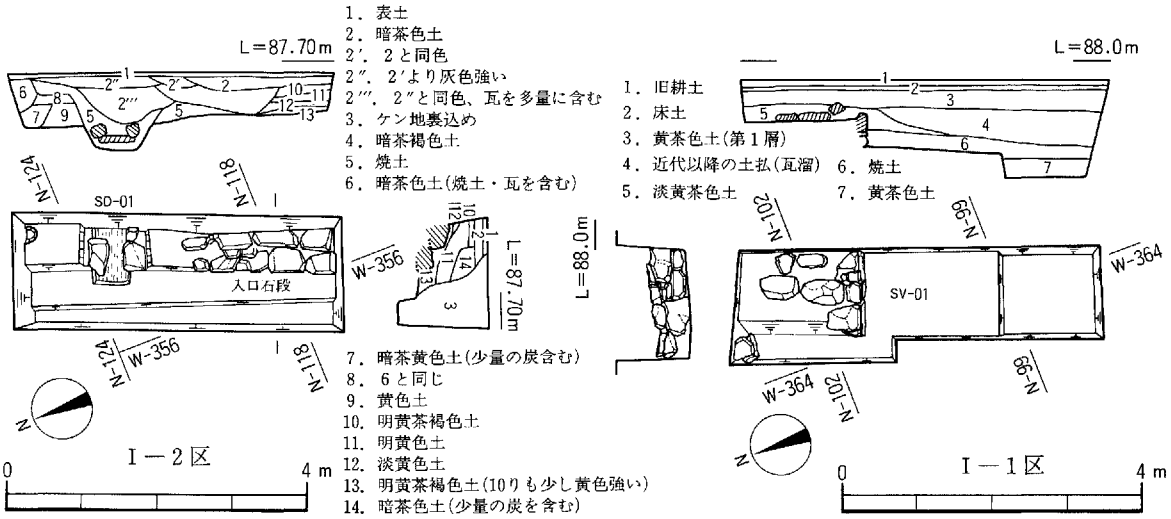



図6　Ⅰ-1・2区遺構平面・土層図

かれていた。このような例はこれまでの調査査においてもいくつか検出されており、幹線流路への放出に際しその流れで溝底部が浸食されるのを防ぐ目的で設けられているものと思われる。

**入口石段**

検出規模で長さ1.5mを測る、30cm大の上部の比較的平らな石を並べたもので、玄関部の階段になるものである。2段分しか残存していなかったが、過去の検出例から4～5段はあったものと思われる。

写真6　SD-04

### c．Ⅰ-3区

この調査区では二時期の遺構面を確認した。第1次遺構面で検出した遺構には石列、溝などがある。これらは出土遺物から江戸中期以降の再興後の遺構であることが判明した。

**石　列 1**

抜き取りのため一部を欠損するが、検出規模で延長6mを測る。側溝(SD-04)と平行しており東側に面をもつ、おそらく道路東側に存在していた塔頭寺院の築地塀の基礎となるものであろう。

**溝**（SD-02・03）

いずれも幅約30cm、深さ20cm前後を測る石組の暗

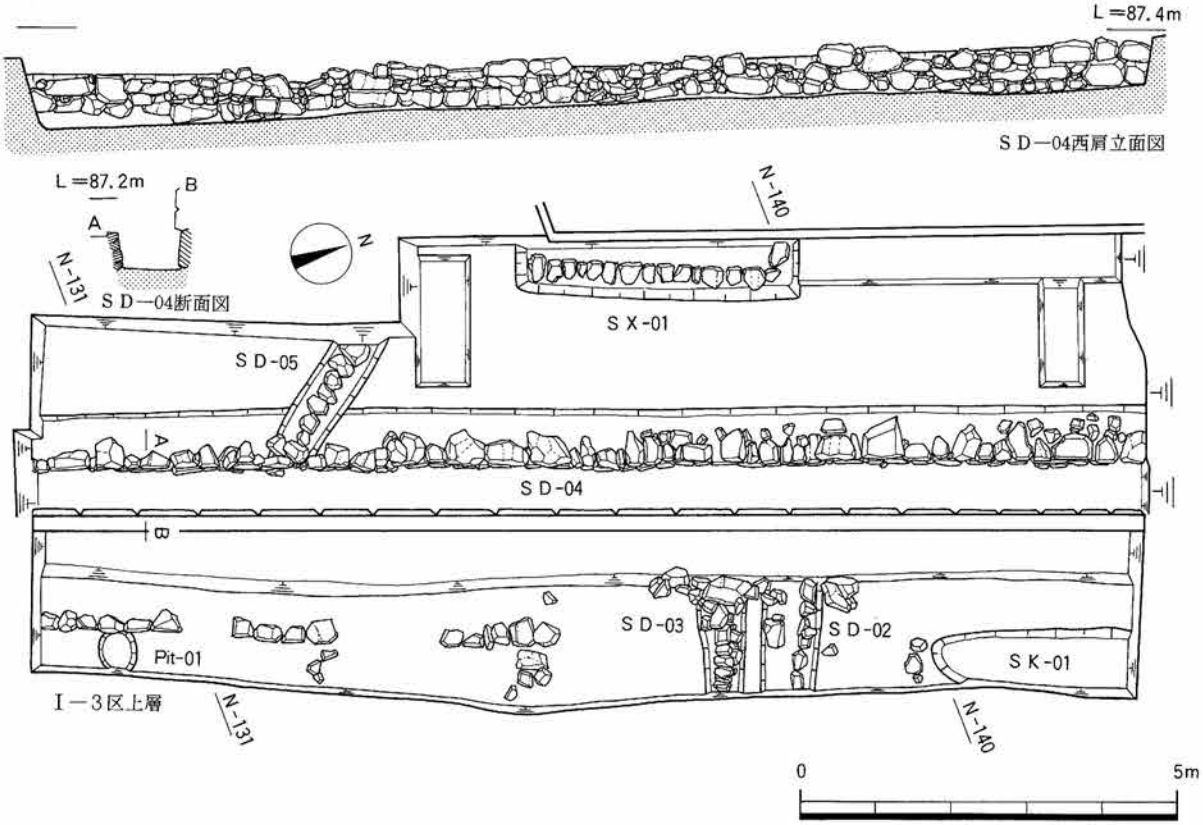



図7　Ⅰ-3・4区遺構平面図

渠排水溝である。レベル的にはほぼ同じであり、ともに江戸時代中期の遺物を含んでいたが、隣接してあることから同時期に存在していたとは考え難く近世の中でも何時期かの作り替えが行なわれたことが窺える。

**溝**（SD-07） 第２次遺構面で検出した石組の暗渠排水路で、幅約20cm、深さ15cmを測る、この溝も先のSD-01同様、排水末端部に扁平な緑泥片岩が敷かれていた。

**井　戸**（SE-01） SD-07により上部の一部を欠損するが、径約80cm、深さ約2.2mを測る。石積みは20cm前後の割石を用いて積まれており、やや中膨みの形状を呈する。埋土は上層が灰色の粘質土、下層は淡灰色の砂質土であった。

この井戸からは多量の土師質皿が出土しているが、上層と下層とではわずかではあるが時期差が認められる。廃絶は上層の遺物から15世紀の初めと考えられている。

なお、SD-07との間には100年以上の時期差が考えられるものであり、中世においても何度かの建て替えが行なわれていたことが窺える。

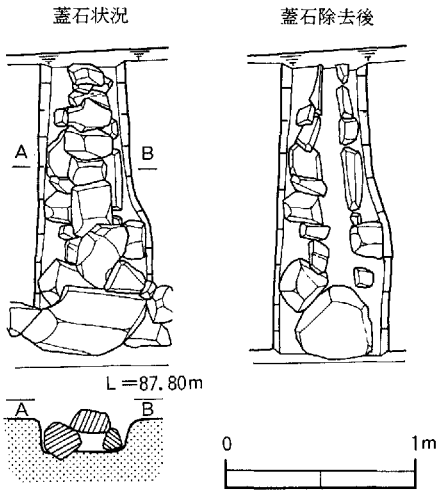



図８　SD-03実測図

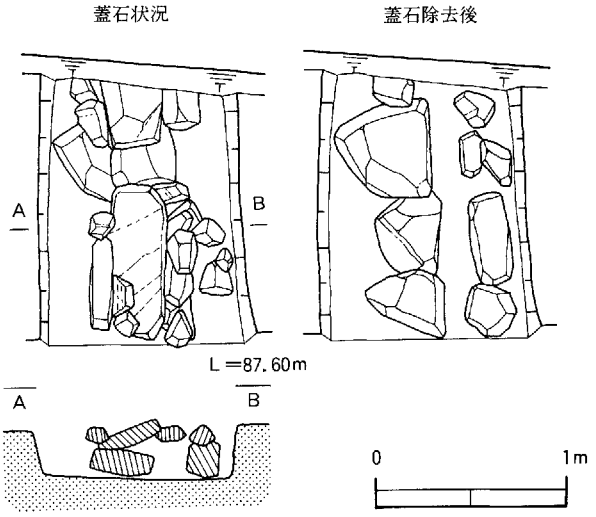



図９　SD-07実測図

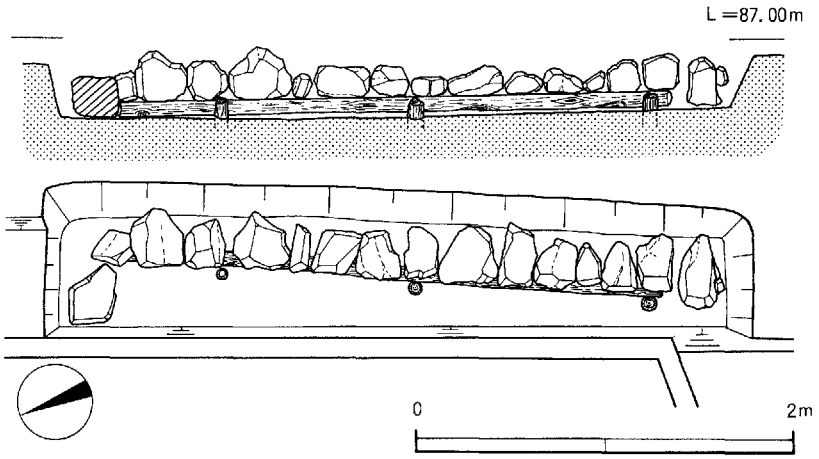



図10　SX-01実測図

また、これらの第２次遺構面を構成する黄色土は整地土であり、この中には13世紀中頃から14世紀代の遺物が多量に含まれていた。

このことは、当地周辺では13世紀の中頃には早くも塔頭寺院が営まれていたことを物語るものと言えよう。

**d．Ⅰ－４区**

３区に隣接する地区で現有の農道部分に当たる。

現有の農道路面下約50cmで近世の道とこれに伴う側溝などを検出した。

道は最低三時期にわたって整備がなされたもようで各面とも直径1.0～3.0cmほどの小石を含むよくひきしまった路面であった。ただし、いずれも出土遺物から見る限り、江戸時代中期以降のものであり、整備にあたって道幅の拡張などの変化は見当らない。

**溝**（SD-04）

前述の道に伴う側面で幅約80cm、深さ約60cmを測る、延長15ｍほどを検出したが、さらに北側へ伸びるものである。

溝の東側の石積みは、現代の石垣を造る際削平を受けたものと思われ、わずかに基底部だけが、その石垣の下に残っている

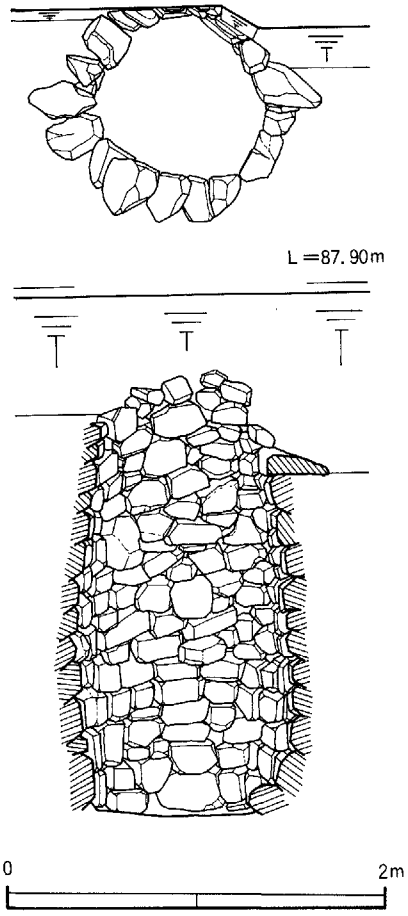
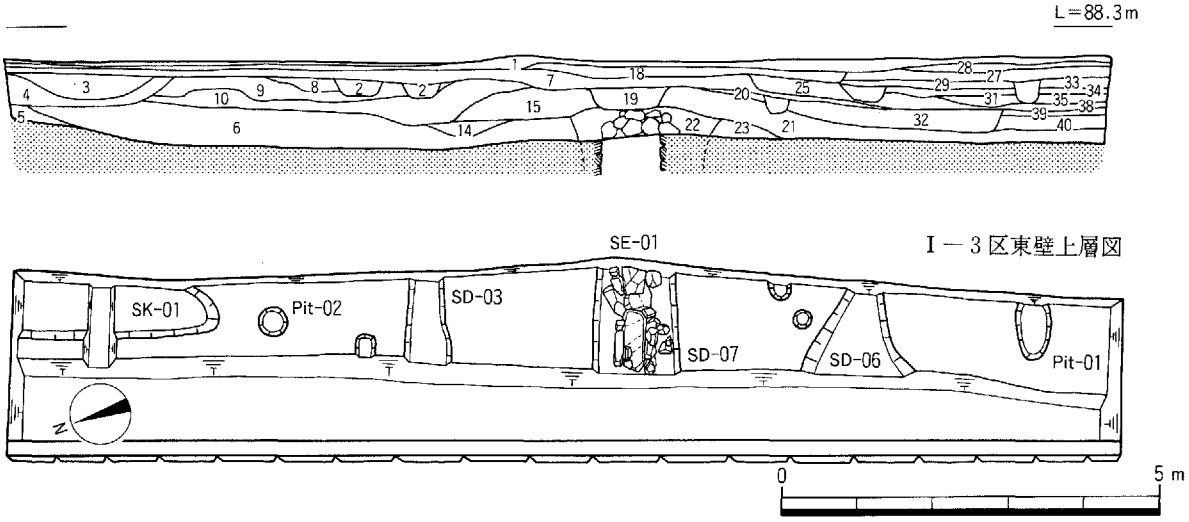



**図11　SE-01実測図**




1．表土
2．淡灰茶褐色土
3．暗茶灰色土
4．灰茶褐色土(瓦片・炭含有)
5．青灰色弱粘質土
6．淡灰黄褐色土(土器含有)
7．淡茶灰色土
8．淡茶黄灰色土
9．淡灰色土
10．明黄色土(部分的に灰色土混入)
11．暗茶灰色土
12．暗茶灰色土(やや黄味をなす)
13．９と同じ(やや黄味をなす)
14．青灰色粘質土
15．淡灰色土(ブロックで明黄色土が入る)
16．暗茶灰色土
17．暗茶黄灰色土
18．灰茶褐色土
19．明黄色土
20．暗茶灰色土
21．淡黄灰色土
22．明黄灰色土
23．明黄灰色土(やや黄色味をます)
24．黄色土
25．淡黄灰色土
26．炭・遺物混入
27．灰色土(焼土混入)
28．黄灰色土
29．25と同じ
30．淡灰黄色土
31．淡茶色砂土
32．淡灰色土(下部分はやや茶色味をます)
33．淡黄灰色土
34．茶色土
35．濃黄色土
36．淡茶砂質土
37．淡灰色土
38．明黄色土
39．灰色土
40．淡灰茶色土

**図12　Ⅰ－３区下層遺溝平面図**

状況であった（写真６参照）。

西側の石積みは２～３段の割石積みで造られ、基底部には50～60cm大の大振りの石が用いられている。全体に造りは丁寧で堅固である。当地域における幹線排水路としての機能を果たしていたものであろう。

**SX-01**

一辺３ｍほどの石積みの東辺だけを検出したもので、その西端は直角に折れ曲がり、調査区外へと伸びる。おそらく方形を呈する遺構で、道の西側に立地する塔頭の一部と推定される。

現存する石積みは一段であるが、この下に胴木が置かれていることから本来の石積みは高かったものと考えられる。

## ２　遺　　物

Ｉ区は調査面積が少なく、これに比例して出土遺物もさほど多くを数えない。主に遺物が出土したのは前述した井戸（SE-01）とこの遺構面をつくっている整地土（第４層）であり、これらはいずれも中世（根来II期）のものである。その他の包含層及び遺構からの遺物は大部分が近世のものであり、これらに混在して天正の兵火時にかかる時期のものや極端に時期の古い遺物が出土している。

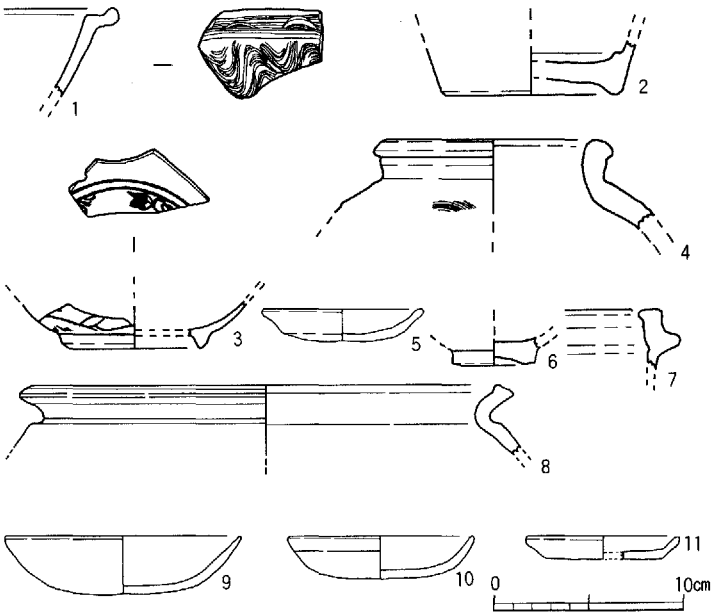
以下、小区ごとに分けて簡単な説明を加えたい。

### ａ．Ｉ－１区出土の遺物（図13、図版21）

（１）は唐津の鉢である。小破片であるため全容は不明だが口径30cm前後で片口のつくタイプの鉢になるものと考えている。淡茶色の釉の上に内外面とも黄白色の粗い刷毛目が施されている。胎土は唐津特有の赤茶けた土である。18世紀前半代の製品である。

（２）は中国製の青白磁の梅瓶の底部である。底部の釉は粗く削り取っているが、一部に釉が飛び散っており、全体に粗雑なつくりとなっている。13世紀末ないし14世紀前半の製品かと考えている。

（３）も中国性の製品で染付の皿である。外面には簡略された牡丹唐草文を描くが素地もやや青味がかりコバルトも発色が悪く滲んでいる。また、畳付部分の釉は切り取られているが硅砂状のものが付着しているなど粗悪品の感をまぬがれない。体部上半は欠損しているが、おそらく丸く立ち上がったのち口縁端部が外反するタイプとなるものと思われる。（４）は備前の壺、肩部




Ｉ－１区第１層（1），Ｉ－１焼土層（2～5），Ｉ－１区黄色土（6．7）
Ｉ－２区第３層（8～11），

**図13　Ｉ－１・２区包含層出土遺物**

には波状文が巡るもので、口縁頸部は短かく直立し、端部はわずかに外側に折れ曲がる。備前4期、16世紀代の製品である。

(5)は土師質の皿で、赤橙色を呈し胎土にはクサリ礫。口縁部には強いヨコナデが施され、このため端部は肥厚する。

以上の2～5の遺物は天正の兵火によると考えられる焼土層からの出土である。

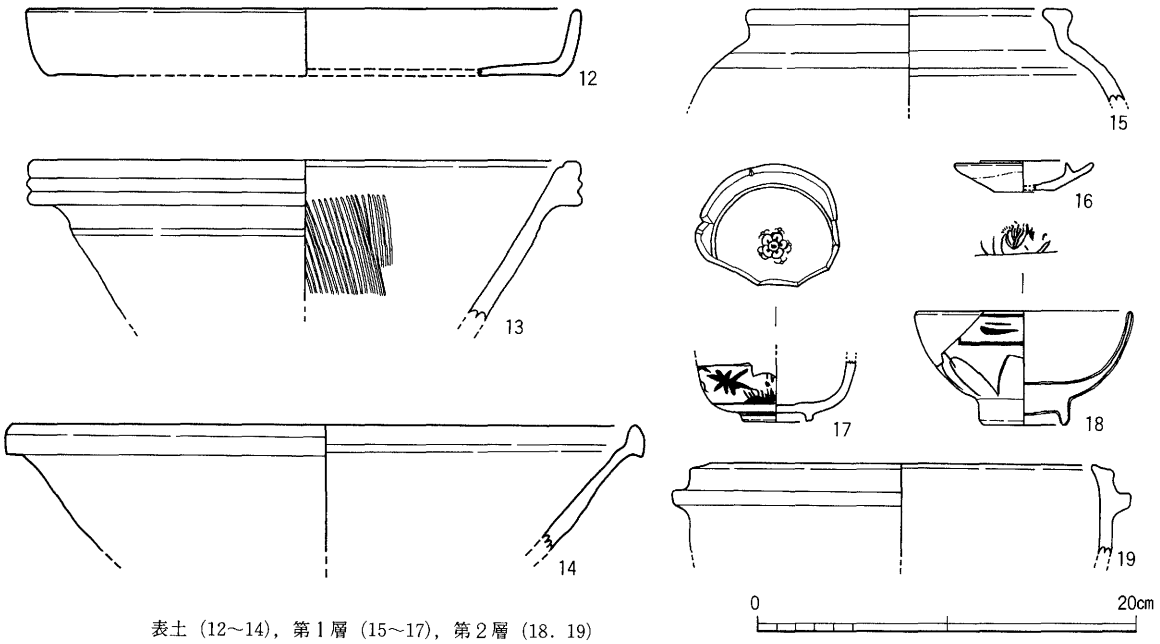
この焼土層の下の整地土、黄色土から出土した遺物には、天目茶碗、(6) 土師質の羽釜 (7) がある。このうち天目茶碗は黄白色のザックリとした胎土で、底部には化粧がけが施されており、瀬戸の製品と考えている。

**b. Ⅰ-2区出土の遺物** (図13、図版21)

(8) は土師質の堝となるものと思われる。「く」の字状に折れ曲がった口縁の端部はわずかに上方につまみ上げられている。一見大和型の羽釜に類似するが、胎土には片岩を含み、明らかに在地の製品である。(9～11)は土師質の皿で、れも淡黄色を呈する。土師質の堝も含めて14世紀～15世紀前半の製品と考えている。

**c. Ⅰ-3区出土の遺物**

Ⅰ-3区は前述したように2次期の遺構面を検出した調査区であるが、表土から第2層までは近世の包含層、第3層、第4層は中世の包含層である。遺構では井戸(SE-01)からの出土遺物が最も多い。土師質の皿が大部分であるが、これらはその法量に斉一性が認められ、一括性の高い資料と考えられるものである。




表土 (12～14), 第1層 (15～17), 第2層 (18. 19)

**図14 Ⅰ-3区包含層出土遺物**

**表土・第1、第3層出土の遺物**（図14、図版21）

(12)は土師質の焙烙である。底部は厚さ4㎜ほどと薄く扁平で、口縁部は底部から直立状に立ち上がり端部を丸くおさめる。全体に赤茶色を呈し、口縁部にはヨコナデを施す。(13) の擂鉢は濃茶色を呈し、焼成は堅密である。口縁部内面には丁寧なヨコナデを施し、それより下位には全面にすり目が入っている。産地については不明だが近世、江戸時代中頃のものと考えている。

(14) は東幡系のこね鉢、(15) は丹波の壺、もしくは甕と思われるもので、体部は茶褐色を呈し口縁上端部及び内面は暗緑色となっている。

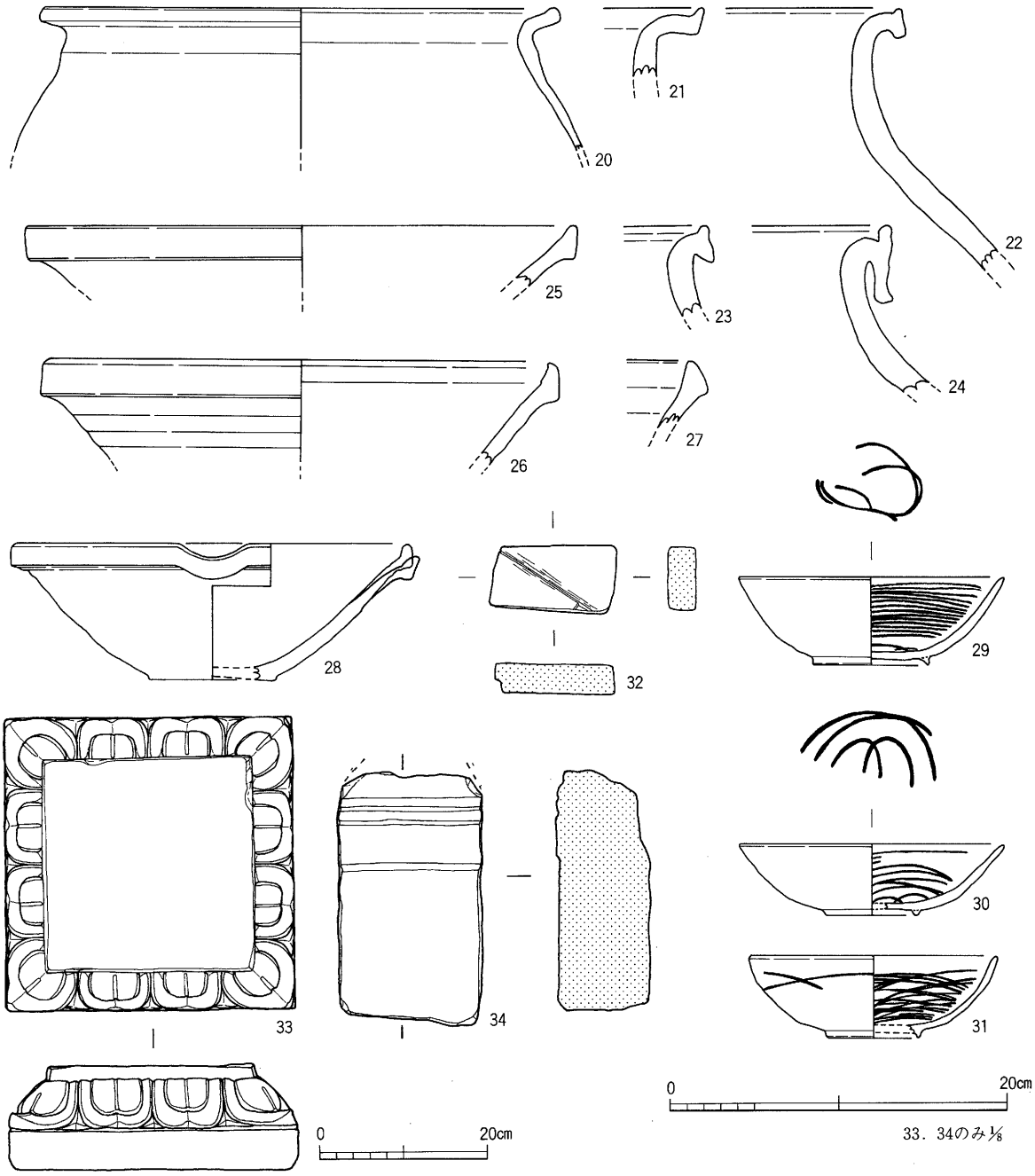



**図15　Ⅰ－3区第4層出土遺物(1)**

(16) は口径7.5cmほどのやや小振りの灯明皿である。内面と外面口縁部下まで透明質の釉が施されており、淡黄白色を呈する。焼成はきわめて堅密で磁器質の感がある。近世の信楽の製品の可能性を考えている。(17)は伊万里の染付の碗で、体部上半を欠くが、丸碗となるものと思われる。18世紀末から幕末にかけての製品と考えている。(18)中国製の青磁碗である。口径12cm弱、器高6cmほどとやや小振りである。体部には片切彫りによるかなり簡略化された雷文帯と蓮弁が描かれており、全体に草緑色を呈する。15世紀前半代の製品である。(19) は土師質の羽釜で、砂粒を多く含みやや暗いハダ色を呈する。鍔より下位には煤の付着が認められる。このタイプの羽釜は、これまでの調査例から紀ノ川流域を中心に出土することが知られており、時期的には15世紀代のものと考えている。

**第4層出土の遺物**（図15、図版22・23）

(20)は土師質の堝で、胎土には多量の砂粒を含む。体部下半を欠いているが、体部中部から底部にかけて丸くおさまるプロポーションをなすもので器高はおおむね30cmほどになる。14世紀を通して存在しており、形態的にはほとんど変化が見られない。

(21～24) は、いずれも常滑の壺、甕の口縁部である。(21) が常滑のII期後半段階、13世紀の中頃から末の時期に該当し、(22) は常滑III期の初頭、13世紀後半、(23) は (22) とほぼ同時期かやや後出するものと考えられる。(24) は常滑IV期、14世紀末から15世紀の初めにかけての製品である。

常滑の製品については、このように各期を通じて根来にもたらされているが、これまでの発掘調査においても前述の (21) とほぼ同時期かこれよりやや古いII期前半段階のものから出はじめ、量的にもっとも多いものはIV期の製品で、V期の製品については常滑自体の生産力の低下と関連してかその出土量は少ない傾向にあるといえよう。

(25～28) は東幡系のこね鉢で、いずれも暗灰色を呈する。13世紀～14世紀代の製品である。

(29～31)は瓦期の碗である。口径15cm前後、器高5cm前後を測り、体部はやや外開きぎみに立ち上がる。高台は断面三角形状を呈し、内面の磨きは幅2mmほどである。(31)のみ外面にもわずかに磨きが施されている。13世紀前半～中頃の製品と考えている。

(32) は砥石で、かなり使用されていたらしく磨滅が著しい。(33) は五輪塔の台座部分である。石質は砂岩で、一辺35cm、高さ12cmを測る。すでに間弁もなく、反花もやや簡略化されており15世紀代の製品と考えている。(35～108) は、すべて土師質の大皿、小皿である。器形、胎土、色調などからいくつかのタイプに分類することができる。

(35～38)は器高3cmほどで、他のものに較べてやや深手の皿といえる。赤橙色を呈し、胎土にはクサリ礫を多量に含むこと、また、体部下半の指押えが顕著なことが特徴である。このうち (35) と (37) の皿には、内面の一部と外面の口縁部下のほぼ全周にわたって黒いタール状の付着物が認められる。

(46～51)の皿はいずれも黄白色ないし、ややくすんだハダ色を呈する。口縁端部に一回のヨコナデを施しておりこのヨコナデ調整された部分と体部下半の未調整部分との境が明瞭なことが特徴である。

(54)は、よく水簸された胎土で色調も他の土師器皿とは異なり白色を呈する。15世紀代に根来を中心とする地域で生産、使用されていたと考えられる皿である。

小皿 (85～108) も大皿同様、数タイプがある。最も多いものは (85) を典型例とするもので、比較的器壁が薄く器高も1cm前後と浅いものである。口縁部は底部から内彎気味に立ち上がり、この部分のみ

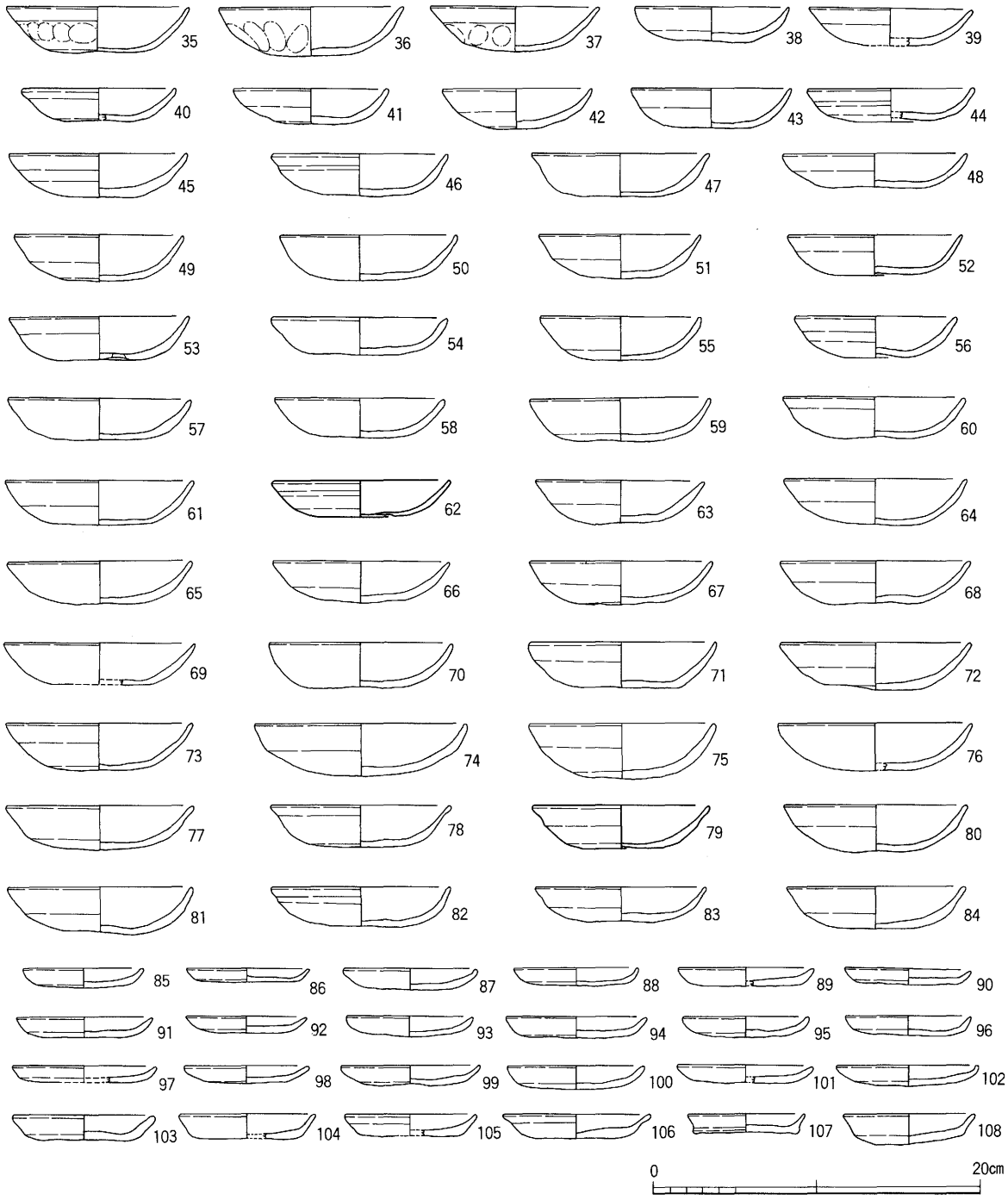



**図16　Ⅰ－3 区第 4 層出土遺物(2)**

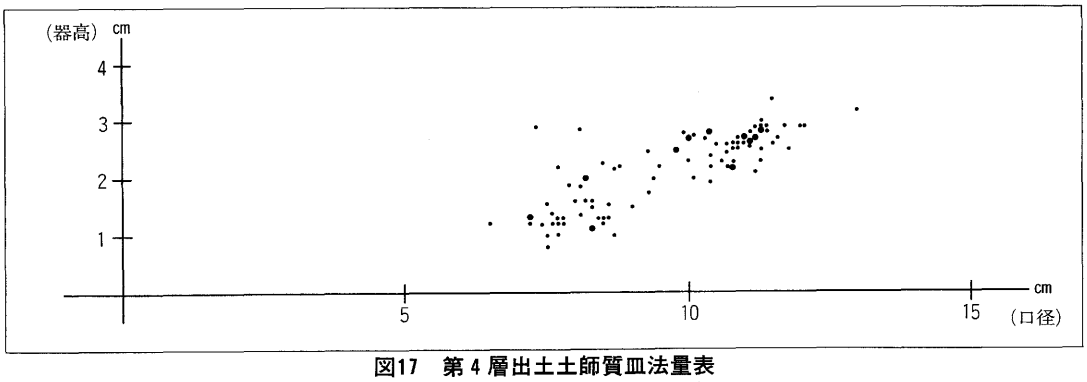



**図17　第 4 層出土土師質皿法量表**

ヨコナデ調整が施されている。胎土は全体に微量の砂粒とクサリ礫を含みザラついた感じである。色調は、いずれも淡赤茶色ないしは暗黄色を呈する。この他には、底部がやや厚く、体部から口縁部にかけて斜め上方に開くタイプのもの(103～105)、口縁部のヨコナデがきつく、このため口縁部がわずかに外反するもの（107、108）がある。

これらの土師質の法量を一点ずつ計測し、ドットとして落したものが図17である。一見してわかるように大皿と小皿の大別はできるもののまとまりがなく分散している状況である。先に述べたようにこれらの土師器皿と共伴して出土している遺物は13世紀から15世紀とかなりの時期幅をもっており、土師質皿についても一括性はなく、おおむねこの時期幅で考えて大過ないであろう。その場合、13世紀代の古い時期に該当するものは、(73～76)などのように比較的法量の大きいものであり、逆に新しいものは前述した（54）の15世紀代になって出現すると考えられている白色を呈するタイプの皿と考えている。

**SD-02出土の遺物**（図18、図版23）

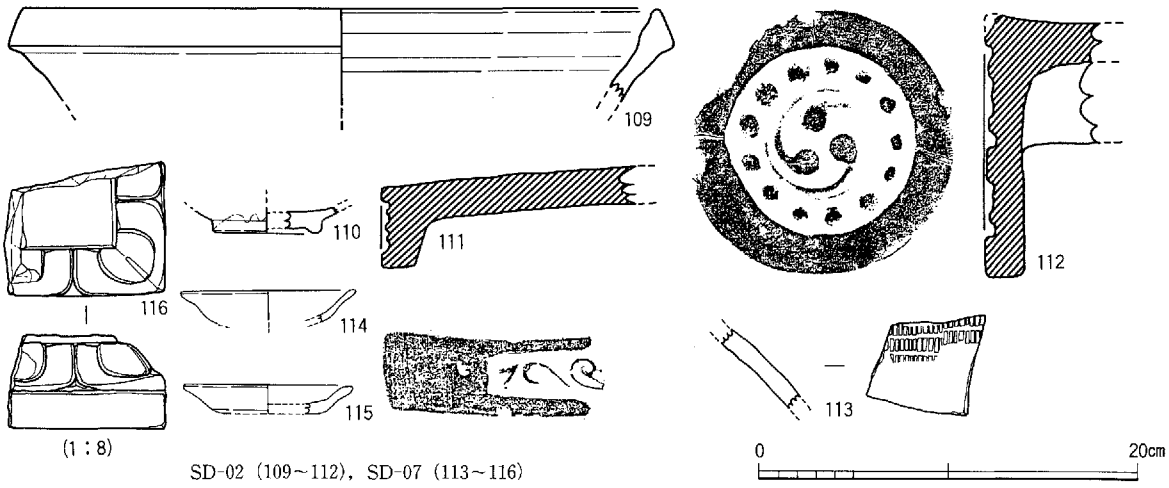
（109）は東幡系の須恵質のこね鉢である。口縁部は平坦面を持ち、上下にやや拡張する。この部分のみ暗灰色を呈し、他の部分は内外面とも灰色を呈する。（110）は碗の底部になると思われるが白濁色の釉が高台畳付付近まで施されている。焼成はやや甘く、胎土は黄白色で外面底部の露胎部は赤茶色となっている。15世紀代の中国製の白磁で胎土の軟質タイプのものか、あるいは近世の国産陶器の両方の可能性を考えているが、共伴遺物を考慮すれば前者の可能性が高いものといえよう。

（102）は瓦当径14cm程のやや小型の軒丸瓦である。内区は右巻きの三ツ巴文で、巴文の頭頂部は工具のナデによって扁平となっている。周囲の朱文は13個配されているが、その大きさにはバラつきがあり雑なつくりとなっている。

**SD-07出土の遺物**（図18、図版23）

（113）は小破片であるが外面に格子状の叩きが見られることや、胎土が灰白色を呈していることなどから常滑の壺、もしくは小型の甕になるものと考えた。外面は暗茶褐色を呈している。

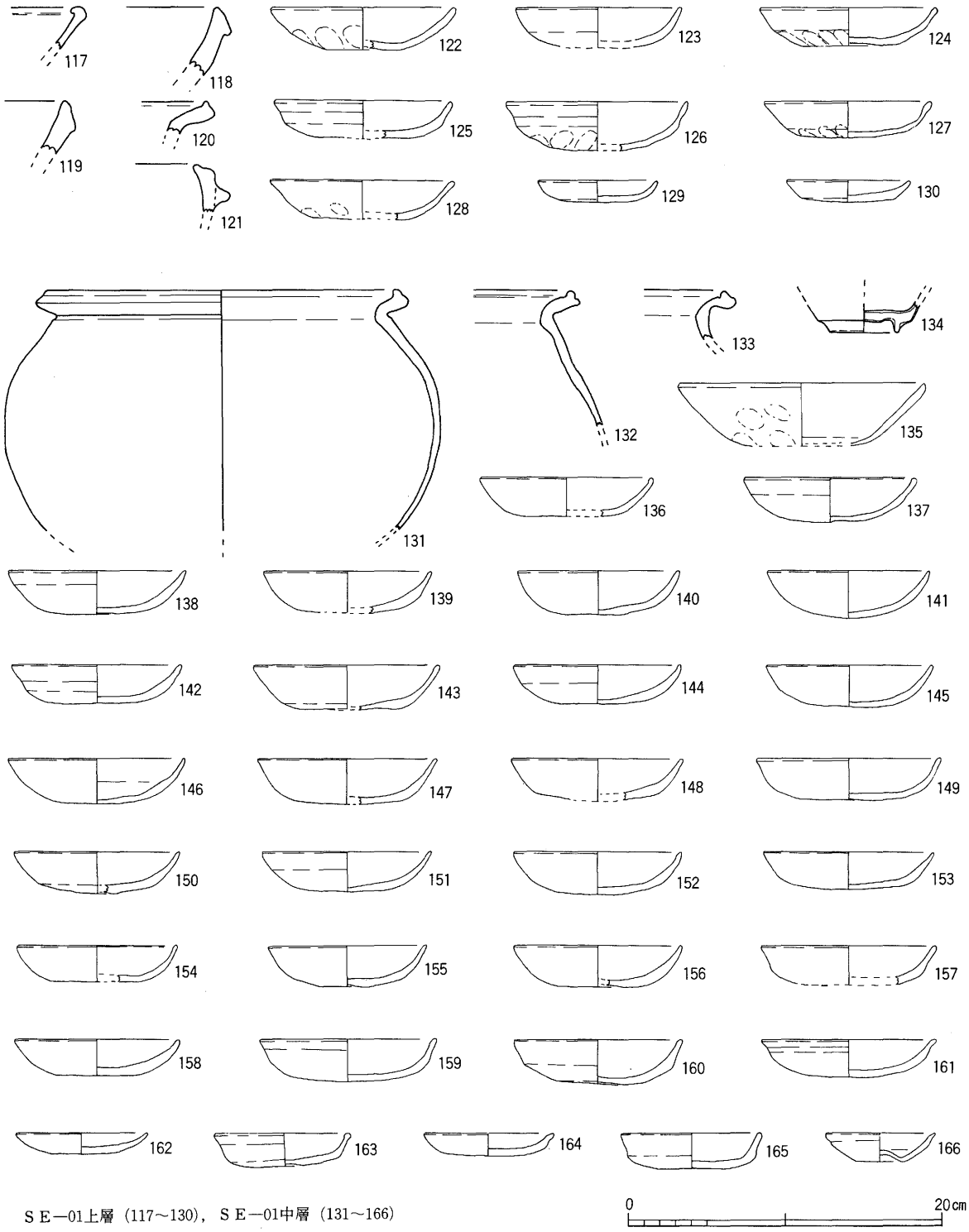
（114、115）は土師質の皿で、いずれも赤橙色を呈し、胎土にはクサリ礫を多く含んでいる。口縁部が強いヨコナデのために肥厚しており、このタイプの皿は根来では16世紀の通有のものであることが知ら




SD-02（109～112），SD-07（113～116）

**図18　Ⅰ－3区SD-01出土遺物**

れている。(116) は五輪塔の台座で、石質は砂岩である。大部分が欠損しているため寸法については不明だが、おそらく前述の第4層から出土している台座 (33) とほぼ同じぐらいになるものと思われる。彫り込まれている反花は (33) に較べてやや簡略化、図案化された傾向が認められ、15世紀後半以降の




ＳＥ—01上層 (117～130)，ＳＥ—01中層 (131～166)

**図19　Ⅰ－3区SE-01上層・中層出土遺物**

ものと考えている。

**SE-01上層、中層出土の遺物**（図19、図版23）

SE-01の上層、中層とも出土遺物の大部分は土師質の皿である。井戸の埋土が灰色の粘土質であったこともあり、遺物の残りは良く、土師質の皿には完形品のものも多い。

土師質皿以外では、東幡系の須恵器のこね鉢や瓦質のこね鉢、土師質の堝などがわずかながら出土している。このうち須恵質のこね鉢（117）は、内側に丸く折れ曲がっており根来ではあまり類例のないタイプである。もしかすれば碗の可能性も考えられよう。

瓦質のこね鉢（118、119）はともに灰色を呈し、焼成は堅密である。口縁部は丁寧なヨコナデ、内面には横方向のこまかな刷毛調整が施されている。口縁部も比較的シャープなつくりとなっており、瓦質のこね鉢の中では古いタイプ、15世紀初め頃の製品と考えている。

土師質の堝（131～133）はいずれも口縁部が「く」の字状に折れ曲がり、口縁部を上方につまみ上げている。前述のⅠ区で出土している堝（８）と較べると、端部のつまみ上げが大きくシャープなつくりであり、一時期古い様相が見られるものと言えよう。（134）は中国性の青磁の小碗である。釉は淡い緑色を呈し、畳付部のみ丁寧に釉を削り取っている。全体に粗い貫入がみられる。14世紀代の製品と考えている。

土師質の皿は、色調、形態などから数種類のタイプが見られる。とくに上層から出土している土師質皿は多様で、（127）などのように第４層で見られた胎土がよく水簸され白色を呈するものや、小皿では同じく第４層に見られた器高が低く口縁部が丸く立ち上がるタイプの皿（129）があるなど、きわめて第４層出土の土師質皿に近い状況にある。これらのことから、井戸上層として取り上げた遺物は第４層からの混入の可能性も否定できないものと考えている。

このことを裏付けるように、中層の土師質皿については比較的斉一性が高く、後述する下層出土の土師質皿と同タイプのものが数多く見られる状況である。この中で特異なタイプとしてあげられるのは、（135）で、他の土師質に較べて口径、器高とも大きく、体部から口縁部にかけて斜め上方に開いている。他地域、おそらく幾内からの搬入品か、それを摸して作られたものと考えられる。

**SE-01下層出土の遺物**（図20、図版23）

（167）は瓦器で、碗というよりもむしろ皿というべき形態である。おそらく、瓦器碗の最終末段階のものと考えており、時期的には14世紀末、ないしは15世紀の初頭と思われる。なお、この井戸から出土している瓦器片はこの一片のみである。

（168）は土師質の羽釜で、黄白色を呈し、胎土には砂粒の他、片岩も少量ながら認められる。

土師質の大皿のうち（184）は焼成がやや甘く淡黄白色を呈する。調整は口縁部から体部下半まで二回のヨコナデ、内面底部には粗いヨコ方向のナデが施されている。この（184）を除く他の大皿は、いずれも暗いハダ色、もしくは暗黄色を呈し、口縁部には丁寧な一回のヨコナデを施している。全体に丁寧なつくりであり、きわめて高い斎一性を示している一群である。

小皿については、第４層とほぼ同じであるが、（214～216）のようなヘソ皿は内面底部の凸部がさほどきわだっておらず、ヘソ皿の初現期のものと考えている。

これらの土師質皿を第４層と同じように、一点ずつ計測しその法量の分布をドットとして落したもの

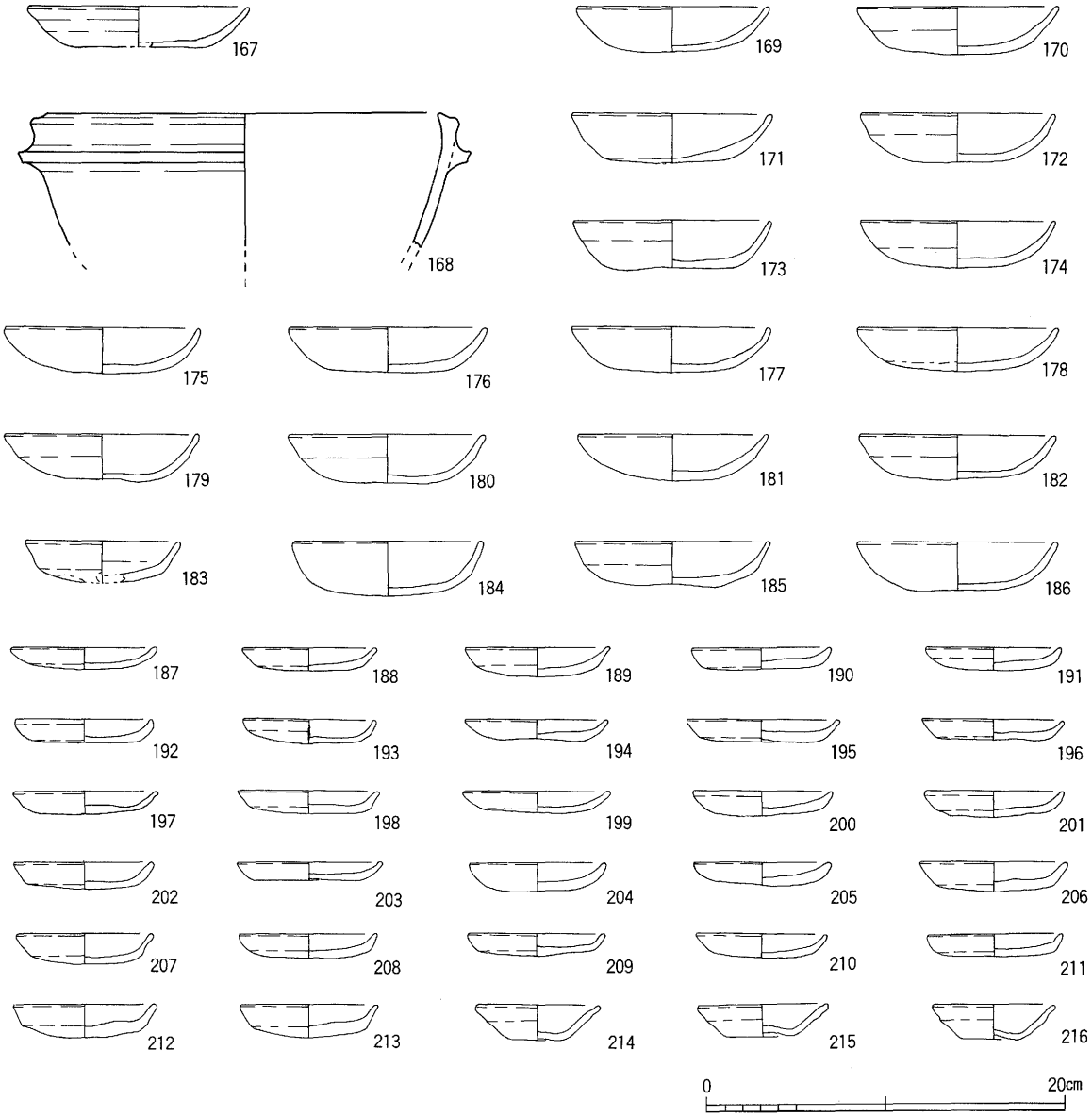



**図20　Ⅰ－3区SE-01下層出土遺物**

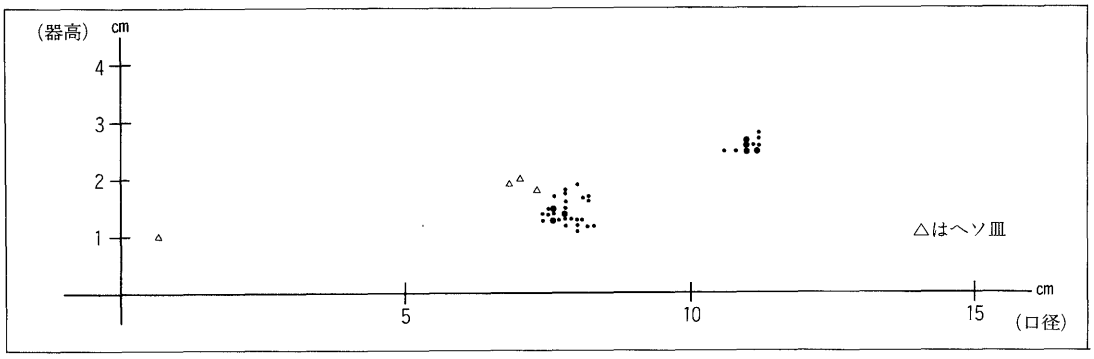



**図21　SE-01下層出土土師質皿法量表**

が図21であるが、第４層では分散していたものがここでは大皿と小皿にきれいに二極分化し、また、それぞれが口径11cmと7.8cm前後に集中している様が看取できる。

このことからも、この井戸の遺物（上層出土遺物は除く）は一括性が高く、良好な資料となるものと考えている。実年代については、第４層との切り合い関係（第４層を切ってこの井戸が作られている）や、前述した瓦器の年代から14世紀末ないしは15世紀初頭のものと判断している。

**ｄ．Ｉ－４区出土の遺物**

前述したように、この４区は現有の農道部分であり、往時の道にも相当する場所に当る。そのため出土遺物は少なく、また中世の遺物も混在するかたちで多少は出土しているが大部分は近世以降のものであった。

**包含層出土の遺物**（図22、図版24）

(217) はずんどう型の甕になるものと思われる。口縁部は左右に拡張し、端面は平坦となっている。濃茶色の艶のある釉が全面に施されているが外面は丁寧な均質の塗りであるのに対して内面は粗い刷毛塗りとなっている。胎土は赤茶色を呈し、砂粒などを含む粗い土である。明治以降のごく新しい時期の製品かと考えている。

(218、219) はともに「Ｔ」字状の口縁をなす小型の甕である。このうち (218) は口縁部下から体部にかけて轆轤挽による凹凸が巡る。丹波の製品と考えている。(219) は口縁端部に三本の凹線が巡り、この部分に「忠」の字が刻印されている。丹波とはやや異なる感じであるが産地については不明である。(220、221) は伊万里の染付で「くらわんか」と称される碗である。ともに下地はややくすんだ灰白色を呈し、体部外面には簡略化された草花文が描かれている。

器壁も厚く、全体に粗雑なつくりであり、18世紀中葉から末にかけて波佐見で大量に焼かれた雑器の類と考えている。

(223) は瀬戸の水甕である。口縁端部の内側が水平に張り出し、内外面とも淡黄緑色の灰釉が施されている。体部外面にはマガリ状の工具により画花文と列点の文様が描かれるこの手の水甕は量的にはさほど多くないが、根来では近世の遺構、包含層から普遍的に出土している。今回の場合、小破片のため全容は不明だが、通例、黄白色の釉の上に緑釉、鉄釉を流しがけしており釉は高台部付近まで施されている。また、高台は低く、幅広のものである。18世紀末から19世紀前半のものである。

以上の (217～223) が第１層出土の遺物であるが (217) を除けば、おおむね18世紀中頃～19世紀前半の時期幅におさまるものである。

(224) は伊万里の青磁染付である。外側が青磁で内面口縁部下には、粗略な四方襷が巡り、内底面には二重圏線の中心部にくずれた花文を施している。腰折れで、体部から口縁部にかけて斜め上方に立ち開くタイプの碗であり、18世紀末段階のものと考えられよう。なお、このタイプの碗は、やはり腰折れで外面が青磁の蓋を伴うものである。

(225) は伊万里の染付で、体部には菊花文が描かれている。高台が高く、体部が斜め上方に立ち上がるもので、いわゆる「広東碗」と称されるタイプの碗である。18世紀末から19世紀前半代の製品と考えられよう。

(226) は陶器の小碗である。焼成は良く、半陶磁質となっている。黄白の艶のある釉が内外面とも施

**図22　Ⅰ－4区包含層出土遺物**

され、全体に細かな貫入が入る。胎土が黄白色を呈しており、瀬戸の製品かとも考えているが断定はできない。(227) は肥前系の陶器の碗で、枇杷色の釉が畳付を除く全面に施されている。

(228) の軒平瓦の中心飾りは花文と萼からなり、花心は三つに、花弁は二つにそれぞれ先端が分岐している。調整は瓦当部の表裏面と凹面がナデ調整、凸面は未調整となっている。江戸時代中期、18世紀中頃のものと考えている。

以上の5点が第2層からの出土遺物であるが、第1層と較べてわずかに新しい要素が見出されているが、さほどの時期差は考えられず、江戸時代中期～後期の包含層と考えて大過ないであろう。

(229) は内外面とも赤茶褐色を呈する擂鉢である内面のすり目は9本単位で全面に施されている。備前、もしくは堺擂鉢の両者の可能性を考えているが、堺擂鉢に見られるという底部の窯道具の痕跡については確認できなかった。(230) も同じく擂鉢であるが、やや小型の製品である。焼成は良好で堅密である。すり目は10本単位で幅はせまく、このすり目を施したのち口縁部にヨコナデ調整を施している産地については不明である。

(234) は波状文の軒平瓦である。出土量はさほど多くないが、根来ではよく見かける文様である。波状は上向きの同心円で、かなり退化していることから16世紀中頃～末の製品と考えている。

**遺構出土の遺物**（図23、図版24）

(235) は内外面とも灰茶色を呈する擂鉢である。胎土はチョコレート色を呈し砂粒を多く含んでいる。体部外面はヨコ方向の削りののちナデ調整を施している。内面のすり目は金属の工具によると思われるもので9本単位で密に施されている。

(236) は土師質の焙烙である。体部の立ち上がりが2cmほどと短く厚いことが特長であり、根来ではあまり見かけないタイプのものと言えよう。(237) は丹波の甕と考えられるもので、胎土にはやや大粒の砂量を含んでいる。この種の甕は、根来では便槽として用いられている例が多い。

(238～240) は染付の碗である。前述したように、いずれも「くらわんか」と称される雑器の碗で広義の意味では伊万里の製品と呼ぶものだが、おそらく18世紀中頃から末にかけて、波佐見で大量に製産さ

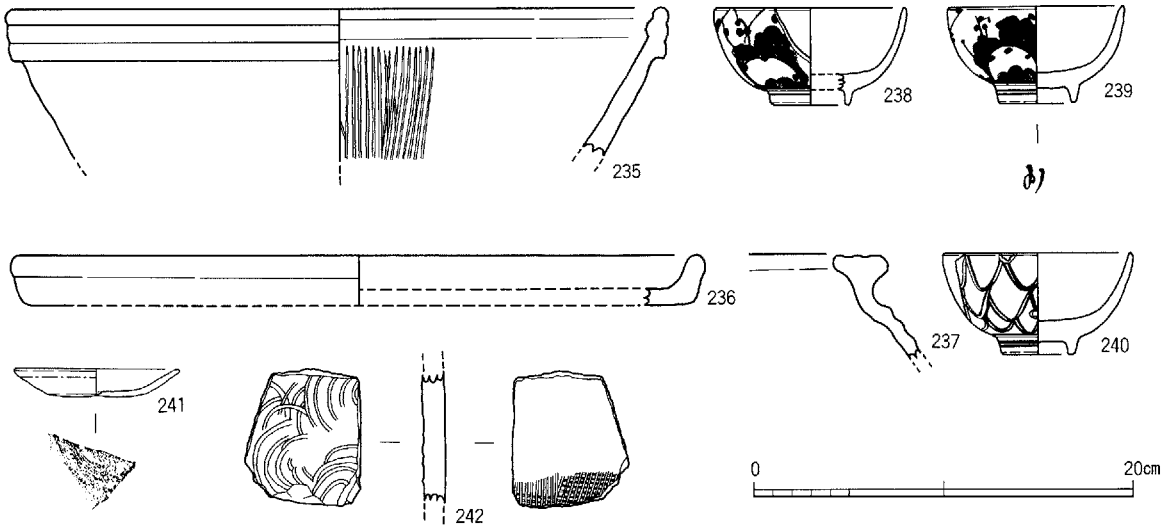



**図23　Ⅰ－4区SD-04出土遺物**

れたものであろう。なお、(240) の二重網手の文様は割筆により描かれている。

(241) は灯明皿で、内面と外面口縁部下まで透明な柿釉が施されている。底部には回転糸切の痕跡が痕跡が認められる。この種の灯明皿は根来に限らず、各地の近世の遺跡から出土しているが、産地については現段階では不明の製品である。(242) は須恵器の甕の体部片である。内面は青海波、外面には細かな格子状の叩きが残る。当然ながら根来寺開創以前の遺物であり、混入と考えられる。

## 3　Ⅰ区　小結

本節では、Ⅰ区の調査成果を簡単にまとめておきたい。

既述したように、Ⅰ区では近世の道とこれに伴う側溝を検出した。近世の道は現在の農道とほぼ重復しており道幅はおよそ2.1mであることが判明した。路面は、小礫、玉石を含むよくひきしまった面となっており、近世の中でも最低二次期の作り替えが考えられるものである。ただし、この作り替えによって道幅の拡張はなされておらず、単にかさ上げを行っただけのものと言えよう。

問題は近世以前、天正の兵火時もしくはそれ以前の道が、この近世の道と同じルートであったか否かという点であろう。

近世の路面を順次掘り下げていったが、中世の路面については検出できなかった。念のため調査の最終段階で二ケ所断ち割りを行い、深さ１ｍほど掘り下げ確認を行ったが、近世の路面下からこの深さまで中世の整地土と考えられる土であり、路面と考えられる遺構は確認できなかった。

ただ、近世の道に伴う側溝は、中世から続いて使用されていたと考えられるものであり、また、調査区東側で検出した中世の遺構も敷地の西端部に相当すると考えられることなどから、中世の道についてもやはり同じルートを通っていたものと考えられ、中世の道は後世の削平により消滅したものと判断される。

溝については、すべて石組によるもので、幹線の流路となるような溝は開渠であるが、敷地内を巡り幹線の流路へと注ぎ込む溝は、暗渠となっていたものと考えられる

これらの溝は、いずれも幅が20cm前後、深さ15cm前後で、用いられている石の大きさ、工法も同じであり、ある程度の規格性を見出すことができるものと言えよう。

しかし、すべてがこのような溝とは限らない。たとえば

写真７　SD-05

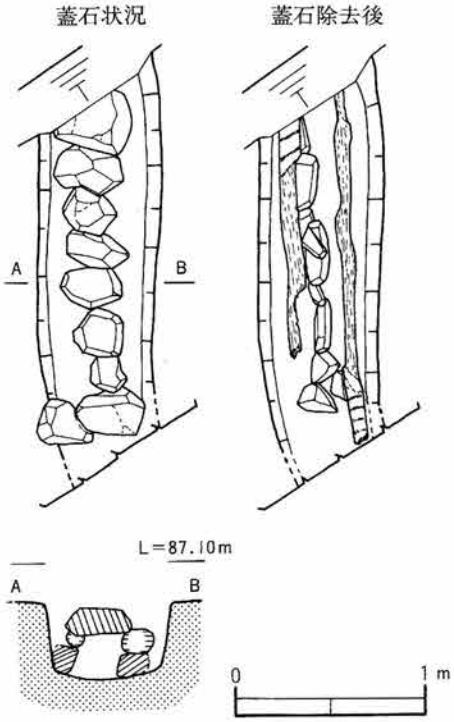



図24　SD-05実測図

今回検出した溝の中で道路の下を横切って幹線の流路であるSD-04に流れ込む溝・SD-05（図24）は、規模的には同規模のものであるが右図の溝断面図にも示すように蓋石を乗せるにあたって、両側の側石の上にそれぞれ一本ずつ直径７cmほどの櫂の木を乗せ、この上に蓋石が乗るような構造になっている。

このような構造をもつ溝は、本例が初例であり、きわめて特異なものといえよう。

遺物については、全体としては出土量が少ないものの、３区の包含層及び井戸（SE-01）からまとまって出土している。

包含層の遺物は、13世紀前半から15世紀にかけてのものであり、かなりの時間幅をもつものであるが比較的残りがよく、とりわけ瓦器碗や土師質の皿は完型品に近いものが重なって多く出土するという状況であった（写真８参照）。

この包含層を切って造られていた井戸（SE-01）からは、先述したように完型の土師質皿がまとまって出土しており、時期も15世紀初頭に限られるもので、きわめて一括性の高い資料である。

土師質皿については、これまでの調査においても、いくつか一括性の高い資料を得ており、今回のこの資料を加えることによってさらに根来山内におけるその変遷を追うことができるものである。そこで今回の資料をこれまでの資料の中からほぼその帰属年代のわかっている良好な資料をえらび出し、それぞれの法量を計測して図及びグラフとして表わしてみた。

図25が、その結果であるが、一見してわかるように、12世紀代で五寸（15cm）、三寸（９cm）の規格を有する土師質皿は15世紀にかけての200年間に、口径が漸時縮小している。

この間、大皿はきわめて定率に近い縮少率示し、およそ50年で1.1cmの割合で縮少していることがわかる。小皿に関して言えば大皿に比べるとやや緩慢な縮少といえるが、これもまた縮少の傾向を認めることができる。

いま一点重要なことは、この間は口径を縮少させつつもその口径は大、小二極に分化し、大皿、小皿のセット関係が維持されている点である。したがってこの間に限って言えば“中皿”と呼称すべき皿は存在しないと言えよう。

**写真８　第４層土師質皿出土状況**

従来、根来の報告書の中で、この時期の土師質皿に対して“中皿”の呼称を用いられている例が見られるが、これは口径12cm前後のやや小ぶりの大皿について、その大きさから漠然と中皿の呼称を用いたものか、あるいは今回の包含層出土遺物のように時期差のある遺物の中で土師質皿を見たときその法量が中間にあるものを“中皿”と呼称しているものと言えよう。少なくとも、今回の図表が示すように根来山内においては、――おそらく山内に限らず紀伊国全体について言えることであろうが――12世紀から15世紀にかけての時期には土師質の皿は大皿と小皿の二種類しか

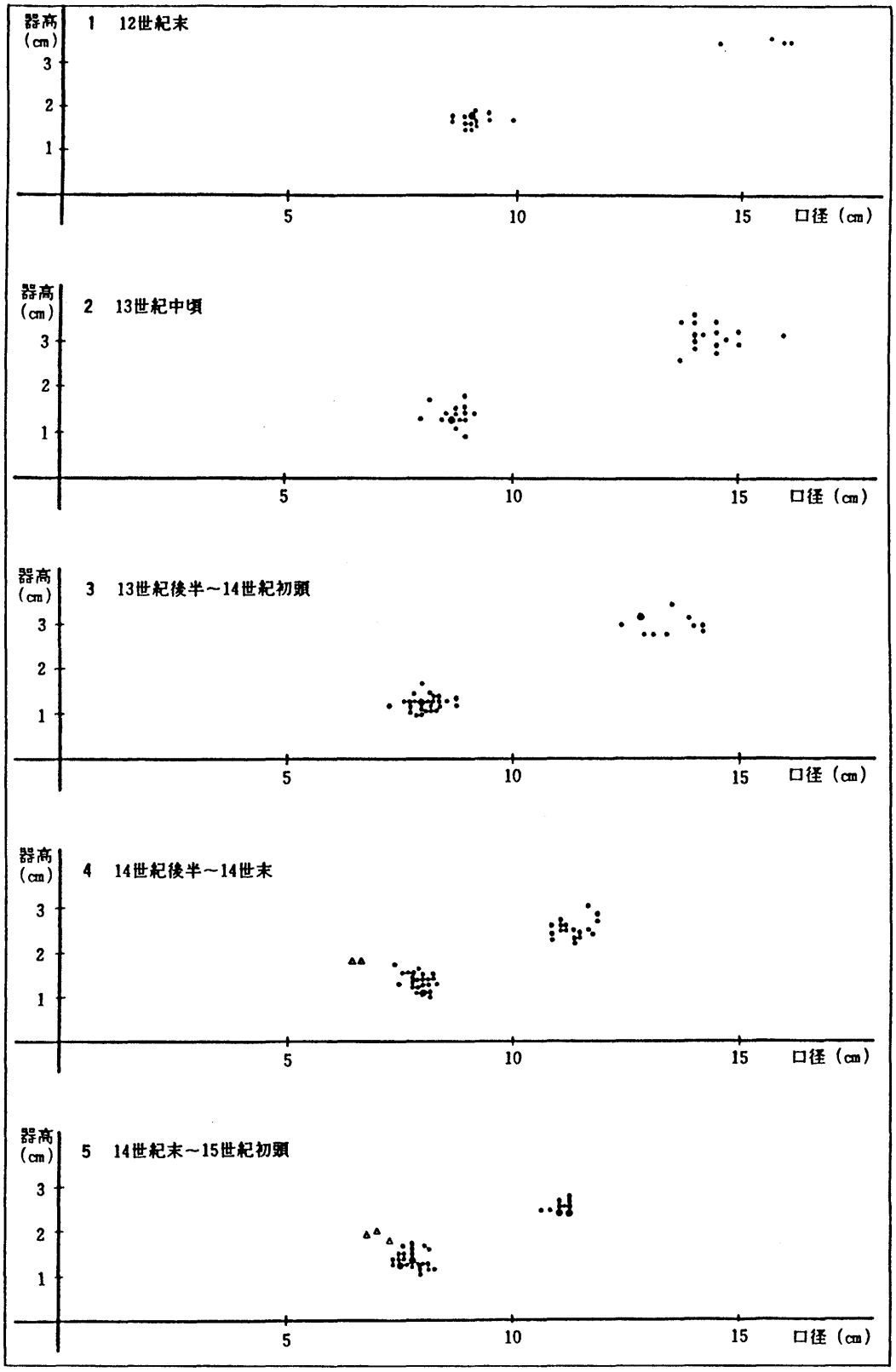



図25　時期別土師質皿法量分布

| | | 大皿 | | | 小皿 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 口径 | 器高 | 器高指数 | 口径 | 器高 | 器高指数 |
| 1 | 12C末 | 15.52 | 3.52 | 22.70 | 9.05 | 1.68 | 18.58 |
| 2 | 13C中 | 14.32 | 3.18 | 22.24 | 8.96 | 1.36 | 15.17 |
| 1 | 13後<br>～14C初 | 13.35 | 3.11 | 22.31 | 8.10 | 1.21 | 15.01 |
| 4 | 14C後～末 | 11.25 | 2.50 | 22.25 | 7.95 | 1.33 | 16.73 |
| 5 | 14C末<br>～15C初 | 11.04 | 2.57 | 23.23 | 7.80 | 1.41 | 18.16 |

（単位cm）

図26　遺構別土師質皿口径・器高平均数値一覧表

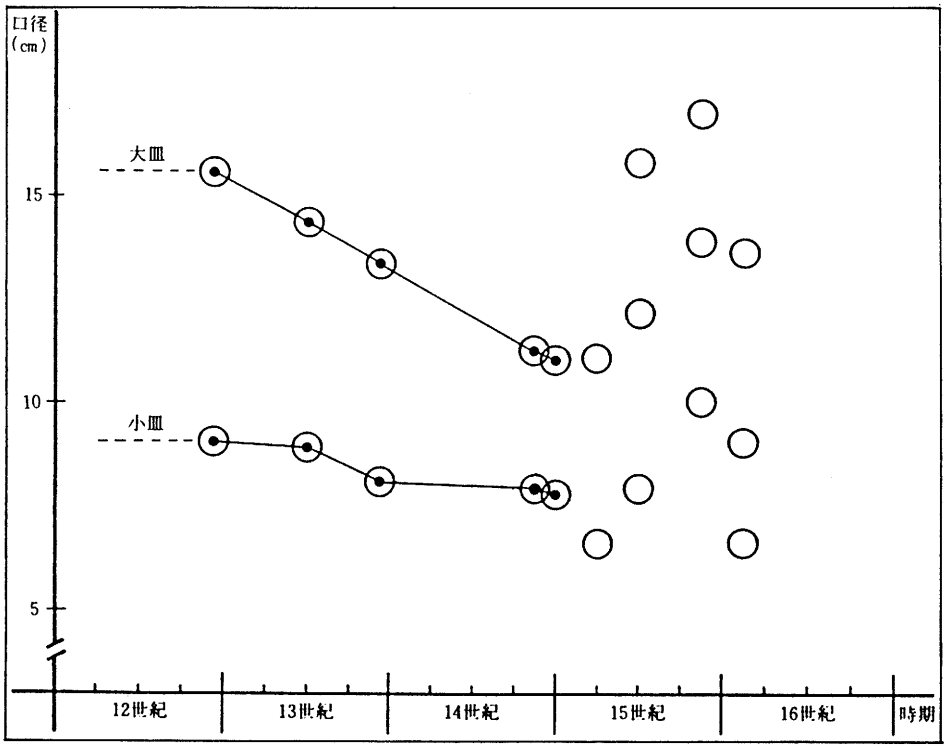



図27　12c～16cにおける土師質皿の口径推移表

存在しないものと考えられる。

なお、山内における15世紀以降の土師質皿の様相については、この資料からだけでは明らかにすることができないが、これまでの調査の成果からある程度はあきらかになりつつある。

15世紀の中頃以降になると、大・小のセット関係が崩れ、大皿、中皿、小皿の三種類に分類する。

また、この頃から畿内系と見られる搬入品が多く見られる傾向にあり、器形的にも最もバラエティに富む時期である。

つづく16世紀に入ると、土師皿の様相はさらに一変し、根来通有の皿と称している赤橙色を呈し、口縁端部が強いヨコナデのために肥厚するタイプの皿一色に染まる様相を呈する。

以上が山内における土師質皿のおおまかな流れであるが、今後さらに細分し、その様相を明らかにしていく上で、今回のSE-01から出土した遺物は14世紀末～15世紀初頭の基準資料として充分活用される資料と言えよう

**註**

(1) 天正13年（1585）の根来攻めは、時の権力者羽柴秀吉による全国統一の一過程としておこなわれたものであるが、その進軍路及び日程についての論考として寺西貞弘「天正13年秀吉の紀州攻め進軍路」（和歌山市立博物館「研究紀要３」1988）がある。それによれば、秀吉は同年３月21日に大阪城を出陣し、根来への浸攻は同月23日となっている。ただし浸入ルートについては、信達（現泉南市）から金熊越への道を取って根来坂本に至ったとしており、蓮華谷からの浸入説をとっておらず、またこの説については言及されていない。

(2) いまひとつの可能性として地幅石であった可能性も考えている。

(3) 実測図番号242の須恵器甕片がこれに該当する。当然、根来寺開創以前の遺物である。このような古い遺物も、山内のこれまでの調査において、何片か見つかっているが、その量は極めて少量であり、根来寺開創以前に当地で生活が営まれていたとは考え難い状況である。ただし、山外の町屋部分では７～８世紀代の須恵器片が比較的多く出土しており、山内とは様相を異にしていると言えよう。

(4) 本書の備前焼編年については、とくにことわりがないかぎり、間壁忠彦氏の編年案によるものである。（間壁忠彦「世界陶磁全集３　日本中世」小学館　1977）他

(5) 有岡城調査会・藤本史子氏の御教示による。ただし氏自身も述べられているように産地での研究があまり進んでおらず、現段階では明確にできない。（藤本史子「伊丹郷町における出土陶磁器の様相」――「有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ――三井パークマンション建設に伴う発掘調査報告書――」大手前女子学園有岡城跡調査委員会　1977）

(6) 紀の川流域外の出土としては、海南市の岡村遺跡が現在確認されている南限であり、北限は大阪府泉南市岡中西遺跡での出土を確認している。また、筆者は実見していないが、岸和田市の箕土路遺跡出土の羽釜（「箕土路遺跡」大阪府埋蔵文化財協会　1987の実測図番号578）も実測図で見る限りこれと同一タイプのものである可能性が高い。なお、このタイプの羽釜は胎土に少量の片岩を含んでおり紀の川流域で生産されたものと考えてまずまちがいないものと思われる。

(7) 根来での東幡系の製品の出土量は比較的多い状況であるがいずれも片口の鉢に限られており甕、碗の出土は確認されていない。このことからも碗の生産がなくなり、甕の生産も低下した13世紀中葉以降、神出Ⅲ期・赤根川期のものであることがうかがわれる。

(8) 畿内で一般に言われているところの“白土器”よりもさらに白色を呈し、胎土もきめ細かなものである。根来寺では15世紀代に普遍的に出土することから、祭祀など特別な用途に用いられたものではなく、日常の雑器であったものと考えている。県外での出土例としては、大阪府南部の泉佐野市の上町遺跡、泉南市の海会寺遺跡及び岡中西遺跡が知られている。ともに根来寺とは歴史的にも関係の深い地域であることが指摘できよう。

(9) この皿と形態的にも技法的にも同一と思われるものが和歌山市の西庄遺跡から出土している。

(10) ヘソ皿については、平安京をはじめ畿内の中枢部では遅くとも14世紀には出現していることがわかっているが、根来寺での出現はこれまでの調査で見る限り、14世紀末ないし15世紀になって現われるもようで、およそ100年の時間的開きが認められる状況である。なお、ヘソ皿は赤色のもの、白色のものの両者が認められる。

(11) 従来、広い意味での織部焼、あるいは河骨の手水鉢と称されていた焼物であるが、最近生産地での研究が進み、瀬戸市内の勇右衛門窯・桂蔵窯などで生産されたものであることが明らかにされている（瀬戸市歴史民俗資料館「研究紀要　VI」1987)。

(12) 「兵庫県の古瓦―淡路―資料集」(兵庫県立歴史博物館　1986) また、この瓦とほぼ同様のものが大阪城の調査において、1580年の石山本願寺・同寺内町の焼失時と考えられる第8層から出土している（「大阪城跡III」大阪市文化財協会　1988)。

(13) 18世紀中頃以降になると、有田町周辺に限らず三河内、波佐見などでも大量に生産が開始され消費地に流通するようになる。最近では生産地での研究が進み各窯ごとの様相が明らかにされつつあり、消費地においても従前のような“伊万里”といった包括的な名称ではなく、窯もしくは生産地で分類するまでになってきているが、現実的には消費地において生産地を決定することは困難と言わざるをえない。このため、肥前系の磁器についてはとくにその産地が明らかでない場合には“伊万里”の呼称を用いている。

## 第３節　II区の調査

### １．　遺　　構

昭和60年度に実施した調査であり、前年度調査区（Ｉ区）の北側にあたる部分である。平均幅約４ｍで総延長はおよそ100ｍを測る。

調査区の大部分は、現有の農道であるが、一部、拡幅により削平を受ける両側の水田部分についても調査を実施した。

検出した主な遺構には、道、石垣、井戸、溝などがあり、時期的には天正以前のものと復興後の江戸時代中期以降のものとに大別できる。

調査に当っては調査区を任意に二分し、南側をII－１区、北側をII－２区と仮称している。以下、これらの小区ごとにその概要を記すことにする。（ただし、両区にまたがる遺構については、１区で取り上げることとした。）

#### ａ．Ⅱ－１区の遺構

II－１区の西側半分は現有の農道部分であり、この部分で、Ｉ区で前述した道とこれに伴う側溝を検出した。東側半分はこの農道部分より一段（0.5～2.0ｍ）高く、現況は水田・畑地となっているところであるが、かつては道に隣接して坊院が営まれていたと考えられるところである。この部分では敷地の西側を区画する石垣や土塀、溝、井戸などを検出した。

**道**（SS-01）

１区で検出した近世の道の延長部分であり、現有の農道下約50cmで検出したものである。道路幅はおよそ2.2ｍをはかり、東側にはやはり１区で検出した側溝が続いている。

道は１区から２区にまたがって延長約80ｍほどを検出したが、予想に反して、２区中央部付近で調査区外へとそれていっている。つまり、この部分より以北では、現有の農道のルートからはずれていることが判明したものである。なお、後述するが、この道の路面上で４箇所の石敷遺構を検出した。

**側溝**（SD-08）

前述の道（SS-01）に伴うもので、Ｉ区のSD-04に相当する溝である。

調査区の南側では、幅50cm、深さ80～100cmをはかる大規模なものであるが、１区北半で急激にせまくなり、２区では幅20cm、深さ20cmほどの規模となっている。

西側の石はすべて和泉砂岩であるが、南側の幅の広い部分

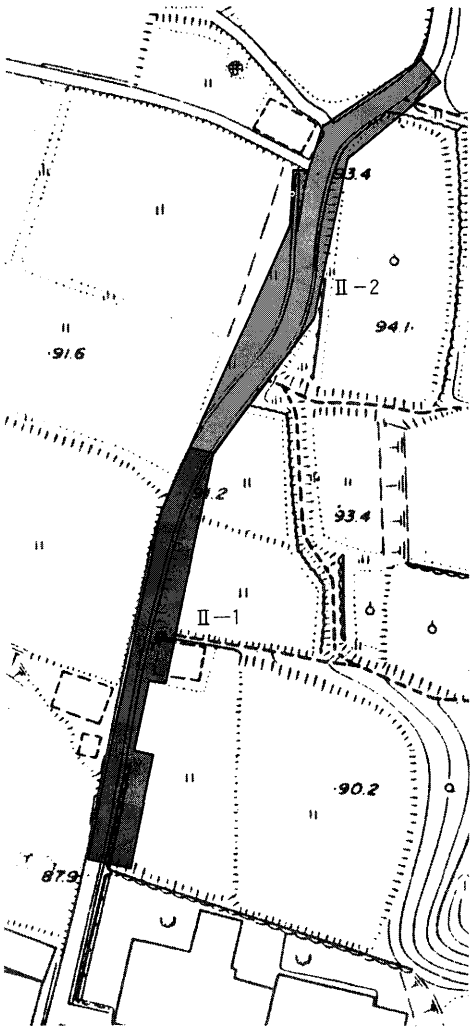



**図28　Ⅱ区調査区位置図**

では、やや大ぶりの石を３～４段に積み上げており、北側の浅く狭い部分では、やや小ぶりの石を１～２段に積んでいる。また、一部であるが溝の底に石を敷いている箇所を確認した。

上層は茶褐色土で、瓦片の他、伊万里、唐津などの近世の陶器片が出土しており、下層の灰色砂質土からは16世紀代の備前、瀬戸の陶器や土師質の皿が出土している。

**石敷遺構**（石敷１～４）

前述の路面上で検出した石敷きの遺構である。10～15ｍ間隔で４箇所を確認したが、いずれも路面の急な傾斜の部分に施されていることから、一種の坂道における階段の役割を担うものであり全体として道のスロープを緩やかにするための施設と考えている。

最も残りのよい敷石１を例にとれば、幅は路面幅と同じ2.2ｍ、長さ2.4ｍを測り、15～20cm大の扁平な石を敷きつめている（図29参照）。

写真９　石敷き路面（大門付近）

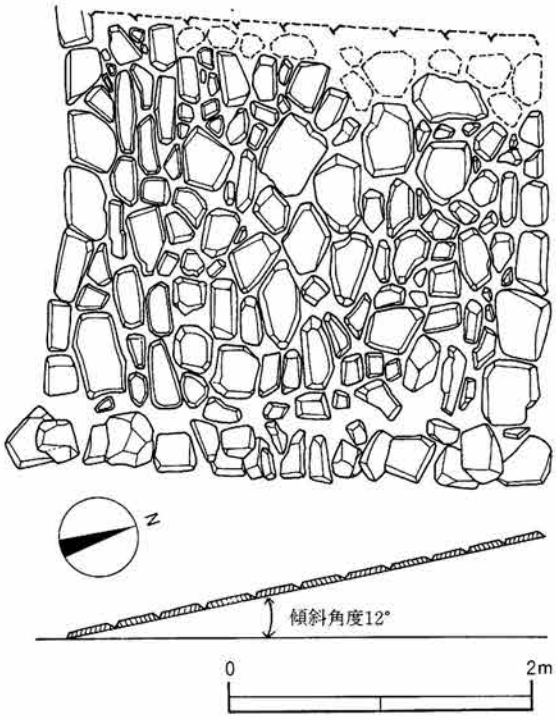



図29　Ⅱ－１区石敷１実測図

このように路面に石を敷きつめる例は調査当時は本例が初例であったが、その後の山内の調査において傾斜地ではないが本例のように石を敷いたものが確認されており（写真９参照）、山内においては、道の要衝部などに敷石を施すことが普遍的に行なわれていたことがうかがわれる。

なお、これらの路面における敷石の例はいずれも近世江戸時代のものであり、天正以前のものについては現段階では確認されていない。

**石　　垣**（SV-02）

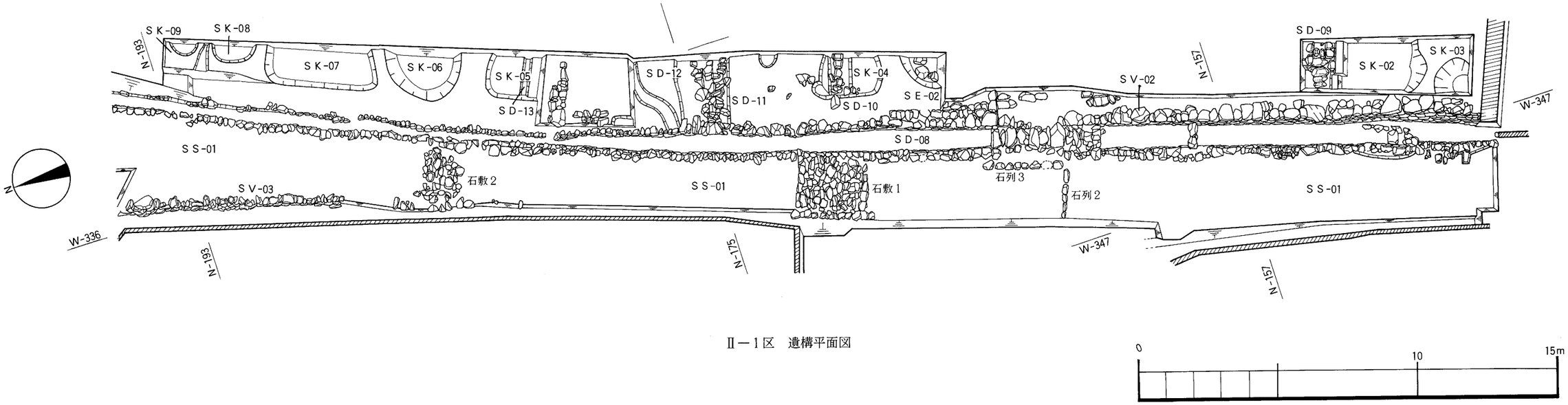
道の東側に位置する坊院の石垣であり、南端の最も道から高い部分でおよそ２ｍを測る。

石垣の基底部は、前述の溝（SD-08）の東側の側石を兼ねている。また、頂部では一部に幅40cmほどを隔てて東側に面をもつ石列が残っていることから、この石垣の上には土塀が建てられていたものと思われる。

この石垣の年代については、その裏込出土遺物から天正の兵火以前につくられたものであることが考えられ、その後江戸時代に至っても残存し、そのまま利用されていたものと思われる。

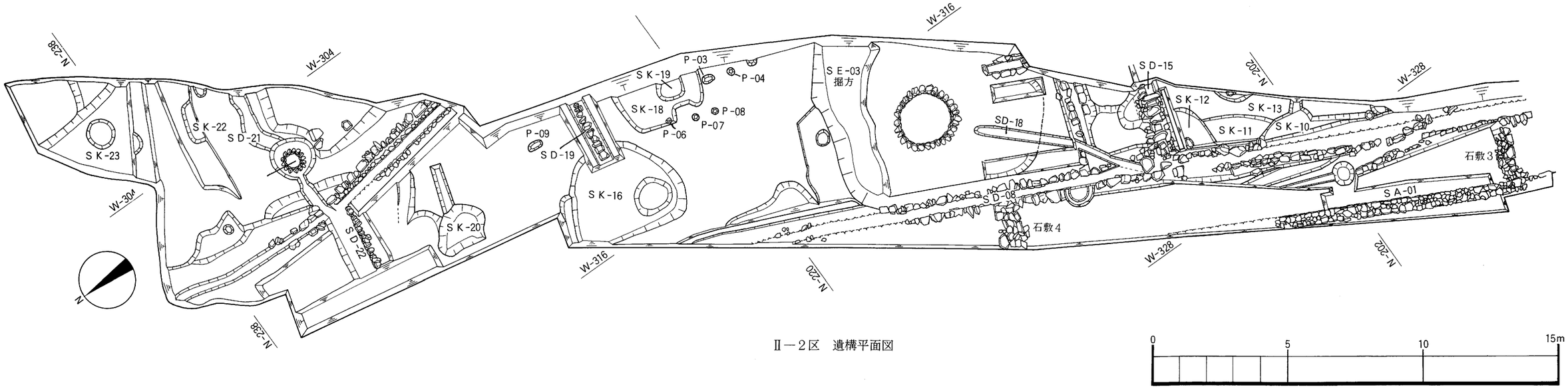
なお、この土塀に画された坊院の屋敷地部分については、昭和59年度に調査が実施されており、13世紀後半から天正の兵火を経て江戸時代の再興まで何回もの作り替えがなされているものの連綿と坊院が営まれていたことが判明している。

また、このときの調査において今回調査区の端で検出




Ⅱ－1区　遺構平面図




Ⅱ－2区　遺構平面図




**図30　Ⅱ－1・2区遺構平面図**

した井戸(SE-03)を完掘りしており、直径1.0m、深さ5.5mを測る江戸時代の井戸であることが判っている。

**入 口 部**

前述の石垣(SV-02)のほぼ中央に設けられた入口であり、幅は約4mを測る。入口手前の溝の部分には長さ50～60cm大の石を蓋石として渡し架けている。

階段部分は石垣より奥に入り込んでおり、残りが悪いため、その全容は不明だが石積みの階段で4段ないし5段であったものと考えられる。調査区の範囲内では検出できなかったが、当然ながらこの石段を上りきったところには門があったものと思われる（第33図参照)。

**溝**（SD-09)

幅50cm、深さ30cmを測る石組の溝である。用いられている石はすべて和泉砂岩で、30～40cm大の大きさである。規模から見ればごく普通の溝であるが、底石を伴っているところが他の溝とは異なっている点である。先にも述べたように、溝の末端部、幹線流路への注ぎ口部分のみ緑泥片岩などの一枚板を付設した例はあるが本例のように、溝の本体部分の底に石を敷いている例はきわめて珍しいものである。

出土遺物がなく、時期については明確ではないが、天正の兵火以前及び兵火に係る時期の遺物を含む土坑（SK-02）を切って造られていることから兵火以後のものであることは確実であり、再興後の江戸時代のものと考えてよいと思われる。

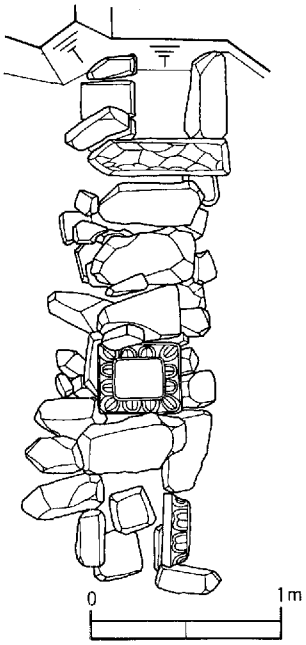



図31　SD-15実測図

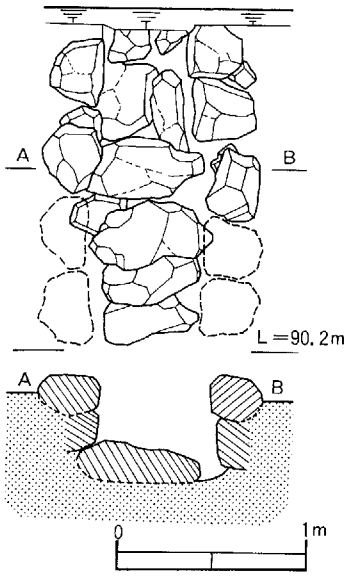



図32　SD-09実測図

**土坑**(SK-02～09)

調査区の東側でいくつかの不整形な土坑を検出した。いずれも天正の兵火以前の遺物を含んでおり、とりわけ多量の瓦片が出土していることから瓦溜めであった可能性が高いものである。

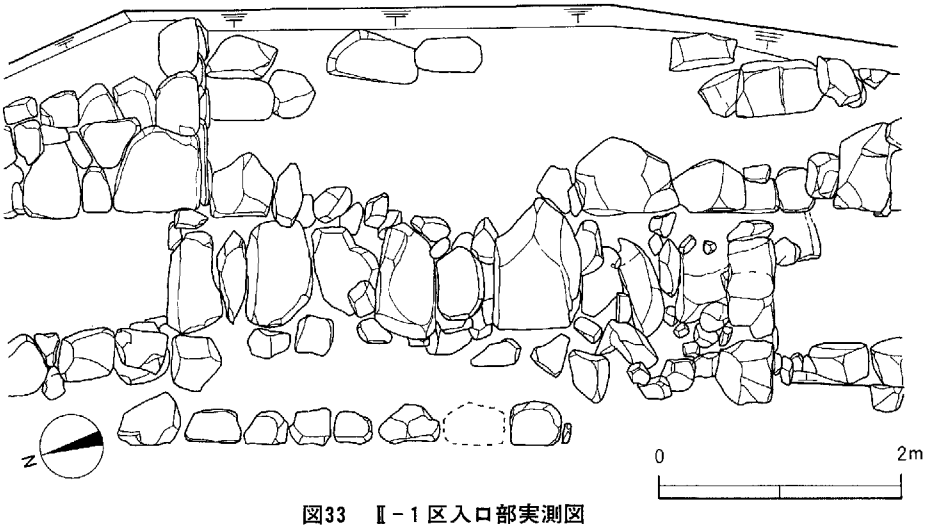



図33　Ⅱ-1区入口部実測図

### b．Ⅱ－2区の遺構

2区の南半部分は道(SS-01)となっているが、この道は先にも述べたように、2区中央部で、調査区の西側へと逸れていっており、調査区の北半は、道の東側に立地していた坊院の敷地に相当する。

このため、この部分については井戸や溝、柱穴といった遺構が多く検出され、遺物も比較的多い状況であった。以下、主要な遺構について概略を記すことにする。

**土　塀**（SA-01）

検出したのは、土塀の基礎である石積みの部分である。幅約30cm、高さ20cmほどを測るもので、延長およそ9mほどを検出した。

両側の石は20cm前後の大きさの和泉砂岩を用いており、両面とも丁寧に面を揃えている。道の西端に接して走っていることから道の西側に立地する坊院の東側を画する土塀であったものと思われる。本来基礎部分はもう少し高いものであり、削平を受けているものと考えられる。なお、基礎部分の石に混じって近世の陶器片が少量出土しており、時期的には江戸時代のものであることが判明した。

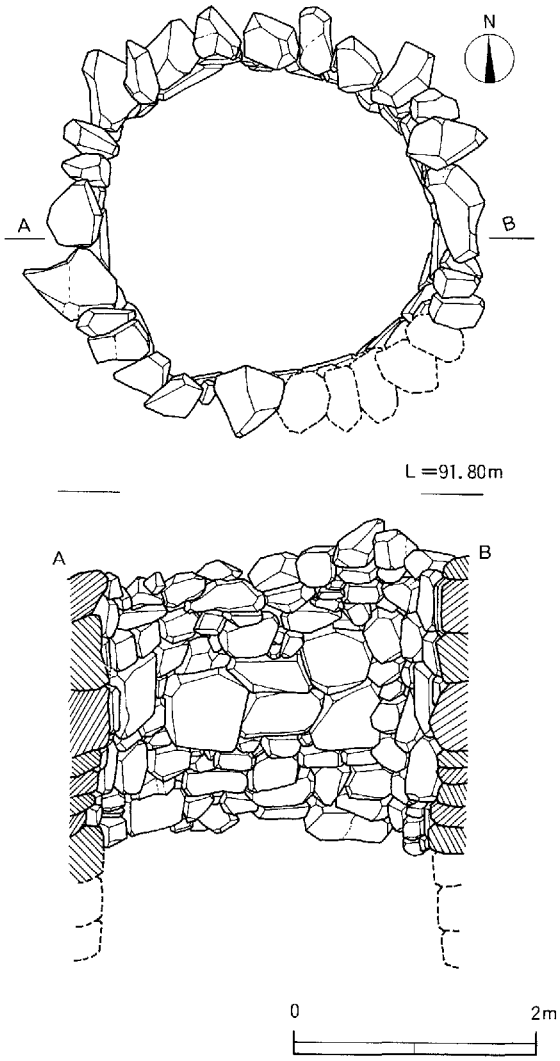



図34　井戸SE-03実測図

**溝**（SD-15）

幹線の流路であるSD-08へと流れ込む溝である。幅約10cm、深さ30cmを測るもので、暗渠排水となっている。

蓋石および側石に板碑や五輪塔の台座をいくつか転用して使用している（図31参照）。

**井　戸**（SE-03）

直径2.2mを測る石組みの井戸である。2.5mほど掘り下げた時点で崩壊のおそれがあったため掘り下げ作業を断念した。掘り方は隅丸方形で、一辺7mほどの大きさであり、このことから推測すれば井戸は少なくとも4m以上の深さを有するものと考えている。

山内の既往の調査で検出した石組みの井戸の中では最大規模のものであり、道に隣接して作られていることなど、従来の在り方とはやや様相を異にするものである。ひとつの坊院に属するものではなく、共通の井戸であった可能性も考えられよう。

井戸からは近世の陶磁器片が出土しているが、掘り方からは中世、16世紀代の遺物より新しいものはなく、また、SD-08との切り合い関係からも16世紀代につくられ、近世に至るまで継続して使用されていたものと考えられる（図34参照）。

**井　　戸**（SE-04）

直径70cm、深さ80cmを測る小振りの井戸である。和泉砂岩による石組みで、上端は円形となっているが、基底部はやや大きいめの４個の石を方形に組んでいる。

井戸内の上層部分には天正の兵火によると思われる焼土で埋まっており下層は砂質土が堆積していた。出土遺物がなく、時期を限定することはできないが、天正の兵火以前のものであることは確実である。

**石　　垣**（SV-04、05）

２区北側の一段高くなる部分で検出した石垣である。二つの石垣が平行して並んでいるが、同時期のものか作り替えによるものかは不明である。手前側の石垣（SV-04）の基底部から後側の石垣の頂部までで高さは約80cmを測り、延長約５ｍを検出したが、石垣はさらに調査区外へと延びていっている。

坊院の敷地を画するものであろうが、現有の畦畔や検出した道とは方向を異にし、西南方向に延びている。

また、石垣の基底部にそって幅約20cm、深さ15cmほどの石組の溝（SD-20）が走っている。

さらに、この溝に直交して、幅約30cm、深さ40cmを測り、片側のみ石組の溝がある（SD-22）。

石垣、およびこれらの溝は、天正の兵火によると思われる焼土により覆われており、兵火以前の遺構であることが判明している。

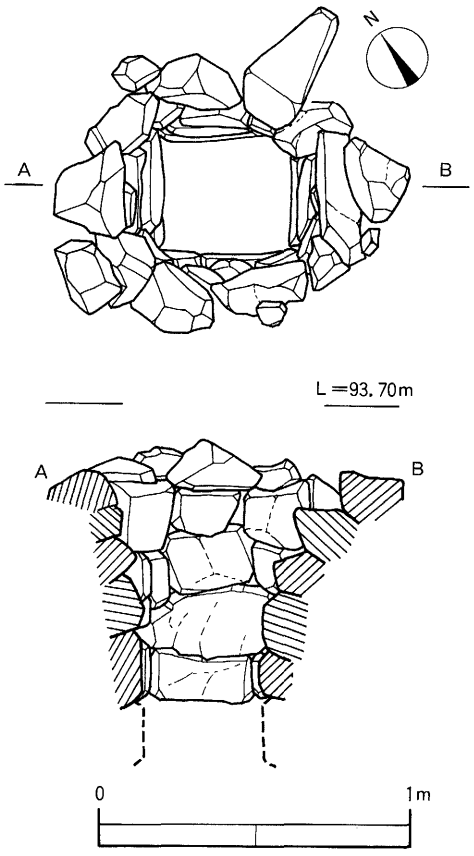



**図35　井戸SE-04実測図**

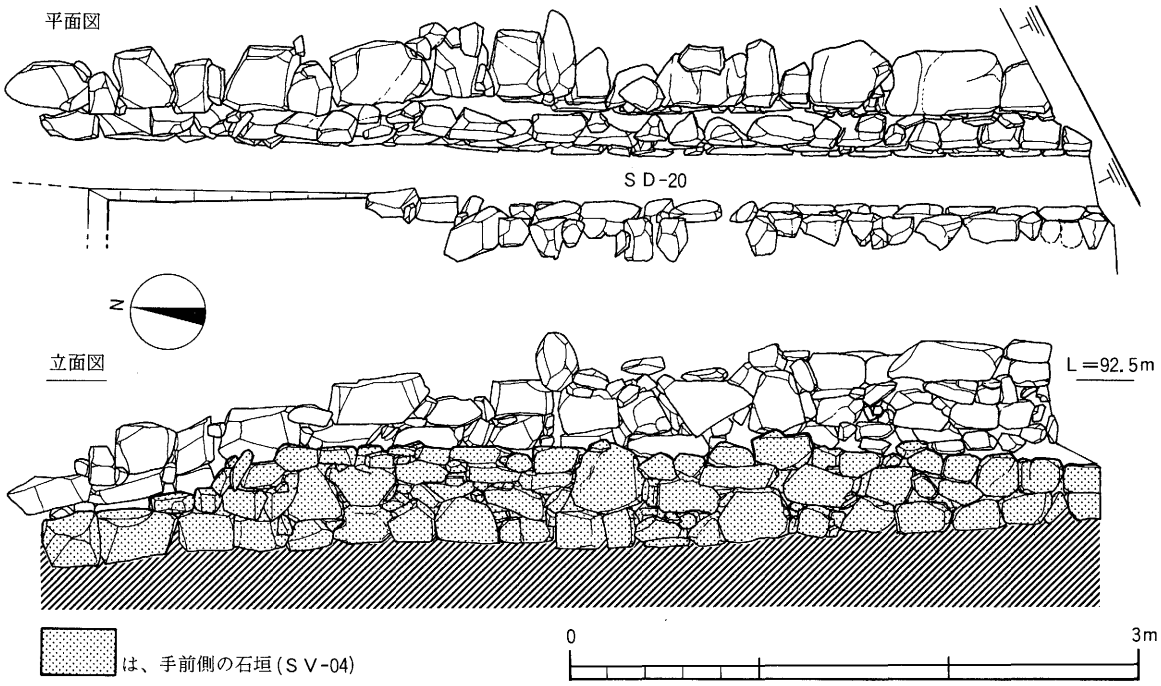



**図36　石垣SV-04・５、溝SD-20実測図**

石垣については裏込出土の遺物から16世紀前半に作られたものと思われる（図36参照）。

## 2．遺　物

検出した遺構及び包含層からは大量の遺物が出土した。概観すれば、15世紀から天正の兵火（1585）までの遺物群と復興後の江戸時代中期、18世紀を主体とする近世の遺物群とに大別することができる。

このうち前者のものでは、土師質の皿、釜、瓦質の火舎、こね鉢、備前の壺、甕、すり鉢といった日常雑器が多く、これに少量ながら中国製の青磁・白磁・染付の碗皿などがまじっている。

後者については、その大部分を備前系の陶磁器が占め、わずかに丹波の甕、信楽の灯明皿などが出土している。

その他の遺物としては、朝鮮製の象眼青磁や根来塗りとして名高い漆器の椀など、従来の山内の発掘調査では出土例の少ないものも出土している。以下、包含層・遺構ごとに分けて説明を加えることとする。

### a．第１層出土の遺物（図37、図版25）

第１層は表土下の黄色土もしくは茶色土で、近世の遺構を検出するまでの層である。この包含層は当然ながら近世以降のものであり、遺構も近世を主体とするものであるが、天正の兵火時あるいはそれ以前の古い遺物もかなりの量の混入が認められた。

（243）は近世の丹波の甕である。口縁はやや偏平な「T」字状をなし、口縁上端部にはわずかに２本の凹線が巡る。また頸部下半から体部上半にかけて段状の凹が巡っている。全体に暗茶色を呈し、一部に淡緑灰色の自然釉がかかっている。胎土は茶灰色を呈し、やや大粒の砂粒を含んでいる。

（244）は唐津の碗である。枇杷色の飴釉を総がけし、畳付部のみ釉を削り取っている。全体に細かな貫入が入っている。近世の根来寺では比較的出土量の多いタイプである。

（245）も同じく唐津の碗を考えられるものであるが、京焼風の淡い黄白色を呈している。釉は透明なガラス質で、畳付部のみ釉を削り取っている。胎土は黄白色を呈し、よく焼き締まっており半陶磁器質の感がある。（246）は片口の鍋となるものと考えている。小破片のため実測図には復原し得なかったが口縁端部に一対の輪状の取手がつくタイプと思われる。内外面とも失透質のチョコレート色の釉が施され、外面体部下半から底部にかけて露胎となっている。胎土は暗黄白色を呈し、焼成はやや甘い。産地については不明である。近世でもごく新しい時期、18世紀末以降のものと考えている。

（247）は京焼の碗と思われる。ただ、先にも述べたように、唐津においても京焼風の製品を数多く製産しており、本品もその一例である可能性も否定できない。器形は体部が底部からやや横開きに丸く立ち上がり、器高の低いことが特徴と言える。黄白色を呈し、透明質の釉が高台部付近まで施されている。高台及び外底部は露胎となっている。小破片のため全体の図案は不明だが、見込み部分には、やや発色の悪い呉須によって風景が描かれている。

（248）は伊万里の鉢である。外面口縁部下に一条の圏線を巡らせ、その下に簡略された花文を描いている。釉には小さな気泡が目立ち、呉須による文様が滲んだように見えている。

（249･250）は伊万里の碗で、俗に“くらわんか茶碗”と称されるものである。ともに簡略化された草花文が描かれているが、（249）は呉須の発色がよく、濃いブルーであるが、（250）は、うすくなってい

る。18世紀中頃の製品と考えるものであるが、粗製品であり、波佐見周辺で焼かれたものと考えるのが妥当であろう。

(251) は伊万里の盃である。染付であるが、文様は極単に簡略化されたものがわずかに描かれているだけであり、19世紀代の製品と考えている。

(252) は筒形を呈した染付の湯飲み碗である。見込には手描きによるくずれた五弁花文が施されている。このタイプの製品は伊万里では18世紀後半から1810年代まで製産されていたことが知られており前述のくらわんか手の茶碗などより一時期新しいものと言えよう。

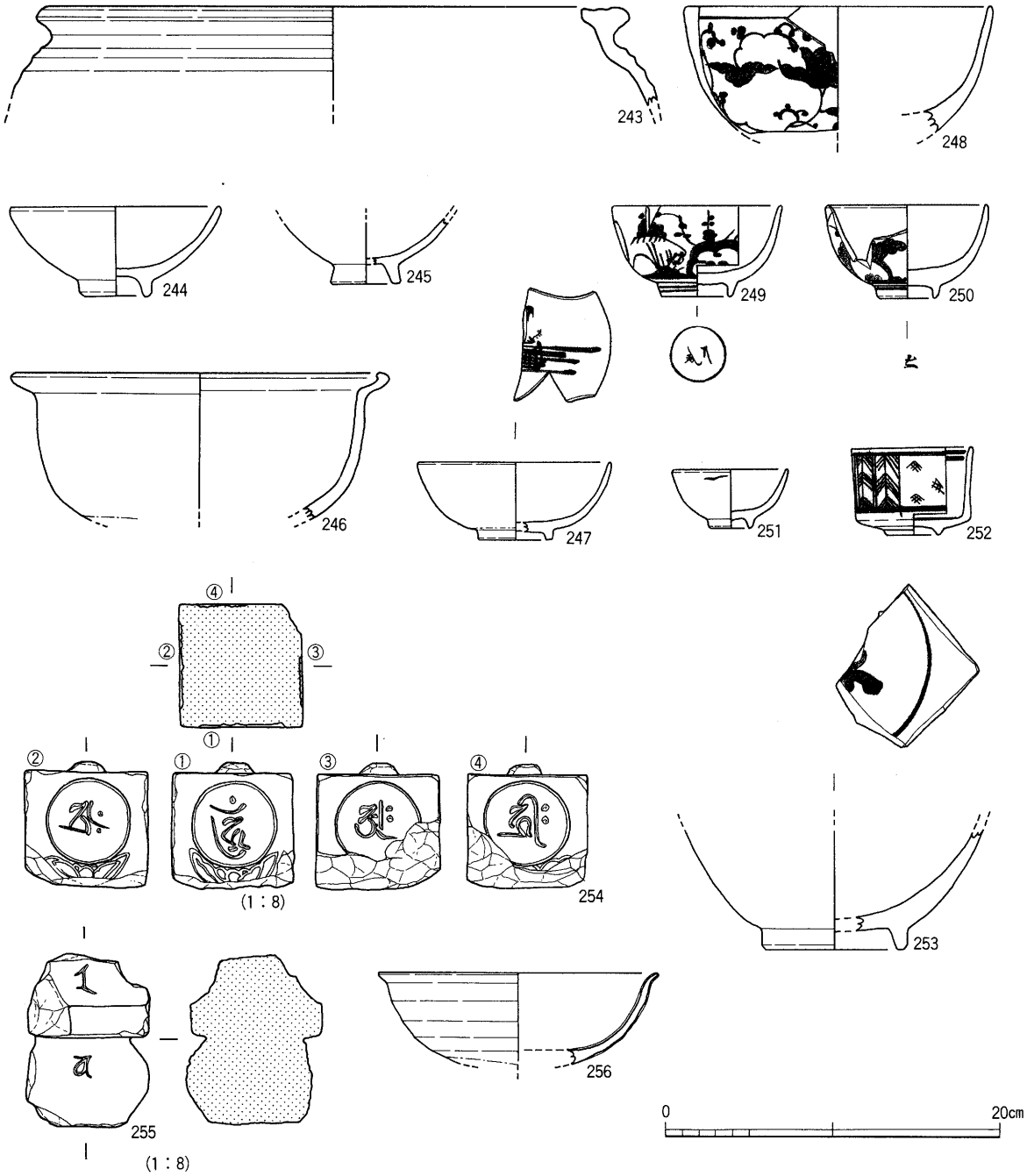



**図37　Ⅱ区第1層出土遺物**

(253) は染付の大鉢になるものと思われるが、小破片のため詳細は不明である。いずれにせよ、他の共伴する遺物の年代観からみて、18世紀以降の製品と考えてまちがいないであろう。

(254) は五輪塔の地輪部分と考えられるものである。四面には月輪の中に4種類の梵字を彫んでいる。材質は砂岩である。(255) も砂岩製で、一石五輪塔の火・水輪部分である。それぞれに「ラ」「バー」の梵字が彫られている。

(256) は中国製の白磁の碗である。全体に淡い緑色を呈しており体部外面には明瞭な削り底が残る。12世紀代の製品と考えられるものであり、第1層出土遺物の中では混入品として考えるべき製品である。

**b．第2層出土の遺物**（図38、図版26）

第2層も近世の包含層であり、18世紀から19世紀前半代の遺物片を含んでおり、第1層と基本的な相異は認められない。このうち (257) は丹波の甕で「T」字状の口縁をなし、口縁平担部には凹線が巡り頸部と体部の接合部分は段となっている。口縁平担部から内面にかけては暗緑色の釉が施され、体部は茶色を呈するが、肩部の何ヶ所かに装飾として暗緑色の釉を流しがけしている。

(258～263) はいずれもすり鉢で、このうち (258) は備前の製品と考えられるもので、暗灰色を呈し、内面のスリ目は11本単位で底部まで施されている。備前V期でも後半から末の段階のものと思われる。(259～262)はいずれも赤茶色を呈し、焼成はやや甘い。産地については小破片のため不明だが、近世の製品であり在地周辺で焼かれたものである可能性が高い。

(263) は丹波のすり鉢と思われる。全体に茶灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。内面口縁部下にナデによるかすかな凹線が巡り、スリ目の幅が狭いことが特徴である。16世紀後半の製品と考えているが根来では丹波のすり鉢の出土は数少ないと言える。

(264・265) はともに伊万里の染付碗である。高台が高く、体部は斜め上方に立ち上がるタイプのもので広東碗と称されるものである。18世紀から19世紀前半のものと考えられよう。(266) は染付の皿である。底部の器壁は1㎝などときわめて厚い。呉須による内面の文様は発色が悪く灰色となっている。ただ外底部に描かれた「大明」の文字は青く発色しており、内面については当初から意識して灰色を出しているとも考えられる。器形的には17世紀前半代の可能性も考えられる製品である。

(267) は伊万里の青磁染付の碗である。内面口縁部下には四方襷文が巡らされており、外面は淡い草緑色を呈している。通例、蓋を伴うタイプの碗であり18世紀中葉から末の製品と考えられる。

(268～272) はいずれも伊万里の“くらわんか”と称される茶碗であり、体部外面には簡略化された草花文を描く。18世紀中葉を前後する時期の製品である。先にも述べたように伊万里の製品の中ではこの手のものが最も出土例が多いと言える。(273) は染付の蓋で、体部は斜め下方に開き気味で口縁部に至る。18世紀後半の製品と思われる。

(274) は暗緑色を呈した碗で、唐津の製品と考えている。全体に細かな貫入が入る。(275) は陶器の灯明皿である。内面のみ施釉で淡黄白色を呈している。焼成はよく堅密である。(276) は広口壺の口縁部と考えられる。口縁端部は大きく外反し二段上口縁となっている。内外面は淡茶色を呈し、胎土は灰白色を呈している。このことから東海地方、常滑あたりの製品の可能性を考えており、時期的には、中世でも古い段階、12世紀から13世紀の前半のものと考えられよう。

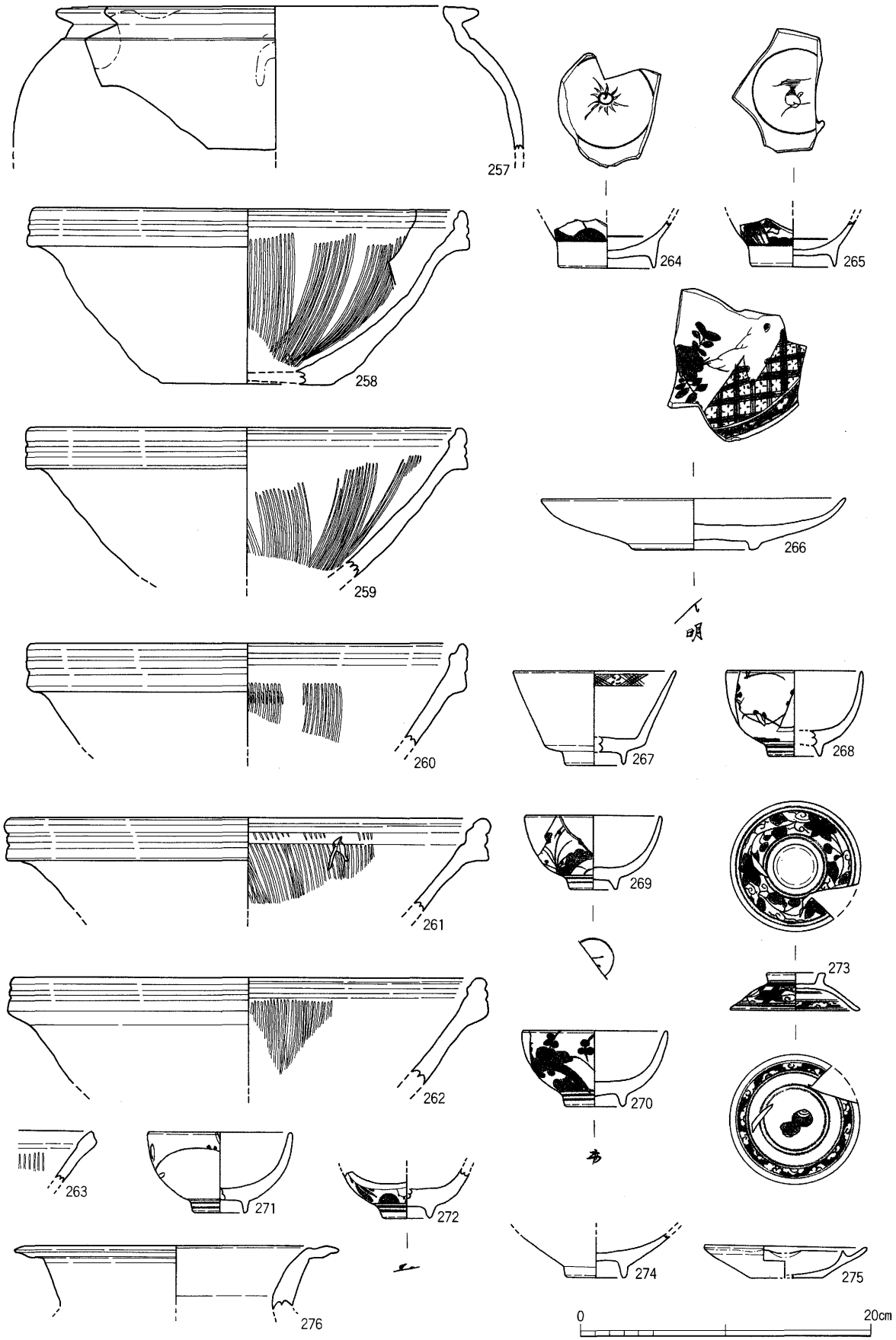



図38　Ⅱ区第2層出土遺物

**c．焼土混入土層出土の遺物**（図39、図版27）

この層は焼土層の上にあたる層で茶褐色もしくは暗灰色の土に焼土が混じっている層を総称したものである。基本的には焼土層と同じような組成をなしているものと思われ、あきらかに混入と考えられるものを除いては近世の遺物は含まれていない状況であった。

（277）は中国製の青磁碗で淡い草緑色を呈する。内面体部には型押しによる人物像らしきものが描かれており、俗に“人形手”と称されている碗である。外面に巡る雷文帯から15世紀代のものであると考えている。なお、この手の碗の出土例は全国的に数少ないが根来では過去の調査においてわずかに一点出土している。（278）は青磁の菊皿である。淡い草緑色を呈し、釉は一部高台内まで流れこんでいる。白磁の菊皿に比べて、この手の青磁の菊皿の出土例は少ない。（279）も同じく中国製の青磁で盤となるものである。体部内面には丸ノミ状の工具による蓮弁が、内底面には型押しによる花文が施されている。

（282）は染付の皿で、内底面の一重の圏線の中には一匹の蟹が描かれている。体部から上半を欠くが、口縁端部まで丸く内彎するタイプと思われる。16世紀後半の製品であろう。1585年焼亡という根来あってはその直前に現われる製品と言える。（283）は灰釉皿で、おそらく丸皿となるものと思われる。高台は削り出しによるもので底部には輪トチ痕が残る。16世紀の中頃、大窯II期の製品と考えている。

（284）も同じく瀬戸の製品で灰釉の瓶子である。釉は淡緑色を呈しガラス質で、釉垂れが認められる櫛描条線に狭まれた肩部には三ツ葉文、菊花文が押捺されている。14世紀前半の製品と思われる。

（285～294）はいずれも国産の焼き締め陶器である。このうち（285）は常滑の製品で甕となるものであるが、口縁部の型態から13世紀の中頃から後半（常滑II期ないしIII期初頭）の製品と思われる。

その他はいずれも備前の製品であるが、若干の時期差が認められる。たとえば（286）の甕は口縁部に浅い凹線が巡っており、16世紀前半（備前V期前半）のものであるが（287）の甕は口縁部がやや扁平な玉縁状となっており一時期古い15世紀前半（備前IV期前半）のものである。壺類はおおむね16世紀前半から中頃（備前V期）のものと思われる。また、（292）のすり鉢は口縁部が上下に太くのびたもので、15世紀末ないし16世紀初頭（備前IV期後半）のものと考えられる。なお（293）は鉢となるものと思われるが、根来ではあまり見かけないタイプである。

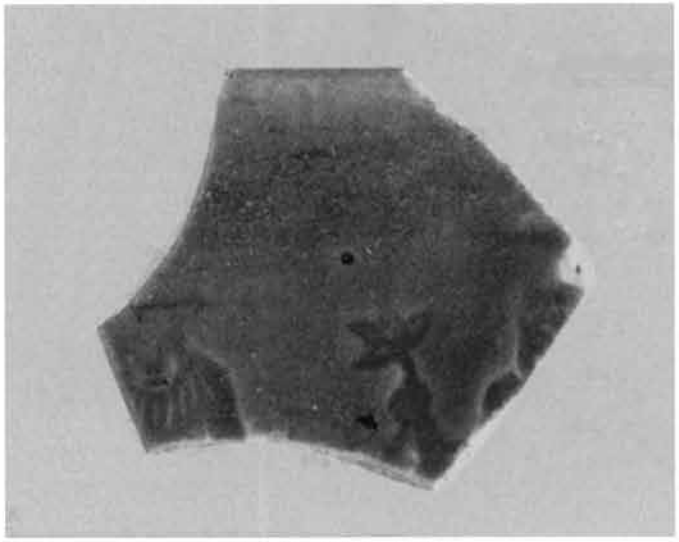


**写真10　人形手青磁碗**

土師質皿（295～303）はいずれも赤橙色を呈し、胎土にはクサリ礫、片岩を多く含む。また、口縁部は強いヨコナデのために肥厚しており、山内では16世紀に通有のものである。

（304）は均整唐草文を配した軒平瓦である。唐草は細く便化している。また周縁の両端部が拡張しつつある。（305）の軒丸瓦は左巻の巴文で、巴の頭部はやや小さく、尾部は細く長い。その周囲には小ぶりの珠文が16個配されている。

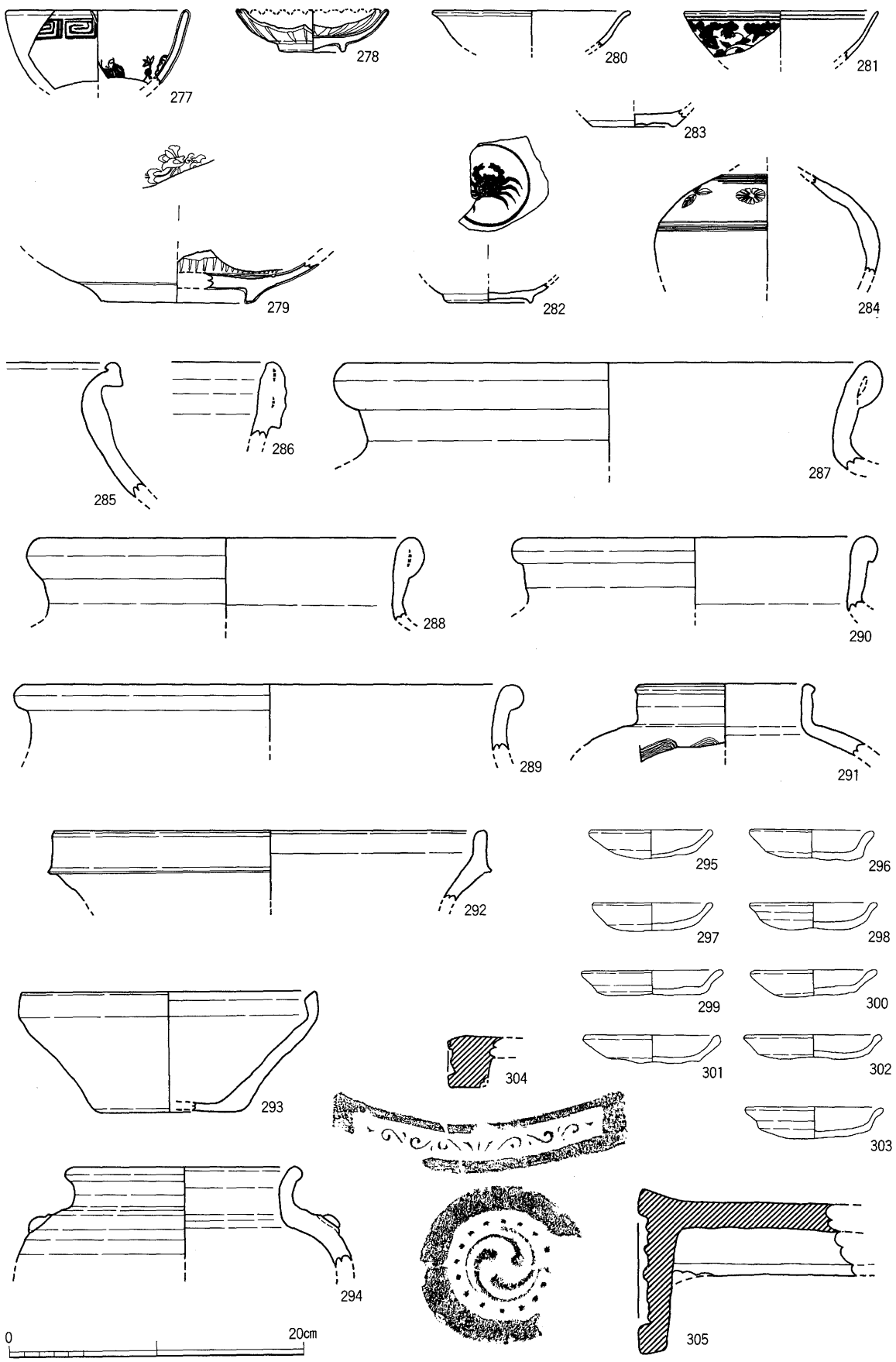



図39　Ⅱ区焼土混入土出土遺物

**d．焼土層出土の遺物**（図40、図版28）

天正の兵火によると思われる焼土層からの出土遺物である。したがって上限を1585年に設定できる遺物群であるが実際には土師質皿などを除けば兵火直前の遺物より一時期古い16世紀中頃の遺物が多く、また伝世品と思われる遺物も少なからず見出すことができる状況である。

(306) は中国製の青磁の碗で体部外面には線描によるかなり便化した蓮弁が描かれている。15世紀末ないしは16世紀前半の製品である。(307は) 瀬戸の天目茶碗である。釉は厚く黒色を呈する。露胎となっている高台と付根部分には化粧がけが施されており茶褐色を呈している。また胎土は白色を呈し焼成は堅密で中国製のものに較べても孫色がないほどである。大窯の初期（Ⅰａ期）の製品と考えており、15世紀末ないし16世紀初めのものと思われる。(309) は中国製の碁笥底の皿で体部には簡略化された蕉葉文が巡る。16世紀中頃の製品である。

(310･311) はともに東播系のこね鉢である。14世紀代の製品であるが雑器でもあり伝世品と考えるより混入したものである可能性が高い。(312)は瀬戸のおろし皿である。。13世紀代の製品と考えられるものである。(313) も同じく瀬戸の製品で灰釉の壺である。底部のみであるがおそらく四耳壺になるものと思われ、年代的には14世紀の中頃を考えている。(314) は備前のすり鉢で茶色を呈している。口縁端部の形態から備前Ⅳ期前半、15世紀中頃の製品と思われる。(315～317)はいずれも備前の大甕口縁部である。このうち (315) はⅤ期、16世紀中頃の製品であり、(316・317) は一時期古くⅣ期、15世紀代の製品と考えられる。

(318) は備前の広口の壺である。器高は推定で40cm程になるものと思われる。外面は茶灰色を呈し内面は灰色となっている。体部中位に装飾の耳が貼りつけられているが、粘土ヒモを丸めて貼りつけただけの雑なつくりである。頸部がそのまま口縁部となっているようなやや特異な形であるが、この手のタイプのものは少量であるが、これまでの調査においてもいくつか出土している。貼り付けられた、耳のつくりなどから16世紀前半～中頃のものと考えている。

(319) は備前の水屋甕である。内外面とも灰褐色を呈し、口縁部と肩部上位に緑灰色の自然釉が被っている。胎土には少量の砂粒を含み、断面はチョコレート色を呈している。口縁部の形態から備前Ⅴ期16世紀の中頃のものと考えている。

(320) も同じく備前の製品で、推定器高30cmほどの壺である。外面は灰褐色、内面は灰色を呈している。肩部には櫛描きによる波状文が巡っており、この部分に緑灰色の自然釉が厚く被さっている。波状文の簡略化の度合や口縁部の形態から備前Ⅴ期、16世紀代の製品と判断される。

土師皿 (321～324) はいずれも赤橙色を呈し、胎土にはクサリ礫や片岩を多く含んでいる。口縁部は強いヨコナデのため肥厚している。再三述べてきたように、16世紀代の根来では通有のタイプであり、天正の兵火による焼土層から出土する土師質皿の大部分がこの手のものであると言える。

(325) はやや小型の軒丸瓦である。左巻の巴は尾部が長く、丁寧なつくりである。配されている珠文は16個を数える。外縁は丁寧にナデ施がされておりやや幅広である。(326) の軒丸瓦は三ッ巴文で小さな珠文が密に配されている。(328) は鉛の延板である。腐触のため表面は白色を呈している。先端部が尖っており断面は蒲鉾状を呈する。中央左隅に竹管状の刻印と思われるものが押されており、重さは160ｇを計る。山内では始めての出土であるが鉄砲の玉の原料であった可能性が考えられよう。

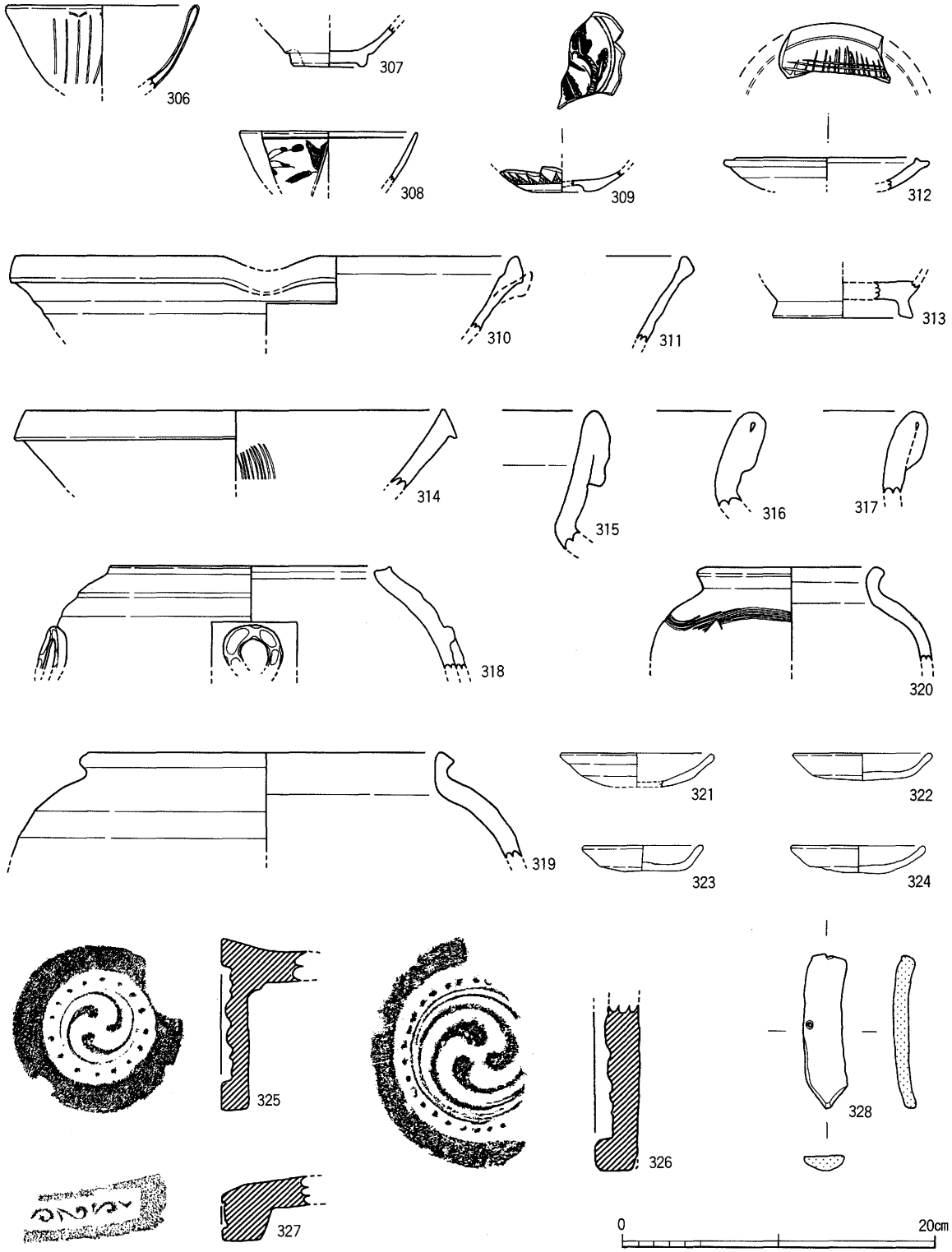



図40　Ⅱ区焼土層出土遺物

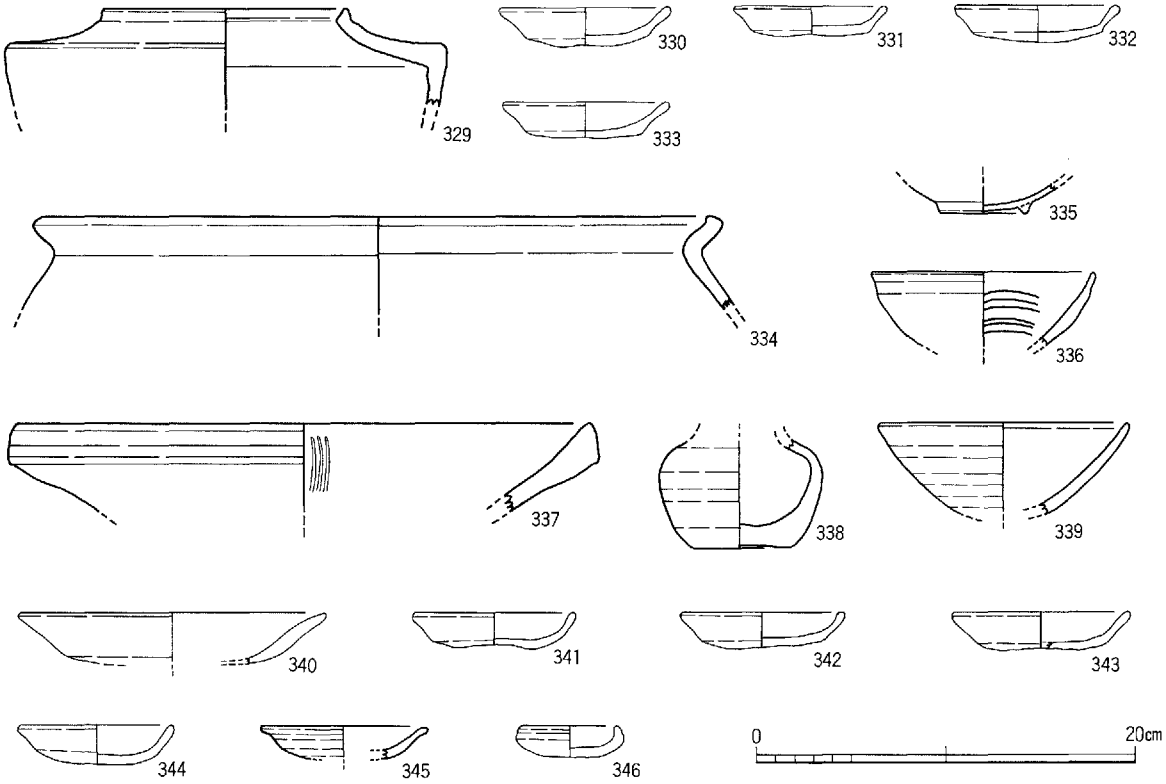
**e．その他の包含層出土の遺物**（図41、図版28）

ここにあげた層はいずれも第２層より下の土であり、レベル的には焼土や焼土混じりの土に相当するものである。したがってこれらの層には近世の遺物は含まれずすべて16世紀以前のものである。

(329) は備前の広口の壺である。口縁部は短かく、肩部が張っており体部にかけてほぼ直角に折れ曲っている。外面は黒灰色を呈し、一部に緑灰色の自然釉が被さっている。断面は灰色を呈し、胎土はきめの細かな土で砂粒はほとんど含まれていない。(330～333)の土師質皿は根来寺における16世紀の通有のタイプのものであり、赤橙色を呈し胎土にクサリ礫、片岩を多く含むことが特徴である。

(334) は土師質の羽釜、もしくは堝となるものである。「く」の字状に折れ曲った口縁の端部は内側につまみ上げられている。形態的には大和型の羽釜に類似するものであるが、胎土には砂粒のほか片岩が多く含まれており在地の製品であることが窺われる。(335.336) は瓦器の碗である。高台は断面三角形を呈し、やや退化の傾向が見られる。また内面のミガキは幅１㎜弱と細く５㎜などの間隔で施されている。これらの特徴から13世紀中頃～後半のものと考えている。

(338) は備前のすり鉢である。内面は暗灰色、外面は茶色を呈する。胎土は粗く、砂粒を多く含んでいる。口縁端部は斜めになっており備前IV-９期、15世紀前半代の製品と考えている。(338)も備前の製品で小壺である。全体に灰色を呈し、底部のみ淡茶色となっている。また、底部は糸切である。頸部上半を欠くが、おそらく鳶口の壺になるものと思われる。(339) と (345) は瀬戸の灰釉の碗と皿である。ともに大窯II～III期の製品と考えている。土師質皿は大部分が通有のタイプであるが、(340) は畿内系のものと思われる。(346) は小皿として実測したが蓋の可能性も考えられる。




淡青灰色砂質土（329～333），黄色土（334～336），暗灰色炭混入土（337～346）

**図41　Ⅱ区包含層出土遺物**

### f．遺構出土の遺物

**SD-08出土の遺物**（図42、図版29）

（347）は土師質の焙烙である。内面は明黄茶色、外面には一部煤が付着しており黒茶色を呈している。やや内傾して立ち上がる体部は口縁下２㎝ほどが内外面とも丁寧なヨコナデが施されている。胎土には砂粒を多く含むほか金雲母が少量含まれている。（348）は小型の鉢もしくは片口のつく鉢となるものと考えている。口縁端部を除く全面に光沢のある茶褐色の釉が施される。断面は赤茶色を呈し、焼成はやや甘い。唐津の製品である可能性が高い。

（349）は伊万里の染付碗である。やや大振りの碗で内面口縁部下位に四方襷の文様帯が巡り、体部外面には丸文が描かれている。内底面の五弁花は筆書きである。18世紀後半の製品であろう。（350～351）はともに草花文の描かれたくらわんか手の碗である。18世紀前半～中頃の製品と考えられる。

（352）も同じくくらわんか手の碗である。畳付を除く全面に施された釉はややくすんだ黄灰色を呈しており、体部に描かれた一重の網手文も発色が悪く青灰色を呈している。内面は無文となっている。18世紀前半の製品であろう。（353）は小破片であるが前述の丸文の碗（349）と同タイプのものになるものと考えている。

（354）は高台が高く、体部が斜上方に開き気味に立ち上がるタイプの碗で、いわゆる広東碗と称されるものである。18世紀末以降に現われるタイプである。（355）は染付の皿である。器高は低く、体部は口縁部にかけて内彎気味に丸く立ち上がり、体部外面には簡略化された唐草文が配されている。高台は蛇の目凹形高台となっており、内底面はやや盛り上がっている。18世紀末以降の製品であろう。

（356）は伊万里の仏飯器である。脚外底部は露胎でややあげ底となっている。体部外面の文様は簡略化が著しく無文に近い状態である。これも18世紀末以降の製品と考えられる。

以上が上層からの出土遺物でありいずれも近世・18世紀前半～19世紀初め年代幅でとらえられるものと言えよう。

（357）は中国製の青磁で、小型の盤になるものと思われる。淡緑色を呈し、体部外面にはやや形のくずれ始めた蓮弁が彫られている。14世紀代の製品であろう。（359）は中国製の白磁の皿である。全体にくすんだ灰白色を呈し、釉切れや砂が体部下半に付着しているなど粗悪品の感がある。（360）は中国製の染付皿である。畳付部のみ釉を削り取っている。体部上半を欠くが、口縁端部が外反するタイプの皿であり、16世紀を前後する時期の製品と考えている。（361）は呉須手の大皿である。全体に淡い緑灰色を呈し、外底部は露胎であるが一部釉が流れ込んでいる。体部中位の圏線に狭まれた部分には丸ノミ状の工具により蓮弁状の文様が施されている。この手の皿は兵火以前にかなりの量が入ってきているもようで、これまでの調査においてもいくつか出土例が知られている。（362）は瀬戸の浅鉢と考えている。黄白色のややパサついた胎土で、その上にガラス質の透明な釉が体部下半まで施さ

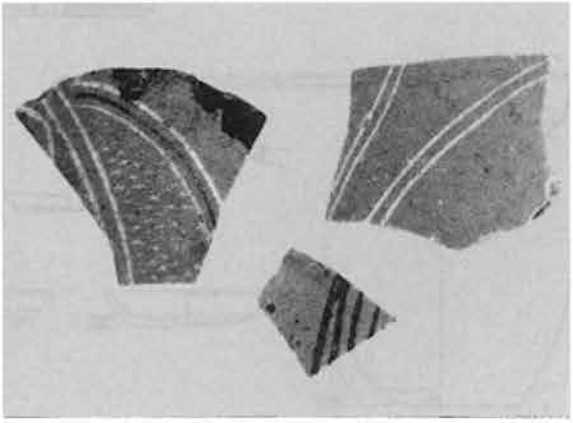


写真11　象嵌青磁

れている。高台を欠いているがおそらく幅広の低い高台がつくものと思われる。18世紀後半ないしは19世紀初めの製品と考えている。

(363) は備前の壺である。(364) は瀬戸の灰釉皿である。内底面の真中に印花文が施されておりその上からガラス質の草緑色の釉が厚く施されている。大窯Ⅰ期、16世紀初めの製品である可能性が高い。土師質皿 (365～368) はいずれも口縁端部の肥厚する16世紀に通有のタイプの皿である。

以上の下層出土遺物のうち (362) を除けばいずれも中世の遺物であり、この溝は上層と下層とでかなりの時期差が認められるものと言えよう。

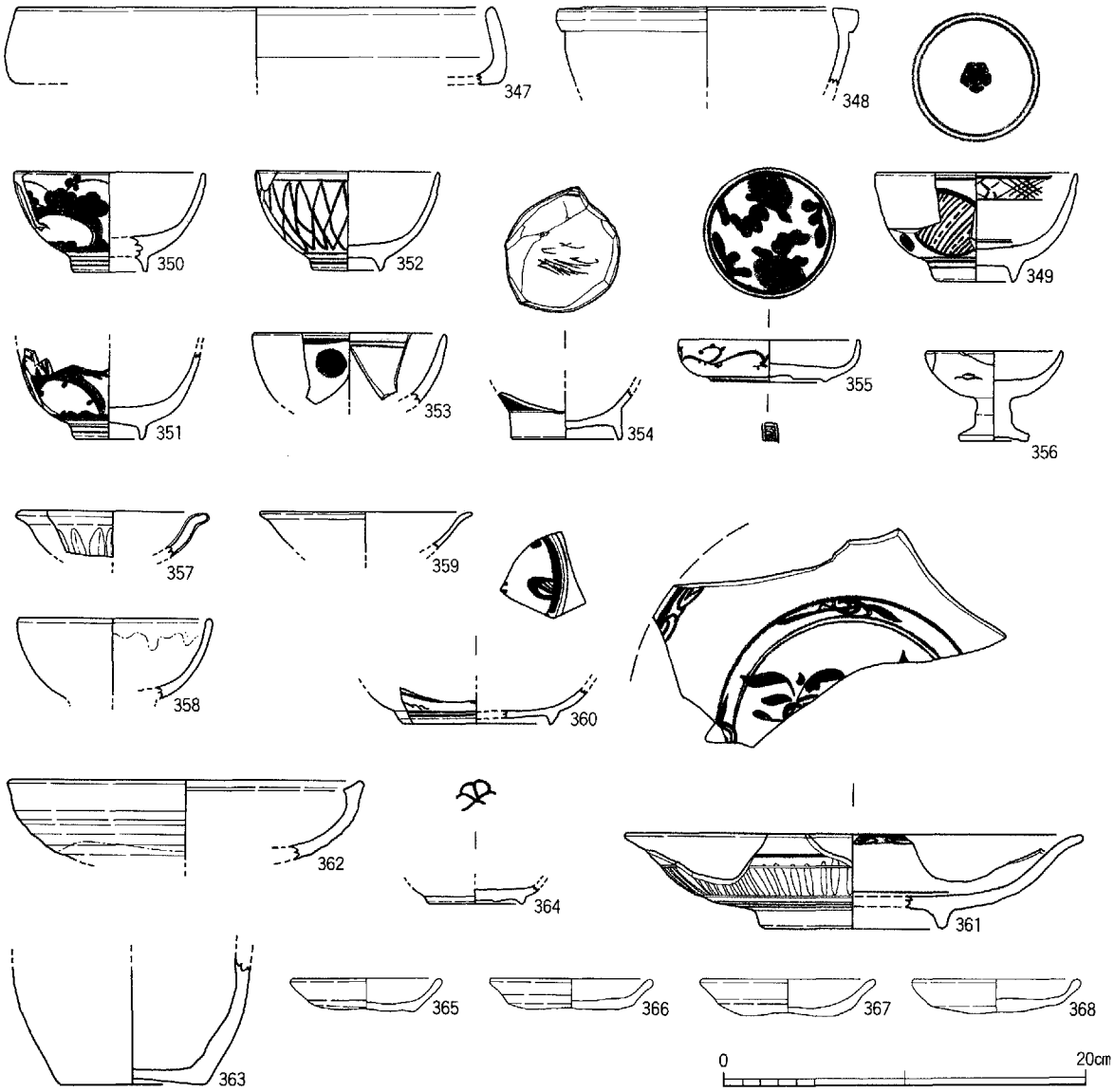



**図42　Ⅱ区SD-08出土遺物**

**SD-11出土の遺物**（図43、図版30）

(370) は中国製の青磁碗である。淡緑色を呈し、全体に細かな貫入が入っている。体部外面に描かれた蓮弁は線描によるものであり、剣頭部文はまだ単位を失っていないがやや粗雑なものとなっている。15世紀末ないしは16世紀初頭のものと考えられる。

(371.372) は土師質の皿で、いずれも赤橙色を呈し胎土にはクサリ礫や片岩を多く含んでいる。口縁部が強いヨコナデのために肥厚しており、このタイプの皿は先にも述べたように根来寺では16世紀に通有のものである。

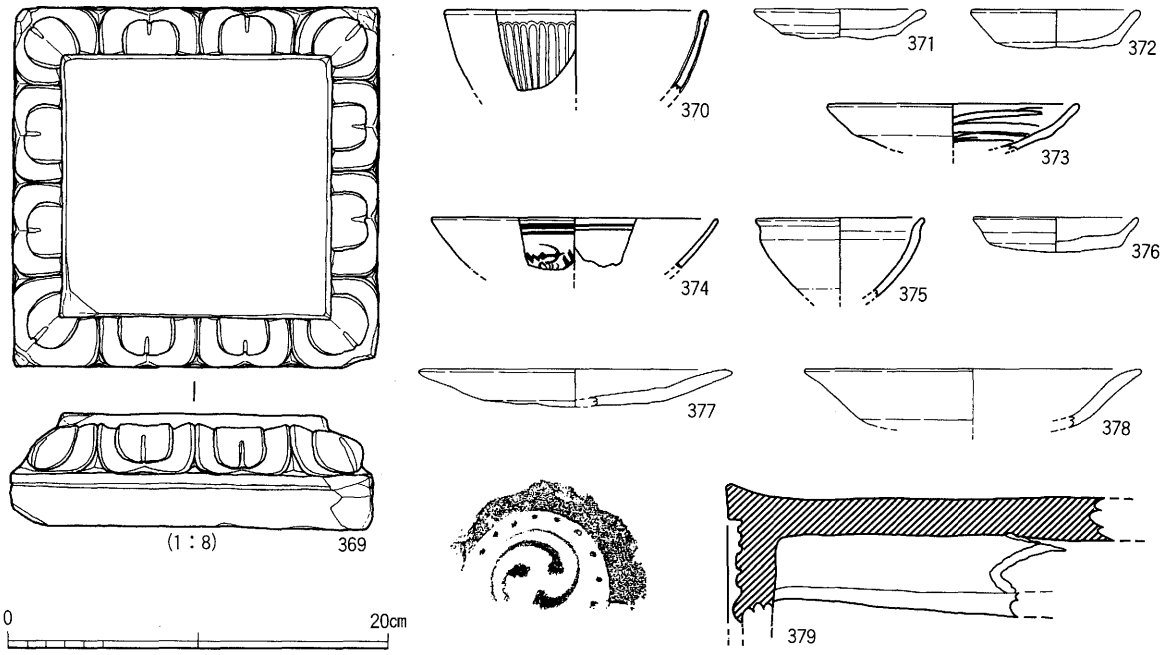
(373) は瓦器の碗である。底部を欠いているが、口径に比して器高はかなり低くなるもようである。内面のミガキは幅１㎜などのものがかなりまばらな間隔で施されている。13世紀後半段階のものと考えられよう。

**SD-15出土の遺物**（図43、図版30）

五輪塔の台座 (369) は、厳密に言えば溝からの出土遺物ではなく、側石として転用されていたものである。したがって直接的にはこの溝の造られた時期、もしくは廃絶した時期を示すものではない。台座は一辺約20㎝を測る方形で材質は和泉砂岩である。上部に薄い座を造り出しており刻まれた蓮弁はすでに間弁を持たず均整はとれているが簡略化の傾向がうかがわれる。15正紀末～16世紀前半代の製品と考えている。

**SD-22出土の遺物**（図43、図版30）

(374) は中国製の染付でやや口径の大きい碗となるものと思われる。(375) は瀬戸の天目茶碗で胎土は黄白色のパサついた感じの土である。体部下半は露胎となっており化粧がけは施されていない。




ＳＤ－15 (369)，ＳＤ－11 (370～373)，ＳＤ－22 (374～379)

**図43　Ⅱ区SD-11、15～22出土遺物**

土師質のうち（376）は再々述べてきた16世紀代に通有のタイプの皿であるが、（377.378）の二つは体部から口縁部にかけて外反するものである。一般にこの手の皿は暗黄白色を呈し、器壁が厚いこと、また大皿に限られることなどが特徴である。中世後期に畿内で見られるものに類似しており、その影響下に成立したものと考えている。根来山内での出土量はさほど多くはないが15世紀末から天正の兵火時に係る時期の遺物と共伴して出土している。

（379）はやや小型の軒丸瓦である。外面の調整はヘラ削りの後丁寧なナデを施しているが、内面は粗く縄目の跡が認められる。

**SK-02の出土遺物**（図44、図版30）

（380）は中国製の青磁で、推定口径30cmほどの大振りの盤となるものと思われる。体部外面には幅広の丸ノミ状工具による蓮弁が彫られており、内面は片切彫りで繊細な波状文や草花文が描かれている。全体に淡緑色を呈し釉は厚い。優品であり14世紀代の製品と考えている。

（381）は中国製の染付皿である。器壁も厚く、かなり口径の大きい皿となるものと思われる。根来では小皿の出土例は多いがこの手の皿の出土は極めて少ないと言える。（382）は呉須手の盤である。畳付部のみ釉を削り取っている。底部のみの出土であるが前述の（361）と同タイプになるものと考えている。

（383.384）はともに備前の甕の口縁部である。いずれも備前Ⅴ期の製品であるが、口縁部の凹線の状態から（383）の方が若干古いタイプと言えよう。

（385）は備前の壺である。内外面とも茶褐色を呈し、口縁上端部と肩部に暗緑色の自然釉が厚く被さっている。頸部はやや外傾し口縁端部はわずかに横に張り出している。備前Ⅳ期後半段階の製品と考えており肩部以下を欠くが三耳壺となるものと思われる。（386）も同じく備前の壺である。内面は暗灰色、外面は自然釉が被さっており灰白色を呈する。胎土には少量の砂粒を含んでいる。口縁端部は丸くおさまっており胴径に比して頸部はやや短くなっている。時期については不明だが備前Ⅳ期以降の製品と考えている。

（387）は丹波のすり鉢である。内面は茶褐色、外面は暗茶色を呈する。内面口縁部下、体部との境にナデによる浅い凹線が巡る。胎土には砂粒、とくに石英が多く入っているのが目立つ。スリ目は７本単位で櫛引によるものである。16世紀後半の製品と考えているが根来ではこのような丹波のすり鉢の出土例は極めて少ない状況である。（388）は備前のすり鉢である。内外面とも茶褐色を呈し口縁端部と口縁部下に重ね焼きの痕跡が残っている。胎土には砂粒が多く含まれる。口縁部の形態から備前Ⅳ期の後半、15世紀末ないしは16世紀初めの製品と考えている。

軒平瓦（389～391）のうち（389）は波状文の軒平瓦で中心飾りは４重圏の上半部である。波状はすでに形式化しておりこの種の波状文の瓦の中では終末のものと考えられ、16世紀中頃の製品と思われる。軒丸瓦はいずれも巴文であるが、（392）は巴の頭部分が離れあっており尾も短いものである。これに比べて（395）は巴の頭は中心部に集まっており、尾の部分も長く重なり合うように巻いている。年代的にはいずれも16世紀代でおさまる製品と考えている。

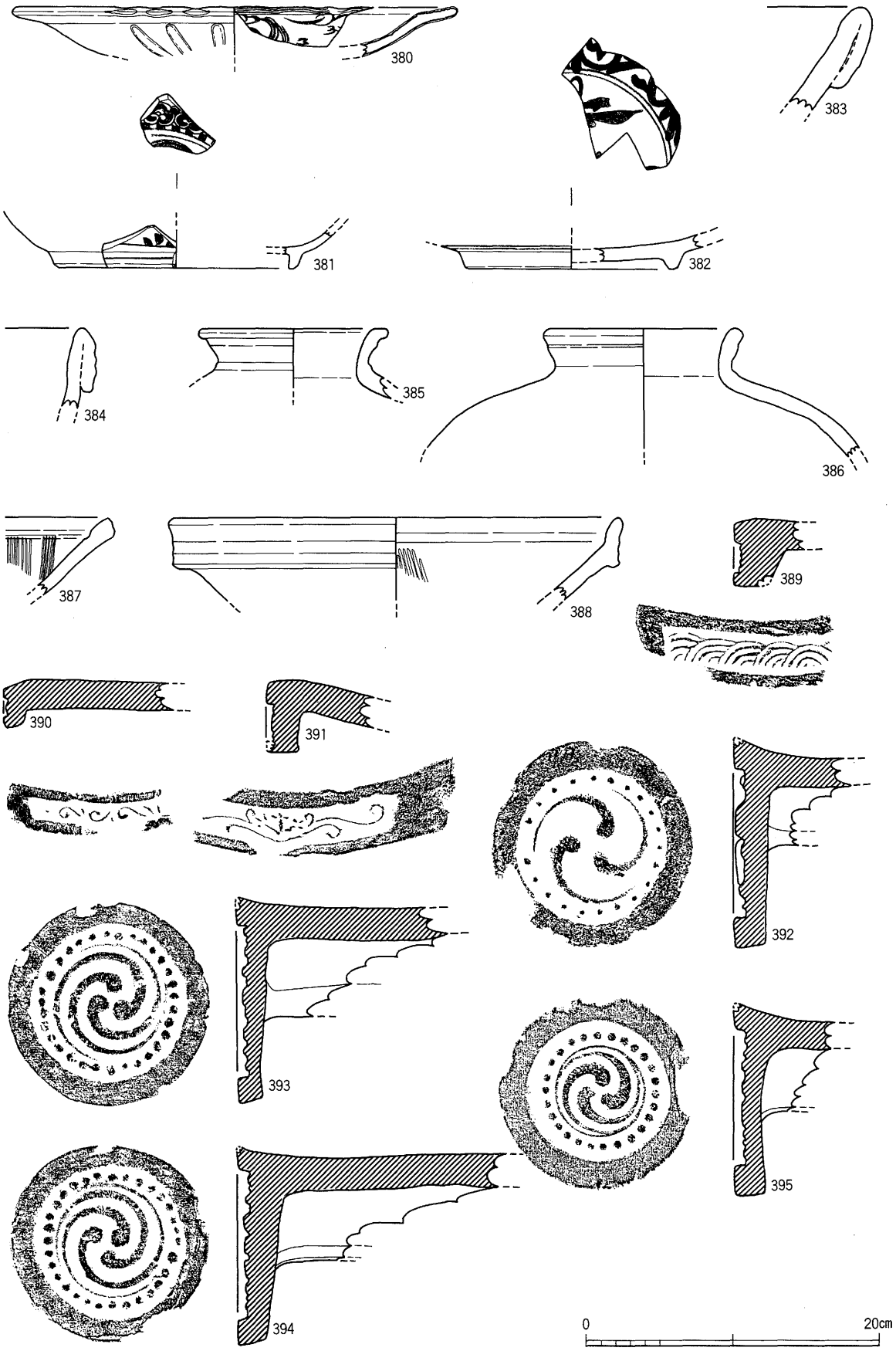



図44　Ⅱ区SK-02出土遺物

**SK-04出土の遺物**（図40、図版31・32）

(396) は備前のすり鉢である。口縁部は灰色を呈するがその他の部分は明るい茶色を呈している。すり目は11本単位でかなり密に引かれている。内面は使用痕が著しくかなり磨滅した状態である。備前Ⅴ期でも後半段階の製品であろう。

(397) は中国製の白磁皿で口縁端部が反返りするタイプである。根来寺では16世紀に最も多く出土する製品のひとつであると言ってよい。

土師質皿には大小二種類があり、このうち小皿（398・399）は明黄白色を呈し概して器高は低く器壁は厚い。口縁部には一回のヨコナデを施し内面はナデ調整で外底部は未調整である。大皿（400・401）はいずれもクサリ礫を多く含み赤橙色を呈している。体部から口縁部にかけて丸く立ち上っており口縁部には一回のヨコナデを施す。これらの土師質皿は13世紀後半のものと考えている。(402) は土師質の堝もしくは羽釜となるものである。ただし羽釜の場合、鍔は５㎜程度の短いものと考えられる。

瓦器碗（403～406）はいずれも内面のみミガキが施され、その間隔はまばらである。高台部も雑な貼り付けで丸く低い。13正紀末の製品と考えられよう。瓦（407・408）はともに16世紀代のものと考えられる。

以上のように本遺構では16世紀代のものと13世紀代のものに大きく分れているが、13世紀代の遺物については遺構の下の一時期古い包含層の遺物である可能性が高いと考えている。

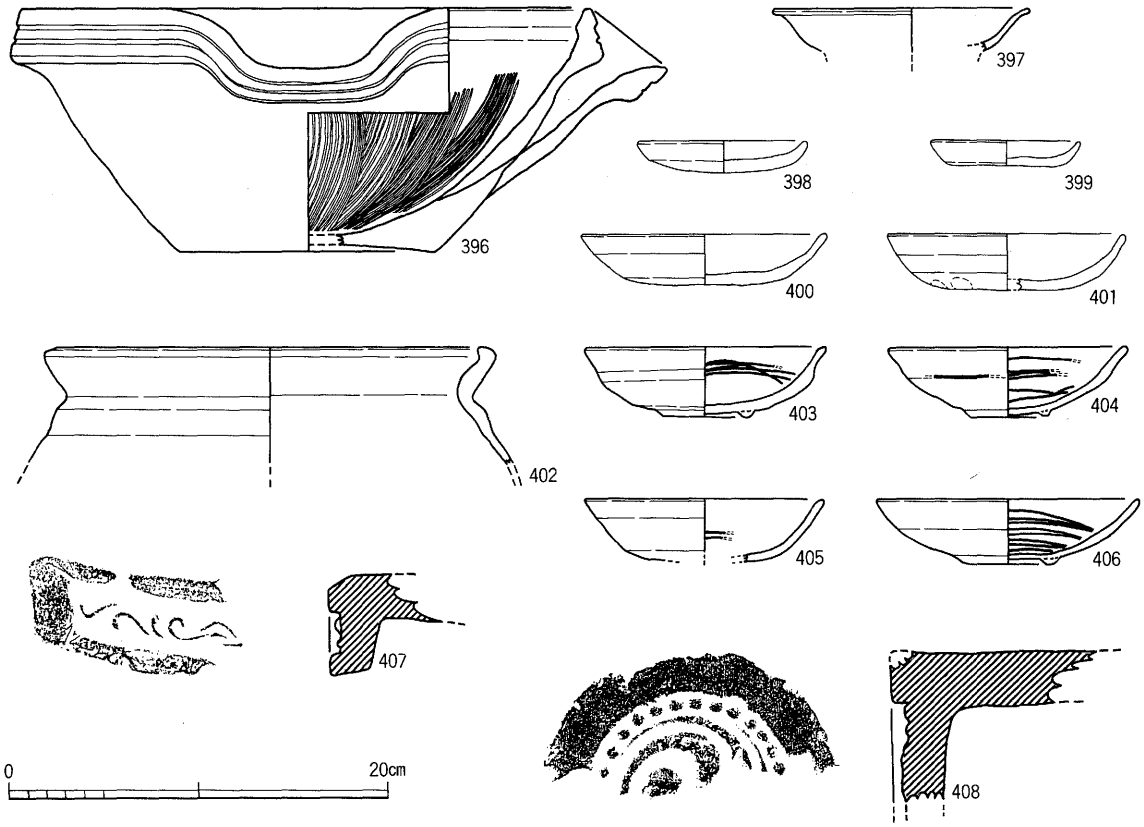
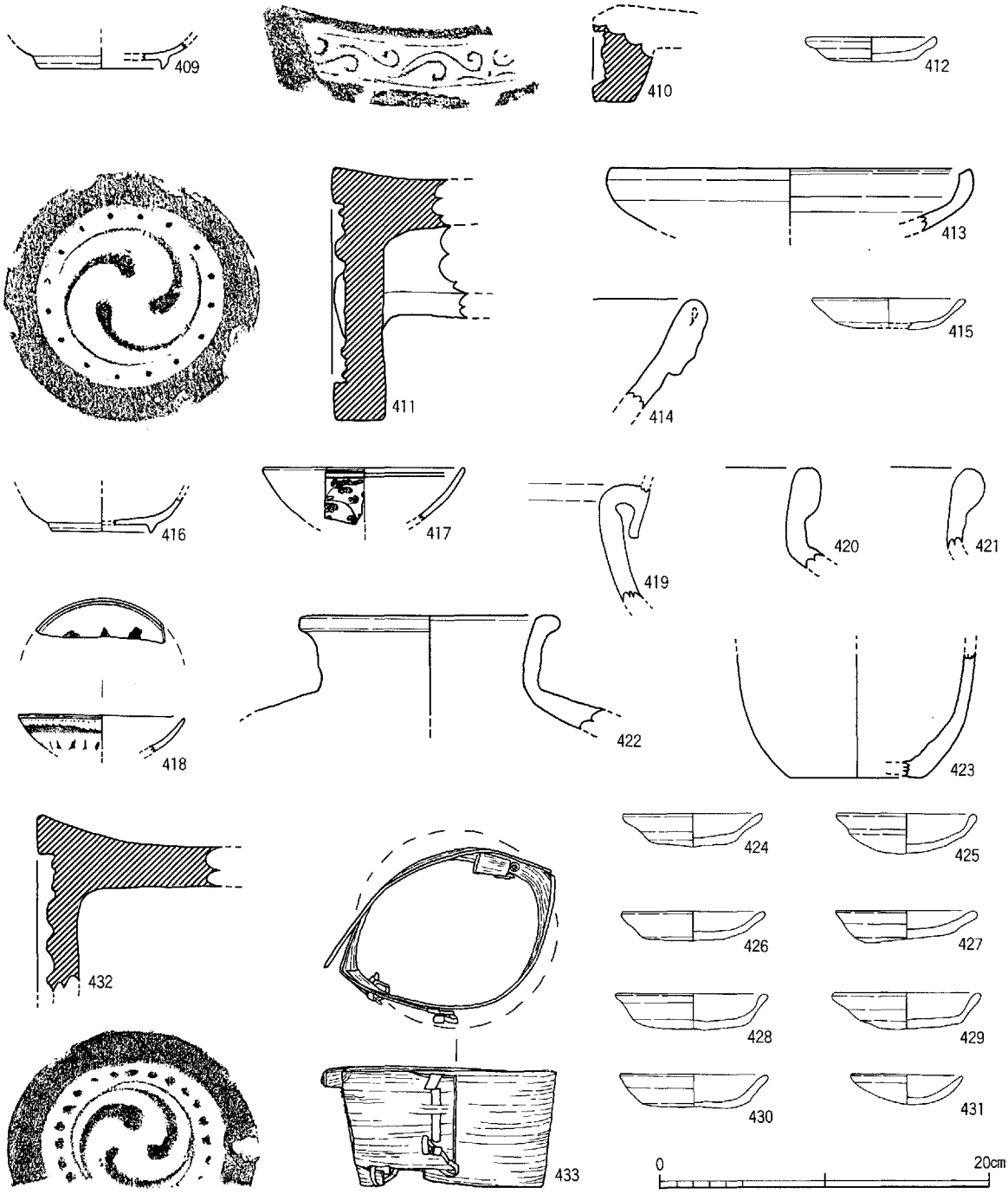



**図45　Ⅱ区SK-04出土遺物**

**SK-05出土の遺物**（図46、図版32）

（409）は中国製の白磁皿で口縁端部が外反するタイプである。やや灰色味を帯びており一部に釉切れが見られるなどやや粗雑な製品である。（410）の軒平瓦は均整唐草文で、文様は線が細く端正なつくりである。天正よりは一時期古く、15世紀代の製品である可能性が高い。

**SK-06出土の遺物**（図46、図版32）




ＳＫ—05（409～411），ＳＫ—06（412．413），ＳＫ—07（414．415），ＳＫ—16（416～433）

**図46　Ⅱ区SK-05・06・07・16出土遺物**

土師質皿（412）は赤橙色を呈し口縁部が強いヨコナデのため肥厚している。胎土にはクサリ礫や片岩の他に大粒の長石が入っている。16世紀代の製品である。（412）の軒丸瓦は左巻の巴文で巴の頭部はやや離れあっており尾は細くて長い。珠文は小さく突出したもので16個が配されている。凸面にはヘラミガキのあと縦方向の指ナデを施しているが全体に雑である。

**SK-07出土の遺物**（図46、図版32）

（413）は備前の製品で浅鉢となるものと思われる。口縁部はヨコナデ、体部下半はヘラ削りとなっている。重ね焼きの痕跡が体部下半に認められる。（414）の備前の大甕は口縁部に凹線の巡る備前Ⅴ期のもので、胎土には砂粒が多く含まれている。

**SK-16出土の遺物**（図46、図版32）

（416）は16世紀代の中国製の白磁皿であるが通例のものとはやや色調が異っており黄灰色を呈している。（417）は染付の碗で体部外面には唐草が描かれている。（418）の染付皿は底部を欠損しているが碁笥底となるものである。ともに16世紀代の製品である。

国産陶器（419～423）はいずれも壺･甕類である。このうち（419）は常滑の製品で口縁部はN字状を呈しており、常滑Ⅳ期、15世紀の前半の製品と考えている。また（422）は信楽の製品である。信楽特有の灰白色の胎土で長石を多量に含んでいる。口縁部から肩部にかけて緑色の自然釉が被さっている。15世紀代の製品と考えている。根来では信楽の製品は本例のようにごく小量出土しているが、すり鉢などはなく壺類に限られるもようである。その他はいずれも備前の製品である。

軒丸瓦（432）は左巻の三ツ巴文で、尾部が長く重なり合っている。凸面はヘラミガキが施されているが内面のナデは雑で布目の跡が残っている。（433）は柄杓の本体部分で柄および底板は欠損している。口径12cm、深さはおよそ7cmを測る。

土師皿のうち（424～430）はいずれも16世紀代に通有のタイプのものであるが（431）はやや口径が小さく体部から口縁にかけてカサ状に開くものである。このタイプの皿は前者の皿ほど多くはないが山内では普遍的に出土するものである。一般にこの手の皿は黄白色を呈し、クサリ礫を含まない。

**SE-03掘形出土の遺物**（図47、図版33）

（434）は中国製の染付碗で、器壁は2㎜ほどと薄い。小破片のため全容は不明だが口縁部下の内外面に二重の圏線が巡る。（435）は備前の甕である。内外面とも茶褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒が多く含まれる。口縁部は偏平な宝珠形を呈しており、備前Ⅲ期末ないしⅣ期前半、15世紀前後の製品と考えている。（436）は備前の壺の底部で灰色を呈している。

**SE-03上層出土の遺物**（図47、図版33）

（439）は中国製の青磁で6角形を呈す角皿である。全体に淡い緑色を呈し内面体部には各辺ごとに区切られた中に片切彫りによる草花文が描かれているが、彫りは浅く不鮮明である。15世紀前後の製品であろう。（441・442）はともに近世の国産陶器である。このうち（442）は深手の鉢になるものと思われ

るが全体に淡い黄緑色を呈し、胎土も緻密で焼成はよく磁器質の感がある。(443) は備前の小型の壺である。小破片のため不明だが肩部に雑な波状文の施されるタイプと考えている。

染付製品はいずれも伊万里系のもので、(444) はくらわんかの碗で18世紀前半～中葉、(445) は丸型の碗で18世紀中葉～末の製品と考えている。また (447) は蓋で18世紀末～19世紀前半の製品であろう。(446) は陶器の碗で体部下半まで黄色の釉がかかり、畳付を除く高台部には化粧がけが施されており茶色を呈している。肥前系の製品と考えている。

**SV-03下層出土の遺物** (図47、図版33)

(449) は備前の大甕で備前Ⅴ期前半の製品と考えられる。軒丸瓦 (450) は左巻三ッ巴文でやや大型の丸瓦である。(451) は波涛文の軒平瓦で16世紀中葉の製品と考えられよう。

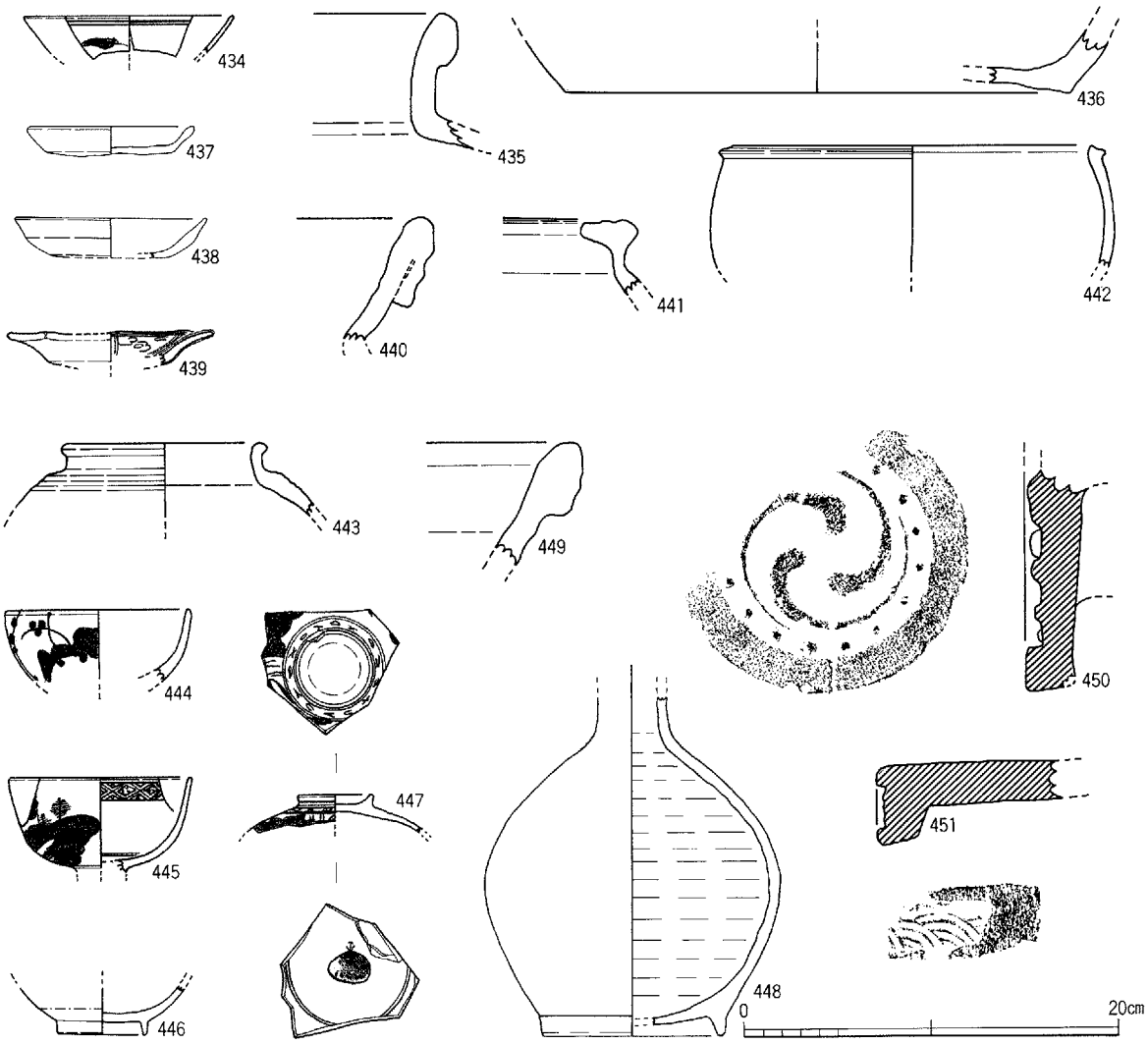



**図47　Ⅱ区SE-03上層・中層・掘形出土遺物**

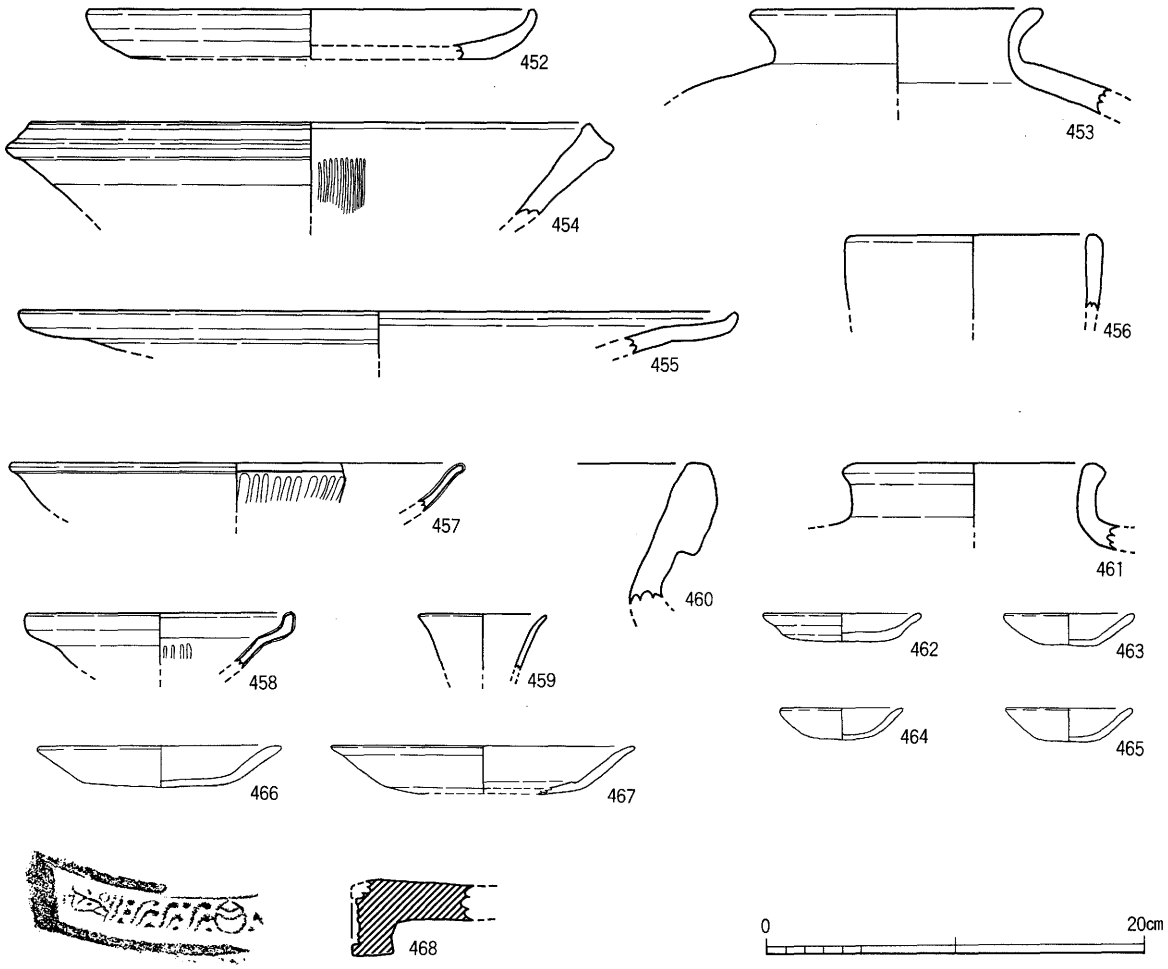
**SV-02裏込出土の遺物**（図48、図版33）

出土している遺物はいずれも国産陶器の壺、鉢類である。このうち（453）は丹波の壺で口縁部は茶褐色を呈し肩部には緑色の自然釉が厚く被さっている。14世紀末ないし15世紀初めの製品と考えている。

その他はいずれも備前の製品で、（455）は浅鉢もしくは盤となるものと思われるが根来寺ではあまり類を見ない遺物といえる。鉢類については年代は不明だが前述の丹波の壺をはじめ（454）すり鉢なども14世紀末から15世紀前半の製品であり他の遺物もおおむねこの年代で考えて大過ないものと考えている。

**SV-04裏込出土の遺物**（図48、図版35）

SV-04の裏込から出土している遺物は、土師質皿の年代観からおおむね16世紀の初頭までの遺物と考えておりSV-04については前述のSV-02より一時期新しい築造と考えられよう。なお、これらの遺物の中で軒平瓦（468）は宝珠の中心飾りをもちその両側には珠文と線の細い唐草文（？）が配されたやや凝った意匠である。これまでの調査では類例がなく珍しいタイプの瓦と言えよう。




ＳＶ—02裏込（452～456），ＳＶ—04裏込（457～468）

**図48　Ⅱ区SV-02・04裏込出土遺物**

## 第４節　Ⅲ区の調査

### １．遺　　構

昭和61年度に調査を実施したもので、調査区は60年度の調査（Ⅱ区）より北側への延伸部、延長およそ170ｍである。

当初、蓮華谷川に架る橋のたもとまでの200ｍほどを予定していたが、橋の手前30ｍほどは、東側の山裾部を現有の農道をつくるにあたって、あらたに切り開いたもので、遺構、遺物とも存在しないことが判明したため、調査の対象から除外した。

調査区の延長170ｍのうち、遺構の疎密はあるもののほぼ全域において遺構を検出した。主な遺構としては、石垣、溝、井戸、埋甕遺構、階段、建物跡などがある。

各々の遺構の存続期間は、天正の兵火以前のものと、復興後の江戸時代中頃のものとに大別できる。また、寺院の敷地を区画する石垣の配置などから調査区内には最低６つの坊院が立地していたものと推定される。

なお、調査にあたっては便宜上、調査区を３分割し、南より順次１区、２区、３区、と称した。３区については距離が長いため、さらに北半、南半とに分割している。

以下、各区ごとに主要な遺構の概要を記すことにする。

**ａ．Ⅲ－１区**

**溝**（SD-25）

幅約20cm、深さ20cmほどを測る石組みの溝で、やや「Ｓ」字状に屈曲している。一部に蓋石が残っていることから、暗渠排水溝であったことが推定される。埋土は溝本来の堆積土ではなく、二次的に埋まったと思われる茶色土であり、この中から16世紀代の白磁皿、土師質皿が少量出土している。しかし、溝の作りがやや扁平な側石を縦長に置く方法をとっていることや、他の遺構との関係から近世の溝と判断される。

**溝**（SD-27）

幅約25cm、深さ20cmを測る石組みの溝である。側石はすべて和泉砂石で、20～40cm大のものを用いている。ほぼ東西の方向をとっており、排水は溝底部の高低差から西側へと流れていたものと判断される。

出土遺物は16世紀代の土師質皿、備前の壺、中国製白磁皿などの細片であり、その石の並べ方などからも中世の溝と考えられるものである。

**溝**（SD-29）

１区の北端で検出した溝で、東西に方向をもつ、幅約30cm、

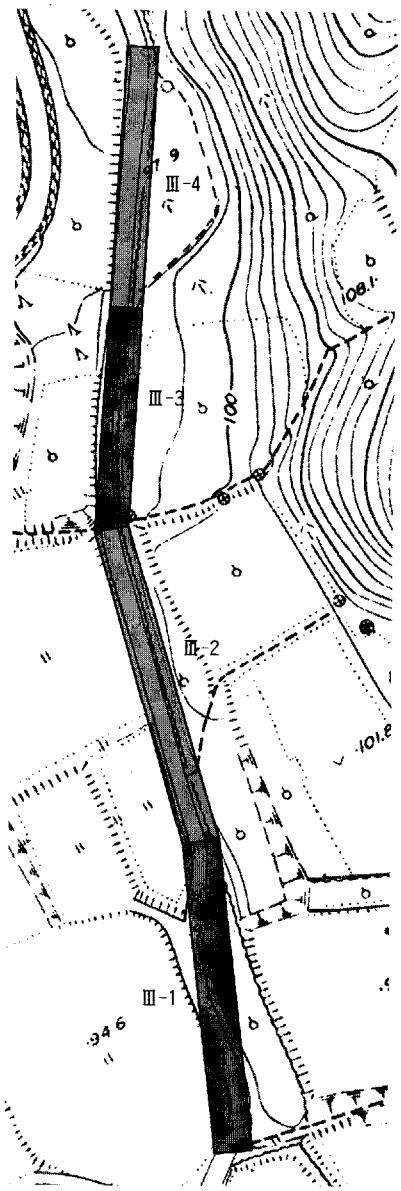


図49　Ⅲ区調査区位置図

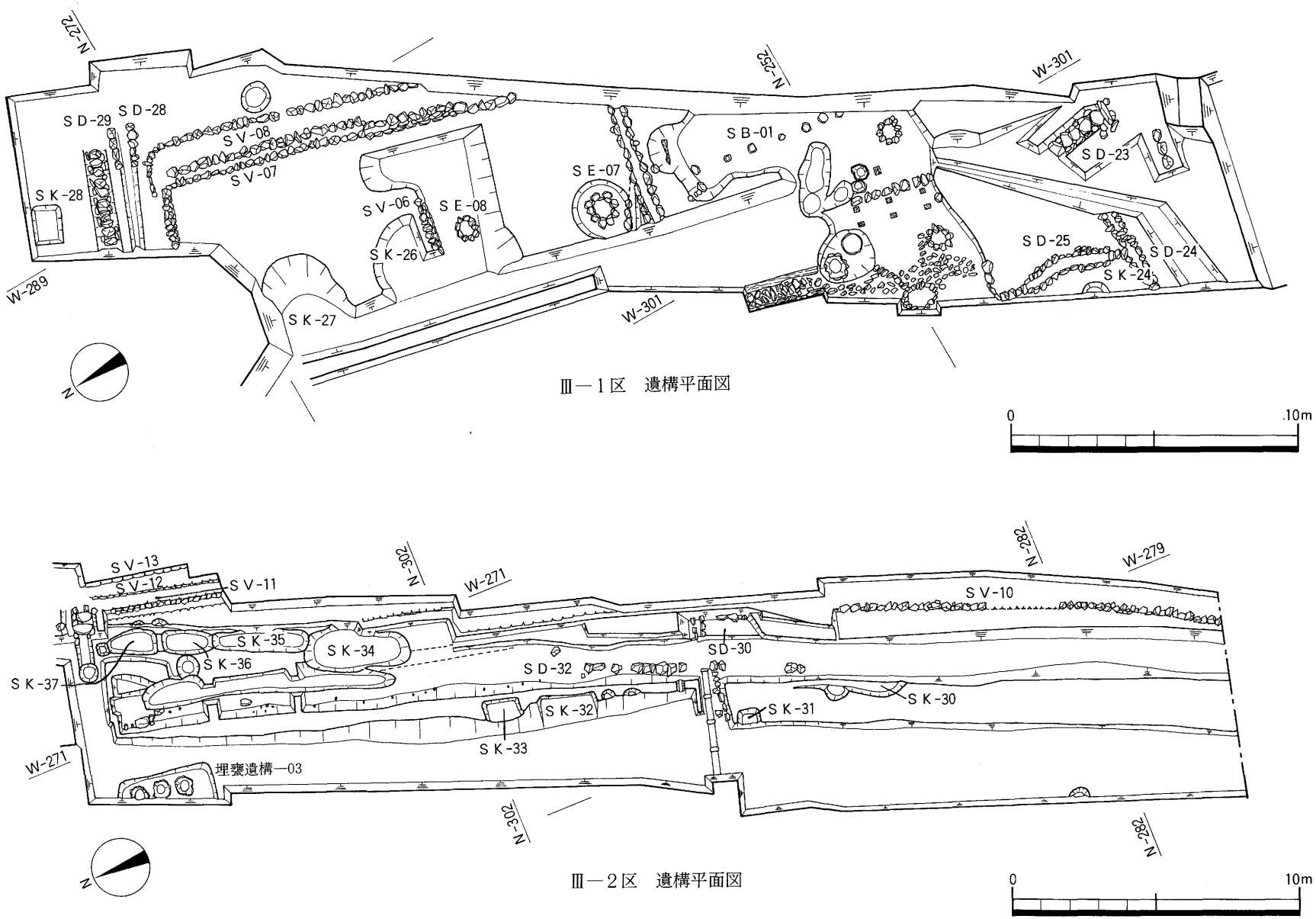



**図50　Ⅲ－1・2区遺構平面図**

深さ30cmを測る。側石には20～30cm大の和泉砂石を用いており、蓋石にはこれよりやや大ぶりの石を用いている。溝内の埋土は灰色の砂質土でこの中から中国製白磁皿、土師質皿の破片がごく少量出土している。中世、天正の兵火に係る時期のものと考えている。

**石　垣**（SV-07～09）

調査区の北側で検出した石垣で、いずれも残りが悪く、基底部から2～3段、高さ40cmほどしか残存していない状況であった。これらの石垣は、すべて同一方向をとっており、何度かの造り替えが行なわれたものと思われる。方向はN 3°Eとわずかに東へ傾いており、北側で西へとほぼ直角に曲がっている。

裏込からの出土遺物や、この石垣に被っていた焼土混じりの堆積土などの状況から、中世、天正の兵火に係る時期のものと判断されるが後述するSK-25も同時期と考えており、その場合切り合い関係からSK-25よりは新しいことが判明しており、時期判断に整合性を欠くことになる。

**井　戸**（SE-07）

前述の溝（SD-27）のすぐ北側で検出した井戸である。直径約80cm、深さ1.2m以上を測る。用いられている石はすべて和泉砂石で、30cmほどの石を積み上げ、その隙間に10～15cm大のやや小ぶりの石を組み込んでいる。作業が危険な為底まで完全に掘りきることはできなかったが側石の横はやや胴ぶくらみの形状を呈するもようである。

出土遺物は少量であるが、瓦や、備前の甕片などが出土している。切り合い関係からSD-27より古いものであることが知られ、中世でも天正の兵火時よりは一時期古い時代のものと考えている。

**井　戸**（SE-08）

後述するSK-25の底で検出したもので直径10cmほどの小ぶりの石組み井戸である。

井戸は天正の兵火によると思われる焼土により埋まっており、中からは僅かに中国製の白磁皿が一片出土している。

井戸も小さく、井戸単独の施設と考えるよりは、SK-25.SV-06などとセットになる復合の施設であったと考えている。

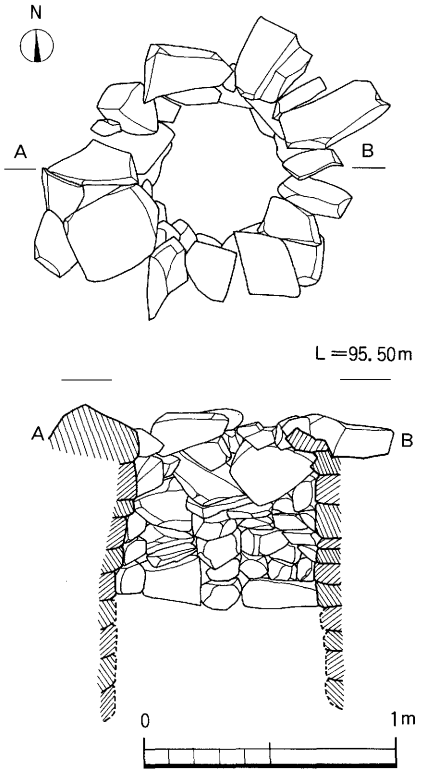



図51　井戸SE-07実測図

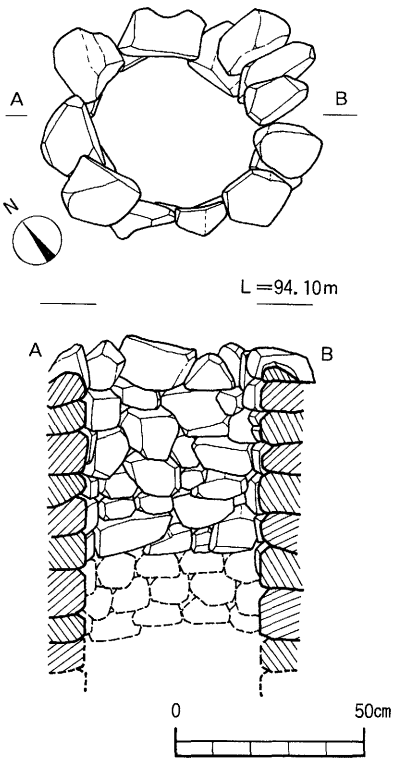



図52　井戸SE-08実測図

**建物跡**（SB-01）

本遺構は建物跡とし

ているが、井戸、集水桝、埋甕、棚などが組み合わさった遺構であり、遺構の性格としては厨房もしくはそれに類する施設であったと考えられるものである。また、この施設の大きな特徴は半地下式であったと思われる点である。

検出面から遺構の床面までは約80cmを測り、ほぼ垂直に落ちている。壁面はかなりの焼成を受けたもようで厚さ1cmほど赤く焼きしまっており、火災による焼成と考えるのが自然であろうが、その焼け具合から防湿などのために意識的に焼き締めたことも否定できない状況である。

西側部分は近世にかなりの削平を受けており、床面から30cmほどが残っている状況であった。また、この遺構は調査区両側にさらに広がっていくもので、その全体規模については不明である。

発掘調査当時は、このような大規模な半地下式の遺構の例はなく、その全容については不明であったが、昭和62年に実施された山内の調査において、これに類似すると思われる遺構が検出されている。

それによれば、東西11m、南北5m以上を測り、北側に幅2mと1mほどの通路がとりつく平面プランとなっていた。また、床面からの高さも80cmほどであり、壁面は厚く焼きしまっていた。本例も北側に通路と思われる出っぱりが認められることからおそらく同じような平面プランであったことが推定されよう。ただし、62年度に検出した遺構は倉庫と考えられるものであり、遺構の上には建物が存在しその床面を掘り下げ半地下式としているものであった。

本例の場合、かなり削平を受けているため、この遺構の上に建物があったか否かは不明である。しかし、いずれにせよ厨房という性格上覆い屋を伴ったことはまちがいないものと思われる。

なお、この遺構の中には北側から押し出したようなかたちで、上層に焼土が、下層（床面から30cmほど）には炭層が厚く堆積しており、天正の兵火直後の整理の際、投げこまれた様子が窺われる

これらの焼土および炭層からは大量の遺物が出土している。とりわけ下層の炭層からは写真に見られるように漆の椀がまとまって出土して

写真12　漆椀出土状況

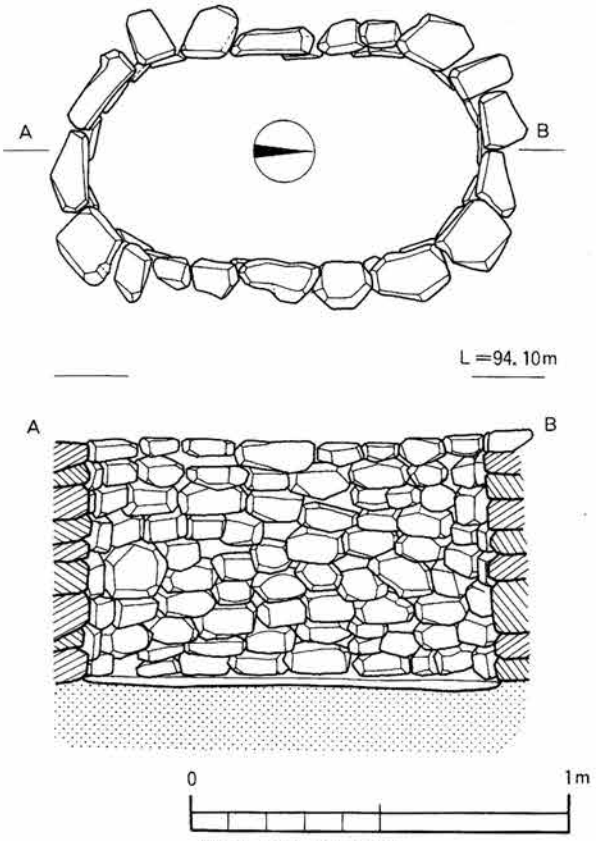



図53　SX-02実測図

いる。この炭層を除去した床面で井戸、石敷遺構などを検出した。以下、これらの個々の遺構について説明を加える。

**礎石列**：東側の通路（昇降口）を降りてほぼ正面に並ぶ礎石である。礎石は10cm大のものと20cm大のものが交互に並んでおり、その間隔はおよそ80cmを測る。検出したのはこの一例だけであり、主体は調

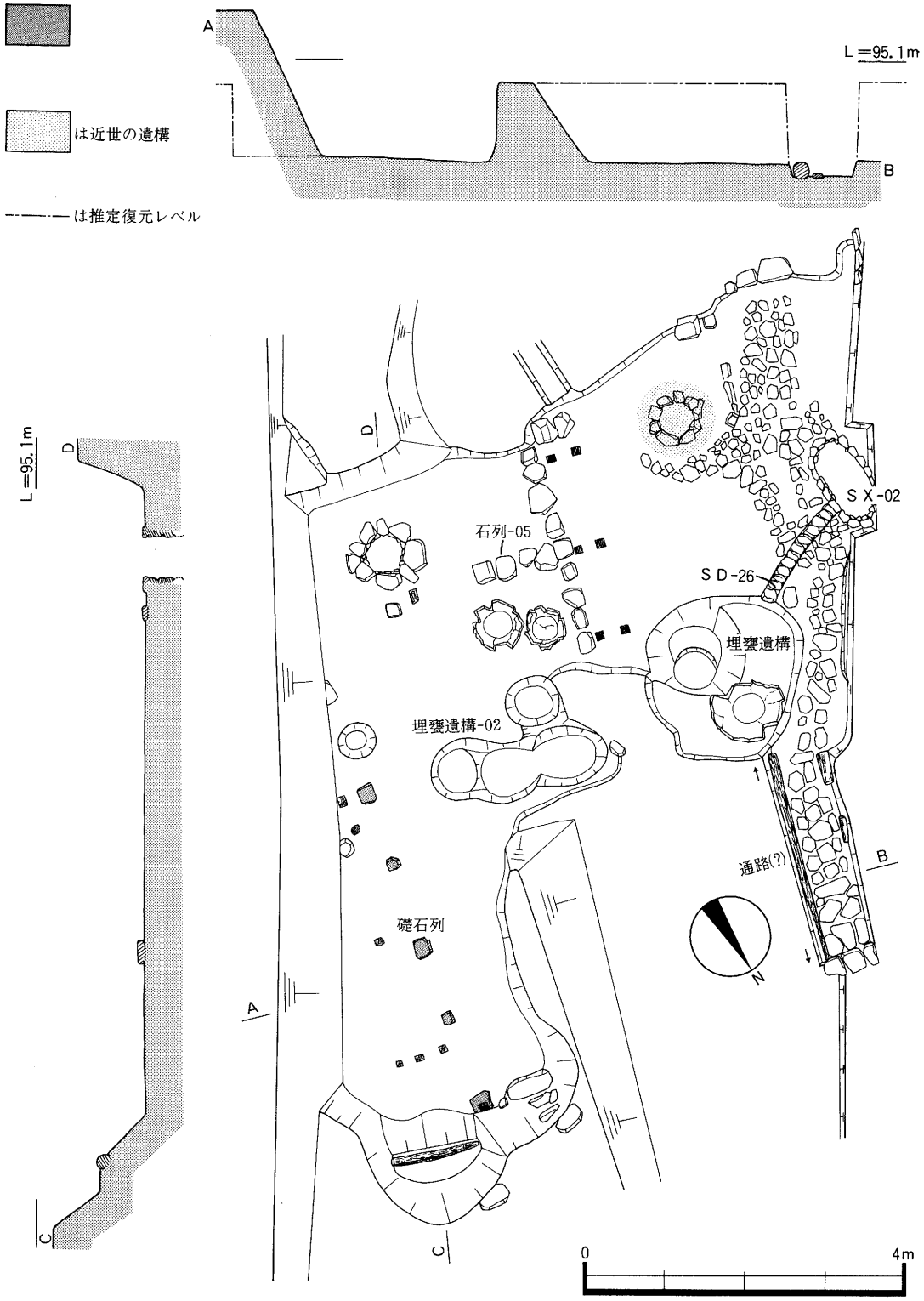



**図54　SB-01実測図**

査区外の東側へ延びるもようでその規模については不明であるが、礎石の大きさから推定してもさほど大きな建物になるとは思えない。

**埋甕遺構-02**：備前の大甕を埋設した貯蔵施設と思われる遺構である。甕本体はすでに抜き取られており存在していなかったが、4個体分の抜き取り穴を検出した。この遺構の南脇に2個体の甕が置かれていたが、これらの甕は、本来、この遺構に埋設されていたものである可能性が高い。

**井戸(SE-06)**：直径60cmを測る石組みの井戸である。幅が狭いため底部まで完掘することはできなかったが、深さは2m以上を測るものと思われる。最上段の石は、きわめて偏平な石を用いており井戸の石組みは削平を受けておらず、この面で機能していたことがうかがわれる。なお、井戸(SE-05)は近世のものであり、この厨房と考えている施設とは関係なく、厨房施設の中で井戸は一基であったと思われる。

**石列-05**：南北に並ぶ10～30cm大の石を用いた石列である。SB-01のほぼ中央と思われるところに位置しており、SB-01を東西に分ける施設の一部であったものと考えている。この西脇に一辺10cmほどの方形の柱が焼けた状態で、三対二間分残っていたが、これは棚などの施設であったものと思われる。

**SX-02**(図53参照)：長径1.0m、短径0.6m、深さ70cmほどを測る楕円形の石組み遺構である。東側の埋甕遺構(01)から幅10cmほどの溝(SD-26)が通じており、このことから水溜の用をなしていたものと考えている。この中は焼土まじりの炭で埋まっており、桶底、柄杓などの木製品が出土した。

**石敷遺構-05**：西側の通路から前述の埋甕遺構及びSX-02周辺に敷きつめられた石敷である。5～20cm大の偏平な石を丁寧に敷き並べており、歩く為に敷設したものである。なお通路部の両側には胴木であったと思われる直径10cm大の木が残っており、この部分は両側が石積みであったことが窺われる。

**土　坑**(SK-25)

前述したSE-08の隣りで検出した大きな土坑である。北側には、長さ約2m、高さ約80cmを測る石垣を伴っている(図55参照)。南側には石垣の痕跡は認められず、地山をそのまま削り落し壁としている。

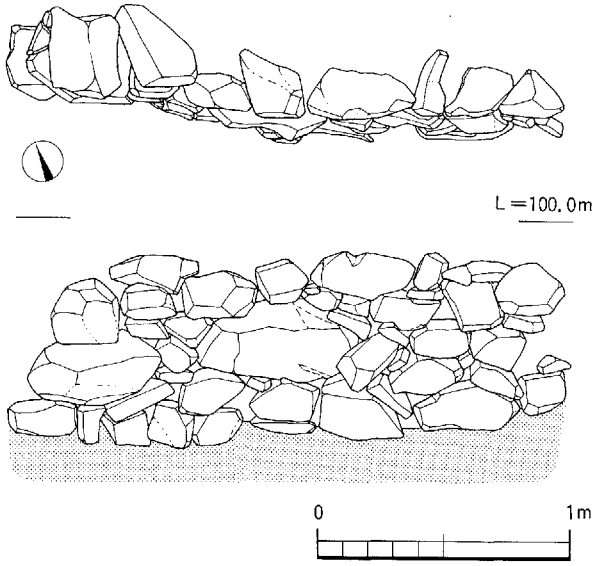



**図55　石垣SV-06実測図**

炭まじりの焼土によって埋まっており、この中から、天正の兵火直前と考えられる中国製の染付製品が多量に出土した。SE-08、SV-06などとセットを成す複合の施設と考えており、前述したSB-01のような半地下式の構造をもつ遺構の一部である可能性が高い。

**b．Ⅲ-2区**

2区は全体に遺構密度が少なく、とりわけ南側半分は後世の削平をかなり受けており遺構はまばらな状態であった。検出した遺構には溝、土坑、石垣、埋甕遺構などがある。

**埋甕遺構-03**(図56参照)

2区北西隅で検出したもので、備前の大甕(2

石入）を複数個埋設した貯蔵施設である。大部分が調査区外西側へとのびていっており、全体の規模については不明である。

検出規模では一辺３ｍほどを測り、甕が南北に３個体並んで埋設されていた。過去の調査例からすれば、さらに２列、もしくは３列、甕の固体数で言えば９固体ないしは12固体ほど埋設されているものと考えられる。

甕の埋設に当っては、全体を甕の肩部が地中に埋まるほどの深さにいったん掘り下げ、甕を設置したのち、これらの甕の隙間を掘りおこした土で再度埋めているもようである。通例、この種の遺構は天正の兵火に係る時期のものと考えており、廃絶に際しては、兵火による焼土によって埋められた例が多い。本例もその例外ではなく、焼土及び焼土の混入した土により埋められていた。この焼土の中からは、この甕自体の破片のほか、少量ではあるが16世紀代の白磁の中国製の白磁皿、土師質皿、備前の壺などが出土している。なお出土した甕はその後の作業で２個体をほぼ完全な形に復元することができた。

**溝**（SD-31・32）

両者の切り合い関係から見ると、SD-32が埋まったのちSD-31が掘削されたものと判断されるが、ともに近世以降のものであり、出土遺物から近代、明治の終わり頃まで機能していたものと考えられる。SD-32の肩部には直径５cmほどの杭が何十本か打ち込まれた状態で残っていた。坊院の溝ではなく、寺院の廃絶後、田畑に水供する水路であったものと考えている。

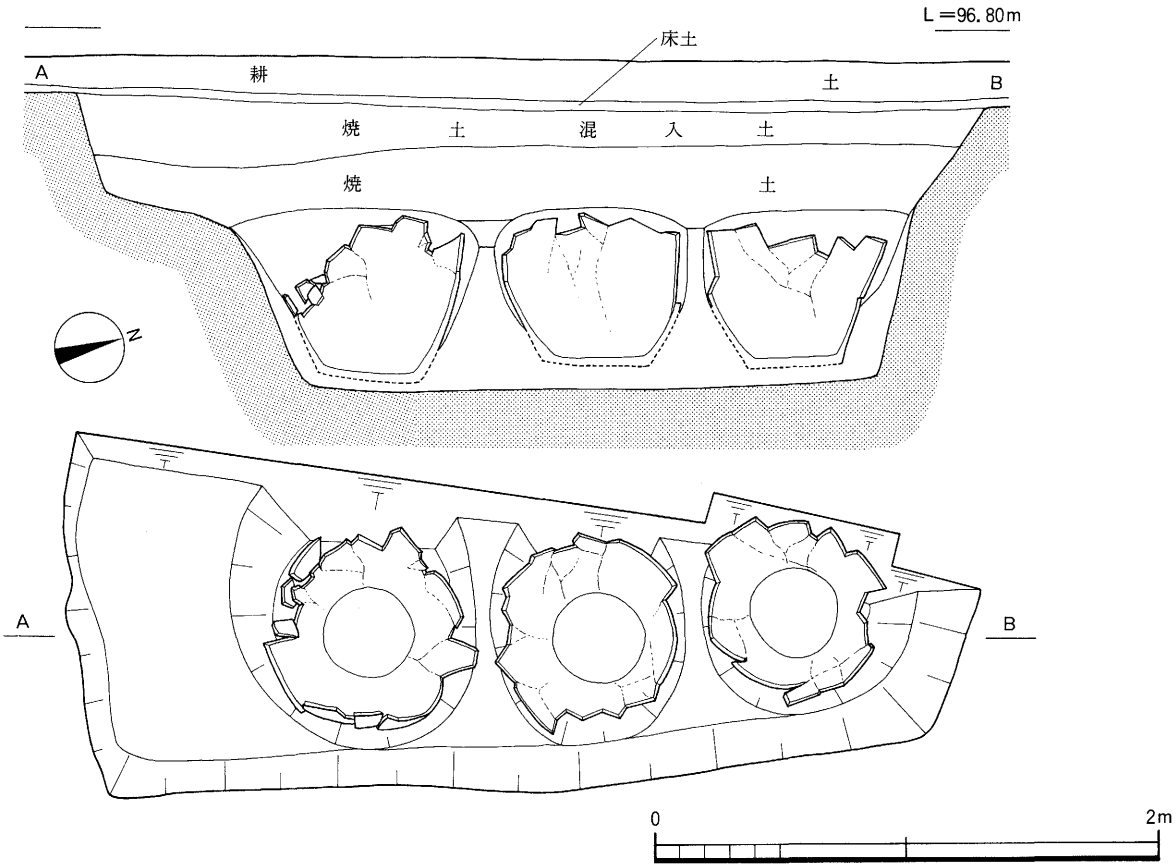



**図56　埋甕遺構-03実測図**

**石　　垣**（SV-11・22・13）

調査区北東端の一段高くなる部分で検出した石垣である。いずれも同一方向をとっているが、SV-13は、50～70cm大の比較的大きな石を用いたもので近世のものと考えられる。SV-12は20～30cm大の石で、高さ80cmほどを測る。出土遺物がなく時期については限定できないが、天正の兵火にかかる時期の可能性が高い。SV-13は高さ1.2mを測り、20cm大の石を比較的丁寧に積み上げた石垣である。図　にも略図で示したように石垣を覆っていた土の中に天正の焼土層が入り、さらにこの下層に遺構のベースとなるような層があったことなどから、兵火時よりは確実に古いことが窺える。また、この石垣は、II-2区で検出した石垣(SV-04)と同じように基底部に沿って幅20cmほどの石組みの溝があり、この溝から15世紀代の土師質皿の細片が出土している。このことからも、この石垣は15世紀代に造られ、機能していたものと考えている。

**C．Ⅲ-3区**

3区は延長75mほどと距離が長いため、南半部北半部とに欠けているが、両区の間では遺構の状態にかなりの相違が認められる。南半部分は遺構密度がきわめて低く、調査区東端で現有の農道に沿う石垣(SV-14)を検出したのみであった。北半部は、近世以降にかなりの盛土を行っており、現有の農道面から2.5mほど下がってようやく中世の遺構面に達する状況であった。

このことから、北半部は中世及び近世を通して道ではなく周囲より一段下った屋敷地であったことが判明した。この敷地全体の範囲については不明だが、南側（正確には南東端）は、調査区の北半と南半の境、遺構面が急激に下がる部分であり北側（北西端）は後述する石垣部分までのおよそ30cmほどと考えられる。この部分で、階段、土坑、石垣などの遺構を検出した。

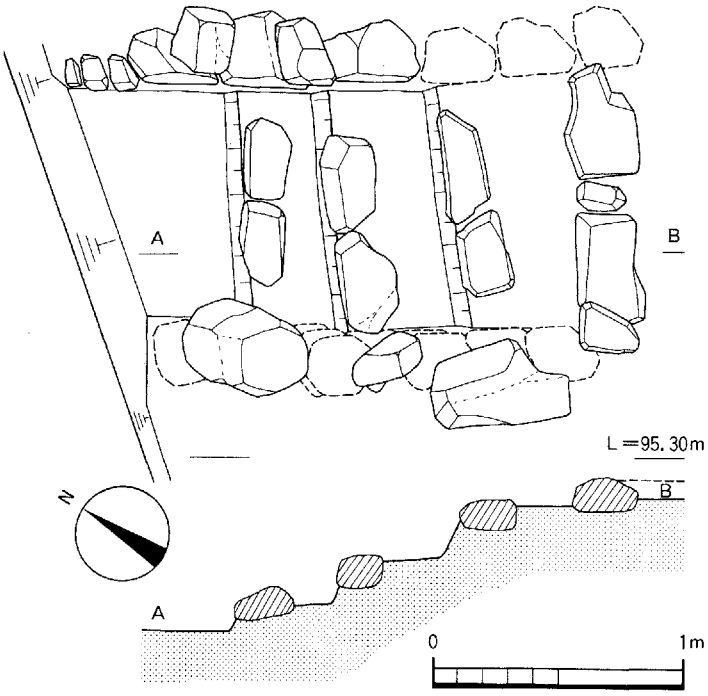



**図57　石段実測図**

**石　　段**（図57参照）

前述の敷地の南東端で検出したもので、この敷地とさらに北側に想定される敷地との昇降の用をなしていたものと考えられる。

残りはさほど良くなく、図57にも示したように、4段分を検出しただけである。さらに北側へ下るものと考えられるが、この部分は後世の撹乱を受けており、明瞭にしえなかった。幅はおよそ1mほどで、両側は石積みとなっていたもようで、この間に、各段とも20cm大の石を2個横に並べて置いている。一段ごとの高さはおよそ20cmほどを測る。

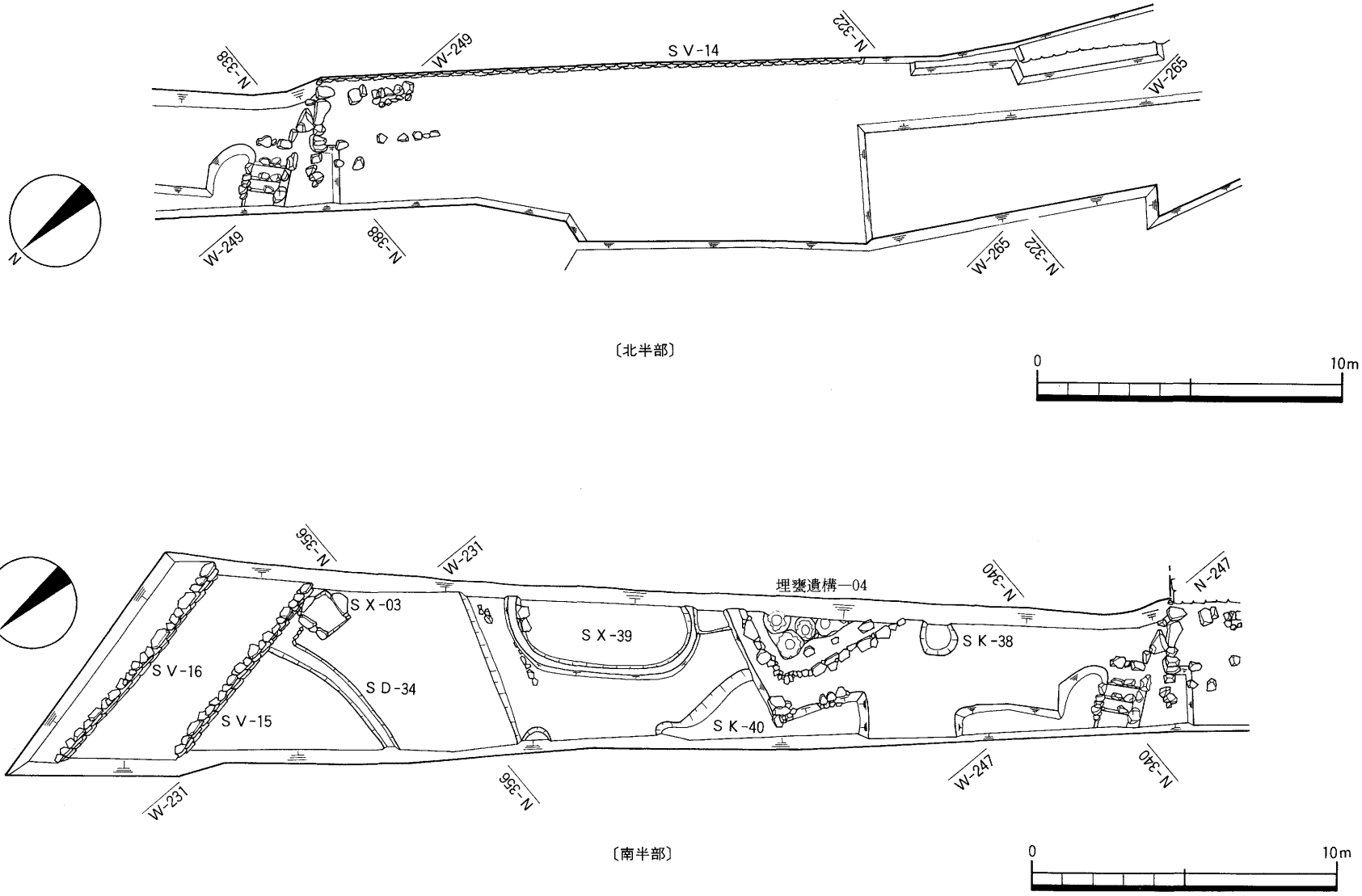



**図58　Ⅲ－3・4区遺構平面図**

**石　　垣**（SV-15・16）

調査区北端で検出した石垣である。先にも述べたように敷地の北面を画するものであったと考えられるもので、二つとも同一方向をとっており、ほぼ南北方向の並びをもつ。

このうち手前側の石垣(SV-15)は基底部からの高さはおよそ80cmほどを測る。用いられている石はすべて和泉砂岩であり、石の大きさは20～50cmと大きさにばらつきが目立ち、基底部の石もさほど大きな石を用いておらず、やや雑な積みとなっている。

この石垣の基底部が中世、15世紀～16世紀の遺構面であり、石垣についても15世紀代に造られ天正の兵火に至るまで機能していたものと考えられる。

奥側の石垣(SV-16)はSV-15より２ｍほど奥で検出したもので、SV-15の頂部とSV-16の基底部では20cmほど高低差があるが、この面はよくしまっており、面を成している。基底部からの高さはおよそ80cmほどを測るが、かなり削平を受けているもようで本来はもう少し高かったものと考えられる。石の積みは前述のSV-15と類似するが、全体にやや大ぶりの石を用いている。

当初、この石垣は近世のもので、近世に至って敷地を拡大したものと考えたが、この石垣の基底部レベルで近世の遺構が全く検出されなかったことや、先に述べたようにSV-15との間が面を成していること、またその積みについても両者であまり差異のないことなどを考え併すと、２つの石垣は同時期に造られた二段築造の石垣であった可能性が高いものと考えている。

**埋甕遺構-04**（図59参照）

備前の大甕を埋設した貯蔵施設である。前述のIII-２区で検出したものなどと同様、これまでの山内の調査で数多く検出している甕ピットと称しているものと基本的には同じ遺構と考えられるものであるが周囲を石によって囲っている点が異例と言える。

図59にも図示したように、南半部分が調査区外へとのびておりその全容は不明であるが、周囲の石積みは南北約５ｍ、東西2.2ｍ以上を測る長方形を呈するものと思われる。

石積みの高さは約60cmほどで、40～50cmほどの大きさの石を置き並べ、その間に20cm大のやや小ぶりの石をつめている。ただし、北西隅部分のみ10～20cm大の石を積み上げており、この部分は積み直している可能性が高い。

甕は元位置を保った４個体分を検出したが、少なくともこの倍は埋設されているものと思われる。いずれの甕も体部下半が残っているだけで、口縁部は意識して打ち割られたらしく、埋土にまじって出土している。この甕の埋設されている中心部と周囲の石積部分の間には幅30cmほどの平坦な面が巡っており、この部分に礎石と思われる偏平な石が３個並んでいるのを検出した。おそらく上屋に伴う礎石であったものと考えている。なお、この平坦面は南西隅で一段上っており、この部分が入口であったものと思われる。

**土　　坑**（SK-39）

長径５ｍほどの楕円形の土坑である。深さは20cmほどと浅く、灰色の粘質土によって埋っていた。この中より中国製の青磁の陵花皿、朝鮮製の青磁碗をはじめ土師質の皿など15世紀代から16世紀にかけての遺物が多く出土している。

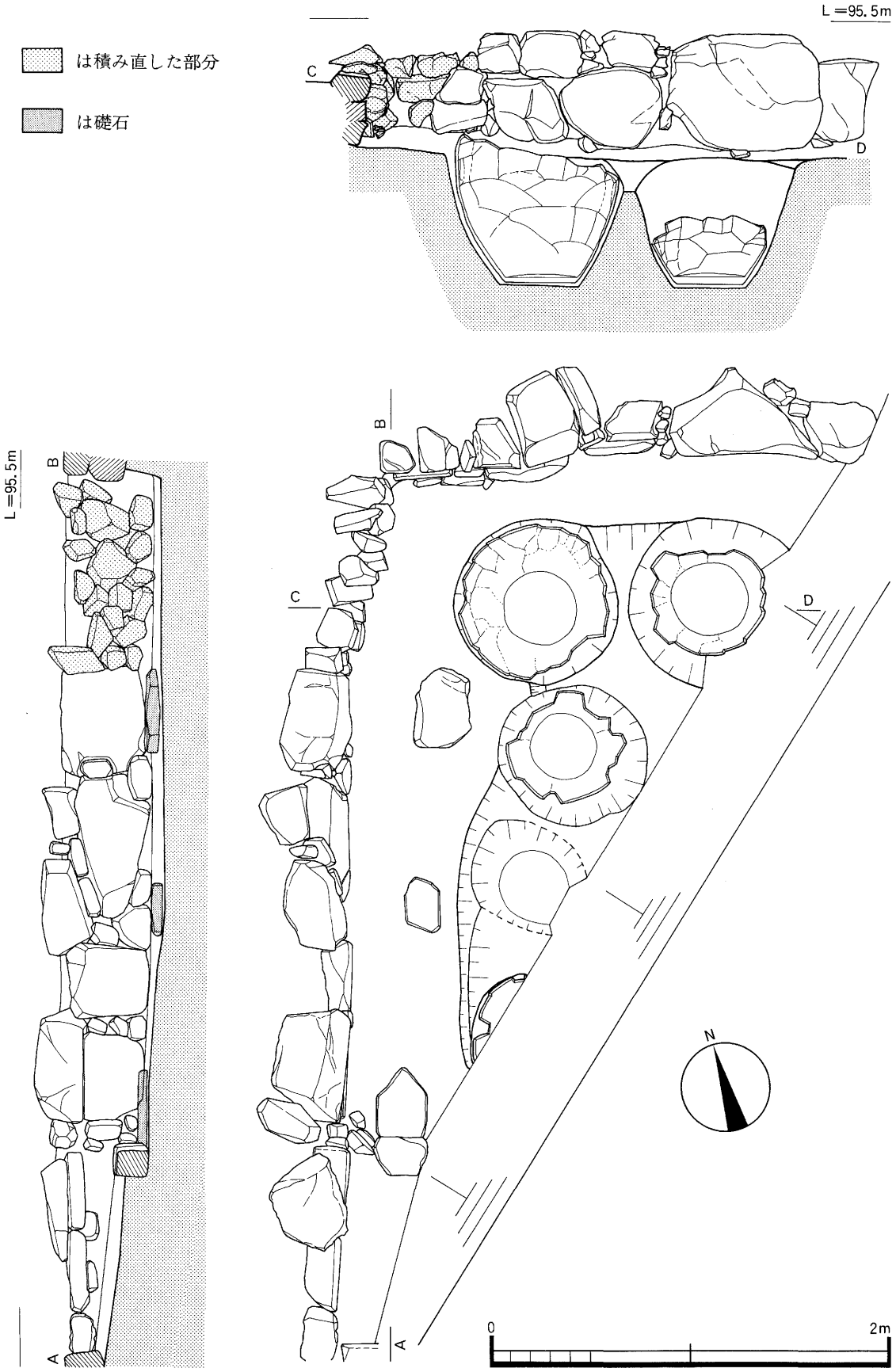



図59　埋甕遺構-04実測図

**SX-03**

前述の石垣(SV-15)のすぐ下に位置する石組みの遺構で、一辺約80cm、深さ40cmを測る。石はいずれも和泉砂岩で20～30cm大のものが二段に積まれているが西側の一辺のみ石を用いておらず茶褐色のやや固い土が壁となっていた。後述する溝(SD-34)とセットを成すものとも考えられ、水溜であった可能性が考えられる。

埋土は上層が灰色の粘質土、下層に5cmほど薄く砂が堆積していた。この中から少量であるが16世紀代の土師質皿、中国製白磁皿が出土している。

**溝** (SD-34)

石垣の下からゆるやかにカーブして西側へとのびる暗渠排水溝である。写真や下図（図60）にも示すように、東側では20cm大の石を用いた石組みとなっており、中央では平瓦と丸瓦を重ね合わせ、その中を水が流れるようにしている。またその下方部分では瓦質の土管を継ぎ合わせている。

写真13　SD-34

これまで山内の調査において、転用した瓦によって溝をつくっているものや、瓦質の土管による排水溝は少例検出されているが、本例のように同一の溝でありながら、このように3種類の工法をもつ溝は初例であり、きわめて特異なものと言えよう。出土遺物などから16世紀代の溝と考えられる。

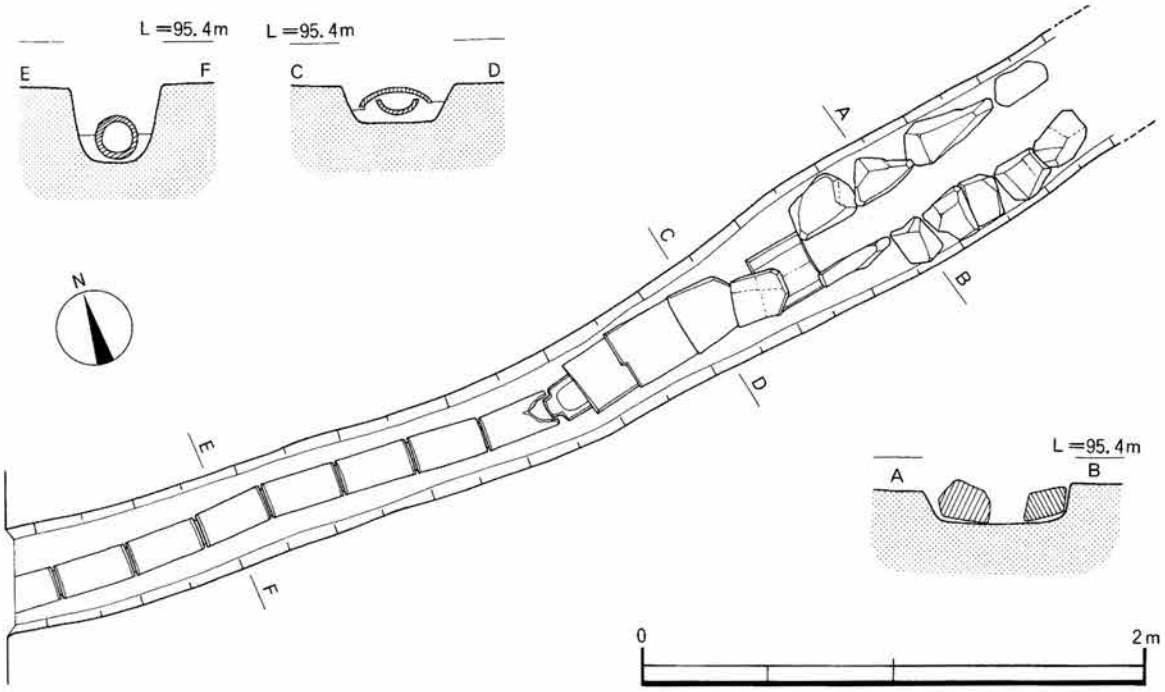



図60　SD-34実測図

## 2．遺　　物

III区は全区調査区を通して最も遺物の出土量が多い地区であった。とりわけIII-１区は多く、SB-01やSK-25など遺構からの出土で一括性の非常に高い遺物群もある。

包含層についても出土遺物は多いが、調査区が長いためかならずしも同一の層序をもって堆積しているわけではない。このためここでは原則として表土下の江戸期の遺構面までの堆積土を第１層とし、その下の中世の遺構面までの堆積土を第２層としている。ただし場所によっては江戸時代の遺構面が削平され、中世と同一面で両者の遺構が検出される場合もあり―むしろこの場合の方が多いのだがこの場合は上層の包含層が第１層、その下層の包含層が第２層といった意味である。また場所によっては包含層が何層にもわたって堆積しているという複雑な様相を呈しているが、この場合には出土遺物を記述する中で堆積状況の概念図を付しているので参考にされたい。

出土遺物は多岐にわたるが全体として見れば、III区は中世の遺構、とりわけ天正の兵火時に係る時期の遺構が多く、このため16世紀代の遺物が最も多い状況であった。

主な遺構には、備前、瀬戸などの国産陶器の甕、壺類や鉢、碗をはじめ日常の雑器である土師質の皿があり中国製の白磁皿や染付皿も数多く出土している。その他には瓦類や五輪塔などの石造製品、漆器の椀、皿なども出土している。

以下、各包含層・遺構から出土した遺物について説明を加えることにしたい。

### ａ．第１層出土の遺物（図61・62、図版34）

第１層は近世の包含層であり伊万里の染付製品、唐津の碗などが主体を占め、これらに混じって中世の備前の製品などが少量含まれる状況である。

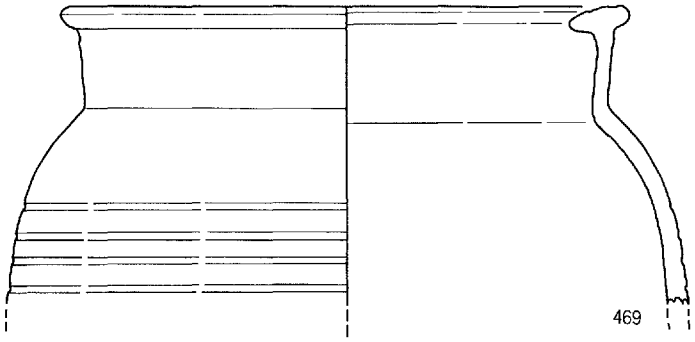
(469) は国産陶器の甕（水甕？）である。内外面でも暗茶色を呈し、なだらかな肩部から頸部がほぼ垂直に立ち上り口縁部は「Ｔ」字状となっている。体部内面には粗い叩きの痕跡が残っている。産地については不明だが、近世でも極めて新しい時期のものと考えている。(470) は備前のすり鉢で、内外面とも灰色を呈する。口縁端部には細い凹面が三本巡っている。備前Ｖ期、16世紀代の製品であろう。

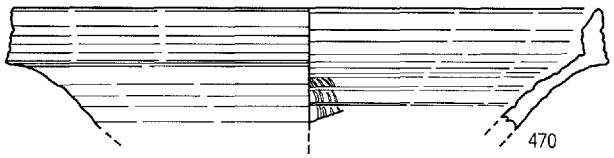
(471) もすり鉢で内面は黄茶色、外面はややくすんだ黄茶色を呈する。口縁部の外面には細く残し凹線が二条巡っており片口部分の幅が８cmほどと広いのが特徴である。すり目は櫛引きによる12本単位のものが施されている。産地および時期については不明だが丹波の製品である可能性を考えている。

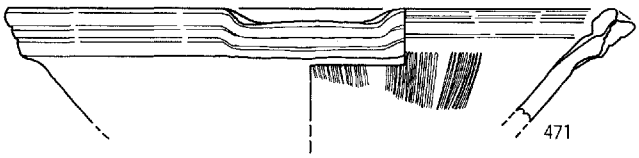
(472) は瀬戸の馬の目皿である。体部は上方にかけて丸く立ち上がり端部は斜めに切り落されたように角張っている。高台は幅広で低く、付高台である。体部内面には鉄絵が描かれており、釉は内面と体部下半まで施されている。18世紀末ないし19世紀前半の製品であろう。

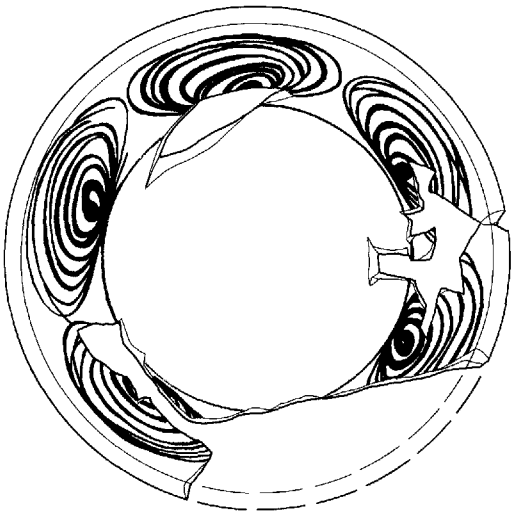
(473) は中国製の青磁碗である。やや青味がかった淡緑色を呈し、体部には蓮弁が描かれている。蓮弁の彫りは浅く全体に不明瞭であるが、花弁ひとつが二重の彫りによって描かれているもようで、外側は浅い片切彫、内側はヘラ先による線描となっている。蓮弁の幅は狭く、やや粗雑さが認められる。

(474) は赤絵磁器である。下地の釉はやや黄色味を帯びたもので全体に粗い貫入が入っている。上絵の残りは悪く、また少破片であるため文様の全体は不明だが内面口縁部下に圏線狭まれた模様帯が巡るもようである。胎土は赤茶色を呈し、焼成は甘い。



0　20cm

**図61　Ⅲ区第1層出土遺物(1)**

(475) は備前の短頸壺である。全体に茶灰色を呈し、胎土には少量の砂粒が含まれる。(476) も備前の製品で中型の壺となるものと思われる。頸部は外傾し、口縁部は丸味を帯びて端部をわずかに折り曲げている。前者の短頸壺については備前Ⅴ期、16世紀を後者の壺についてはⅣ期、15世紀代の年代を考えている。

(477) は国産の陶器の皿で、内面を外面体部下半までガラス質の緑色の釉が施され細かな貫入が入っている。産地については不明だが、時期的には近世でもかなり新しい時期ものと考えている。

(478) は京焼風の碗である、ガラス質の透明釉が内面と高台付根部分まで施されており、黄白色を呈している。見込みには風景が粗略なタッチで描かれている。

(479) は灯明皿で、内面と外面口縁部下までガラス質の透明釉が施されている。外面体部は灰色を呈し回転ヘラ削りの跡が明瞭に残っている。焼成は堅密で磁器質の感がある。近世の信楽の製品の可能性を考えている。

(480) は国産の磁器の盃である。内面と体部中位までは緑色、体部下半から高台内部までは濃茶色の失透釉が施され二色に塗り分けされている。高台はやや八の字状に開き、幅は狭い。近世の製品であるが産地については不明である。

(481) は唐津の碗である。体部下半までやや青味がかった灰色の釉が施されており、露胎部は赤茶色を呈する。断面は灰色を呈し焼成は堅密である。17世紀初頭の製品であろう。1585年焼亡という根来寺にあっては唐津の製品は少なく、とりわけ16世紀末～17世紀初頭の製品は極

めて稀なものである。

(482) は陶器の小碗である。ガラス質の透明釉が施され全体に細い貫入が入っている。胎土は灰白色で陶石質の感がある。

(483) は伊万里の染付で広東碗の蓋になるものと思われる。18世紀末ないし19世紀前半の製品と考えられよう。(484) は伊万里のくらわんか手の碗で体部には草花文が描かれている。(485) も同じくくらわんか手の碗であるが下地はやや灰色味を帯び雑な菊花文が配されている。ともに18世紀中葉の製品である。(486・487) は同形、同文である。体部は口縁部にかけてわずかに外反気味に立ち上がり全体に釉の発色も良く光沢質である。また、断面を見ると胎土も光沢がありやや伊万里の製品とは異質な感がある。19世紀前半の瀬戸の染付である可能性を考えている。

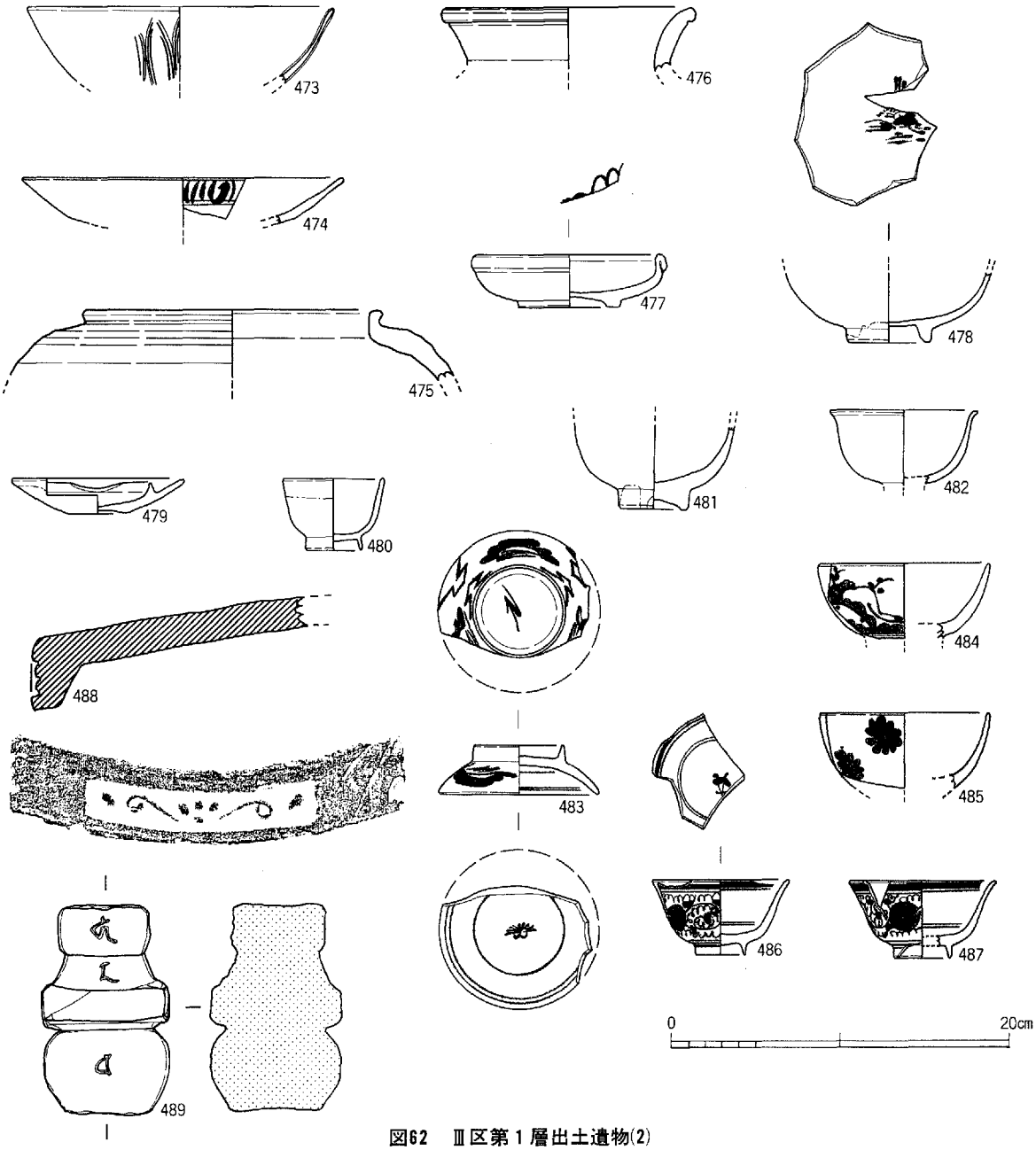



図62　Ⅲ区第1層出土遺物(2)

(488) は均整唐芦文の軒平瓦である。中心飾りの3弁の花弁にはかなり硬化している。凹線と顎部は比較的丁寧なナデ調整を施しているが凸面は未調整となっている。江戸時代中期から後期にかけての瓦と思われる。

(489) は一石五輪塔で水、地輪部分を欠いている。和泉砂岩製であり、正面にはやや粗雑で浅い彫りによって「キャ」「カ」「ラー」の梵字が彫まれている。残存高はおよそ13cmを測る。

**b．第2層出土の遺物**（図63、図版35）

第2層は近世の遺構面を成している包含層であり、ここに含まれる遺物はあきらかに混入と思われるものを除けばすべて中世のものである。その中には13・14世紀代の比較的古い時期のものも含まれているが大部分は16世紀を中心とする時期のものである。

(490) は中国製の青磁碗である。高台外底部のみ露胎でその他の部分には暗緑色の釉が施されている。体部の蓮弁は平ノミ状工具により平たく浮彫りされており鎬をもたない。内面底部には一条の圏線の中に印刻花文が施されている。14世紀中頃の製品と考えている。

(491) は中国製の青磁の盤である。淡い緑色を呈し体部内面に施された蓮弁は幅2㎜ほどと狭く、5本単位の櫛状工具によって施されているもようである。全体に粗雑な感じであり、14世紀後半ないし末段階の製品と考えている。

(492) は中国製の線描の蓮弁文碗である。暗緑色を呈し全体に細かな貫入が入る。15世紀末ないし16世紀前半の製品であろう。(493) は染付の坏である。全体的にくすんだ灰色を呈し、小破片のため文様は不明だが体部外面に粗略な草花文の一部らしいものが認められる。

(494) は長石釉のかかった小皿で、内面には鉄絵による文様が施されている。小破片のため不明だが志野の可能性が高い。志野とすれば17世紀前半の製品であるが、包含層出土のものでもあり、第1層もしくは近世の遺構からの混入品と考えるべきであろう。

(495) は備前のすり鉢である。赤茶色を呈し胎土には少量の砂粒が含まれている。口縁端面にはわずかに浅い凹線が巡っている。備前Ⅴ期中頃、16世紀前半～中頃の製品と考えている。

(496) は常滑の甕である。口縁上部、及び肩部には自然釉が厚く被さっており緑色を呈している。肩部には細かな格子状の叩きが施されている。内面は茶色を呈しており頸部と体部との継ぎ目部分には強い指頭圧痕が明瞭に残っている。口縁部の形態から常滑Ⅳ期、15世紀前半の製品と考えている。

(497) は一石五輪塔の火・水・地輪部分である。材質は和泉砂岩で正面部を欠いており梵字の様相については不明である。地輪部はやや縦長の長方体となっており16世紀代の製品と考えている。

(498･499) はともに五輪塔の台座部分で、材質は和泉砂石である。(499) はすでに間弁がなく反花も便化しており16世紀前半代のものと考えている。(498) はこれより形式的にはかなり古いものと思われるが年代については不明である。(500) は均整唐草文の軒平瓦で凹面は横方向のナデ調整が施されているが凸面は未調整となっている。

**c．淡黄色土出土の遺物**（図65、図版36）

第1層下の包含層で整地土と考えられるものである。遺物はさほど多くはないが中世のものと近世の

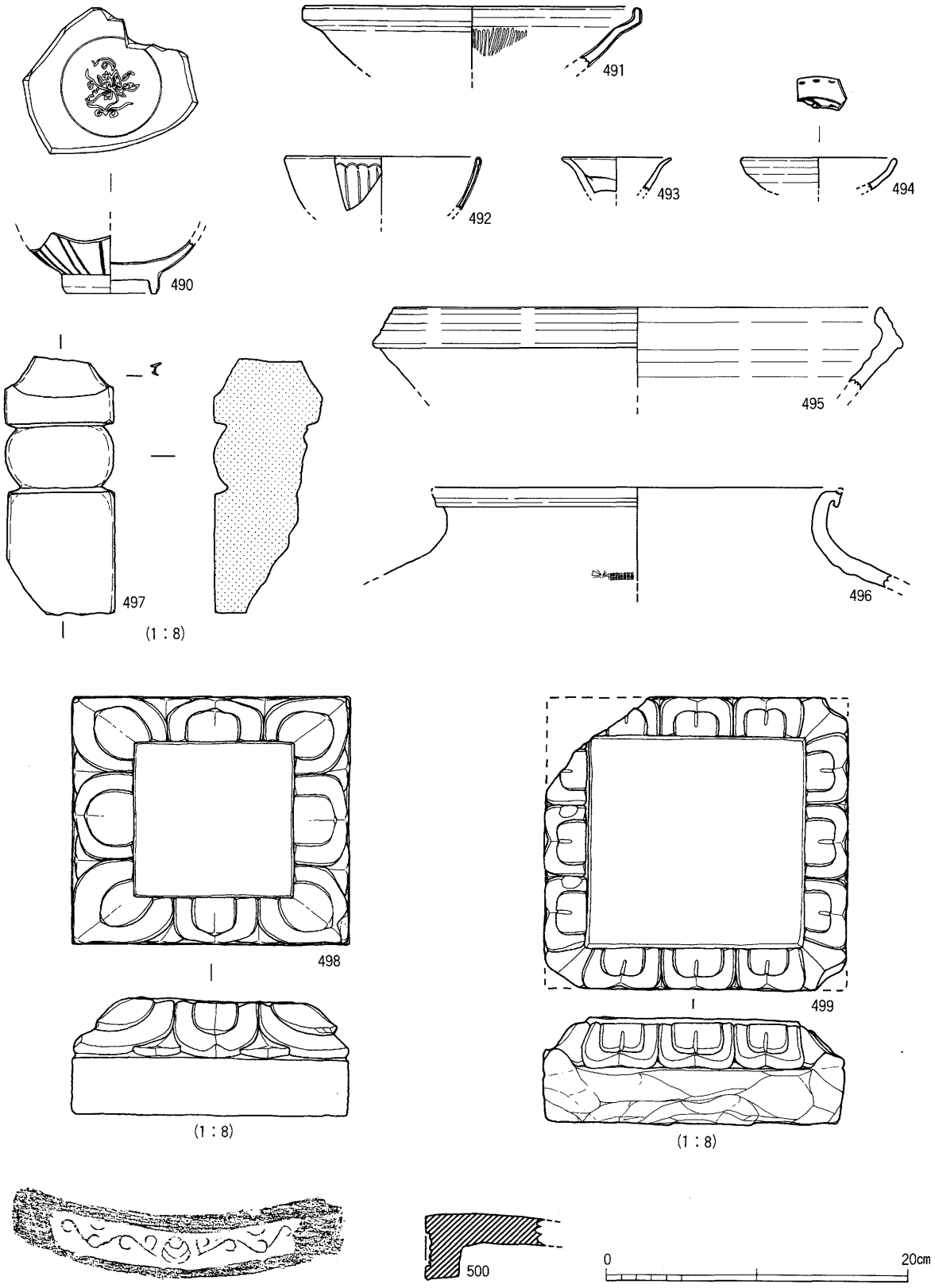



**図63　Ⅲ区第2層出土遺物(1)**

ものとが混在して出土している。

(501) は暗茶色を呈するすり鉢である。口縁端面には細い二条の凹線が巡る。内面のすり目は10本単位の櫛引きによるもので細く鋭利なものが密に施されている。近世のすり鉢であるが産地については確定できない。ただ、口縁部下に重ね焼きの痕跡が残っていることから堺のすり鉢でないことは断定できよう。(502) は丹波のすり鉢である。外面体部は茶色を呈し、口縁部周辺は自然釉のために緑灰色となっている。すり目は7本単位で口縁部の断面は三角形状を呈している。近世の製品である。

**d．暗茶色土出土の遺物**（図65、図版36）

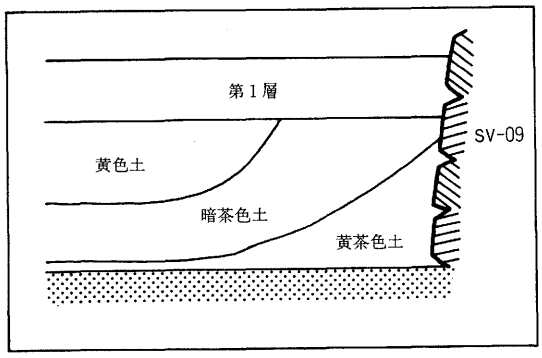



**図64　Ⅲ区SV-09付近土層模式図**

(503) は備前の壺である。内外面とも黒灰色を呈し、肩部には粗雑な櫛描きによる波状文が施されている。備前Ⅴ期、16世紀代の製品と考えられよう。(504) は青味がかった銅緑釉に刷毛目を施した唐津の甕である。口縁は「T」字状を呈し、断面は灰白色で焼成は堅密であるやや幅広の高台が付くタイプと考えており、17世紀もしくは18世紀初頭の製品であろう。

(505) は常滑の甕である。茶褐色を呈するが、口縁上部および頸部外面には緑灰色の自然釉が胡麻状

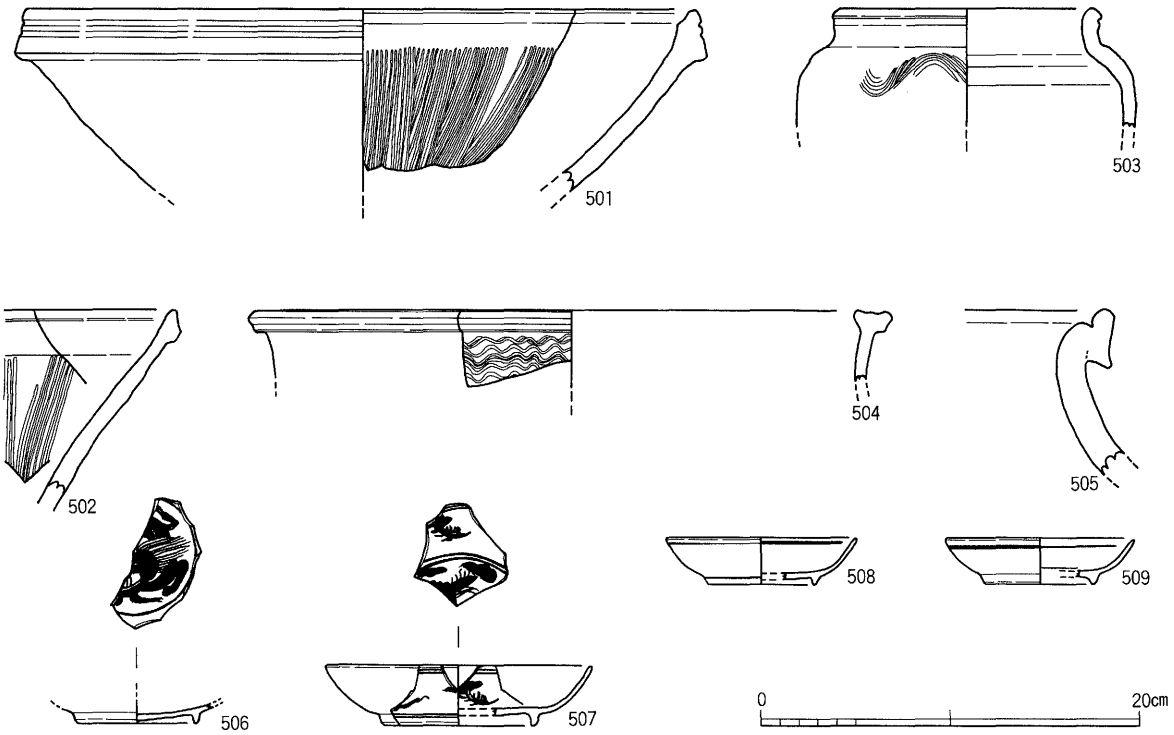



**図65　Ⅲ区SV-09付近包含層出土遺物**

に降りかかっている。胎土には微細な細粒が多く含まれている。口縁部の形態から常滑Ⅳ期、15世紀前後の製品と考えられよう。

**e．黄茶色土出土の遺物**（図65、図版36）

（506～509）はいずれも中国製の染付皿である。このうち（506）は内底面に玉取獅子が描かれており口縁部が端返りするタイプの皿である。天正の兵火の時期まで残っているが体は15世紀後半から16世紀前半の製品であろう。他の3点はいずれも口縁部が内彎気味に立ち上がるタイプの皿で16世紀後半の製品である。

**f．黄色土出土の遺物**（図67）

黄色土はSV-11付近で確認した土で、天正の兵火によると考えられる焼土層の一層上の整地土である。出土遺物は少なく破片のため大部分図示しえなかったがいずれも中世のものばかりであった。

（510）は備前の広口壺である。外面は茶褐色で肩部は胡麻状の自然釉が降りかかっている。内面および断面は灰白色を呈している。頸部は薄くほぼ垂直に立ち上がり口縁端部を丸くおさめている。時期については断定できないが、おそらく備前Ⅴ期16世紀代の製品であろう。

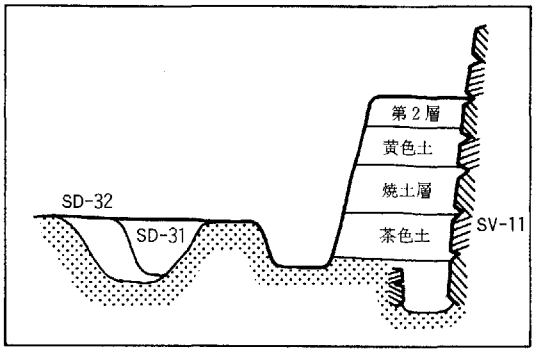


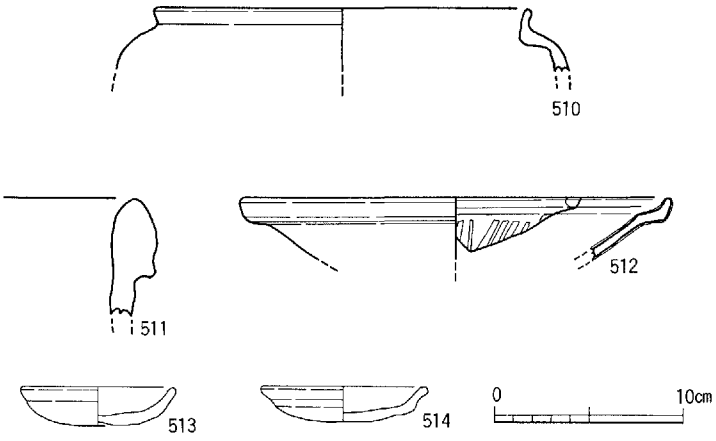

図66　Ⅲ区SV-11付近土層模式図

**g．焼土層出土の遺物**（図67）

この焼土層は天正の兵火によると考えられる焼土層である。出土遺物は少なく、図示できたのは（511）の備前の甕のみである。甕の内面は茶褐色を呈し、外面は自然釉が厚く被さり緑灰色を呈している。口縁部の形態から16世紀前後の製品と考えている。

**h．茶色土出土の遺物**（図67）

（512）は中国製の青磁の盤である。体部の内面の蓮弁は幅5㎜などで平ノミによって彫られている。14世紀後半の製品であろう。（513・514）は16世紀代の土師質皿である。




黄色土（510），焼土層（511），茶色土（512～514）

図67　Ⅲ区SV-11付近包含層出土遺物

**i．遺構出土の遺物**

SB-01は前述したように半地下式の遺構で厨房跡もしくはそれに

類する施設と考えているものである。遺構内には天正の兵火によると思われる焼土・炭層が厚く堆積していた。この中からの出土遺物は多く、中国製の白磁皿、染付皿、美濃瀬戸の碗・皿、備前の甕・壺・鉢、日常の雑器の土師質の皿、瓦質の火舎などのほか、瓦や石造製品などバラエティに富んでいる。

これらは兵火直後の火事場整理の際に投げ込まれたと考えられるものであり、兵火直前16世紀後半の山内の土器の様相を知る上で貴重な資料となるものである。

遺構内の堆積土は上層の焼土、下層の炭層と明瞭に分れていたが出土遺物で見る限り時期差は認められず、整理の段階で上層の遺物と下層の遺物とがかなりの頻度で接合することも確認した。しかし概して下層の方が湿度が高く、その分木製品の残りが良いこともあって漆器椀などの木製品や建築部材などが多い傾向にある。以下、ここでは上層と下層とに分けて記述する。

**SB-01上層出土の遺物**（図68、図版36・37・38）

(515～521) はいずれも中国製の白磁の皿である。このうち (515) は菊皿、(521) は口縁部が丸く内彎するタイプの皿で、他は口縁端部が端返りするタイプの皿で16世紀の遺構からは普偏的に数多く出土しているが、菊皿および内彎するタイプの皿は、本例に限らず出土量は極めて少ない状況である。いずれも同時期、16世紀代の製品であるが、全体に灰色味を帯び高台部に圭砂状の砂粒の付着が認められる粗悪品であり、16世紀中頃以降の製品と考えられよう。

(522～524) は中国製の染付皿である。このうち (522) は底部が碁笥底となっており体部下半に簡略された蕉葉文帯が巡る。この手の皿は量的にはさほど多くはないが天正の兵火時に係る遺構からは普遍なく出土する傾向にある。また文様についても粗略差はあるもののすべて同文のものと言ってよい状況である。(523・524) はともに口縁端部が端返りするタイプの皿で外面体部には唐草文が配られている。小破片のため全容は不明だが (523) は見込部分に玉取獅子が描かれており、全体にやや厚手で高台部の作りもしっかりとしている。天正の兵火時よりは一時期古い製品と考えられよう。ただこのタイプの皿は、兵火直前までかなり残ってきているもようで、本遺構に限らず天正期の遺構、包含層出土の染付皿の大部分がこのタイプと言っても過言ではない。

(525) は瀬戸もしくは美濃の灰釉おろし皿である。濃緑色の釉が口縁部内外面に施されその他の部分は露胎となっている。底部は糸切りで口縁部には2回の回転ヨコナデが施されている。焼成がやや甘く、露胎部は淡い赤茶色を呈している。また、内面のおろし目は磨滅が著しく中心部分ではすり減って痕跡すら残っていないほどである。焼成が甘いことも原因であろうが長期間にわたって使用され伝世されていたことがうかがえよう。

(526) は瀬戸の天目茶碗である。体部下半の露胎部分には化粧がけが施されている。焼成は堅密で胎土も良く精選された土が用いられている。大窯のⅠ期後半もしくはⅡ期前半、16世紀前半の製品と考えている。(527) は備前の大海形の茶入である。全体に茶褐色を呈し、肩部にわずかに胡麻釉が降りかかっている。体部上半から口縁部にかけては丁寧な回転ナデ調整、体部下半にはヘラ削りの痕跡がかすかに残っている。備前Ⅴ期、16世紀後半代の製品と考えられよう。

(528) は瀬戸の小壺である。体部上半を欠くがおそらく丸壺形の茶入なるものと思われる。内面と体部下半まで鉄釉が施されており、底部は糸切り未調整の平底となっている。年代については限定できな

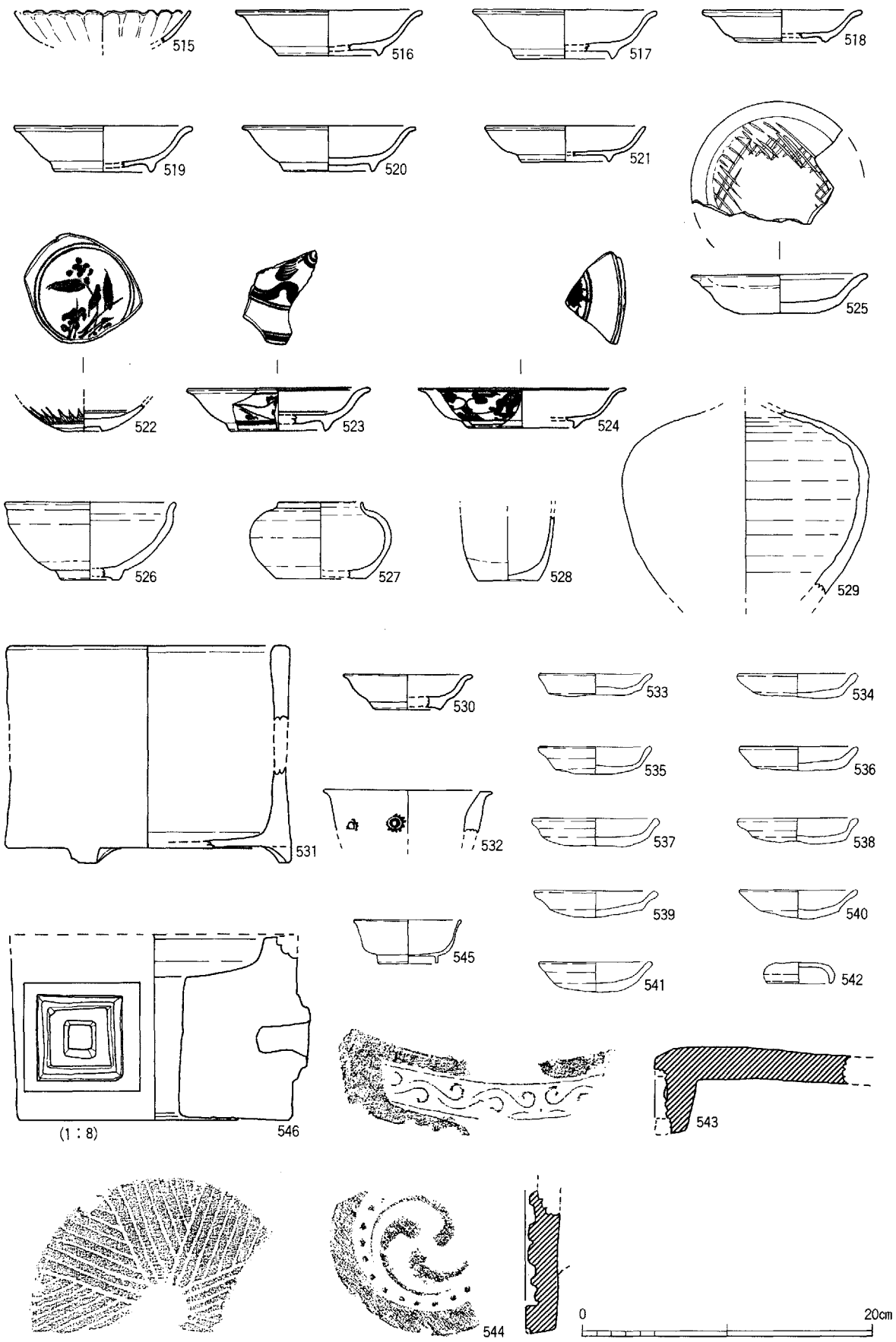



図68　Ⅲ区SB-01上層出土遺物(1)

いが遺構等の状況から考えて16世紀中頃、後半と考えて大過ないものと思っている。(529) は瀬戸の瓶子である。二次焼成を受けており釉調、文様などは不明である。(530) は瀬戸の灰釉皿である。口径9cmほどとやや小振りで、体部は内彎気味に立ち上がり口縁部はわずかに端返りする。大窯Ⅰ期の製品と考えており、実年代で言えば16世紀前後のものと思われる。

(531) は瓦質の香炉もしくは小型の火舎と思われる。破片のため全容は不明だが三足のつくもので全体に器壁の調整は粗く、おそらく印花文などは施されていないものと思われる。(532) も同じく瓦質の製品で香炉となるものである。体部外面にはヘラ磨きが施されその上から簡略な文様が押印されている。瓦質の製品は一般に山内では15世紀に盛行するものであるが、本例などはやや粗雑なつくりであり16世紀に入ってからのものと考えてもよいと思われる。

土師質皿 (533～541) はいずれも口径8cm前後で赤橙色を呈する。胎土には片岩、クサリ礫を含み口縁部が強いヨコナデのため肥厚しているもので、16世紀に通有のタイプの皿である。ただ、16世紀前半段階では同一タイプで口径の大きなものが存在するが、ここではそれが入っていないことから16世紀後半のものと考えている。(542) は土師質の蓋で黄白色を呈している。

軒丸瓦 (543) は均整唐草文で文様は彫りが深く端正なつくりである。顎部は横方向に調整し、凸面との境部分には丁寧なヨコナデが施されている。

(545) は銅製の六器である。腐触がかなり進んでおりわずかに原形をとどめる程度である。六器はこれまでの山内の調査において何個体か出土しているが、いずれも地鎮と考えられる遺構からの出土であり本例のように生活祉の遺構からの出土は初めてである。

(546) は茶臼の上臼部分である。材質は砂岩で、分画数はおそらく8分画になるものと思われる。直径19.5cm (6.5寸) を測る。

(547･548) は備前のすり鉢である。ともに暗灰色を呈し焼成は良好である。口縁端面には浅い凹線が巡っている。備前Ⅴ期、16世紀の中頃の製品と考えている。(547) のすり目は8本単位で体部中位から底部にかけて放射状に引かれており底面には及んでいない。

(549～552)はいずれも備前の徳利である。茶灰色ないし茶褐色を呈する。やや胴膨みの体部で頸部は細長く口縁部は大きく外反する。体部内面には明瞭なロクロ目が、頸部にはシボリ目が残っている。備前Ⅴ期、大窯初期の製品と考えており、16世紀後半に位置づけられよう。

(553～556)は備前の甕である。口縁部の形態はそれぞれ異なっており同一遺構内の出土ながらかなりの時期差が認められる。このうち最も古いものは口縁部の形態から推して (554) と考えられる。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は偏平な玉縁状を呈している。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれている。備前Ⅳ期の特徴を備えたものであり、15世紀代の製品と考えられよう。

逆にもっとも新しいと考えられるものは (555) である。頸部が「く」の字状に折れ曲がり口状部の側面には3本の凹線が巡る。全体に茶褐色を呈し口縁部から肩部にかけて黄灰色の胡陶 (自然釉) がかかっている。高さ92cm、胴部最大径84cmを測る。全体のプロポーションや口縁部の形態が紀年銘資料である元亀三年 (1571) の大甕と酷似しており、この大甕についても16世紀後半、詳かく言えば1550年から1585年の間にその製作年代を求めることができるものと考えている。

その他の甕については前者 (554) と後者 (555) の中間的な形態を呈しており年代的にも両者の中間

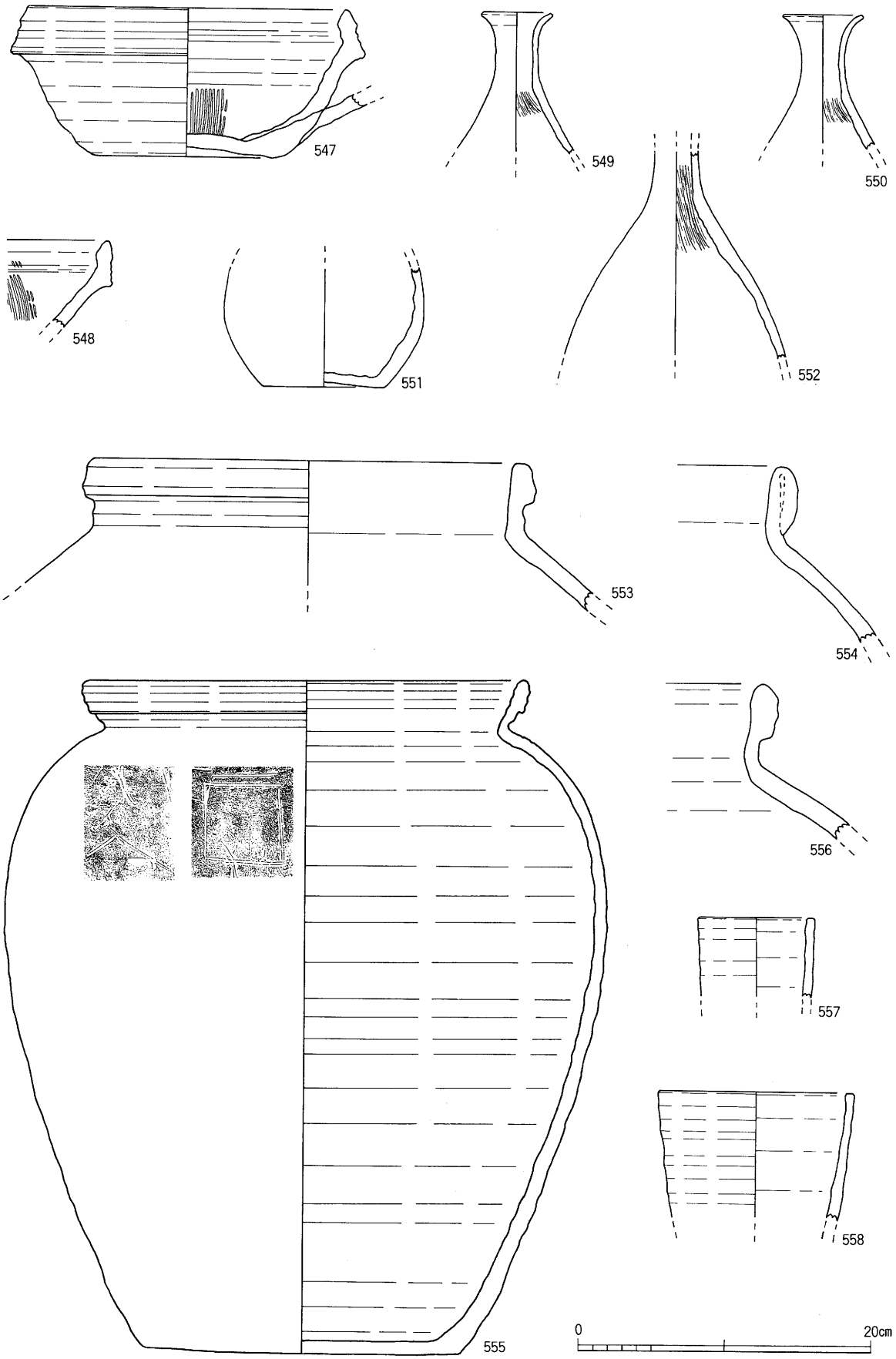



図69　Ⅲ区SB-01上層出土遺物(2)

に位置づけられるものと思われる。

(557) は備前の筒状の深鉢である。口径8㎝、高さについては底部を欠いており不明だがおそらく8㎝前後になるものと思われる。器壁は5㎜前後と薄く焼成も良好で全体に暗灰色を呈している。

(558) も同じく備前の筒状の深鉢で口径13㎝ほどとやや大振りの製品である。全体に茶灰色を呈しており体部中位より下半にはヘラ削り調整が施されている。

これらの深鉢の製作年代については断定できないが共伴する遺物の年代幅から考えて、備前Ⅴ期、1585年を下限とする16世紀の製品と考えて大過ないものと思っている。

(559～569) はいずれも備前の製品で大型・中型の壺である。このうち (559) は口径17㎝を測る。肩部以下を欠いてるが胴部最大径30㎝、器高40㎝前後になるものと思われる。暗褐色を呈し、肩部には粗い波状文が施されるもようである。頸部はわずかに外傾し口縁端部は丸くおさめられている。

(560) も (559) とほぼ同じぐらいの大きさの壺である。頸部は外傾し口縁端部は横方向にわずかに張り出している。肩部には3本単位の櫛状工具による波状文、体部上位には条線が施されている。

(561) は三耳壺である。胴部最大径21㎝、器高37㎝を測る。口縁部から体部上位にかけて黄灰色の自然釉が厚く被さっており、他の部分は暗茶褐色を呈している。以上3点の大型の壺はいずれも備前Ⅳ期後半、15世紀の後半から16世紀にかけてのものと考えており天正の兵火に至るまでのおよそ100年間にわたって長く使用、伝世されていたことがうかがわれよう。

(562) は口径10㎝、器高20㎝前後の中型の壺である。全体に暗茶褐色を呈し、体部内外面には明瞭なロク目が残っている。肩部より上はナデ調整が施され、肩部には櫛引きによる粗い波状文が施されている。

(563) もほぼ同形の壺で全体に暗褐色を呈している。肩部には幅2㎜、5本単位の櫛状工具による条線が巡っている。(564) は広口の壺、もしくは小型の水屋甕になるものと思われる。口頸部が短くなだらかな肩部の一端を上方につまみ上げたような型となっている。全体に茶褐色を呈し、焼成は良好である。

(566) の壺は口径14㎝を測り、中型の壺の中にあってはやや口径が広い。頸部は直立し口縁端部は丸くおさめつつやや横方向に拡張している。全体に茶褐色を呈し口縁上端部と肩部には黄緑色の胡麻（自然釉）が降りかかっている。(568・569) の壺は肩部より上を欠損しているが、おそらく (562) のような頸部が短く口縁端部を丸くおさめるタイプの壺となるものと思われる。ともに茶灰色を呈し、体部内外面には顕著なロクロ目が残っている。

備前の中でも壺は甕やすり鉢に較べて口縁部の形態の変遷が明瞭ではなく、時期決定には困難を伴うものと言えよう。したがってこれらの壺についてもその製作年代を限定することは難しいが、肩部に施された波状文の様相などを加味すれば、おおむね備前Ⅳ期後半以降、15世紀後半から1585年の間におさまる製品と考えられよう。なお、(564) はⅤ期になって現われるタイプの壺と考えている。

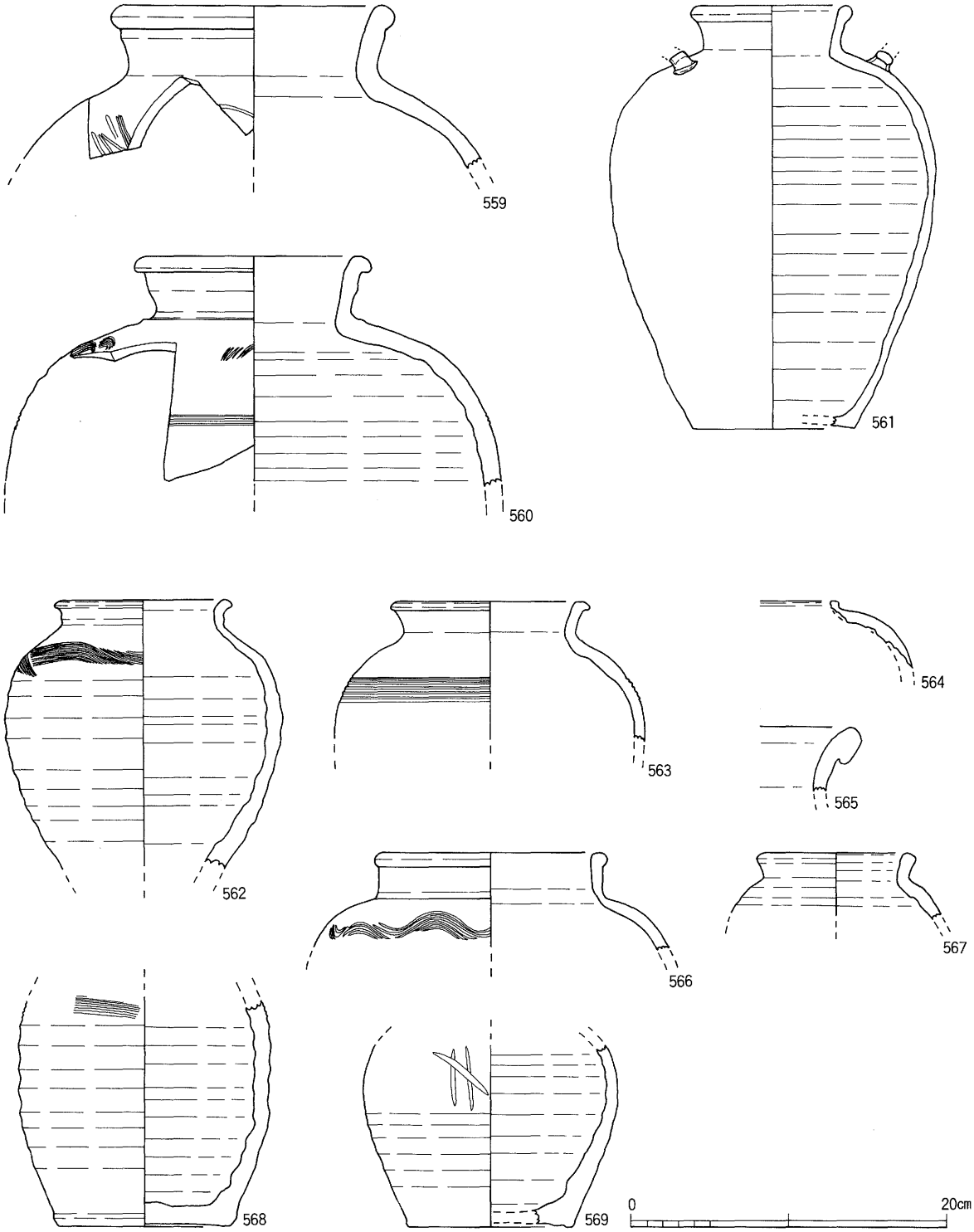



図70　Ⅲ区SB-01上層出土遺物(3)

**SB-01下層出土の遺物**（図71・72、図版39・40・41）

(570～572) は口縁部の端返りする中国製の白磁皿である。このうち (572) は口径15.5cm、器高3.5cmを測り、通例出土するものよりひとまわり大きい皿である。灰色を呈した釉に小孔が見られるなど粗雑な製品である。

(573) は中国製の染付皿である。碁笥底となっており畳付部の釉を削り取っている。体部下半には簡略化された蕉葉文が巡らされている。

(574) は瀬戸の灰釉の碗である。中国製の青磁の模倣製品と考えられるもので体部には線描の蓮弁文、見込み部分には印刻の花文が施されている。高台内底部を除く全釉で全体に淡い黄緑色を呈する。16世紀初めの製品と考えている。

(575～579) はいずれも瀬戸の天目茶碗である。このうち (575・576・579) は口径11cm前後、器高6cm前後の法量を有する。体部はゆるやかに内彎気味に立ち上がり、口唇部は直立し、口縁部が短く外反したのち端部を丸くおさめている。鉄釉が体部下半まで施されており、口台付近の露胎部にはサビ釉が塗られている。高台はいずれも削り出しによるもので (575) と (579) は輪高台となっているが高台内の削りは3mmほどと浅いものである。

(577) 口径12.5cm、器高6.5cmを測る。全体のプロポーションは先に述べた (575) などと同様であるが法量ががやや大きいものである。体部下半まで施釉されており白色を呈している。しかし釉は長石釉ではなく白天目でないものと考えている。おそらく鉄釉の焼成ミスが二次焼成により白色に変じたものと思われる。

(578)は口径13.5cm、器高6.3cmを測る。体部は斜上方にまっすぐ立ち上がり、口唇部は直立し端部は外反せずむしろ内側に押え気味にまとめている。体部下半まで鉄釉が施され黒茶色を呈している。高台は削り出しによるものでサビ釉が施されており茶褐色を呈している。

これらの天目茶碗は全体のプロポーション、口唇部の形態などから大窯のⅠ期後半、もしくはⅡ期前半段階のものと思われ、16世紀前半にその製作年代を求められるものと考えている。

(580) は瀬戸の皿である。体部は内彎気味に立ち上がり口縁部はわずかに外反している。体部に下半まで鉄釉が施され黒色を呈し、露胎部は灰色を呈している。体部下半にはヘラ削りの跡が明瞭に残っており、高台は残りが鋭利に削り出されている。大窯Ⅱ期の製品と考えている。(581) は瀬戸の灰釉の皿で淡緑色の釉が全体に施され見込み部分中央よりやや偏って菊花文が押されている。

(582) は瀬戸の肩衝の茶色である。口径2.8cm、器高4.5cmの小品で鉄釉が体部下半まで施されており茶褐色を呈している。また、底部は糸切底となっている。この製品についても大窯Ⅱ期、16世紀中頃のものと考えている。

(583) は備前のすり鉢である。全体に茶灰色ないし灰色を呈し、口縁部側面には3本の凹線が巡っている。内面のすり目は13本単位の幅広のもので底部付近までまばらに施されている。(584) は備前の製品で筒状の深鉢もしくは建水となるものと思われる。全体に茶褐色を呈し、内面にはロクロ目が明瞭に残る。外面口縁部付近はナデ調整、底部付近はヘラ削りの後、ナデ調整を施している。

(585) も備前の製品で大徳利である。全体に暗灰色を呈しており頸部下半に窯印と思われる櫛引の格子文が施されている。これらの備前の製品はいずれも備前Ⅴ期、16世紀代のものでありとくに (585) の

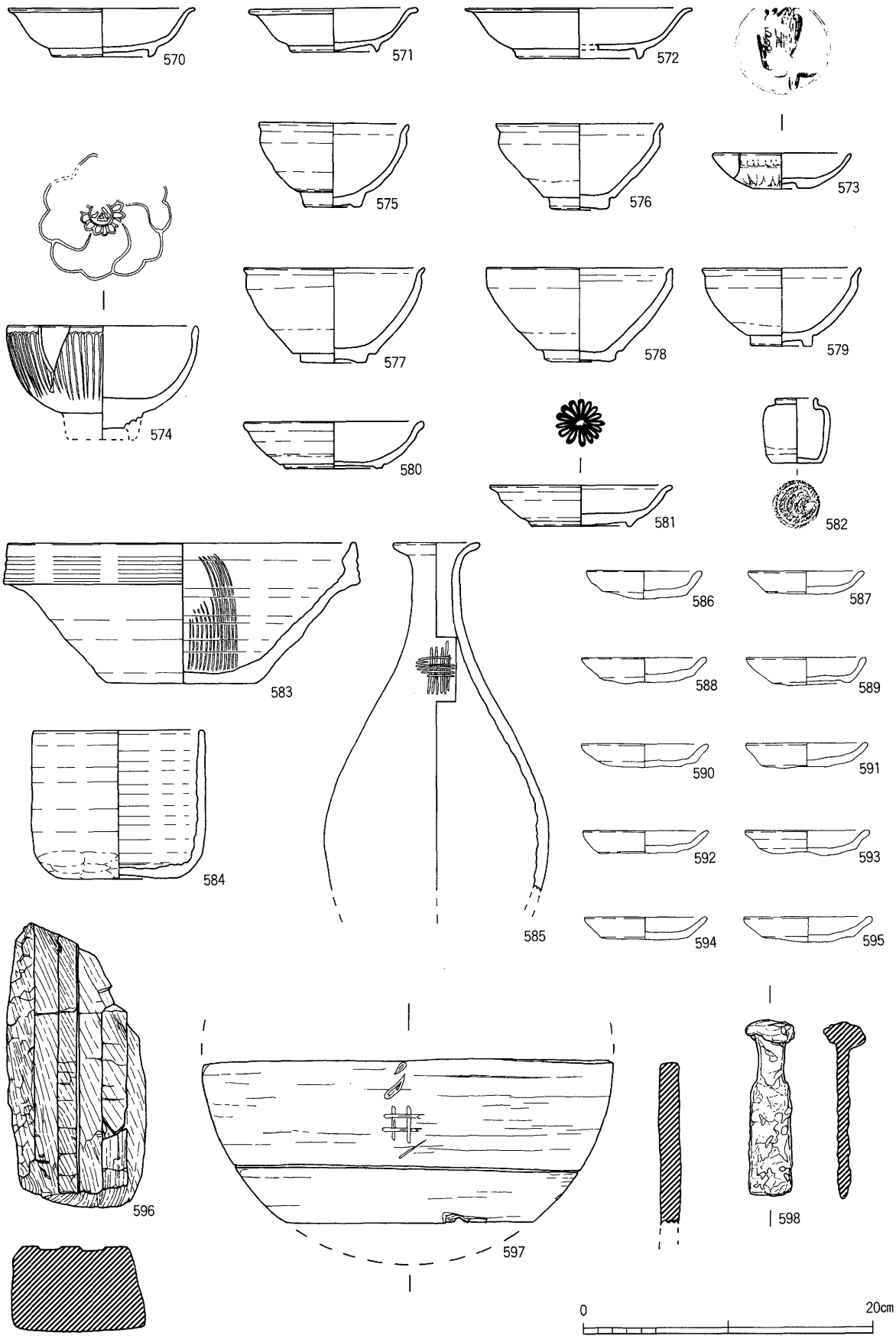



図71　Ⅲ区SB-01下層出土遺物(1)

徳利は大窯初期、16世紀後半段階の製品と考えている。

土師質皿（586～595）はいずれも口径９cm前後を測り、口縁端部の肥厚する16世紀代に通有のものである。

(596)は敷居の一部だが火災に遇ったもようで炭化している。敷居の溝幅は1.6cm、深さ４mmほどで畦（溝と溝の間）幅は1.2cmを測る。(597)は桶の底板である。直径28cm、厚さ1.2cmを測る。各板は竹釘により接合されている。(598)は鉄製の鏨（たがね）である。全長12cm、身部分の幅は2.3cmを測る。かなり腐触が進んでおり細部については不明である。

(599～611)はいずれも漆器で、いわゆる根来塗りと称される製品である。火災に遇っておりいずれの製品も黒く焼けこげている。火災後一括投棄されたもようで狭い範囲からまとまって出土した。

このうち(599)は高杯の杯部と考えられるもので直径17cmを測り、内面は黒漆、外面は朱漆が塗られている。その他はいずれも椀・皿類で全体に朱漆が施されており文様は描かれていない。

椀には（600・601）のようにやや大型で体部から口縁にかけて内彎気味に丸く立ち上がるタイプのものと（612）のように中型で器壁がやや厚く口縁部の外反するタイプがある。皿（611）は口径15cm、器

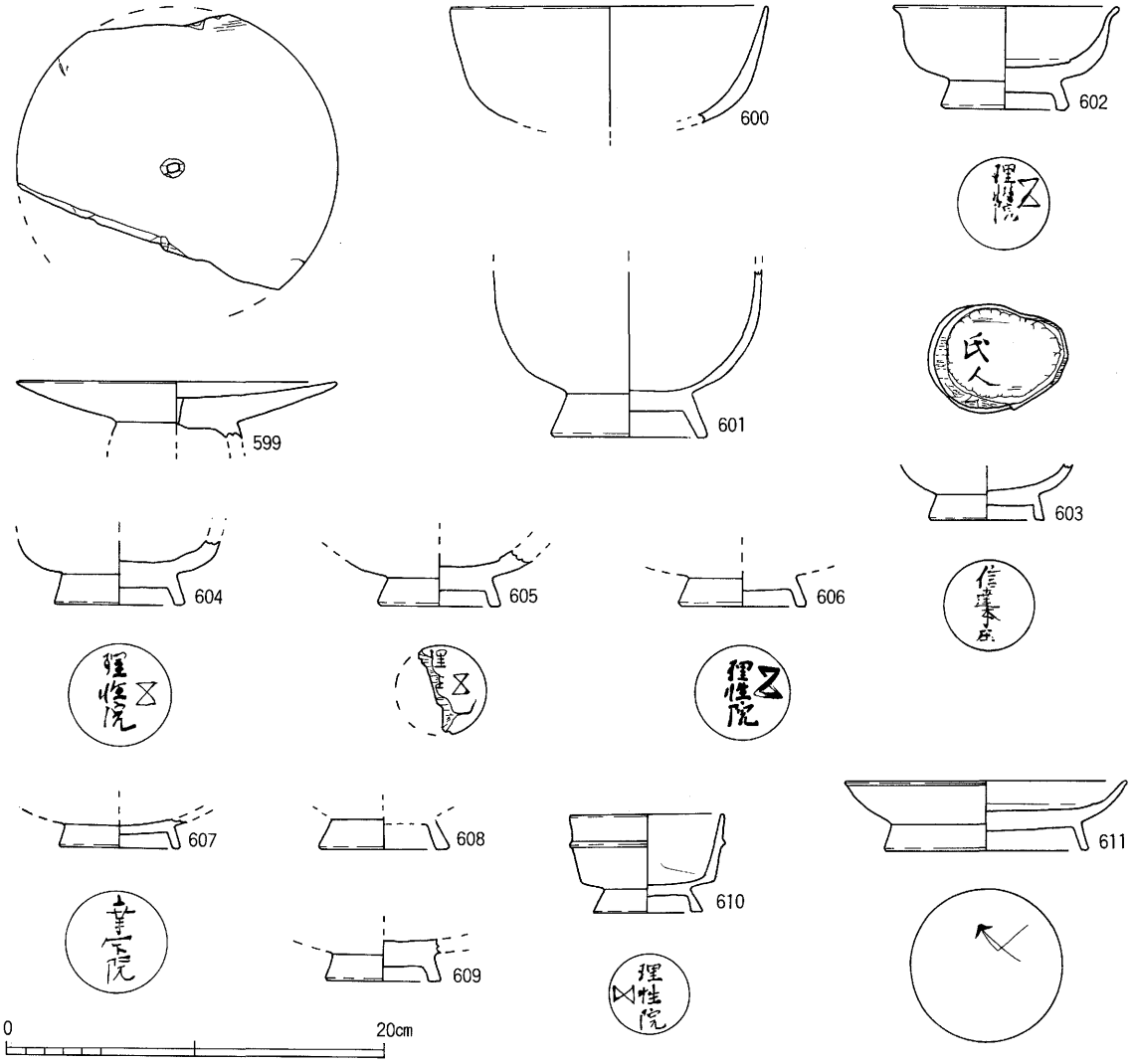



**図72　Ⅲ区SB-01下層出土遺物(2)　漆器**

高3.5cmほどで底部がやや肉厚となっている。また、(610)は腰折れの椀で体部中位に一条の削り出しによる凸帯が巡っている。口径10cmほどの小ぶりのもので器形的には豆子と称されるものであろう。

なお、これらの椀の外底部には「理性院」という院名が銘記されており、これらの椀が理性院の所有であったことがうかがわれる。また院名の傍には「⧖」と記号が描き表わされており、「⧖」という記号が理性院を意味する院号のようなものであったことが推測される。

そのほか「信達本庄」と書かれたものも一点（603）あり、信達との関係を示すものと言えよう。

**SD-29出土の遺物**（図73、図版42）

（612）は中国製の白磁皿で口縁部の端返りするタイプである。（613）は中国製の青磁盤である。全体に草緑色を呈する。口縁部は「く」の字状に折れ曲がり端部は上方につまみ上げられている。体部内面には幅3㎜ほどの丸ノミ状工具による形骸化した蓮弁文が施されている。（614）は備前のすり鉢で内外面とも灰色を呈する。内面のすり目は9本単位であるが放射状ではなく不規則に施さ

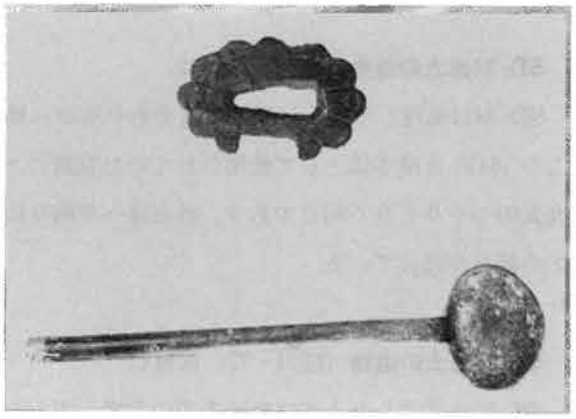
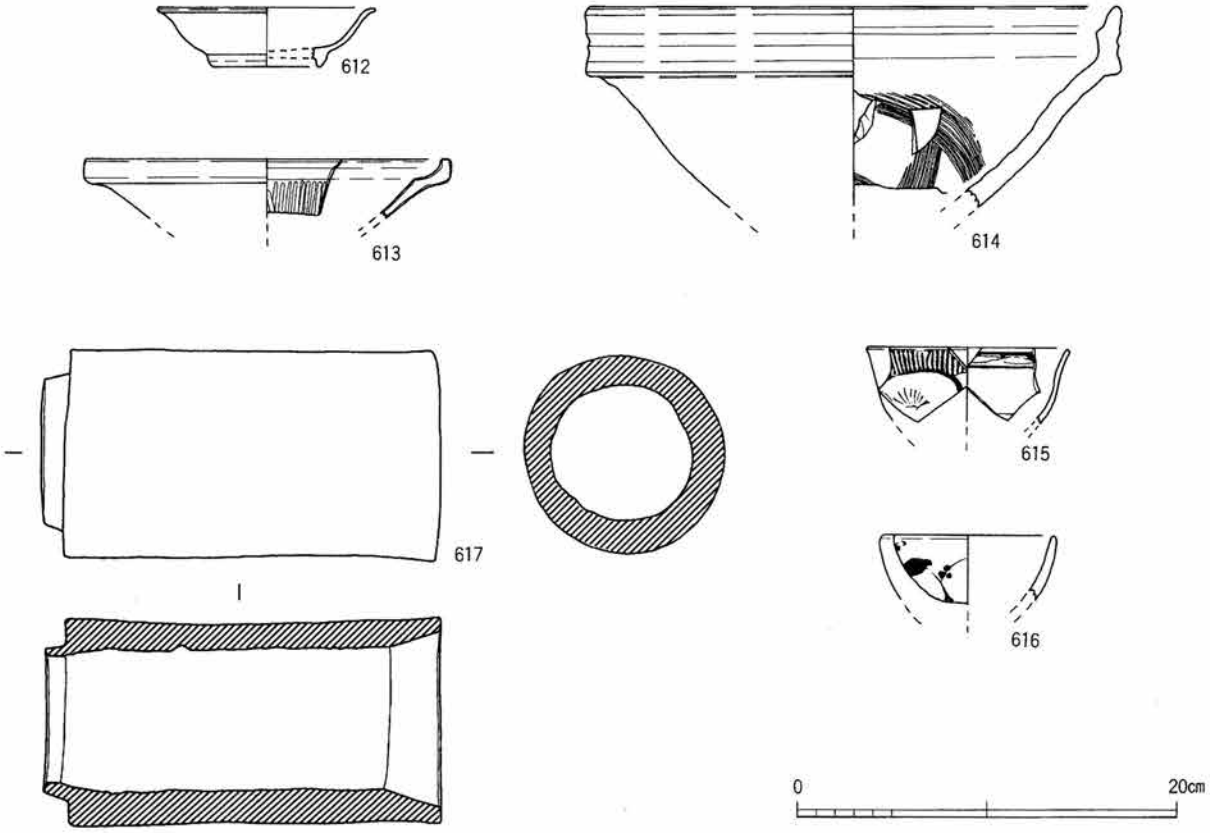


**写真14　鍔および匙**




ＳＤ—29（612～614），ＳＤ—32（613～616），ＳＤ—34（617）

**図73　Ⅲ区SD-29・32・34出土遺物**

れている。口縁部の形態から備前Ⅴ期、16世紀代の製品と判断される。

**SD-32出土の遺物**（図73、図版42）

(615･616) はいずれも染付の碗である。このうち (616) は伊万里のくらわんか手の碗であるが (615) は瀬戸の製品で、文様や呉須の発色状態などから近世以降のものである可能性が高いものと考えている。そのほかこの溝からは写真14の刀の鍔や銅製の匙が出土している。

**SD-34出土の遺物**（図73、図版42）

SD-34は前述したように同一の溝でありながら異なった３種類の工法によって作られている溝でありこの (617) は溝本体として使用されていた瓦製の土管である。直径16cm、長さ30cmを測る。基本的には丸瓦のつくりと全く同じであり、外面はヘラ削りにより平滑に仕上げられ、内面には布目と直径８mmほどの縄目が残っている。

**SK-25出土の遺物**（図74・75、図版42）

SK-25は前述したように半地下式の遺構と考えられるもので炭まじりの焼土によって埋まっていた。この中からは多量の遺物が出土している。その内訳について言えば中国製の染付製品の多いことが特長である。通例の出土比率、組成から見れば異常に高いものであり、染付製品だけをまとめて投棄したものと考えられよう。

染付製品の中では (619) のような碗は極めて少なく大部分が皿である。皿の中には (620) のような碁笥底のものや口縁部の端返りするタイプのものが少量認められるが、大半は口縁部が内彎気味に丸く立ち上がるタイプのものである。この内彎するタイプの皿は16世紀後半以降に出現することがこれまでの研究で知られており、1585年焼亡という当遺跡にあっては最も新しい様相を示すものであると言えよう

なお、これらの内彎するタイプの皿の文様はさまざまであるが、八宝文を配したものがもっとも多く、次いで動物を描いたものが多い。描かれている動物としては鳥、蟹、鹿などがあるが、これらの中では (637) のように鹿を描いたものが最も多い状況である。

その他の遺物としては中国製の白磁、国産陶器、瓦類がある。とくに白磁は染付に次いで多い状況であり、中でも小坏の多いのが特長と言えよう。通例の天正の兵火によると考えられる焼土層からは白磁は数多く出土するもののほとんどが端返りの皿であり小坏は極めて少ない状況である。この意味でも本遺構の遺物の出土状況は通例とは異なっているものと言える。

白磁の小坏 (640～643) はいずれも口径６cm、器高４cmを測り、口縁部は外反している。外底部には呉須により「福」の字が描かれているがいずれも字体は崩れている。(644･645) は白磁の皿である。全体に灰色味を帯びており、つくりもやや雑である。これらの白磁製品はいずれも16世紀後半代の製品と考えている。

(646) は備前の壺である。全体に濃茶色を呈し、口縁部から肩部にかけて黄色の自然釉が被かっている。また肩部には退化して雑な波状文が巡らされている。

軒丸瓦 (647) は左巻きの巴文で周囲には16個の珠文が配されている。軒平瓦 (648･649) はいずれも

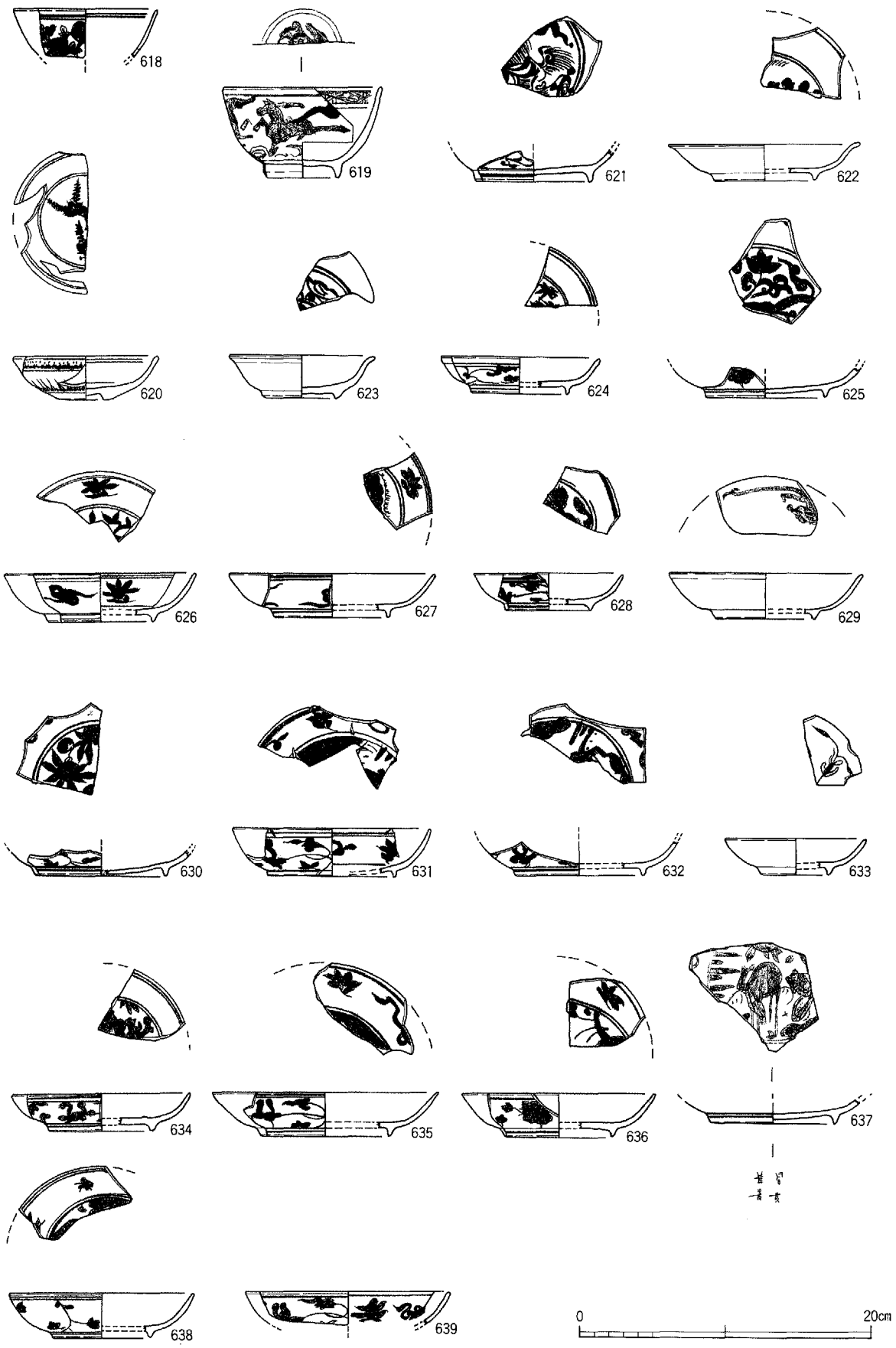



図74　Ⅲ区SK-25出土遺物(1)

均整唐草文であるが、(648) の方が大きく、まち全体につくりが丁寧で古い様相を呈していると言えよう。これらの瓦については16世紀前半～中頃の製品と考えている。

**SK-29出土の遺物**（図76）

(650) は瓦質の製品で煮炊用の鍋などをかける道具であったものと考えている。口縁部はゆるやかに外反し端部は水平となっている。内外面とも黒色を呈しナデ調整が施されている。(651) は備前の大甕で折れ曲がった口縁の側面にはまだ凹線は入っておらず備前Ⅳ期、15世紀後半の製品と考えられる。(652・653) は土師質の皿で口縁端部の肥厚する16世紀代のものである。

**SK-35出土の遺物**（図76、図版42）

(654) は瀬戸の灰釉の碗である。淡黄緑色を呈し全体に細かな貫入が入る。胎土は黄白色のぱさついた感じの土である。(655) は備前の壺で肩部には波状文が巡らされている。また、口縁部から肩部にかけて黄白色の自然釉が被さっている。

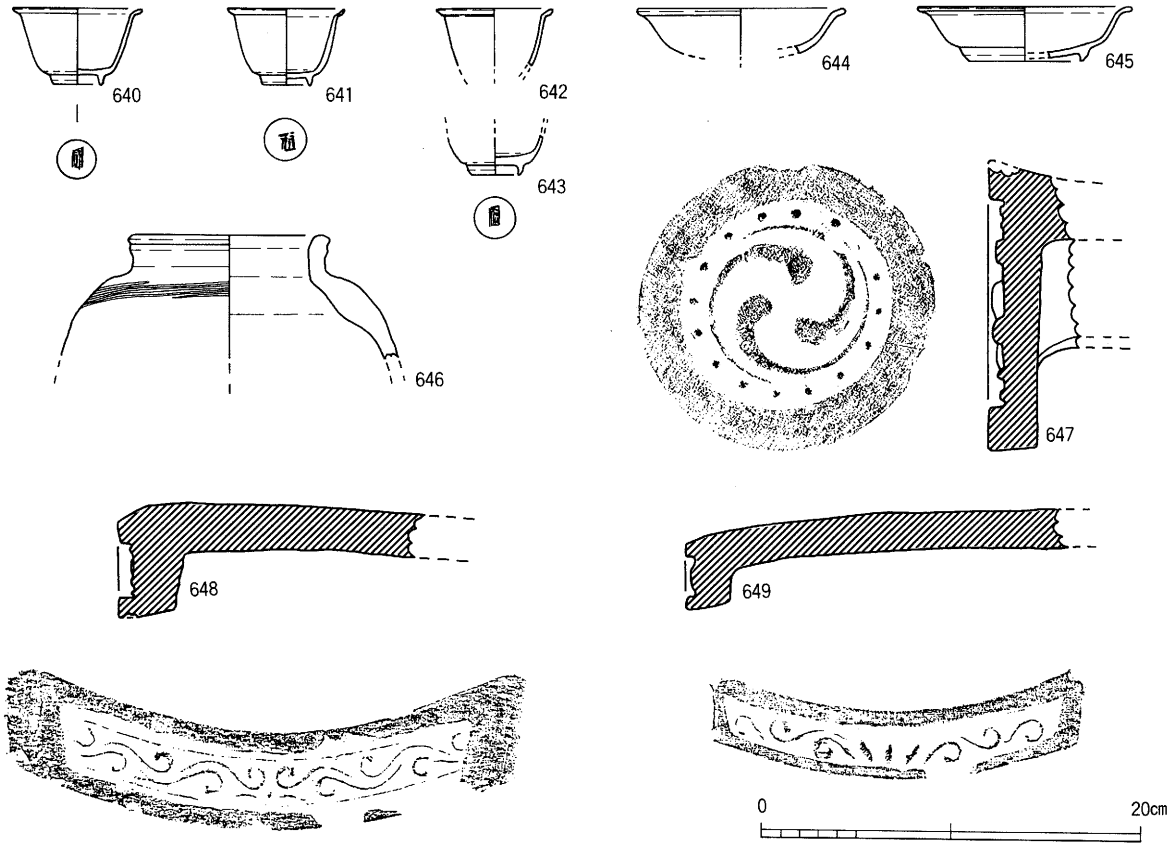



**図75　Ⅲ区SK-25出土遺物(2)**

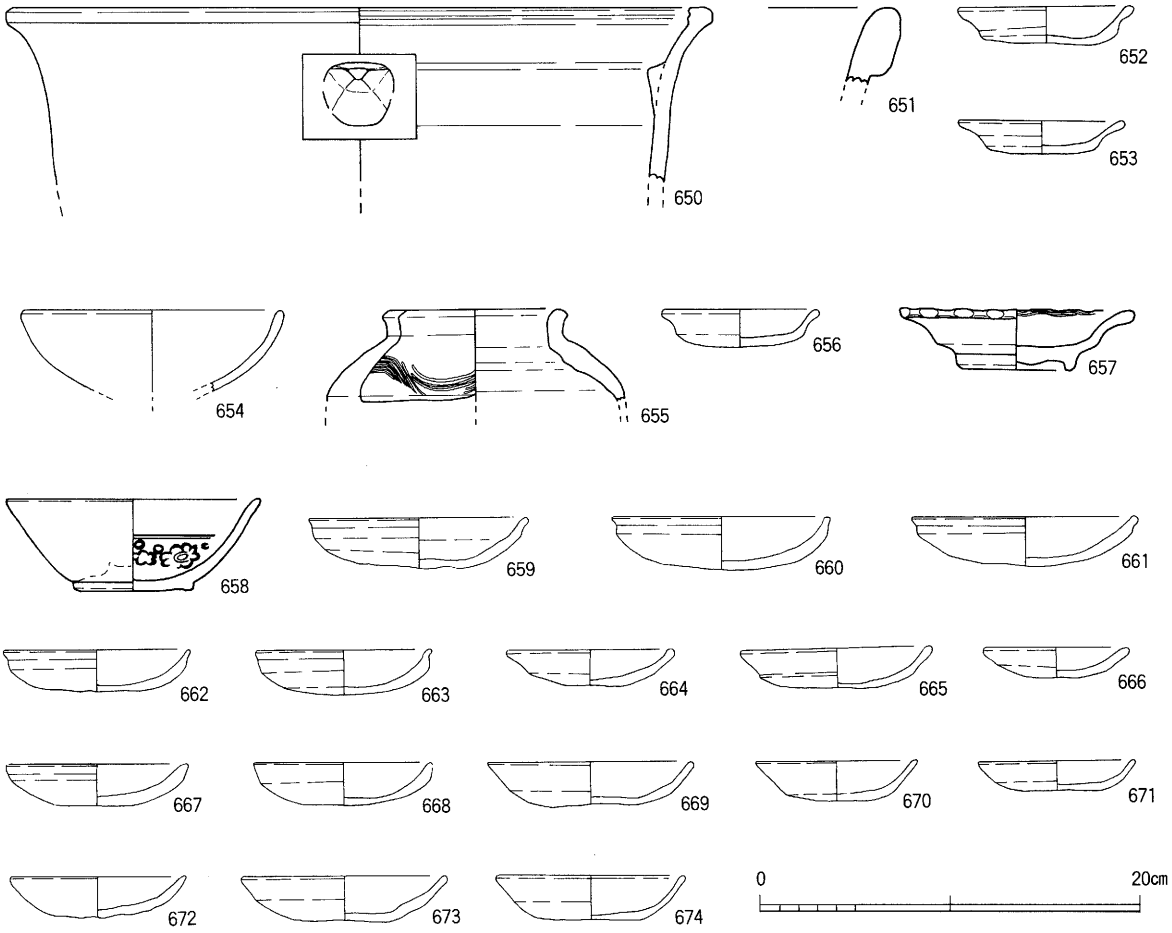
**SK-39出土の遺物**（図76、図版42）

（657）は中国製の青磁皿で全体にくすんだ黄緑色を呈している。（658）はくすんだ黄白色を呈した碗で、内面には浮彫りによる花文が施されている。高台は削り出しによるもので、この部分のみ露胎となっている。朝鮮製の可能性が高いものと考えている。土師質皿（659～674）は15世紀後半代のものである。

**埋甕遺構-03出土の遺物**（図77、図版43）

（675）は中国製の白磁の皿である。やや灰色味を帯びており小孔が目立つ。（676）は中国製の染付皿である。体部から口縁部にかけて丸く内弯気味に立ち上がるタイプのもので、体部外面には唐草文、内面には八宝文が施されている。16世紀後半の製品である。（677）は瀬戸の鉄釉の小壺である。球形に近い胴部に短かく立ち上がる頸部を有し、肩部には一対の横耳が貼付けられている。小破片のため不明だが、おそらく一方の耳の下に注口を有する水注となるものと考えており、16世紀中頃から後半にかけての製品であろう。（678～680）はいずれも備前の壺、甕類である。このうち（680）は徳利で全体に灰色を呈しており、頸部の付け根部分に窯印と思われる「＋」がヘラ先により施されている。16世紀後半、大窯初期の製品であろう。

（651・652）はともに三ッ巴文の軒丸瓦である。このうち（651）は朱文小さく、尾部も短いなどやや




ＳＫ—29（650～653），ＳＫ—35（654），ＳＫ—37（656），ＳＫ—39（657～674）

**図76　Ⅲ区SK-29・35・36・37・39出土遺物**

雑な造りとなっている。いずれにせよともに16世紀中頃の製品と考えて大過ないものと思われる。(683)は茶臼である。極めの細かな砂岩を用いており、全体に丁寧につくられている。

**埋甕遺構-04出土の遺物**（図77・78、図版43）

(684) は備前の大甕である。器高は約90cmほどで、胴部の最大径は約80cmを測る。やや丸みを帯びた胴部は口縁部で「く」の字状に外反し、口縁部はかすかに内傾している。口縁の外面には4条の凹線が巡っている。口縁はやや波打っており、肩部に窯印と思わる記号状の文様がヘラ先により彫られている。肩部から体部下半にかけて表面の剥離が著しい。この剥離は火災により火を直接受けたことが原因と考えられ、逆に言えば剥離していない体部下半部分まで土に埋められていたことが判明する好例と言えるものである。

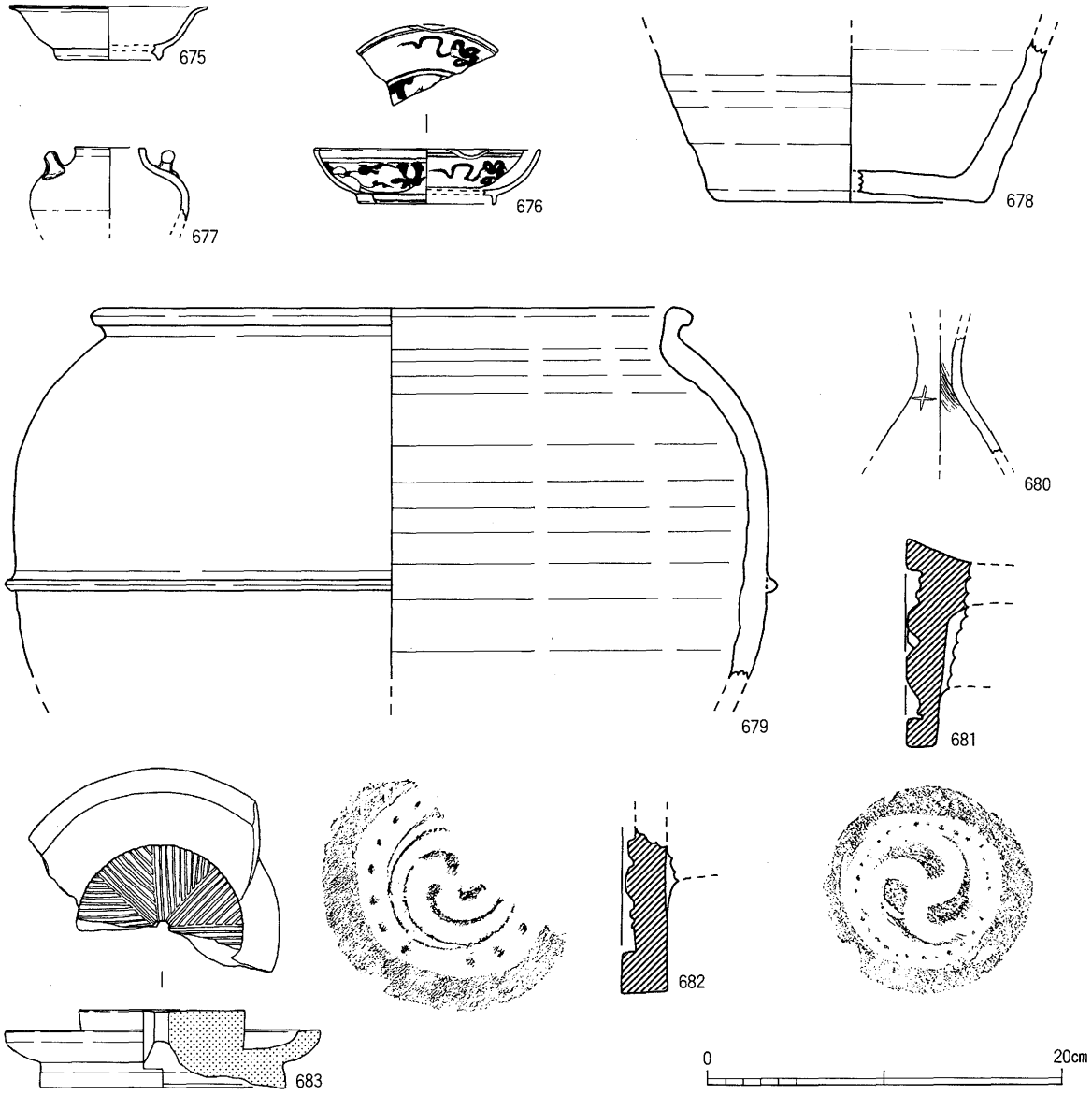



**図77　Ⅲ区埋甕遺構-03出土遺物**

復元できたものはこの大甕一個体であったが、ほかにも大甕の破片はこの遺構から数多く出土しており（685～689）がこれに該当するものである。

このうち（685・686・698）は口縁部の形態が前述の（684）と同様のものであり、備前Ⅴ期、16世紀代の製品といっていいであろう。これらに比べて（687）は口縁部の立ち上がり方もやや真っ直ぐに立ち上がっていることや口縁部外面の凹線もやや弱く、偏平な宝珠状の形態を残しているところから一時期古いものと思われる。なお、（689）も甕であるが、これは常滑の製品である。口縁部の形態から推して15世紀代のものと思われる。

根来寺、その中でもとくに本遺構のような埋甕遺構では、少なからず常滑の甕がこれまでにも確認されている。その場合、古い時期の常滑はなくほとんどがこの15世紀代の製品という状況のようである。

なお、この遺構から出土している大甕の破片の一部と思われるものに黒い煤状の付着物が認められた。

この破片の部位は胴部上位と考えられるもので、煤状の付着は平行して認められた。おそらく火災の際、内容物が燃焼した痕跡を示すものと思われるが、その内容物については不明である。

（690・691）はともに備前の壺である。頸部が長く、口縁部が外反するタイプのもので、全体に茶褐色を呈している。先の大甕などと同様に16世紀中頃から後半にかけてのものと考えている。

（692・693）は土師質の皿である。胎土に赤褐色のクサリ礫を含むもので、やや橙色味を帯びた肌色を呈している。口縁部が強い横ナデにより成形されている。この土師質皿は16世紀を通して根来寺で普遍的に見られるタイプのものである。（693・694）は均整唐草文を配した軒丸瓦である。（699）は石臼で、やや目の粗い砂岩を用いている。

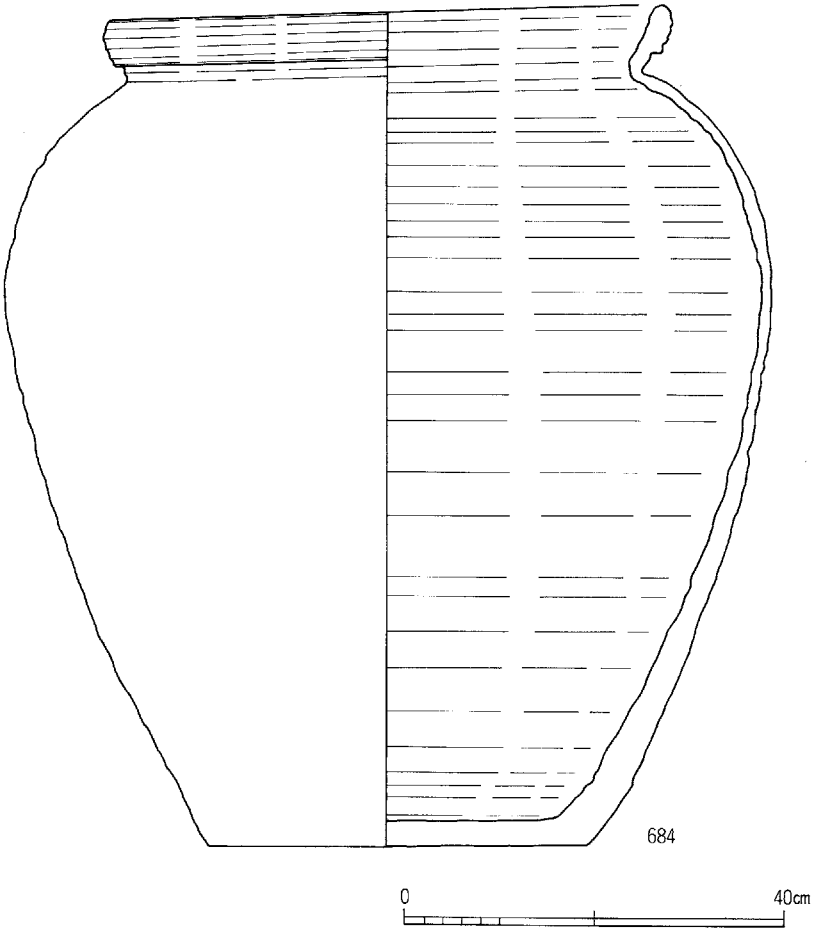



**図78　Ⅲ区埋甕遺構-04出土遺物(1)**

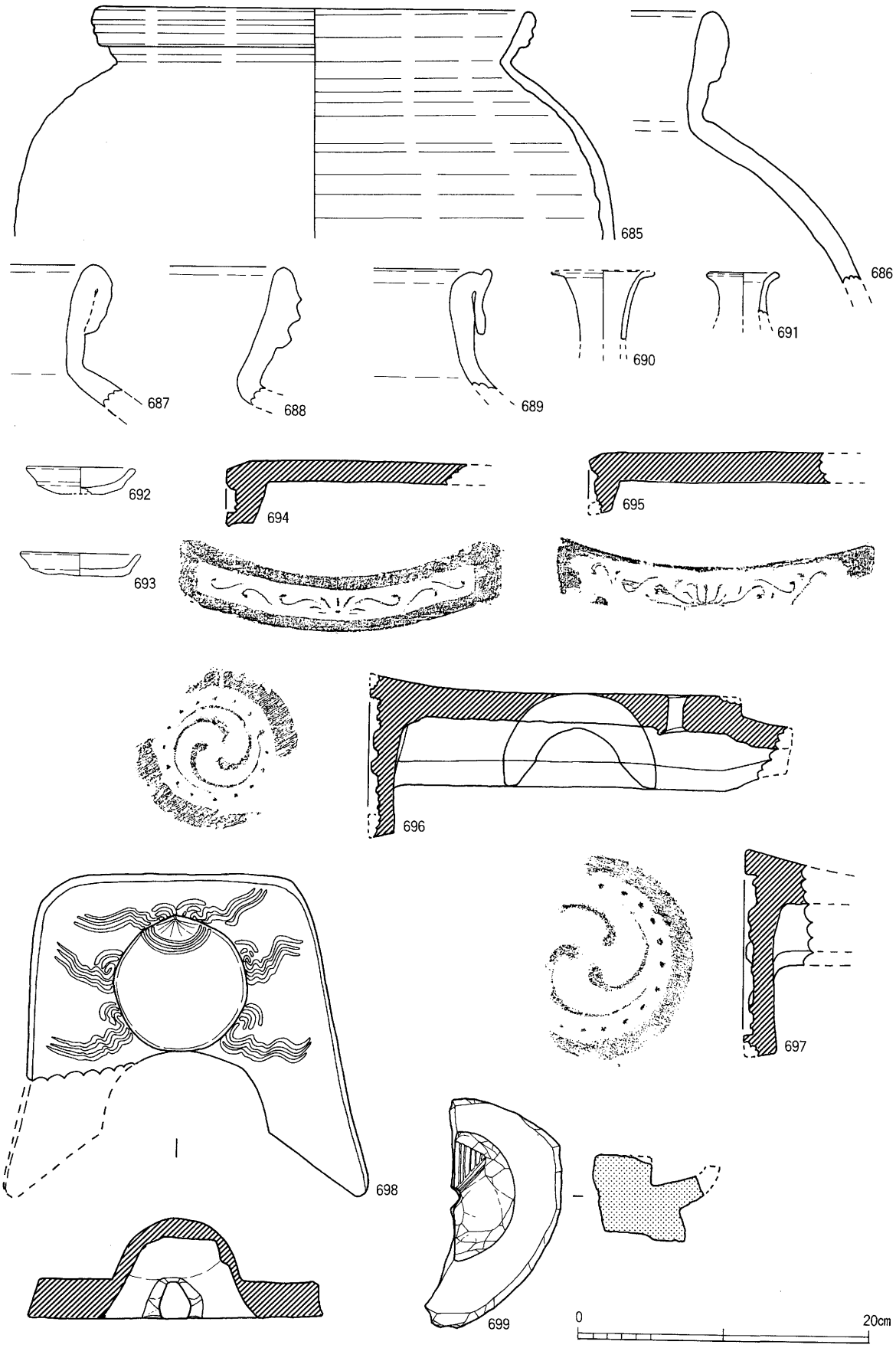



図79　Ⅲ区埋甕遺構-04出土遺物(2)

## 第５節　Ⅳ区の調査

### １．遺　　構

本Ⅳ区は、昭和62年度に調査を実施したものであり根来地区普通農道建設に伴う調査としては、最終年度の調査に当たるものである。

調査区は前年度に実施したⅢ区より北側への延伸部、延長約200ｍ（幅約５ｍ）である。調査に当たっては、便宜上調査区を３分割しており、南から順次１区・２区・３区と仮称している。

このうち１区および３区については、遺構密度は極めて希薄な状況であった。とりわけ３区は昭和のはじめに現有の農道を作るに当たって東側の山裾部分をカットした箇所に当たっており、遺構および遺物はまったく検出されなかった。検出した主な遺構としては井戸・溝（暗渠排水路）・石組みの溜枡状遺構などがある。

以下、各区ごとに主要な遺構の概略を記すこととする。

**ａ．Ⅳ－１区**

本区の表土は礫混じりのよく引き締まった土で、厚さ20cmほどにわたって堆積している。もちろんこの表土は現在の農道を作るに当たって敷かれたものであるが、近世の遺物にまじって中世の遺物も多く含まれている。おそらく周囲からの客土したものであろう。その下層には淡黄茶色の土がやはり20cmほどの厚さで堆積しており、これを第１層としている。この土の中には、中世の遺物も多く含まれているが、これらに混じって近世の遺物も若干はいっており、もっとも新しいものでは19世紀に入ってから出現する伊万里の広東碗が確認されている。このことからこの第１層は近世末の整地土と考えられよう。この第１層を除去した面が遺構面である。なお、１区の南端は現有の菩提川に架かる橋の建設時にかなりの攪乱を受けたようで、遺構面が大きく削られていた。

**土　　坑**（SK-01）

調査区の北半部で検出された石組みの遺構である。調査区外に延びていっているため全容については不明と言わざるを得ないが、長径６～７ｍ、短径４ｍほどの楕円形になるものと考えられよう。

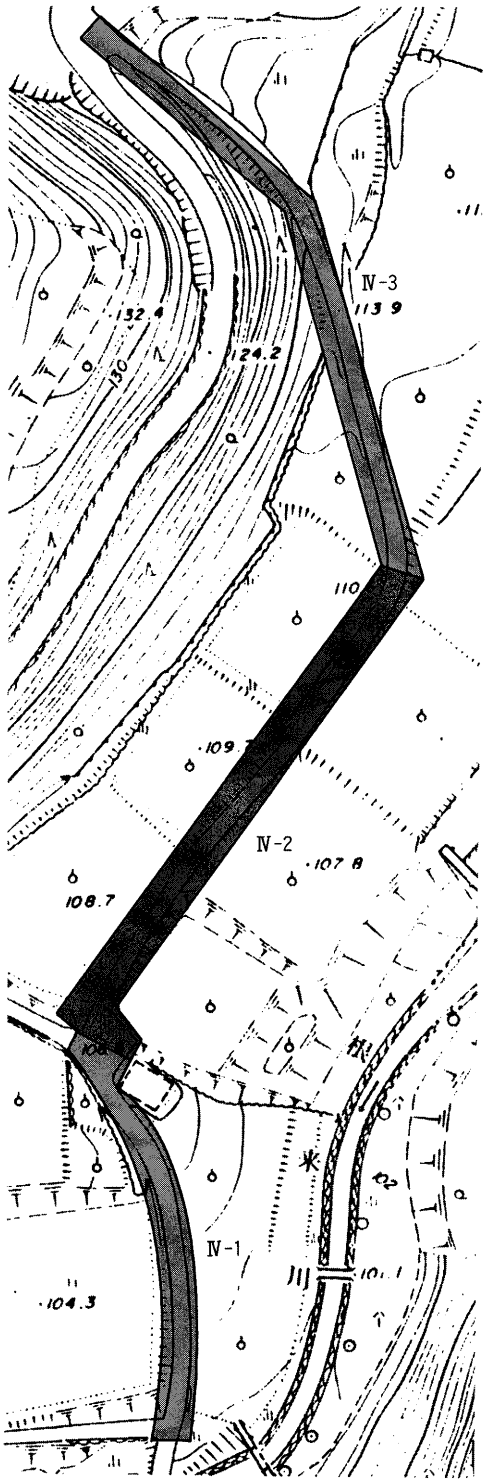



図80　Ⅳ区調査区位置図

深さは60cmほどで、底部は平らとなっている。内側には20～30cmほどの砂岩の割石が3段ないし4段積まれている。一部積み石を欠いている箇所もあるが、本来的にはすべてに石積みが施工されていたものと思われる。上下2層に分けて遺物を取り上げているが、上層の茶褐色のやや汚れた土には近世の遺物片が認められるが、下層とした焼土混じりの土からは瀬戸の灰釉皿や天目茶碗、中国製の白磁皿・染付碗皿、備前の甕片など天正の兵火までの遺物である。この遺構の用途としては、溜枡の可能性が高いものと考えている。

**溝**（SD-35・36）

調査区を東西に横切る溝（SD-35）とこれに直交して取り付いている溝（SD-36）である。ともに幅は20cmほどで、20～30cm前後の割石1段によって構築されている。深さは20cm前後であり、石の並べ具合やその規模など当遺跡においては普遍的な造りの溝と言えるものである。この溝は開渠であり、屋敷地内の雨水・生活排水を処理する溝であったものと考えている。なお、この溝からの出土遺物はなく、時期については不明である。

**井　戸**（SE-09）

調査区の北端で検出したもので、石組みの井戸である。直径1.3m、深さは2.3mを測る。基底部に50cmほどの比較的大きな石を据えつけ、そこからかすかに内径する形で石を持ち上げている。この内面を構成している石の大きさは20～40cmほどで、全体に横置きする形で積み上げており、空間が生じそうな場所にはやや小振りの石を用いて埋め込んでいる。最上端の石は50cm前後の比較的偏平なものを用いているが、通例のものとは異なりその外側にも石が置かれている。

井戸の埋土は大きく3層に分けることができ、上層は黄色土、中層は青灰色砂質土、下層は焼土と炭の混じった暗灰色の汚れた土であった。上層には近世の遺物が多く含まれていた。中・下層には土師質皿を中心に備前の甕・壺など中世の遺物が多く含まれていたが、ごく少量ながらこの両層においても近世の遺物が出土していることを確認している。

なお、この井戸の付近は先に述べた第

写真15　基石出土状況

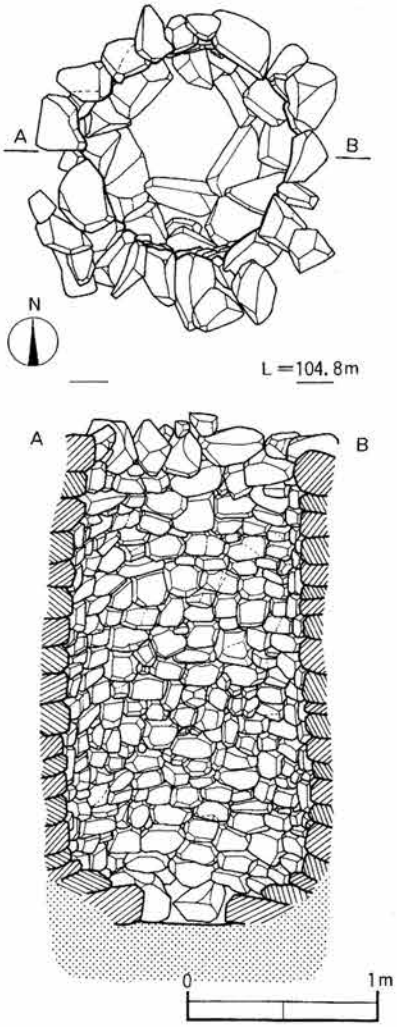
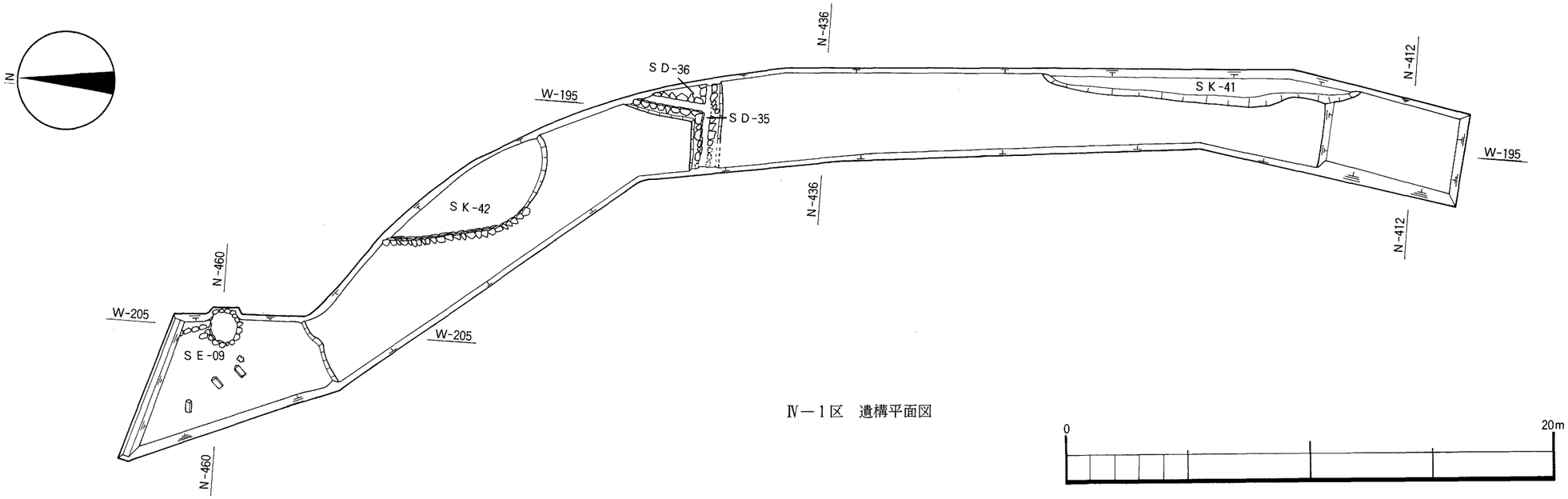
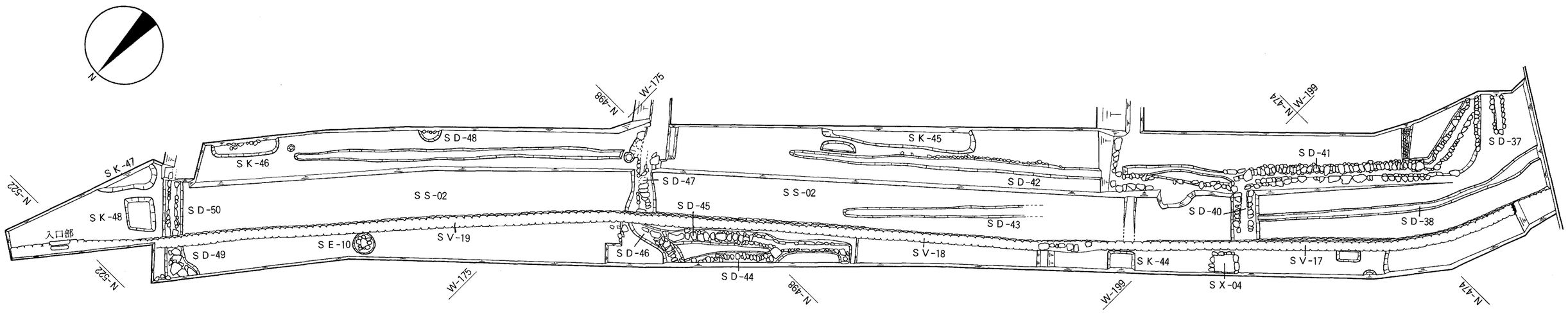



図81　井戸SE-09実測図




Ⅳ－1区　遺構平面図




Ⅳ－2区　遺構平面図

図82　Ⅳ－1・2区遺構平面図

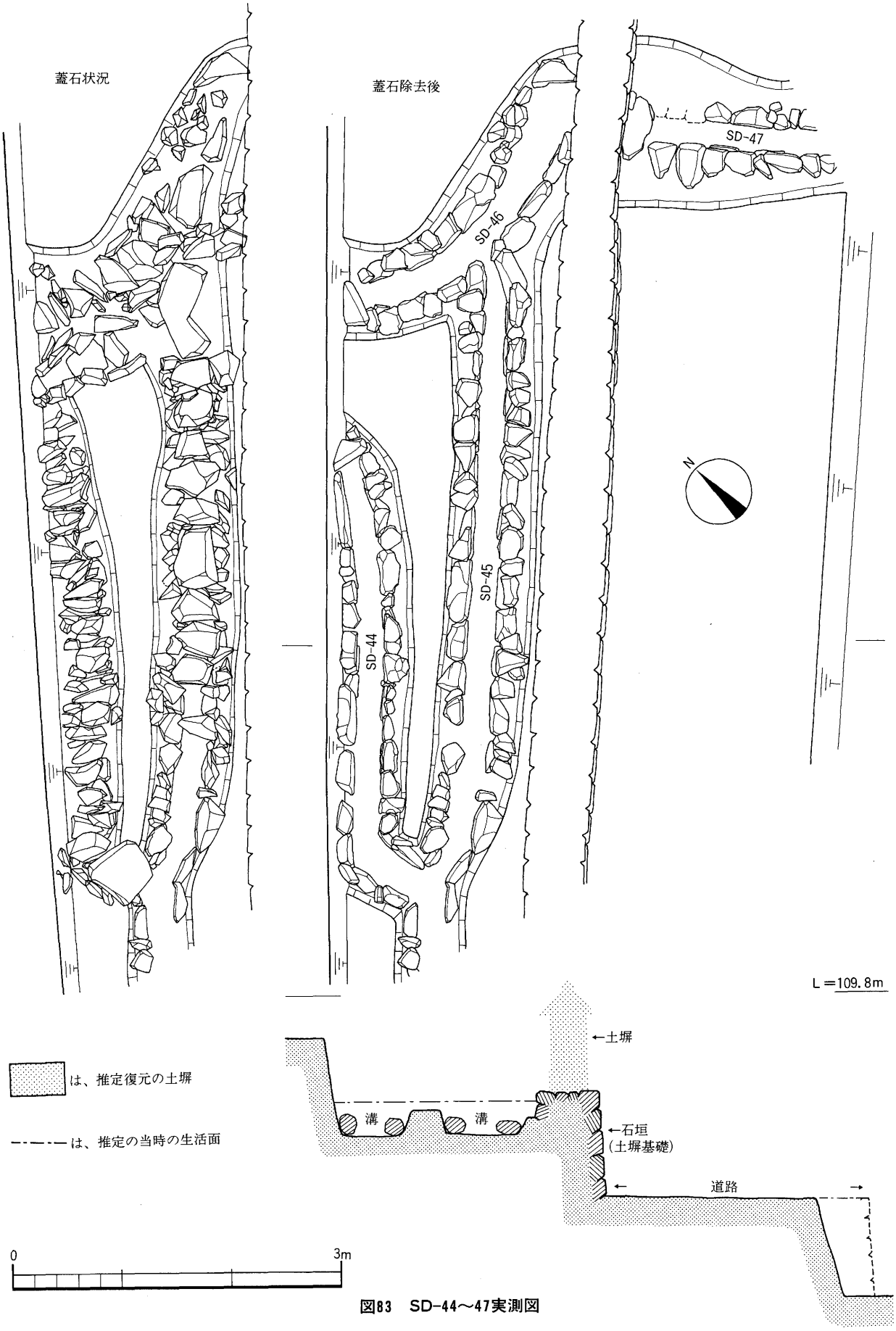



**図83　SD-44～47実測図**

1層としている淡黄茶色土の下に暗灰色の汚れた土が厚く堆積しており、井戸はこの土を除去した面で検出したものである。

また、この井戸の近くで墓石を検出している(写真15参照)。元位置を保ったものではなく、遺棄された状態での出土と考えられるもので、それぞれ江戸時代後期の文化年間の年号が刻まれている。

**b．Ⅳ－2区**

Ⅳ－2区としている地区は現有の農道が大きく東側折れている場所でり、北側には山が迫っている。この山と農道の間には3区画の水田区画（現在は柑橘畑となっている）が東側から雛壇上に残っている。この区画と現有の農道とは1.5m前後の比高差があり石垣が現存している。さらに農道を挟んだ南側にも3区画に分かれる柑橘畑があり、ここでは農道より一段低くなっており、石垣は存在していない。

農道を挟むこの6区画は往時の坊院のそれぞれの敷地を示すもの――かつての坊院の区画が踏襲され現在水田（柑橘畑）区画となっているものと考えられる。

以上のような状況を模式図ふうに表したのが下図（図84）であり、したがって調査区の範囲は往時の道とその両側に建ち並んでいた各々の坊院の敷地の際ということになろう。

この調査区においては、道路・溝・溜枡・井戸などの遺構が検出されている。

**道　　路**（SS-02）

現有の農道下で検出したもので、ほぼ現在の農道と重複するものである。ただし、往時の道の方が道幅は広く、残りの良い調査区南側の石垣（SV-17）と道の側溝である溝（SD-40）との間隔から往時の道幅は約2.1mほどであったことが判明した。

路面は場所によって異なるが最低でも2面が確認されている。いずれの面も細かな礫を含みよく引き締まっている。出土遺物が少なく時期を断定できるものではないが、いずれの面からも近世の遺物が出土しており、確認される限り近世以降の道といわざるを得ない。ただ、地形から考えて中世の道（天正の兵火以前）もこの場所を通っていたと考えるのが自然であり、江戸時代に入って何らかの改変をうけたものと思われる。

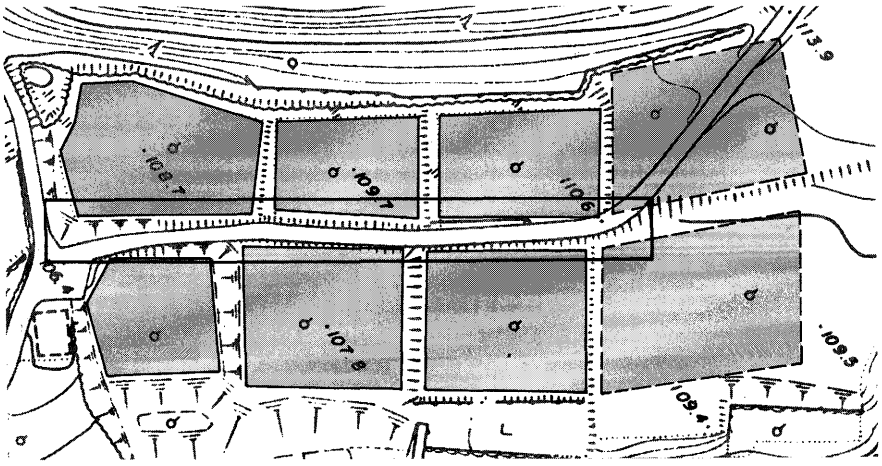



**図84　Ⅳ－2区と坊院敷地の復元図**

この道の中央部で２条の溝を検出している。(SD-37・38) ２条とも幅30cm前後で深さも５cmほどと極めて浅いものである。両側に石を用いていた痕跡もなく、場所的にも不自然であり、人為的なものではなく雨水が流れてできた窪みの可能性もあろう。

**溝** (SD-40)

前述の道路(SS-02)の側溝である。幅約40cm、深さは残りの良いところで50～60cmを測る。石組みの溝であり、幅30cm、厚さ15cm前後の石を横置きにして用いている。道の両脇に建つ坊院の排水を流す幹線の流路となるもので、これらの排水はこの側溝を通して近くの川へと導かれるものであろう。

**溝** (SD-41・47・50)

これら３条の溝は、いずれも前述の道路を横切っている溝である。いずれも幅は20～30cmほどで、深さは20cm前後を測るものである。道を横断していることからも想像されるように開渠ではなく、当然蓋石を伴っていたものであり、その蓋石の上にさらに土を被せていた――つまり路面の下に設けられていた溝であると言える。

機能的には、北側に立地する坊院の生活用水や雨水を道の反対側にある側溝に流し込むものである。このことを端的に現しているのが坊院の敷地内で検出したSD-44・45・46としている３条の溝との関係である。図83として図示したようにこれら３条の敷地内の溝は、いずれも幅・深さとも20cmほどで、１段ないし２段の石組みのものであり、蓋石を伴うものである。生活空間を確保する意味でもこれらの溝は埋められていて、日常の生活の中では見えないようになっていたと考えられる。敷地内の水は最終SD-46に集められ、土塀の基礎ともなっている石垣際で下に落とされる。この落とされる部分の石垣には下に掲載した写真のように開口部が設けられていて、ここから道を横断する暗渠排水であるSD-47を通り、側溝へと導いている。

敷地内の溝から出土遺物はまったくなく、時期を特定できないが、一連のものである道を横断する溝(SD-47)から天正の兵火時にかかる時期の土師質の皿や備前の甕の破片が出土しており、近

写真16　石垣下の排水口

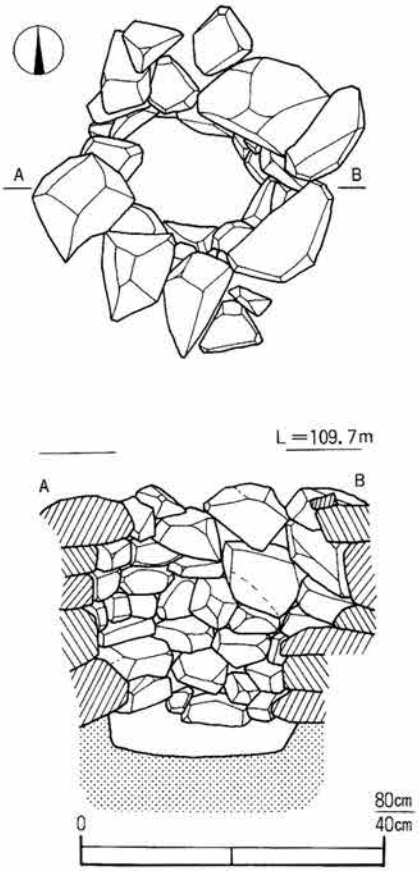



図85　井戸SE-10実測図

世の遺物は見られない。このことから敷地内の溝についても中世、天正の兵火以前のものと考えることが妥当と言えよう。

なお、これら道を横断する溝の位置は、遺構全体図からも看取できるように北側の坊院の敷地各々につき一つずつ配されている。

この例をもとに山内のすべてを類推することは無謀ではあるが、おそらく同じような条件にある坊院においては、このように各々の排水施設を整備していたことが充分に推察できよう。

このことは、中世段階において根来寺が計画的に整備されていたことを傍証するものであり、また、当時の技術力の高さを物語るものとも言えるであろう。

**SX-04**

調査区の北端に引っ掛かる形で検出された石組みの遺構である。おそらく一辺２ｍほどの方形になるものと思われ、深さは約60cmほどで四側面とも３段ないし４段の石が積まれている。底部には石は認められず土そのままとなっているが、わずかに中心部が窪んでいる。本来はもう少し高さがあったものと思われる。本遺構の機能としては、溜め枡の可能性を考えているが、位置的にはあまりにも土塀に近い場所にあり、他の用途の可能性もあろう。遺物は少なく、天正の兵火直前の頃と思われる土師質皿が完形で出土しているほか、15代の常滑の甕の破片が出土している。近世の遺物はまったく認められず、このことからも兵火直前まで機能していた遺構と考えてよいであろう。

**井　戸**（SE-10）

直径約40cm、深さ約70cmと極めて小規模な石組みの井戸である。深さが浅いためであろうか、一般的に根来寺で見られるような基底部に比較的大きな石を据えるようなことは行っておらず、10cmほど土を掘り窪めた外側から直接20cm前後の石を積み上げている。全体に造りも通例のものより雑な感じがある。

出土遺物には16世紀代の土師質の皿と美濃の灰釉の皿がある。いずれも天正期のものと考えられるもので、この井戸についても兵火直前まで機能していたものと言えよう。なお、場所的には先に述べた溜め枡と考えられる遺構(SX-04)と同じように土塀の際に造られている。このように浅いもので井戸としての機能を果たしていたか疑問の残るところうであろう。形状的には井戸ではあるが、溜め枡として使われていた可能性も考えられよう。

**石　垣**（SV-17・18・19）

道の北側に沿って設けられた石垣である。再三述べてきたように道の北側に占地する坊院の敷地を画するもので、道がやや緩い勾配となっているのにあわせて、ひとつの敷地で言えば、西側が高く、東側が低くなっている。石垣の勾配は高いところでもほとんどなく、垂直気味に立ち上げられている。

用いられている石は30cm前後の和泉砂岩で、割石積みされている。ごく一部、点数にすれば５点ほどであるが、五輪塔の台座部を転用して用いていることを確認している。このことは、根来寺においてはとりたてて特異なことではなく、石組みの溝などの説明で述べたように石垣に限らずこのような石造物を転用している例が往々にして見られるものである。

この石垣の頂部の幅は40cmほどで、おそらくこの上には、ほぼ幅いっぱいの土塀が造られていたものと想像される。現在でも残っている山内の坊院の例からすれば、この土塀はさほど高いものではなく、１ｍ前後のものであったと推定されよう。

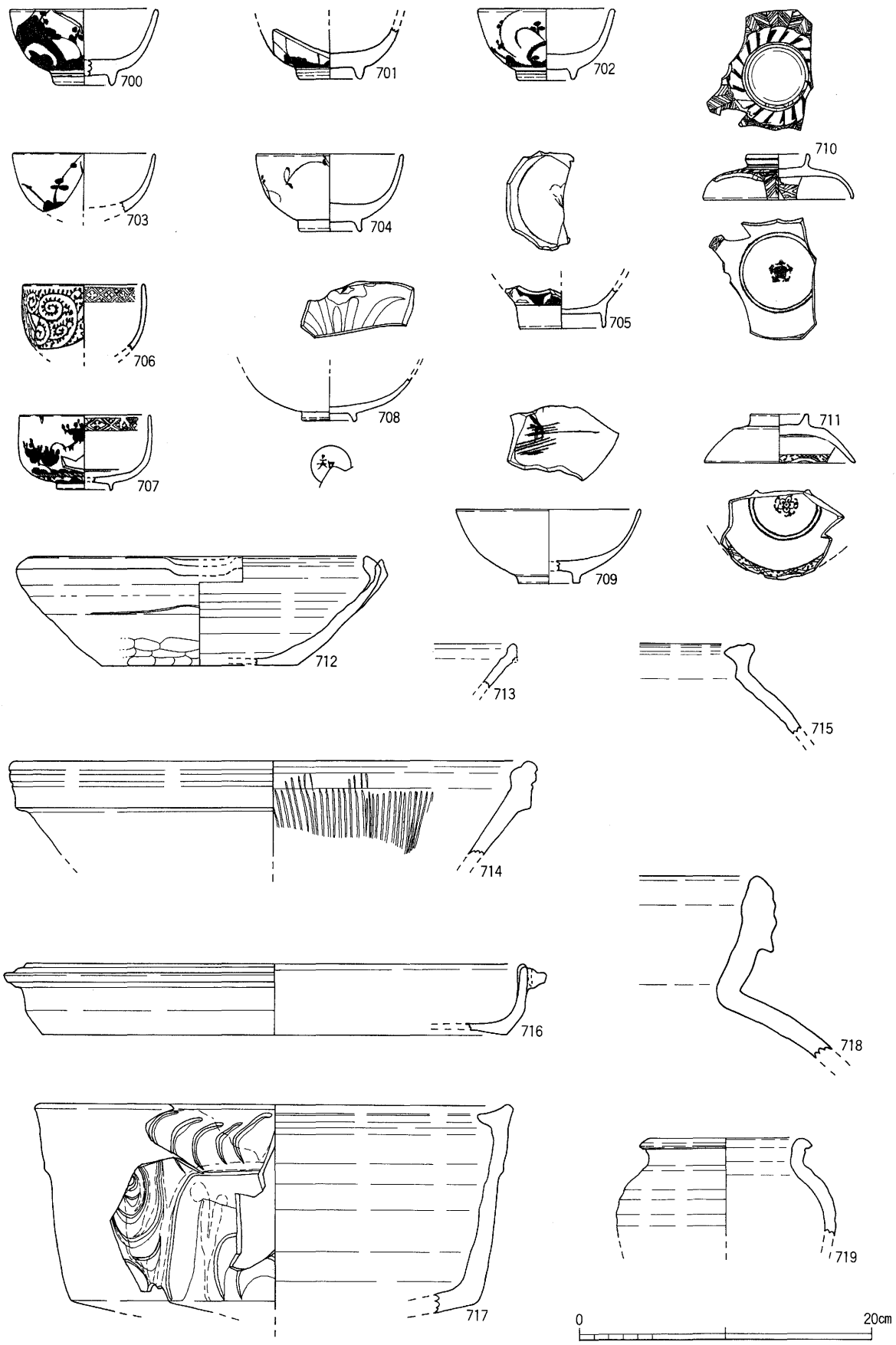



図86　Ⅳ区第１層出土遺物

## 2．遺　物

Ⅳ区は、先に述べたように調査区がかつての道と重複している部分も多く、その関係もあって出土した遺物の量はさほど多くはない。主な遺物としては、天正の兵火にかかる時期の国産陶磁器・中国製の青磁、近世の伊万里の染付け製品などがある。

### a．第１層出土の遺物（図86）

第１層からは中世のものと近世のものが混在して出土している。このうち（700）から（707）は伊万里の染付け碗である。時期的には18世紀中頃に盛行する「くらわんか」と俗称される碗（700～704）と新しく19世紀後半になって現われる高台が高く、体部が斜め上方に真っ直ぐ立ち上がっていく碗、いわゆる「広東碗」と称されるタイプの碗（705）がある。

（708･709）は京焼き系の碗と思われるもので、体部外面はやや薄い黄色を呈し、胎土もパサついて感じでやわらかい。

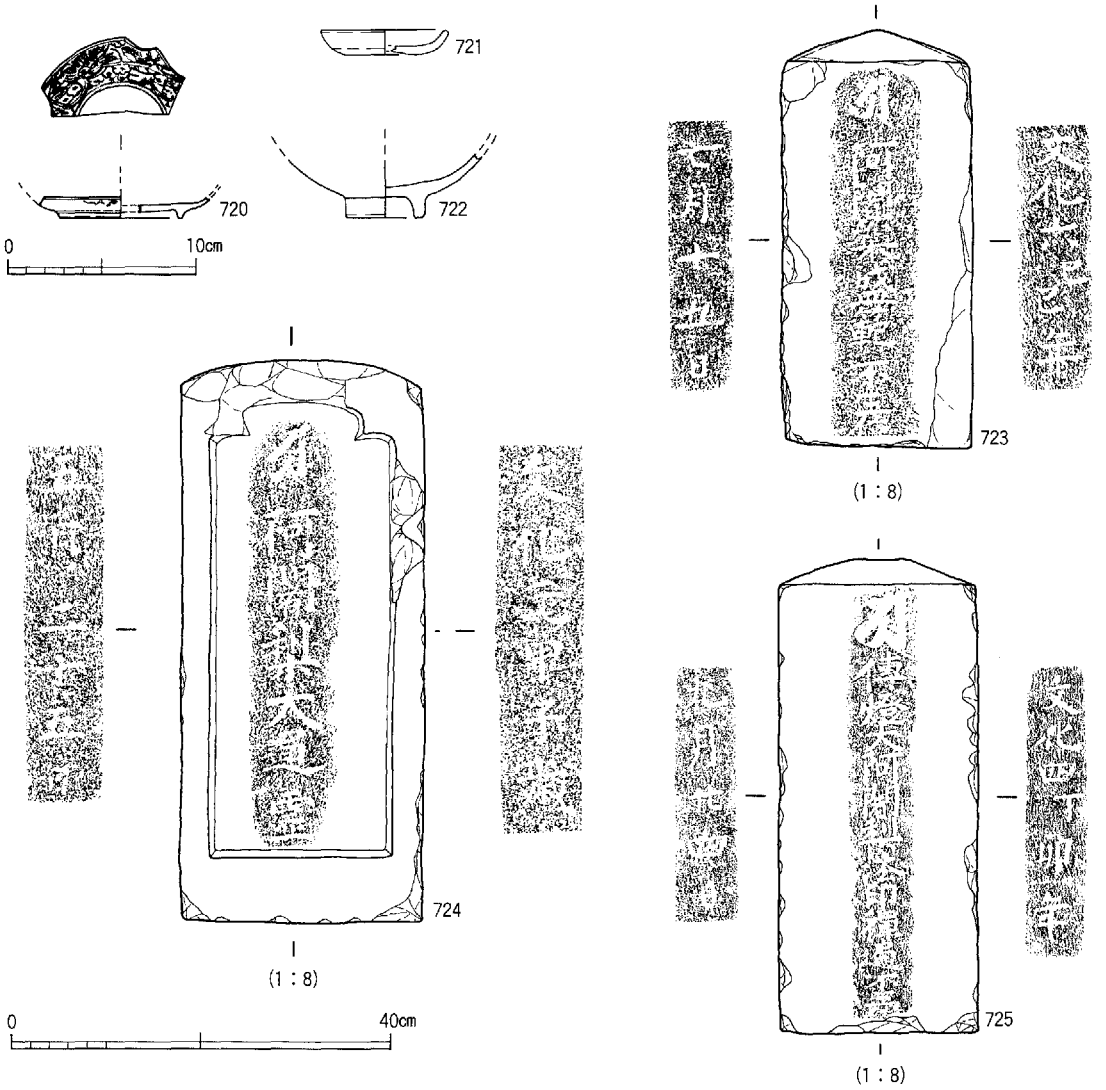



図87　Ⅳ－１区暗灰色粘質土出土遺物

(712) は茶褐色を呈し、体部下半部に横方向の粗い削りの痕跡が残っている。あまり類例のみないものであるが、その色調などから備前の製品である可能性が高いものと考えている。(713) は東播系の須恵質のこね鉢である。口縁端部のみややくすんだ黒色を呈しているが、その他の部分は灰色となっている。13世紀代の製品であり、このⅣ区で出土している遺物の中では最も古い時期に属するものである。

(715) は近世の甕である。口縁端部は水平状に拡がっており、2条の凹線が巡らされている。おそらく越前の製品と考えられるものである。(717) は瀬戸の河骨の鉢である。体部外面にはレリーフによる文様がつけられており、その上から緑色と暗茶色の釉が流しかけされている。高台部を欠いているが、通例、露胎で幅2cmほどの低い高台が巡るらされる。近世の根来寺では出土例は多く、かなりの数が入ってきていたものと思われる。(718・719) はともに備前の製品である。このうち (718) は大甕の口縁部で、その形態から備前Ⅴ期に属するものと考えられよう。(719) は広口の壺で、全体に灰色味を帯びた色調を呈しており波状文などの文様は施されていない。

**b．暗灰色粘質土出土の遺物**（図87）

この暗灰色粘質土は1区の北端にのみ存在していた土であり、新しい時期に埋め立てられたと考えられる土である。(720) は染付けの皿で、文様および呉須の発色からも江戸時代後期から末段階のものと考えられよう。(721) は口径6cmほどの土師質の皿で、近世のものである。天正の兵火時のものに較べると小振りとなっており、焼成は堅くなっている。土師質皿は近世になるとその数を急激に減じるが、このようなタイプのものは少量存在しているようである。

(723～725) は花崗岩製の墓石である。拓本でも示したように、それぞれ文化年間 (1804～1817年) の年号が刻まれており、墓碑銘からはその頃山内で没した僧の墓石と考えられよう。

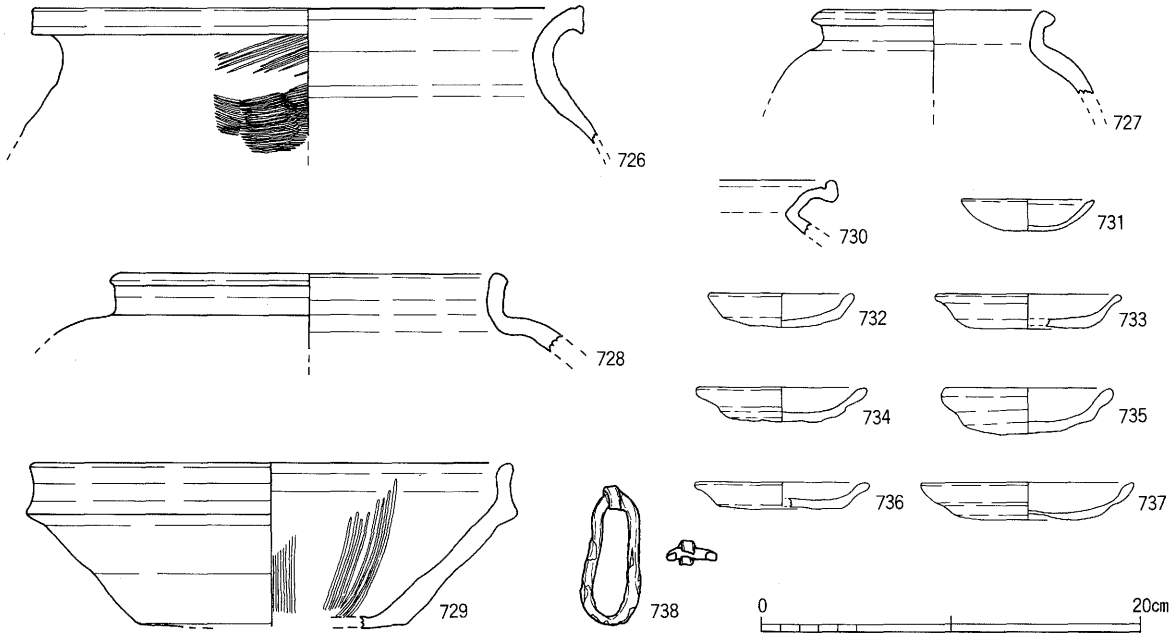


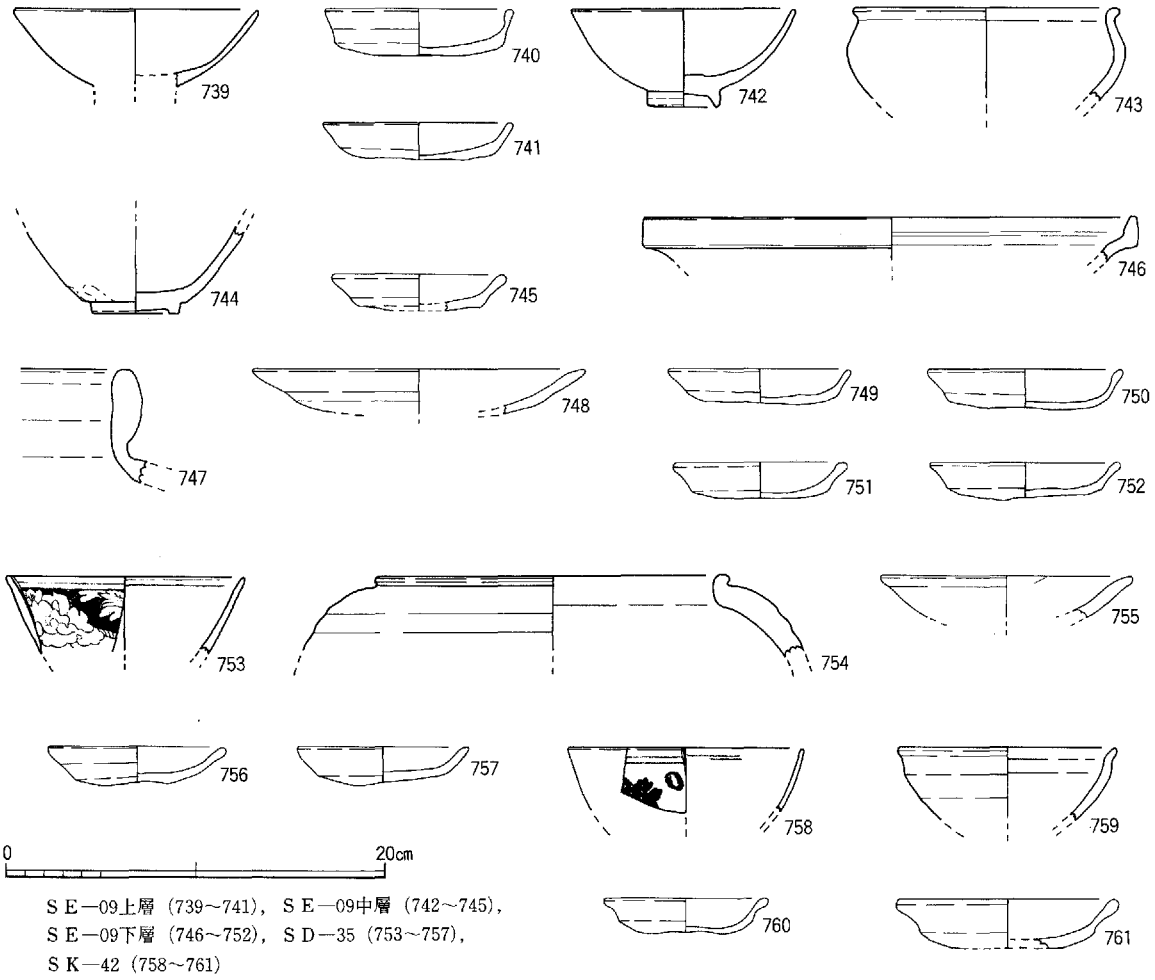

**図88　Ⅳ区第2層出土遺物**

### c．第２層出土の遺物（図88）

この第２層からの出土遺物は少ないが、いずれも天正の兵火以前のものが出土している。(726) は須恵質の甕である。頸部から体部上半には細かな刷毛状のタタキが見られる。口縁部の形態は常滑の甕に似ているが、焼成や調整を見る限り常滑の可能性は少ないものと考えている。本遺跡ではあまり類例を見ないものと言えよう。(727～729) はいずれも備前の製品である。このうち (727･728) は広口の壺であるが、ともに灰色味を呈し、口縁端部は丸く納めている。その形態から推して天正の兵火時よりは少し古い時期のものと考えられよう。(729) の擂鉢は茶褐色を呈し、内面には８本単位のすり目が施されている。口縁部は、上下にかなり拡張されてはいるが、凹線はまだ施されておらず、備前Ⅳ期、15世紀代で収まる製品と考えている。

(730) は、土師質の鍋になるものと思われる。胎土には砂粒を多く含み、やや濃い目の肌色を呈している。同じような口縁で体部上半に鍔が付き、羽釜となるものが知られているが、これについては概ね12～13世紀代の瓦器碗を伴う時期のものであり、本例については共伴遺物から考えても鍋と考えるのが妥当と思われる。

(731～737) は土師質の皿である。このうち (731) は、体部は口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる




ＳＥ—09上層 (739～741)，ＳＥ—09中層 (742～745)，
ＳＥ—09下層 (746～752)，ＳＤ—35 (753～757)，
ＳＫ—42 (758～761)

**図89　Ⅳ－１区遺溝出土遺物**

もので、15世紀後半ぐらいのものと考えている。その他の皿は、口縁部が強いヨコナデのために肥厚しているタイプ16世紀後半段階の根来寺における普遍的な土師質皿と言えよう。

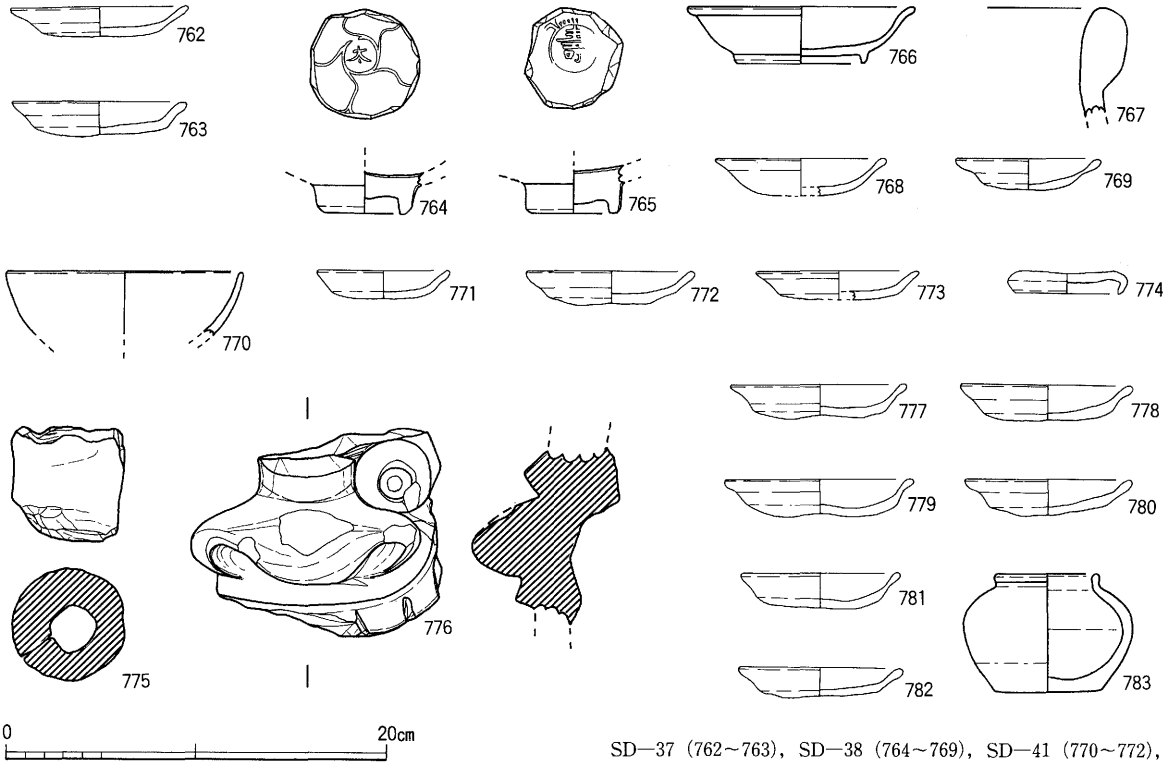
(738) は直径5㎜ほどの鉄製で、環状に加工してある。おそらく釣り金具に類するものと想像しているが、その用途については不明である。

### d．1区遺構出土の遺物

(739～752) は、いずれも井戸 (SE-09) からの出土遺物である。このうち上層および中層では、土師質皿 (740・741) や (744) の瀬戸の天目茶碗など16世紀代のものも出土しているが、肥前系の碗鉢 (742・743) など近世のものが確実に入ってきている。

それに較べて下層では、近世の遺物はまったく含まれておらず、13世紀代の東播系のこね鉢 (746) や15世紀代と思われる備前の甕 (747) をはじめ天正の兵火までの土師質皿が出土している。土師質皿のうち (748) は、体部が斜め上方にひらくタイプのもので、畿内系とでも呼ぶべきものだが、その他の皿は再三述べてきたように16世紀代に根来寺で普遍的に見られるタイプのものである。

溝 (SD-35) からもすべて中世のものが出土しており、このうち (753) は中国製の染付けの碗である。(754) は備前の壺で肩部上半のみの出土であるが、全体にやや照りのある茶褐色を呈している。外面には轆轤引きの痕跡を残す凹凸が顕著である。土師質皿 (755～757) はいくつかのタイプがあるが、いずれも15世紀後半から天正の兵火時までに収まる時期のものといえよう。土拡(SK-42)も中世の遺物




SD—37 (762～763), SD—38 (764～769), SD—41 (770～772), SD—45 (775), SD—46 (773・774), SD—47 (776～780), SD—49 (781・782), SK—46 (783)

**図90　Ⅳ-2区遺溝出土遺物**

のみが出土している。(758) は中国製の染付けの碗で、比較的薄い体部は、内彎気味に立ち上がっている口縁部下に内外面とも細い二重の圏線が巡らされている。たいぶ外面には花の文様が描かれているが、詳細については不明である。(759) は、瀬戸の天目茶碗である。内外面ともややくすんだ茶色を呈している。胎土は黄白色のややぱさついた土で焼成はあまい。土師質皿 (760・761) は、ともに典型的な16世紀代の根来寺に通有のもので、口縁部が強いヨコナデのため肥厚しており、全体にやや赤っぽい肌色を呈している。

**e. 2区遺構出土の遺物** (図90　図版46)

いずれも溝および土拡からの出土遺物であり、時期的には近世のものはなく、天正の兵火までの一群である。このうち (762・763) はSD-37からの出土しているもので、16世紀後半段階の土師質の皿である。

SD-38からは中国製の青磁碗・白磁皿のほか備前の甕、土師質皿が出土している。このうち青磁の碗 (764・765) は、ともに意識的に打ち欠いたようで高台部分のみが出土している。内面低部には型押しにより吉祥文字である漢字が押されている。体部を欠いているが、おそらく線描の連弁か口縁部下に雷文帯の巡るタイプで、15世紀代の製品と考えられよう。

白磁の皿 (766) は、口縁端部が外反するタイプのもので、16世紀後半段階の中国製品である。(767) は備前の甕の口縁部であるが、やや扁平な玉縁状をなしており、15世紀代の製品と言えよう。土師質皿 (768・769) はともに口縁部が強いヨコナデにより肥厚するタイプで、16世紀代のものである。

SD-41からは青磁の無紋の碗 (770) のほか16世紀代の土師質皿 (771・772) が出土している。(775) はSD-45から出土しているものであるが、フイゴの羽口である。直径は6.0cmを測る。こうした鍛冶道具については、山外の町屋地域での出土例は多く知られているが山内では珍しいものと言える。

SD-47からは鬼瓦と土師質皿が出土しており、このうち鬼瓦 (776) は中心部分のみの出土であるため詳細は不明だが、彫りも深く写実的な傾向が窺えるものであり16世紀以前の製品と考えられよう。土師質皿 (777～780) はいずれも16世紀後半段階の根来寺では普遍的なタイプのものである。SD-49から出土している土師質皿 (781・782) も前述のものと同様である。(783) はSD-46から出土しているもので、器高6cmほどの小振りの広口壺である。全体にややくすんだ草緑色をしており、瀬戸の製品かと思われる。

# 根来寺の油倉

菅原　正明

## 1　甕倉の発見

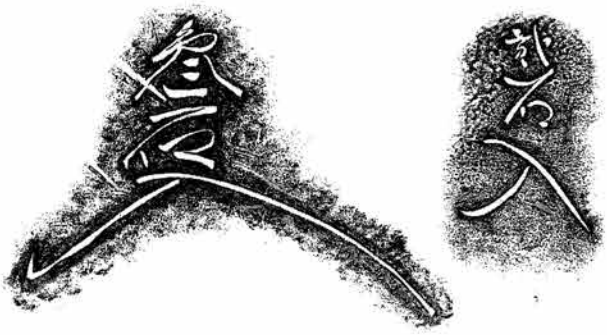
**a．埋甕遺構**　和歌山県教育委員会はここ10年間、根来寺山内で発掘調査を行っており、天正13年(1585)の羽柴秀吉の根来攻めの際の兵火の跡を示す焼土や多くの遺構を検出し、坊院の一端を明らかにすることができるまでになった。この中で注目すべきものに「埋甕遺構」がある（第１図)。この埋甕遺構は従来「甕ピット」と呼称されてきたもので、これまでに20個所以上発見されている。この埋甕遺構は地面に深さ50～60cmほどの穴を掘って大甕を複数数列、あるいは一列に並べて据付けているものであり、中には大甕を地下室に据付けている地下式の埋甕遺構もみられる。埋甕遺構内の大甕のほとんどが備前焼で、大人が一人はいるくらいの大きさがあり（第２図)、肩部外面に窯印と共に弐（二）石入とか参（三）石入とかヘラ書きされている（第３図)。弐（二）石入は口径56cm、器高96cmほどで、参（三）石入はその一廻り大きい。数は少ないが常滑焼の大甕を一緒に据付けていることもある。この埋甕遺構は大甕を

第１図　埋甕遺溝

第２図　備前焼大甕

据付けた建物とみられ、倉として機能したと思われる。ここでは大甕をまとめて倉の土間に据付けている埋甕遺構を便宜的に以下「甕倉」と」仮称する。この甕倉の形態や規模には規格性がなくまちまちであることから、各坊院ごとに甕倉を建てたと推定した。

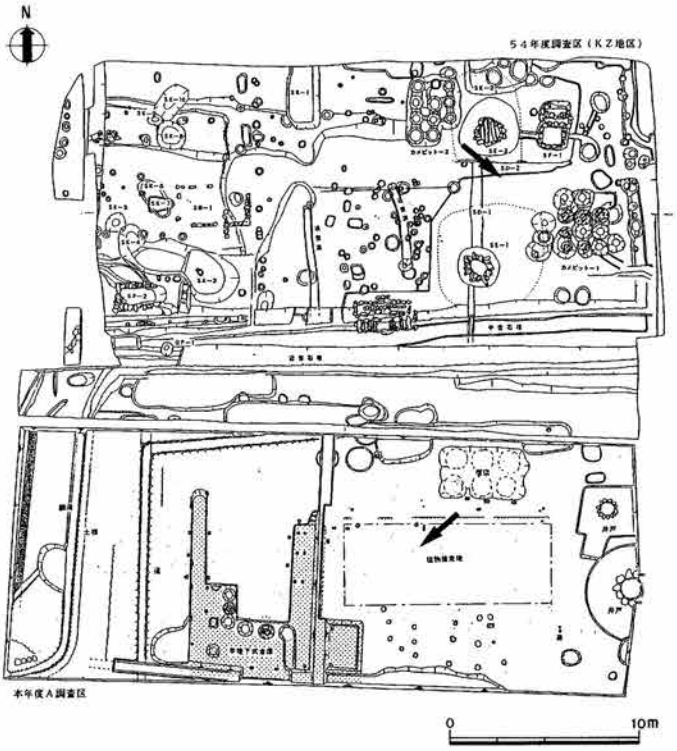
**ｂ．新・旧甕倉**　甕倉の遺構には大甕が残存している場合と、すべて抜取られ、その抜取り穴を山土で埋めている場合とがある。前者はほとんどの大甕内、あるいは大甕の抜取り穴の埋土中に焼土や木炭がはいっており、大甕の形式から、天正13年の兵火で廃絶した甕倉跡であると考えられるのに対して、後者は大甕抜取り穴の中には焼土や木炭を含まず、埋戻されているので天正の兵火以前に他の地点に移設されて廃絶した甕倉跡とみられる。前者を新甕倉、後者を旧甕倉とする。この旧甕倉と新甕倉とが同一敷地内で検出されることが多く、新甕倉には15世紀代の大甕を据付けていることもあり、旧甕倉の大甕の多くは新甕倉に移設されたものと推測する。例えば円明寺の東側で行った発掘調査についてみると、昭和55年度にKZ調査区で検出した坊院の敷地では甕倉を北側から南西側に移設しており、また昭和62年度にNG87-2A調査区で検出した坊院の敷地では同じく甕倉を北東側から南西側に移設している（第４図）。この甕倉の移設はその中の大甕数がほとんど増加していないことから、甕倉の規模拡大のためではなさそうだ。これらの大甕の埋置時期は新甕倉遺構に残存していた最も新しい大甕の形式及び旧甕倉遺構の埋土中から出土した遺物の形式から旧甕倉は15世紀後半に建てられ、新甕倉は16世紀後半に建てられたものとみられる。



第３図　備前焼大甕の容量

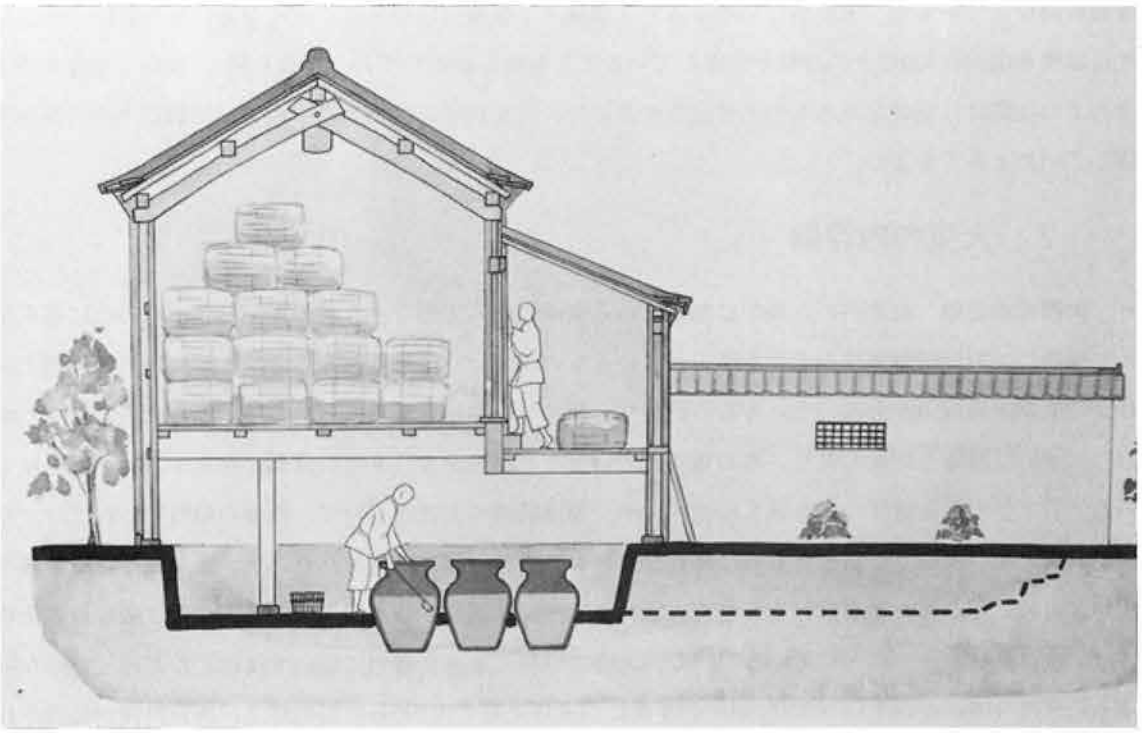
**ｃ．甕倉の構造**　甕倉の建物はすでに失われているのでその構造はなかなか把握しにくい。しかし幸なことに、昭和62年度にNG87-2A調査区で検出した坊院（第４図の南側の坊院）の甕倉SB01は地下式倉庫であったため、その平面形や規模・地下室の様子等の下部構造が明らかで、それに続く上部構造を推定できた。その規模は東西長11.5ｍ、南北幅４ｍ、深さ0.8ｍで、北面の東側及び西側に角状に突出し

た出入り口が2個所あり、スロープ状に地下に降りるようになっている。地下室の南寄りの床面に床束の礎石が東西に3個並び、その北側に大甕を7個据付けていた。この地下室の壁は真っ赤に焼けており、また床束の礎石も柱位置は黒くその周りは赤く焼けていた。さらに埋土中から焼けて赤くなったスサ入の壁土や瓦、それに炭化した建築部材の小片や炭化米が多量に出土した。良好に残っている壁土は厚さ20cm以上あり、表面から5cmほど赤く焼けている。また壁土には竹小舞が残っているものもある。これらのことからこの倉は土蔵造り2階建で上は米倉、地下は甕倉であったことが判明した。鳴海祥博氏にこの倉の復元図を描いていただいた（第5図）。この他に、昭和55年度のⅠ-2次調査区で発見した甕倉は、埋甕を取り囲むように人頭大の石を矩形に並べており、これは土蔵の壁の下の基礎地業であり、この甕倉も土蔵造りと考えられる。

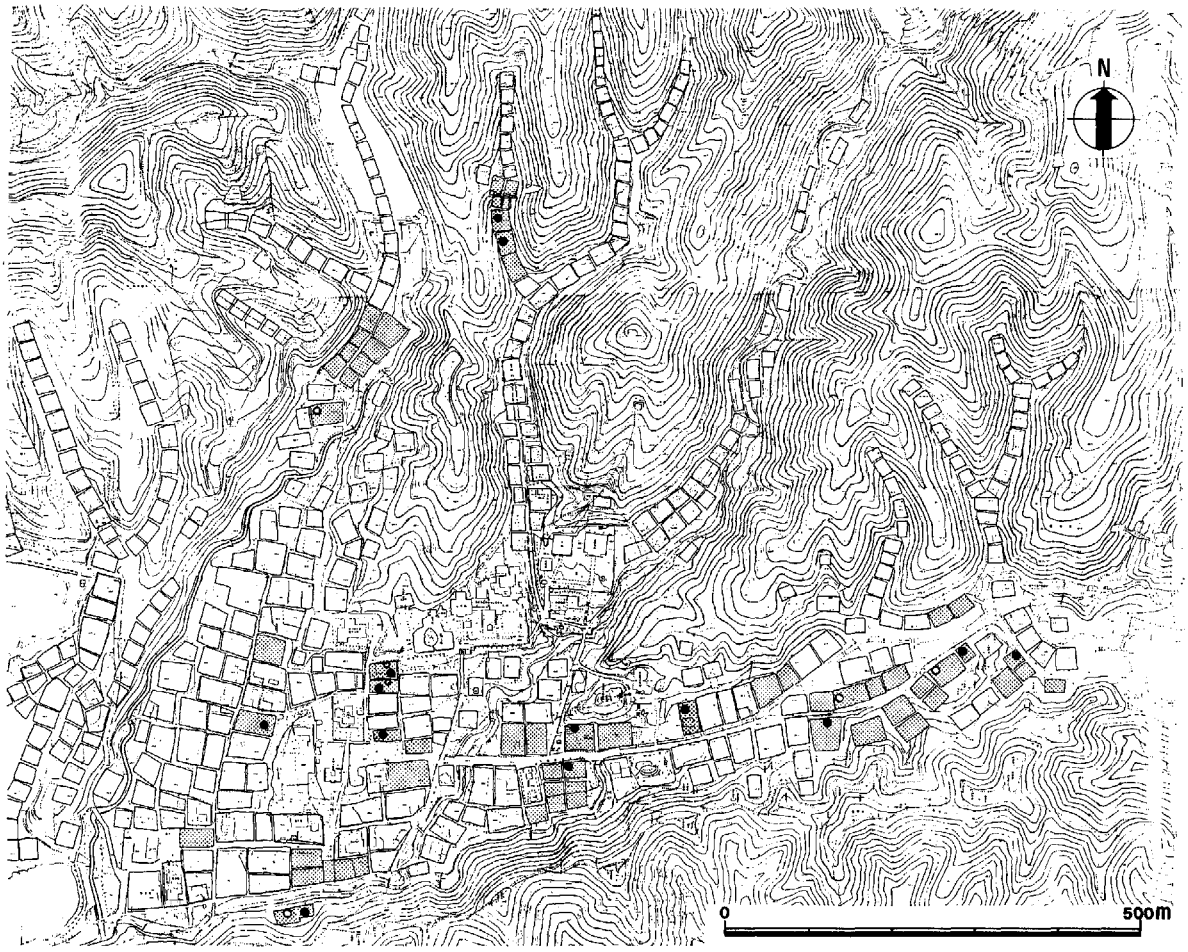



第4図　旧甕倉と新甕倉

**d．甕倉の大甕数**　これまでの発掘結果よりみると、甕倉は各坊院ごとにその建物の形態及び規模・大



第5図　倉の復原（米倉・油倉）



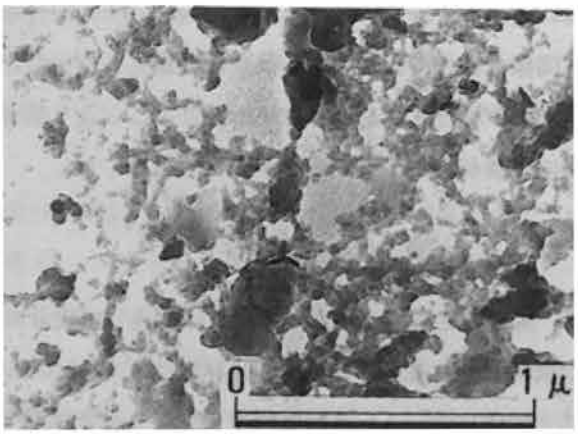
第６図　根来寺の坊院と甕倉

甕数が異なっているが、大甕数は平均すると１甕蔵で７個据付けていたことになる。また先に、天正13年には根来山内に450以上の坊院が存在していることを明らかにしており（第６図）、少なくともその３分の２の坊院には甕倉があるものと推定されるので、天正13年には根来寺全山で2100個以上の大甕を所持していたとみてもよい。

## 2　大甕の内容物

**ａ．大甕の内容物**　甕倉内の大甕には割れている個所に沿って幅２～３㎝の布を貼り、その上に漆を塗って補修し、内容物が漏れ出るのを防止しているものがしばしば見られること、また大亀の口縁部上端および底部内面縁辺が磨耗しているものがあり、柄杓で内容物を汲み出したものとみられることなどから、大甕には液体をいれており、木の蓋をしていたことが分かる。また口縁部に布をかぶせ頚部を紐で結んで蓋としている痕跡のある例もある。従来、埋甕遺構の大甕について、紺屋の染料をいれていたものであるとか、火薬とか酒を作るのに使われたとか、食料の保存に使われたとか、また油や味噌・醤油をいれるのに使われたとか言われてきた。これまでの発掘調査で埋甕遺構の大甕内からは甕倉の廃絶後にはいった遺物が少々出土しているだけで、大甕にいれてあったものについてはほとんど残っていない。ほとんど残っていないというのは、昭和62年度に根来寺大塔の南200ｍに岩出町立民族資料館が建設されることになり、建設に先立って事前の発掘調査を行った際に検出した甕倉の中の大甕内の底から黒色の

タール状のものが検出されたのであるが、担当者が写真撮影の際にこのタール状のものを全部ふき取ったとのことで、現在その資料は残っていない。しかし詳細はこの大甕の内面を観察してみると胴部内面に黒色物が付着していることが明らかとなった。



第7図　カーボンボール

**b．大甕に付着している黒色物**　そこで、これまで出土した多数の大甕に黒色物が付着しているものがあるのかどうかについて再検討した。その結果、大甕の内面に黒色物が付着しているものが多数あることが判明した。この黒色物は大甕の胴部内面や頸部内面に付着していることが多く、それもその上端は水平ではなく波状であり、底部内面には見られなかった（図版の1・2）。この黒色物は薄く付着しているものや厚く膜状に付着しているもの、部分的に付着しているもの、真っ黒く広く付着しているもの、漆膜のように光沢のあるものなど色々みられた。さらにこの黒色物は大甕の内面だけではなく外面にも付着しているものもある（図版の3・4）ことが明らかになってきた。

**c．黒色物の電子顕微鏡観察**　大甕に付着している黒色物は大甕内容物と直接関係していると考えられた。この黒色物は肉眼観察によるとススのように見えるので、通産省大阪工業試験所の藤井禄郎・池田茂氏にこの黒色物を電子顕微鏡で撮影していただいたところ、カーボンブラックやカーボンボールが観察され、この黒色物が炭素であることが判明した（第7図）。とすると、なぜ大甕に炭素が付着したのか、またこの炭素が大甕に内容物といかなる関係にあるのかという問題が浮かび上がってくる。根来寺が天正13年に羽柴秀吉の焼討にあい、伝法院の建物と南大門のみを残してすべて焼失しているので、この時に甕倉も焼け、大甕の内容物が炎上し、大甕に黒色物が付着したとみて間違いはあるまい。ただしすべての大甕内面に黒色物が付着しているわけではなく、大甕内容物が焼けた際の温度により、ススの付き方が異なり、低温度の場合はこの黒色物が埋土と一緒にとれたり、発掘後の水洗いで流れたこともあろう。このようにみてくると大甕の内容物は燃える液体、つまり油であった可能性が最も高い。この大甕にいれていたものが油であるとすると、この油は中世の油座関係の文献の検討から、燈明に使われた燈油とみられる。

**d．黒色物に含まれる有機物**　大甕内面の黒色物は燈油が燃えて付着したものであるとすれば、黒色物に完全に炭素に成り切らない有機物が含まれているものと考えられる。この黒色物に有機物が含まれているのかを確認するため、黒色物の付着している大亀破片をベンゼン（$C_6H_6$）を用いて超音波処理し、有機物が析出するのかどうかを観察した。そのいくつかから有機物が析出し、薄黄色あるいは薄茶色に変わったので、この黒色物の中には有機物を含むものがあり、ベンゼンに析出したことが分かった。

**e．ゴマ油の燃焼実験**　以上見てきた黒色物の分析とは別に、素焼きの鉢にゴマ油をいれ、これを燃やしてみた。ゴマ油は常温では火を付けてもすぐには燃え上がらない。しかしこの油から灯芯をだして（油の表面積を大きくする）、それを火を付けると、灯明としての明りをとるぐらいは燃えるが、全体としては燃え上がらない。しかし油の温度を沸騰するくらい上げて火を付けると油はぱっと燃えあがり、真っ

黒い煙がもうもうふきだし、鉢の内面にススが付着した。このススの付着した状態は大甕内面の黒色物と同様であり、大甕の中の油全体が燃えあがったということは、大甕内の油が沸騰するくらい甕倉の温度があがったことを示している。このことより甕倉が火事になり燃えあがり、倉全体が高温になり、大甕の燈油が勢いよく燃え上がったと推測した。

## 3 油　　倉

**a．油倉炎上**　ゴマ油の燃焼実験に関連して甕倉の遺構についてみると、昭和62年度にNG87-2A調査区で検出した土蔵造りの甕倉SB01は火事で焼けており、地下室の壁が真っ赤になり(図版の5)、床面も一部赤色化している。さらに床束の礎石も赤色化していることなどから、この甕倉が焼けた時に地下室も燃えたものとみられる。壁土の赤色化については上屋の部材が燃えて落下して地下室が焼けたにしても、特に地下室に燃えるものがなければ、このように壁や床が赤色化することはなかろうと思われる。土蔵造りの甕倉の焼亡は類焼というよりも内から燃えた可能性が高い。このことは大甕に燃える液体がはいっていたことを示すものであり、先の検討より、大甕には液体がはいっていること、大甕内の黒色物はススであること、さらにこの黒色物から有機物が析出されていることから、この地下式甕倉の大甕の内容物は燈明に用いる燈油で、根来寺の甕倉は油倉とみられる。しかし根来寺の甕倉がすべて油倉であるとは断定できないが、根来寺山内にある各坊院がこの大甕で何かを生産していたとは考え難く、大甕の内容物は同一のものとみてもよいのではなかろうか。

**b．叩き割られた大甕**　天正13年の根来寺焼討の際に、新甕倉の大甕の多くは焼ける前に叩き割られ、また引抜かれている。昭和62年度にNG87-2B調査区で検出した地下式甕倉SB02の場合、大甕を3個並べて据付けていた抜取り穴があり、その内2個所の穴の中に大甕の口縁部がひっくり返されており、また抜取り穴の壁が焼けた状態で検出された(図版の6)。この付近に口縁部以外の破片が散乱しており、特に厚さ2～2.5cmの厚い底部は細かく割れていた。これらの破片はすべて接合でき、完形なり、さらに胴部外面にススの付着しているものもあり、甕倉が燃えたときには、この大甕は引抜かれていたことを示す。大甕が引抜かれたり、叩き割られた理由はどこにあったのであろうか。備前焼の大甕の場合40～50日間も連続して薪を大量に使い焼成したといわれており、きわめて高価であったとみられるので、この高価な大甕をこれほど大量に購入していることは、その数以上に、その中に貯蔵していたものは、さらに高価なものとみなければならない。秀吉が大甕を徹底的に破壊していることは、根来寺が再びこの大甕に燈油を蓄え、巨大な富を得ることを恐れたために相違ない。

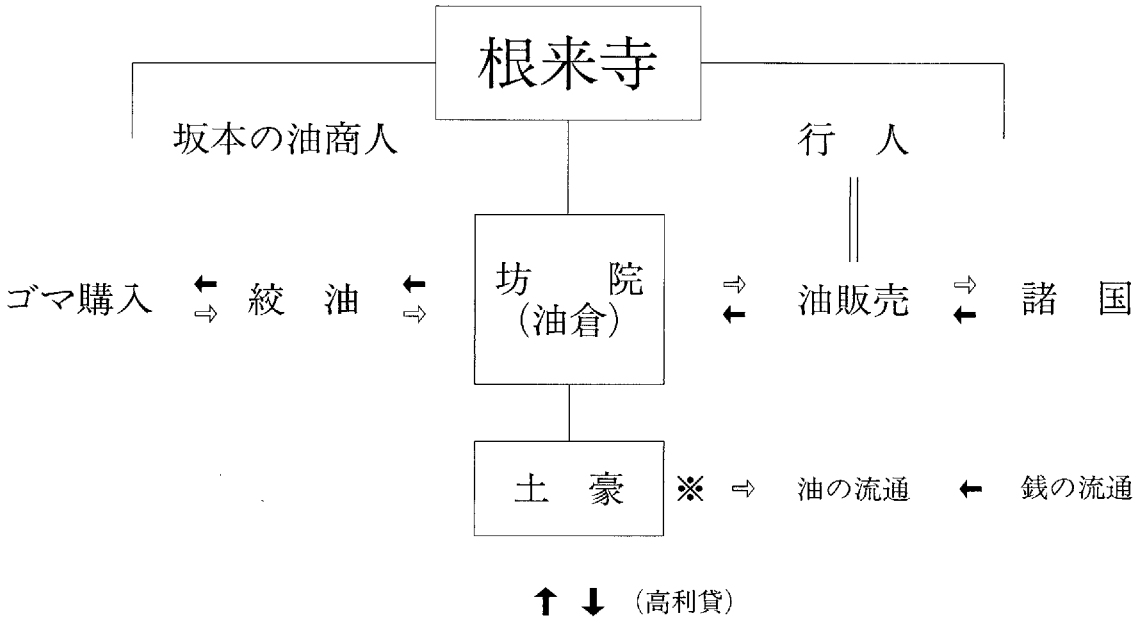
**c．大甕の容量**　甕倉出土の大甕の多くが備前焼の二石入であるが、中には三石入もみられる。堺環濠都市遺跡出土の備前焼大甕二石入（16世紀後半）2個の容量について藤木卓次・奥村一憲氏が電子計算機で体積計算を行い、その容量は311.441ℓ～379.674ℓであることを示しており、1石は180ℓであったものと思われる。すべての大甕に燈油が一杯はいっているとは限らないが、仮に二石入の大甕に燈油が3分の2はいっていたとすると、根来山内に天正13年に貯蔵された燈油は、1大甕に1.3石（234ℓ）はいっており、1甕倉が平均7個の大甕をもち、この甕倉が根来全山で300棟以上あると推定されるので、燈油の総容量は2730石（491400ℓ）以上で、これを銭に換算してみると（天正年間に紀州では燈油1升が150～200文）4～5.4万貫以上にもなる。ちなみに、平安時代の例ではあるが東大寺全山が1年間に使用

した燈油は「年料油6斛四斗八升五合」(『延喜式』主税上)であり、また高野山大伝坊院が治承2年(1178)に「常燈並臨時恒例御明料」(『根来要書』下)としてあげていた燈明は年間5石である。とすると、根来寺の1坊院の甕倉ではその2倍以上の燈油を貯蔵していたことになり、いかに膨大な量の燈油を根来寺が貯蔵していたのかを知るのである。

**d．燈油の生産と販売**　根来寺の各坊院の油倉の燈油の貯蔵量は自己消費にしては多すぎるので、この灯油を元にして商売をしていたものと考えられ、根来寺にはこの燈油を販売する機構があったものとみなければならない。燈油は水のようにどこからか汲んできたのではなく、燈油の原料となるゴマを入手し、それを絞油し、この燈油を各坊の甕倉に貯蔵し、そしてこの燈油を諸国に売り捌く販売網が完成していたとみられる。そこで燈油の製油から販売までの流通過程を江戸時代の例をとってみると、以下のような機構があることが分かる。この中で坊院が直接関与していたのは燈油の貯蔵だけであった。

1　ゴマ栽培⟶　2　購入(種物問屋)⟶　3　絞油(絞油業者)⟶　4　貯蔵(油問屋)⟶
5　販売(油屋)⟶　6　消費者(燈明)

**e．坊院の燈明**　根来寺の坊院がいかに燈明を貯蔵し、また販売していたのかについて記している文書は皆無である。そこで、発掘結果からどんなことが考えられるのか検討した。先に行った甕倉の大甕の検討より、大甕には燈油が貯蔵されていたと推測したのであるが、これに関連し坊院内からは絞油関係の遺構(ゴマを炒りまた蒸すヘッツイや炒りゴマを粉砕する唐臼・油を絞る長木などの遺構)は検出されず、坊院内では絞油は行われなかったと思われる。とすると各坊院は油倉に燈油を貯蔵し、それを販売していた可能性が高い。つまり各坊院は甕倉を建て、大甕を入手するなどの資本投下を行い、その製油・絞油を坂本の油商人に行なわせ、この油を販売して利潤を得ていたと推測されるのである。



**f．坊院の経済**　根来寺の行人方の多くが紀伊国・和泉国の国人・土豪層の弟子であり、山内に坊院を建て（和泉国熊取庄の中家―成真院、紀伊国那賀郡小倉の津田氏―杉ノ坊、紀伊国海部郡雑賀の土橋氏―泉識坊、紀伊国名草郡岩橋の湯橋家―威徳院、和泉国佐野の藤田家―西蔵院など）、宗教的権威を背景に根来寺と郷村の名主層とが強く結びつき、地域的政治権力を結集させ、和泉国・河内国の荘園領主に対する高利貸活動・加地子田畑の集積を展開したといわれている。このような根来寺の経済基盤は燈油で得た資本を元にしていたとみられる。

## 4　根来寺の発展

根来寺は格別に裕福であったことを示すことにより、その経済基盤が他の諸寺院を圧倒するほど組織だった強力なものであったことを逆に示したい。15～16世紀の根来寺の興隆状況についてその具体例をあげる。

1　坊院が各谷間の奥にまで進出するのは15世紀中頃からでであり、16世紀後半に最大に達し、その総数は450を超えている。

2　甕倉（油倉）が建てられ始めるのは15世紀後半からであるが、16世紀後半にその数が最大になっている。この甕倉（油倉）の大甕の中で最も多い形式は16世紀後半に所属するものである。

3　16世紀後半には坊院の日常食器のほとんどが中国製の陶磁器で占められており、出土焼物の中で輸入陶磁器が30％を超えている。この中で染付と白磁が多い。こればかりでなく漆器が多用されており、都や城館出土の食器と比べて勝るとも劣らない。

4　根来寺は天正13年の兵火により廃寺同然になり、根来で育ち、技術を身に着けた大工たちの多くも生活の場を失った。しかし鶴衛門・吉衛門・刑部左衛門・塀内は豊臣秀吉の信任の厚かった高野山の僧、木食応其を介して、各地の寺社や霊廟の造営に携わるようになったらしい。また平内氏は鶴衛門とともに江戸時代には江戸幕府の大棟梁となり、日光東照宮をはじめ幕府の大造営に関与した。建物を飾る彫刻の技術こそ、根来寺の大工が中央権力に受け入れられ、桃山建築の華やかさを支えた大きな力であったと思われる。根来大工が実力を蓄えることができたのは根来寺の豊かな経済基盤に支えられたからであろう。

5　ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスの『日本史』によると根来寺は「彼らの寺院なり屋敷は、日本の仏僧（の寺院）中、きわめて清潔で黄金に包まれ絢爛豪華な点において　抜群に優れ」ており、また「これらの建物は日本に於てみるべき最も壮麗なるもの」と記録している。さらに『日本西教史』上は「寺院ハ杉、糸杉ノ材ヲ以テ造リ、恰モ宮殿ノ如シ、大堂美室ノ内ニハ、珍器名画ヲ列ス」とも誌されており、これらは発掘成果からみるとあながち誇張した表現とも言えない。

6　根来寺の南の前山には土塁や櫓・堀切りなどの砦のような施設が築造されており、行人は鉄砲で武装し、根来寺の巨万な富を守っていたと考えられる。ルイス・フロイスによれば「彼らは軍事にはきわめて熟達しており、とりわけ鉄砲と弓矢にかけては、日頃不断の訓練を重ねていた」という。根来寺坊院跡の発掘で山内の各地から表面が白色になった鉛の鉄砲玉や鉄砲の原料となる鉛の延版が出土している。

7　秀吉の根来攻めの直前に、根来寺から高野山へと逃れ、のちに京都の智積院の能化第三世となった

日誉僧正は『根来破滅因縁』で「下地富貴安楽ノ寺成ハ、財宝満々テ在之故、諸軍物取ニ心掛ル」と記し、根来寺の豊かさを指摘している。

このように中世にまれにみる急成長を遂げた根来寺の繁栄は、莫大なる富の蓄積なしには達せられなかったであろうと思われる。この根来寺の興隆の基盤は灯油を元にし、それを運用する経済機構にあったとみることにより理解できるのである。

**註**

1 和歌山県教育委員会『根来寺坊院跡』1980～1988年、菅原正明「埋もれた中世の根来寺」(『根来寺展』1988年)

2 上田秀夫「51年度の調査」8頁(『那賀郡岩出町根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅰ』1978年)

3 武内雅人「KZ地区の調査」55頁(『根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅲ』1980年)

4 村田　弘「中世の遺構」9頁(『根来坊院跡　昭和62年度』1988年)

5 菅原正明「根来寺の変遷」42～45頁(『根来寺展』1988年)

6 上田秀夫「51年度の調査」図版第3(『那賀郡岩出町根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅰ』1978年)

7 小野正敏「越前一乗谷における町家について」812頁(『論集日本原史』1975年)

8 上田秀夫「根来寺の遺構と塔頭の構造」25頁(『シンポジウム一乗谷と中世都市』1986年)

9 臼井洋輔「備前焼年銘入大甕の時代的特徴」69頁(『岡山県立博物館研究報告5』1984年)

10 毛利哲夫「三木城発掘調査」54頁(『三木市埋蔵文化財調査概報―昭和50年度～59年度―』1986年)

11 水野正好「主要文献解題」320頁(『発掘が語る日本史』4近畿　1987年)

12 杉本　宏「宇治市街遺跡第2次発掘調査概報」7頁(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第8集』1985年)

13 大甕にもし油がはいっていたとすれば脂肪酸が検出されるものと思われたので、残留脂肪酸の分析を依頼しているが未だ正式な分析結果を得ていない。中間報告によると、甕倉の発掘所見と大きく異なり、油が火事で燃えたときの変化やその後の劣化、及び埋没地層との関係などさらに細かな分析が必要であると思われるので、今後慎重に見守ってゆきたい。

14 豊田　武「油座」154～157頁(『座の研究』1982年)

15 村田　弘「中世の遺構」18頁(『根来坊院跡　昭和62年度』1988年)

16 野田芳正「堺環濠都市遺跡発掘調査報告―車之町東1丁　SKT21地点―」注記15-3　511～512頁(『堺市文化財調査報告第20集』1984年)

17 津田秀夫「燈油」211～220頁(『講座・日本技術の社会史　1農業・農産加工』1987年)

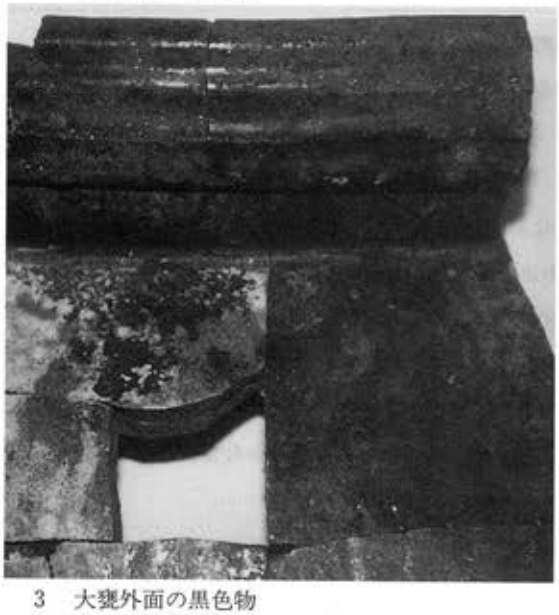
18 福尾猛市郎「戦国期根来寺の大名領主性について」39頁(『広島大学文学部紀要12』1957年)、三浦圭一「根来寺と和泉熊取の中家」361頁(『中世庶民生活史の研究』1984年)

19 村田　弘「根来寺坊院における焼土出土遺物とその組成」162頁(『貿易陶磁研究No.8』1988年)

20 内藤　昌「豊臣秀頼の大工」・「伊達政宗の大工」・「徳川家光の大工」『近世大工の系譜』1981年、鳴海祥博「根来寺の大工」56～57頁(『根来寺展』1988年)

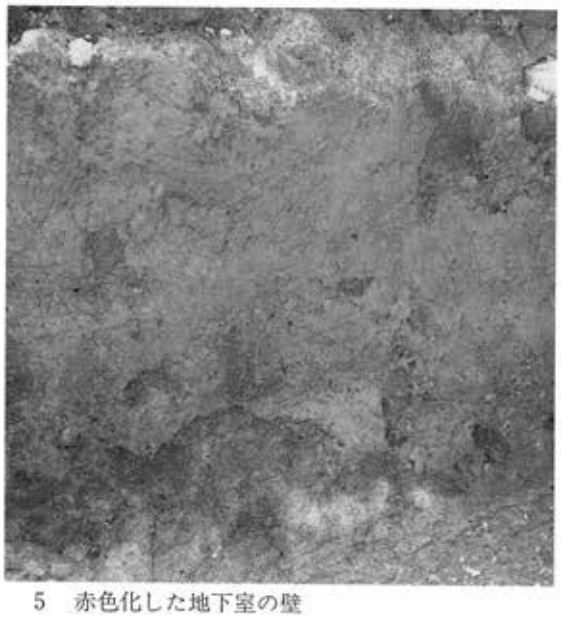
1　大甕内面の黒色物

2　大甕内面の黒色物



3　大甕外面の黒色物

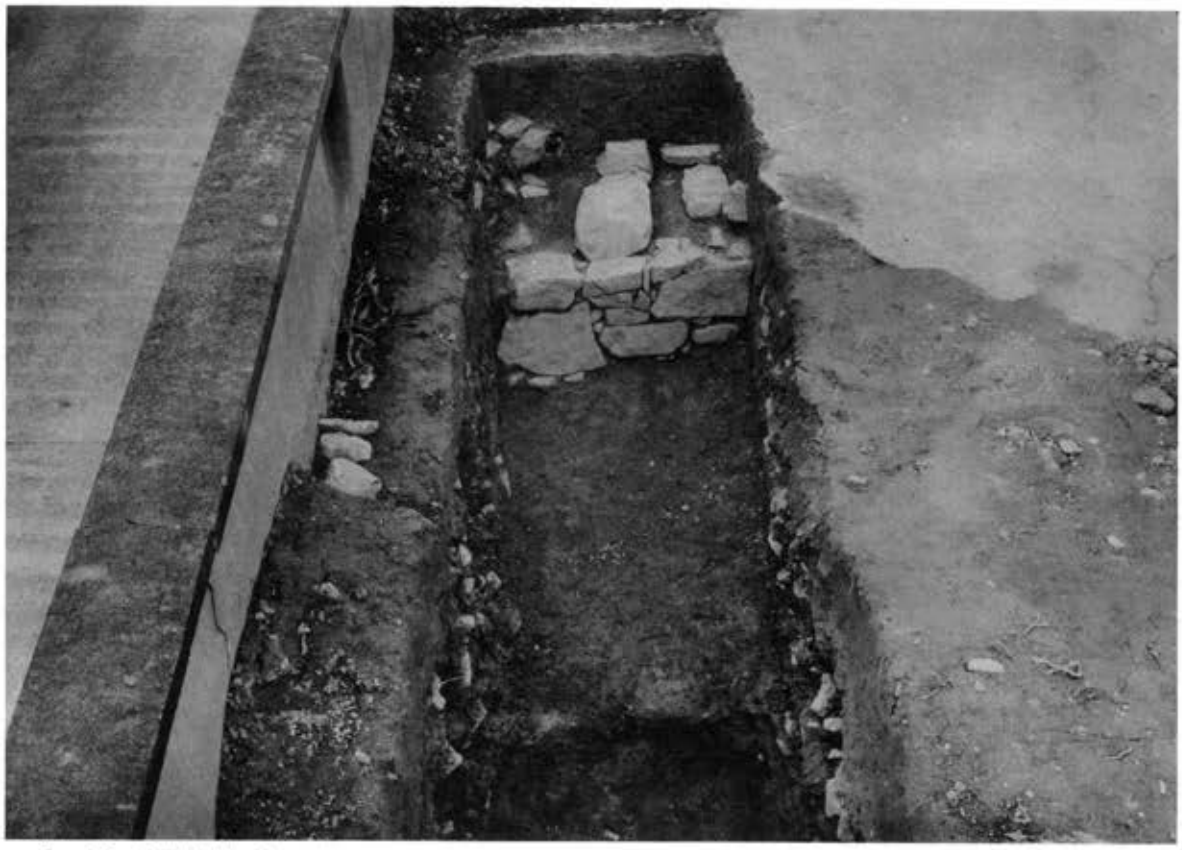
4　大甕外面の黒色物



5　赤色化した地下室の壁

6　引抜かれ、叩き割られた大甕

# 図　　版



1　Ⅰ－1区全景（南から）

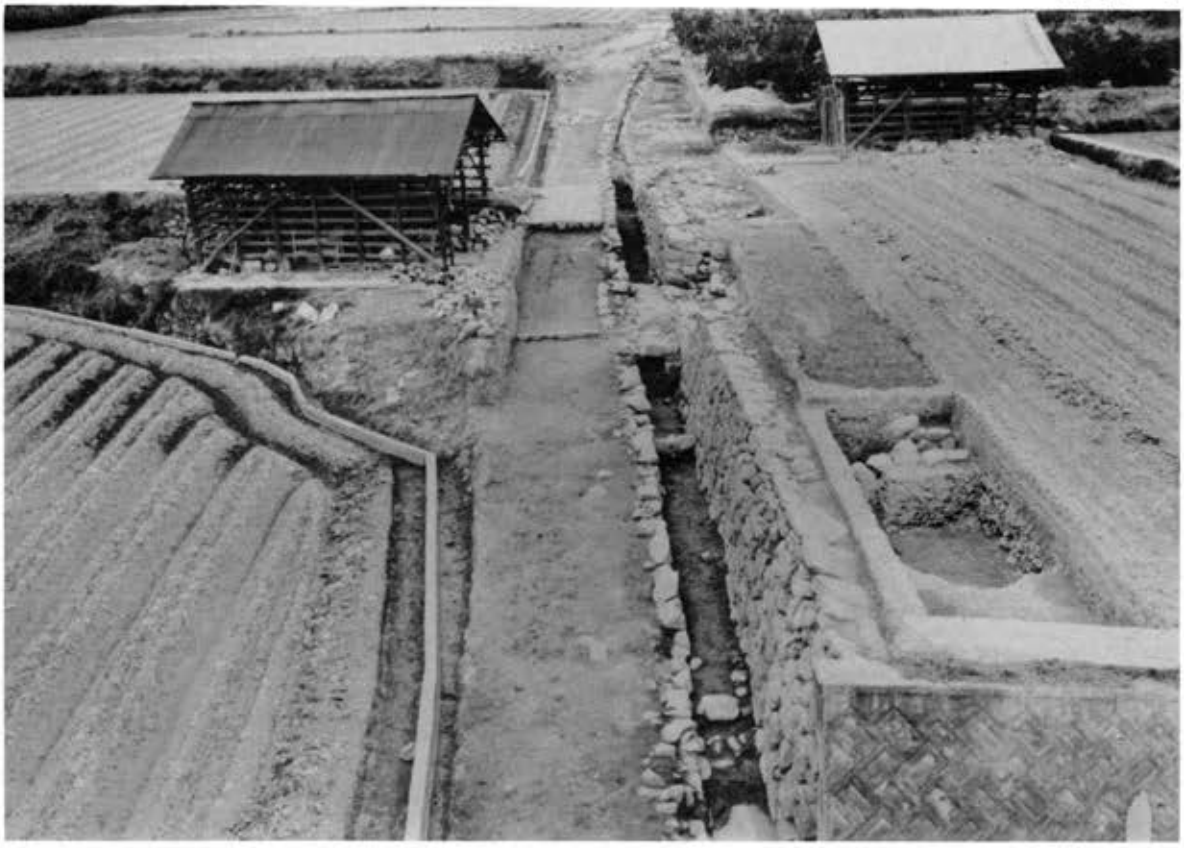
2　Ⅰ－2区全景（西から）

1　Ⅰ－4区全景（南から）

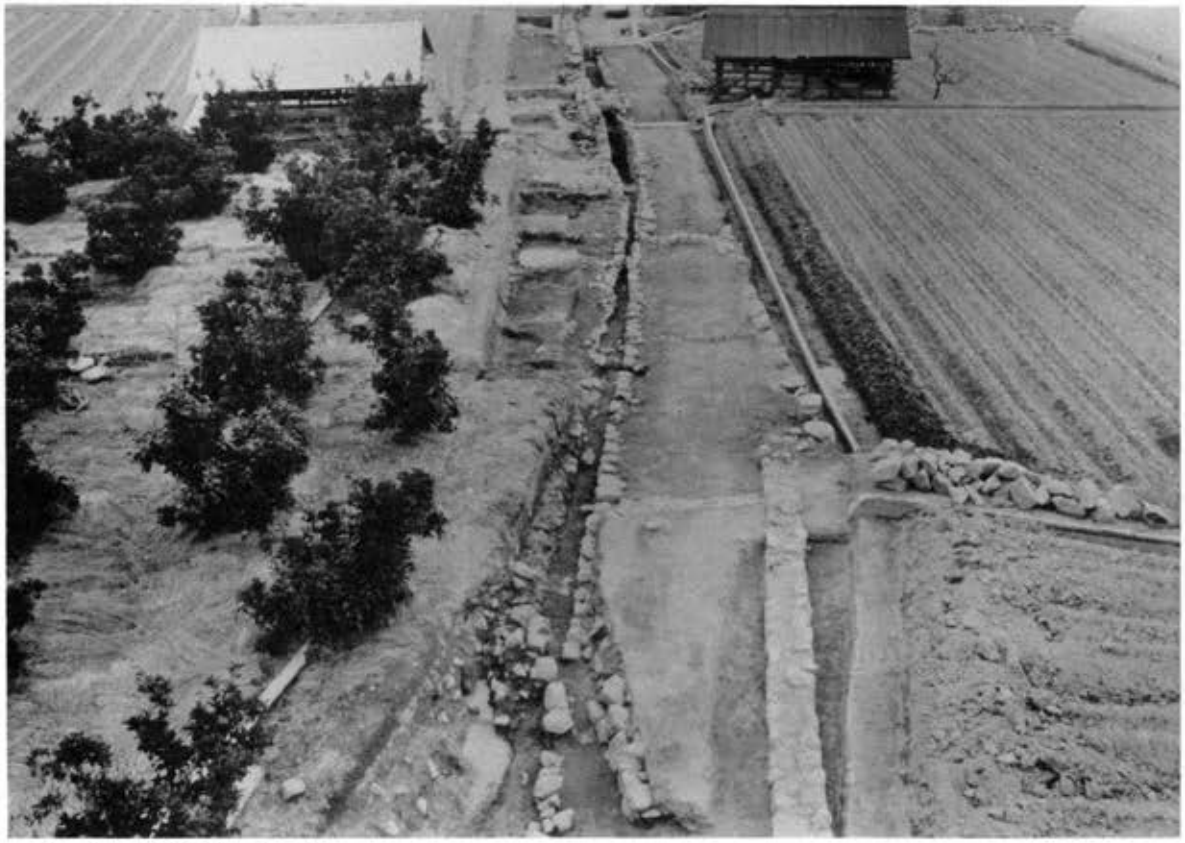
2　Ⅰ－3・4区全景（南から）

1　Ⅰ－3区　井戸ＳＥ－01（南から）

2　Ⅰ－4区　溝ＳＤ－04（南から）

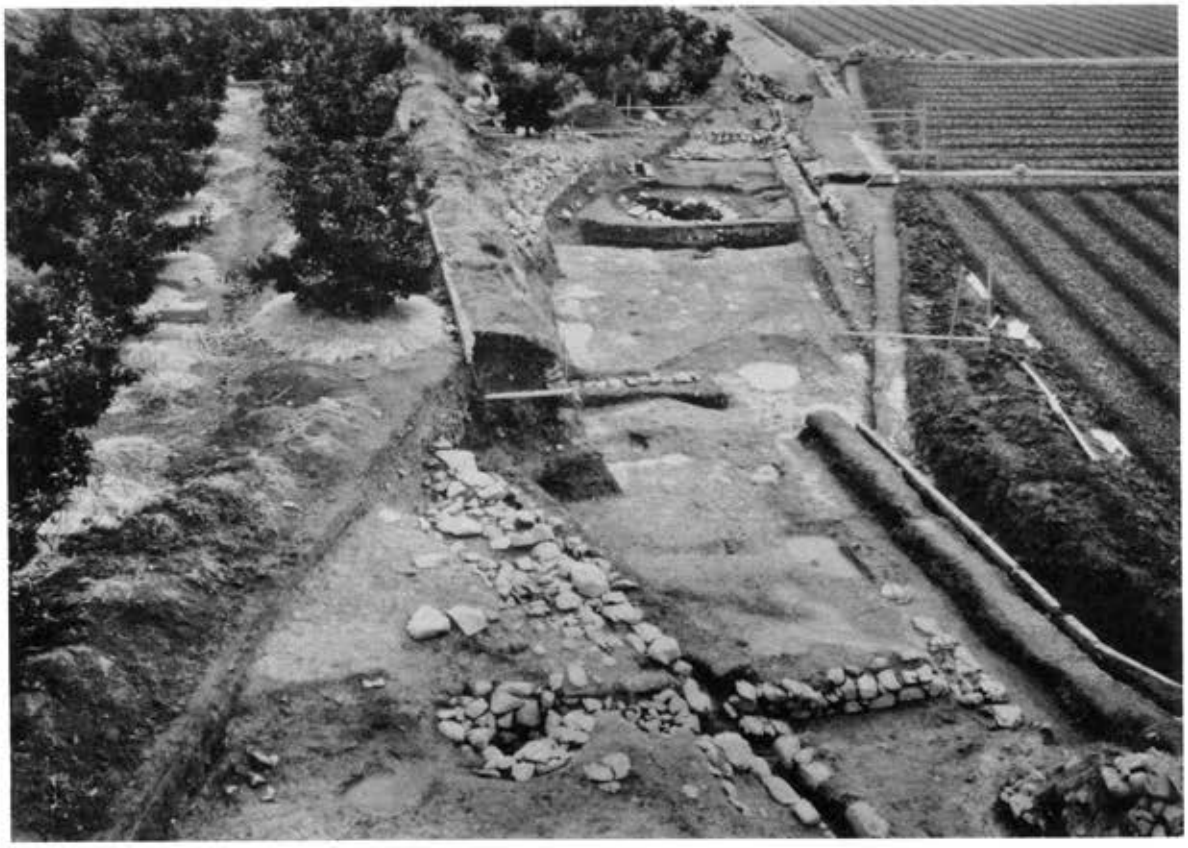


1　Ⅱ－1区全景（南から）



2　Ⅱ－1区全景（北から）

1　Ⅱ－2区全景（南から）



2　Ⅱ－2区全景（北から）

1　Ⅱ－1区　井戸ＳＥ－03（南から）

2　Ⅱ－2区　井戸ＳＥ－04（北から）

1　Ⅱ－2区　石垣ＳＶ－04・05（南から）

2　Ⅱ－2区　石垣ＳＶ－04・05，溝ＳＤ－20（東から）

1　Ⅱ－2区　溝ＳＤ－15（西から）

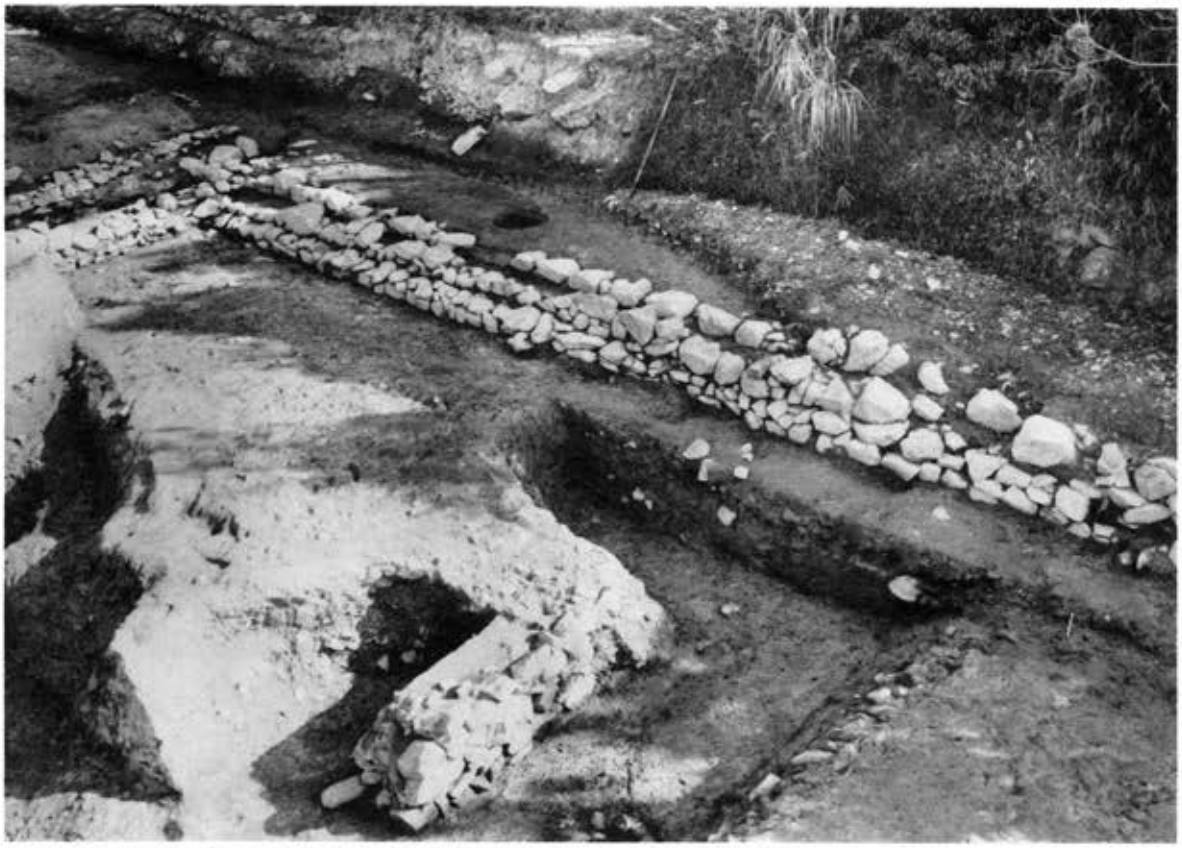
2　Ⅱ－1区　溝ＳＤ－09（西から）

1　Ⅱ－1区　道ＳＳ－01，溝ＳＤ－08，石敷－01（南から）

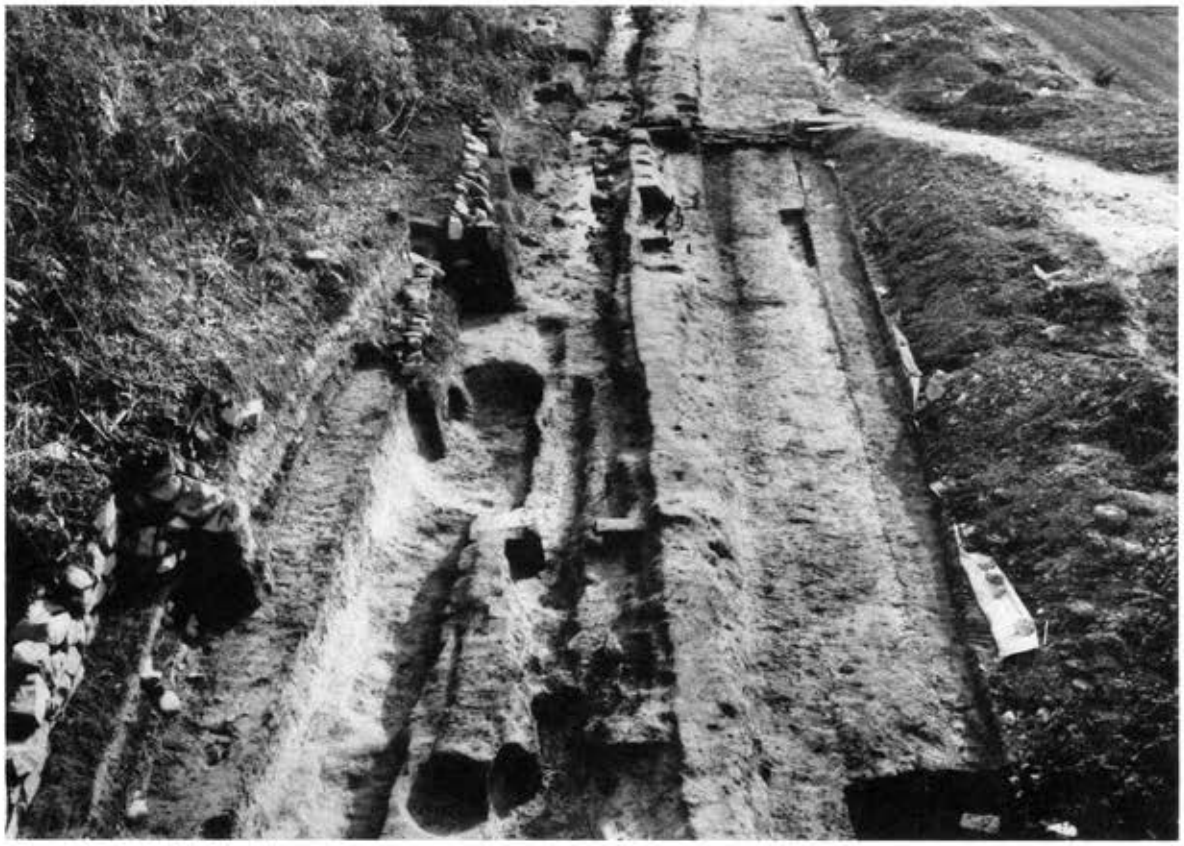
2　Ⅱ－1区　石垣ＳＶ－02（南西から）

1　Ⅲ－1区全景（南から）

2　Ⅲ－1区全景（北から）

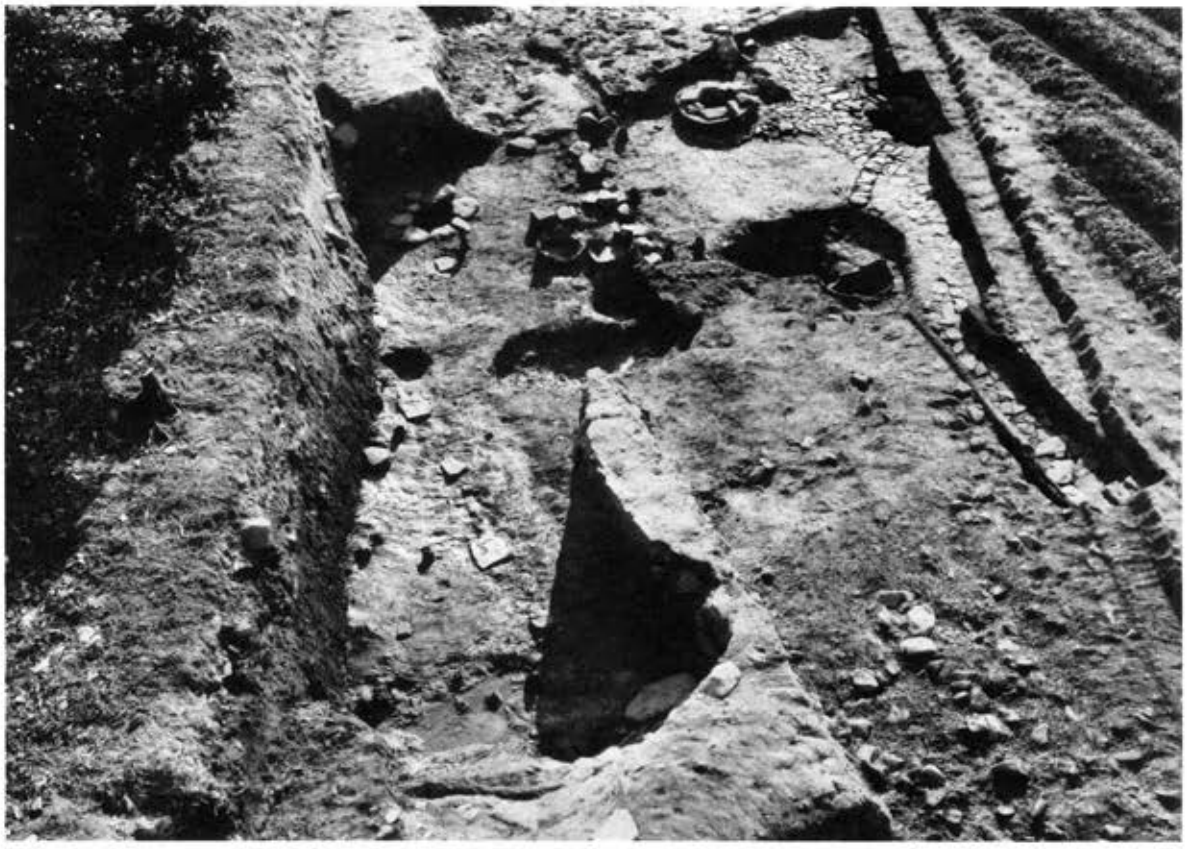


1　Ⅲ－1区北側　土壙ＳＫ－25，石垣ＳＶ－07・08・09（南西から）



2　Ⅲ－2区全景（北から）

1　Ⅲ－2区　埋甕遺構－03（南から）



2　Ⅲ－1区　建物ＳＢ－01全景（北から）

1　Ⅲ－1区　建物ＳＢ－01内礎石・杭列（北から）

2　Ⅲ－1区　建物ＳＢ－01中央部（北から）

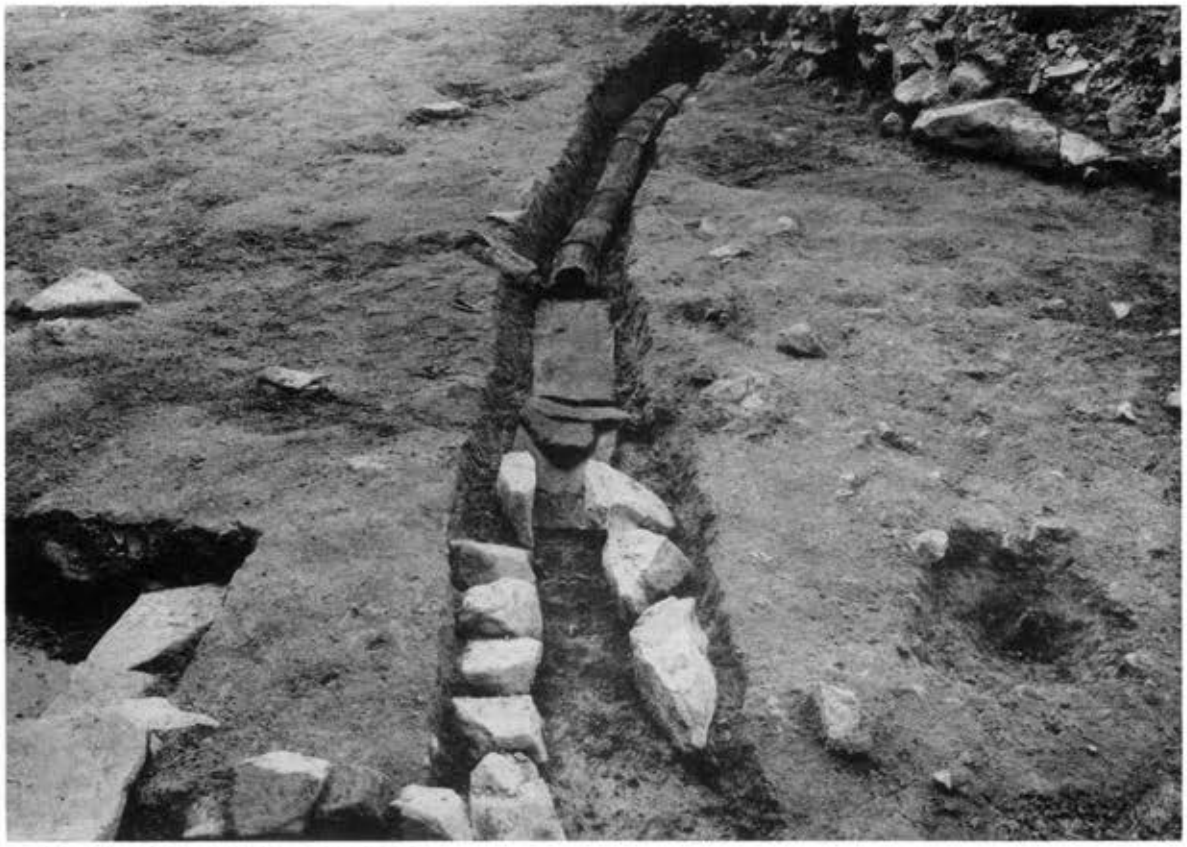
1　Ⅲ－3区全景（南から）

2　Ⅲ－3区全景（北から）

1　Ⅲ－3区　石段（南から）

2　Ⅲ－3区　埋甕遺構－04（北から）

1　Ⅲ－3区北側　石垣ＳＶ－15・16（西から）



2　Ⅲ－3区　溝ＳＤ－34（東から）

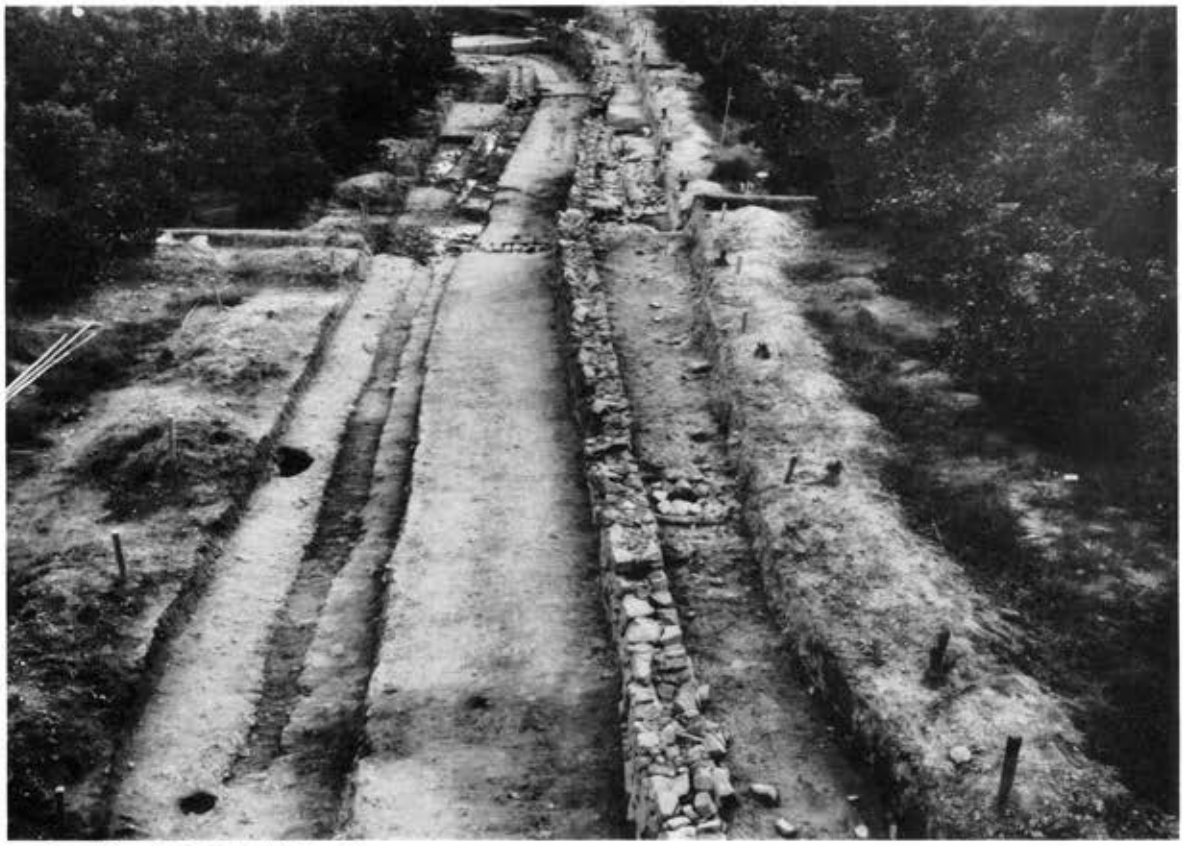
1　Ⅳ－1区　墓石検出状況（北から）

2　Ⅳ－1区　井戸ＳＥ－09（北から）

1　Ⅳ－2区調査前風景（南西から）

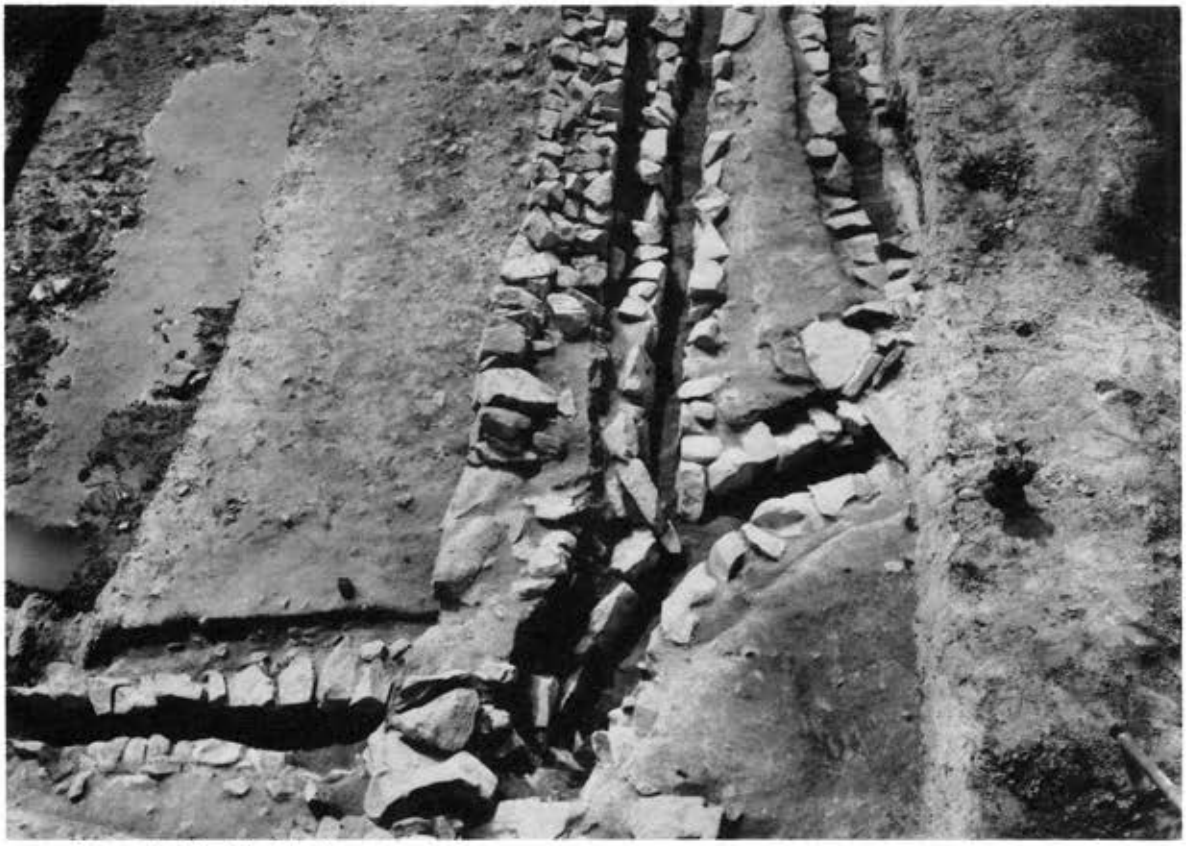
2　Ⅳ－2区全景（南西から）

1　Ⅳ－2区南側　石垣ＳＶ－17，溝ＳＤ－41（南西から）



2　Ⅳ－2区全景（北東から）

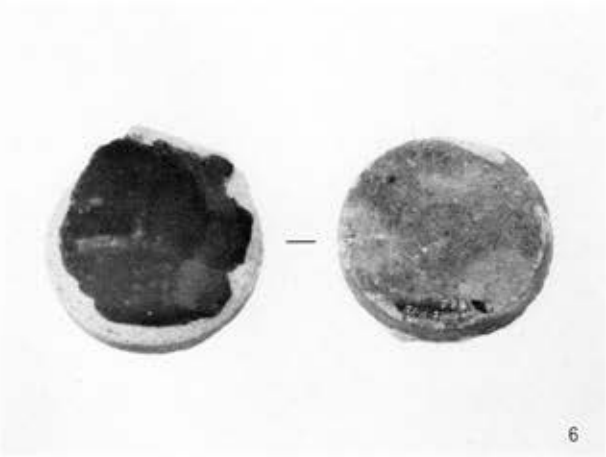
1　Ⅳ－2区　溝ＳＤ－44～47合流部（北東から）



2　同　蓋石除去後（北東から）

1

4


6

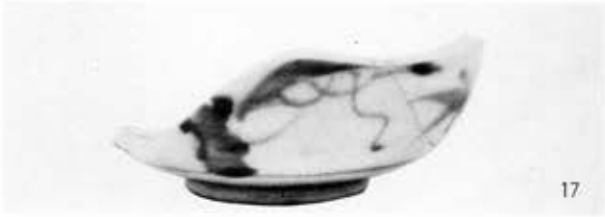
7

8

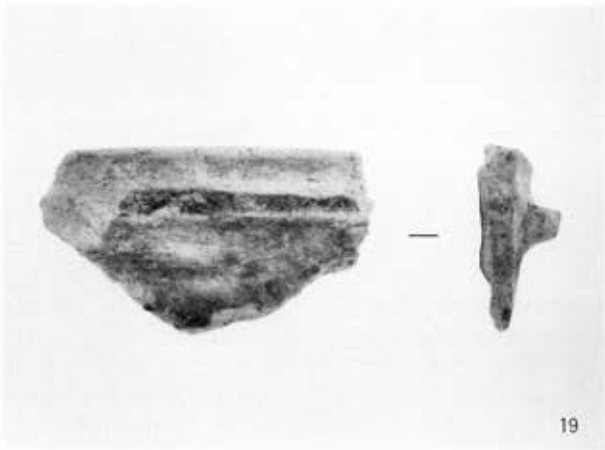
9

14

16

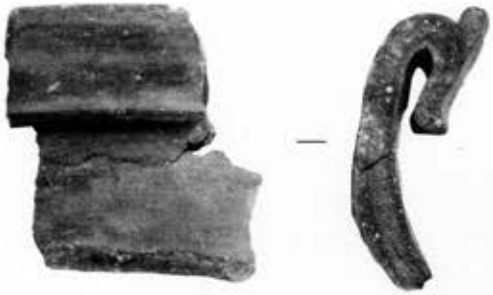

17

18

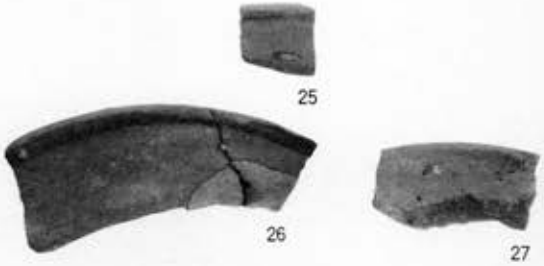

19

21

23



24



25

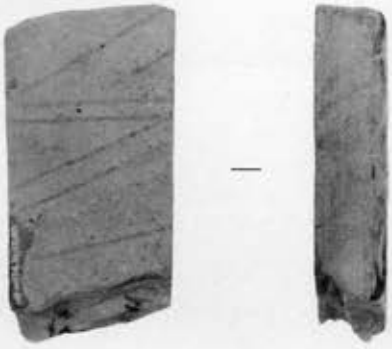
26

27

29

30

31



32

33

35

42

60

82

81

98

107

112

116

117

118

132

138

193

216

222

223

224

225

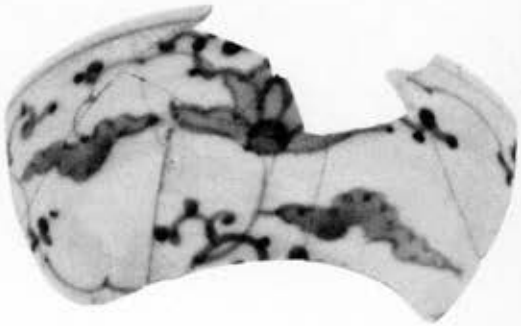
231

239

240

242

247



248

249

250

251

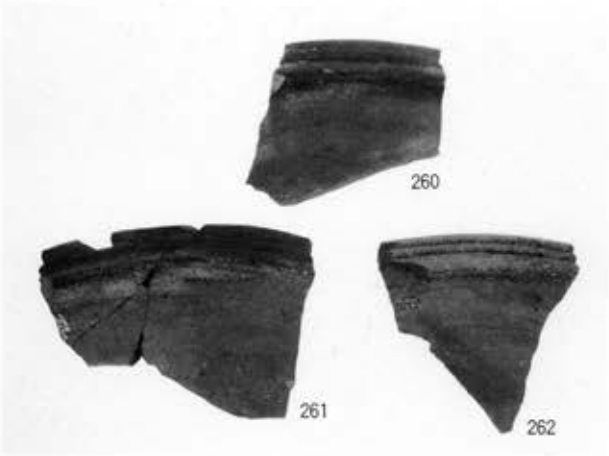
252

255

256

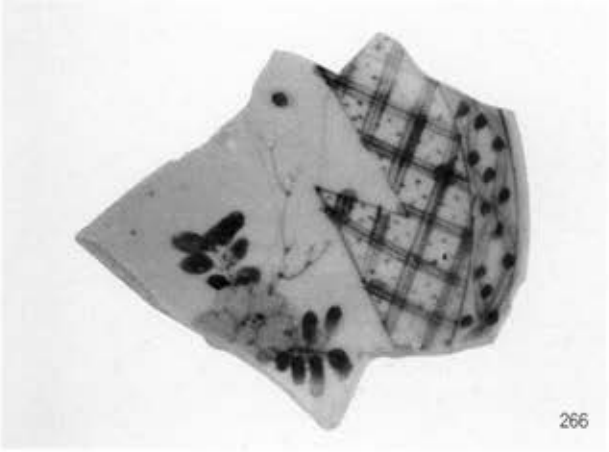
257

258


260
261
262

264

265


266

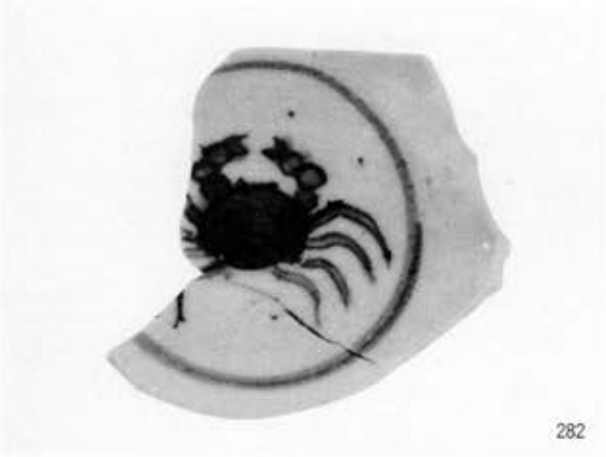
267

274

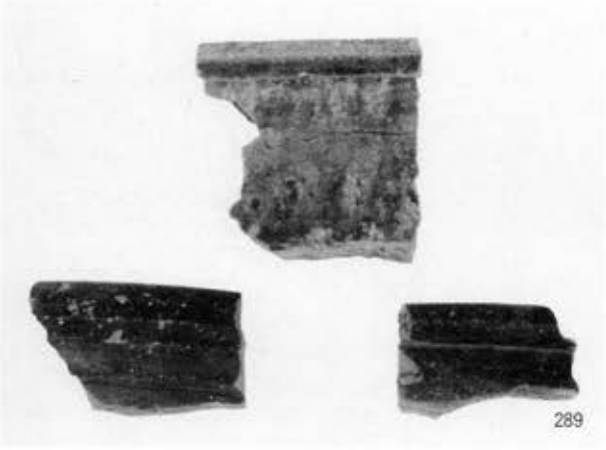
275

278

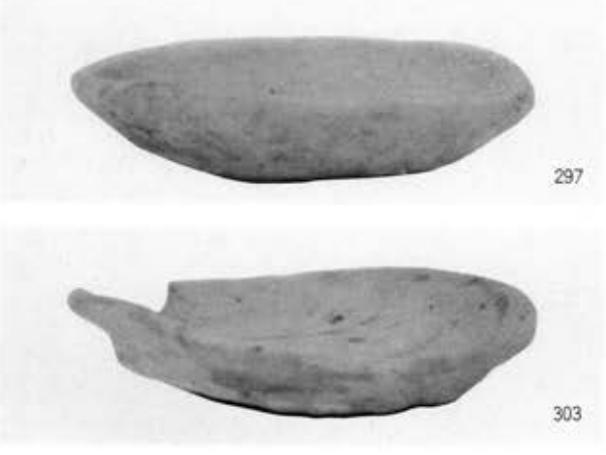
279


282

284


289

293


297

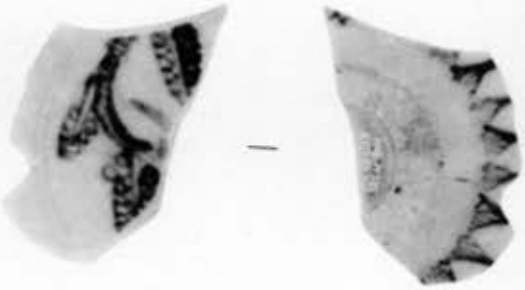
304


303


305

306

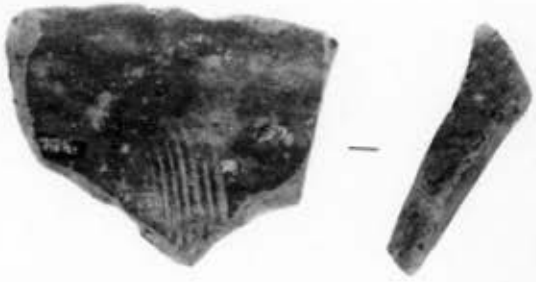
307



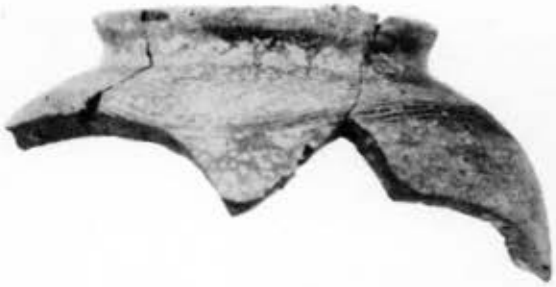
309

311

310



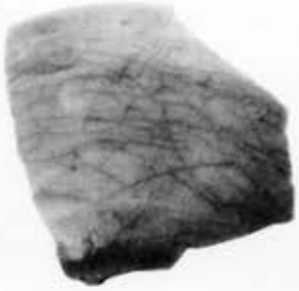
314



320

328

338



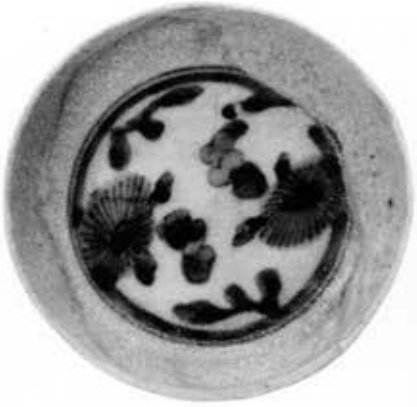
339

346

349

351

352

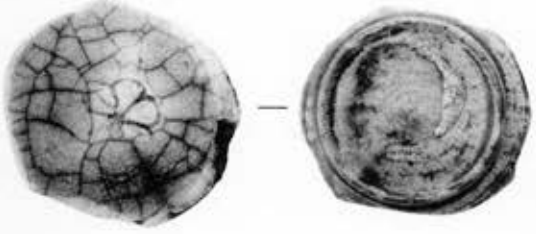


355

357

358

361

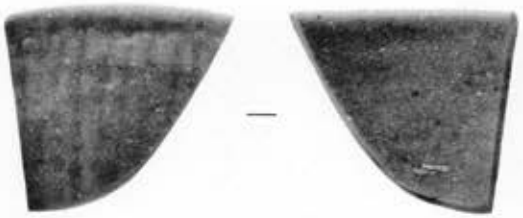


364

365

366

369



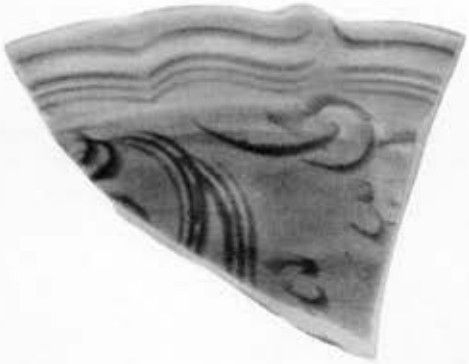
370

374

375

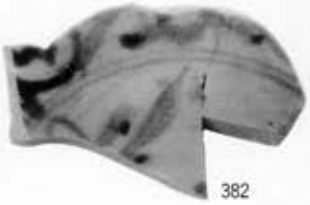
376

379

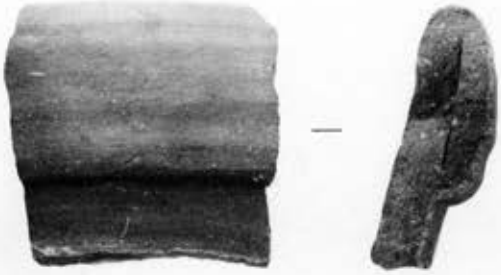


380

381

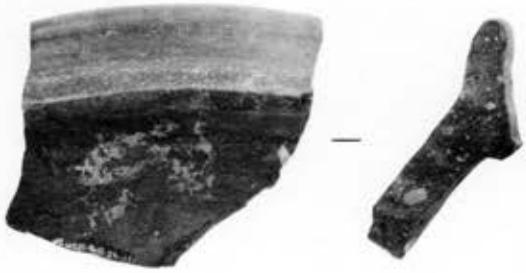


382



383

387



388

389

391

392

393

394

396

398

401

403

404

406

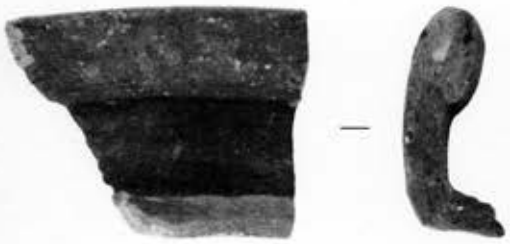
410

411

414

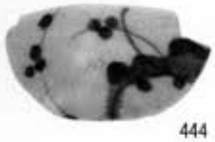
422

433

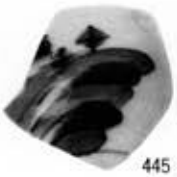


435

439



444



445

447

448

453

454

457

459

472

474

480

481

483

486

488

489

490

491

492

494

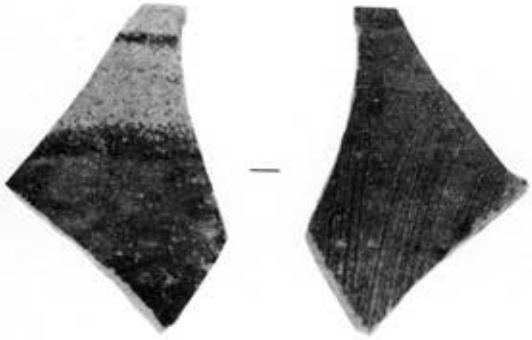
496

497

498

499

500



502

505

520

522

525

527

530

531

541

542

543

544

545

547

552

555

557

559

560

561

562

564

565

567

568

570

572

573

574

575

576

577

578

579

580

581

582

583

584

585

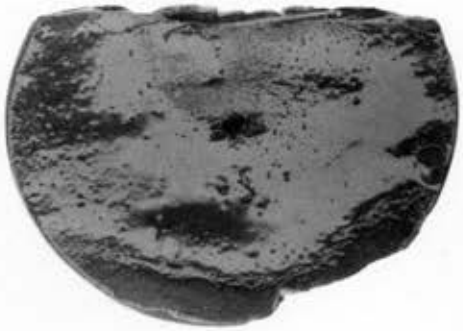
591

594

596

597

598



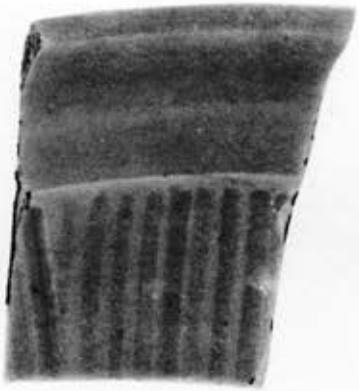
599

602

604

610

611


613

614

619

620

626

631

635

637

640

641

646

657

658

677

684

683

698

699

700

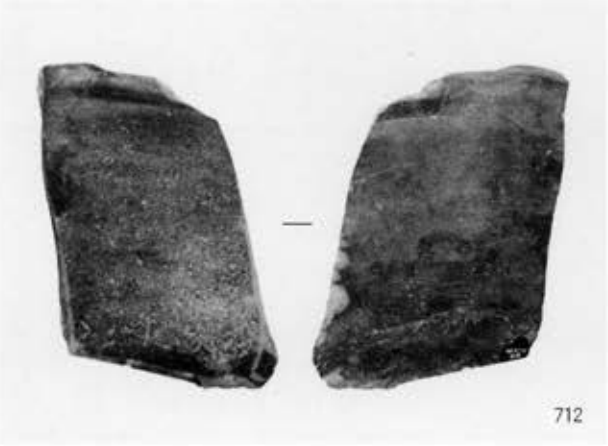
702

707

709

710

711


712

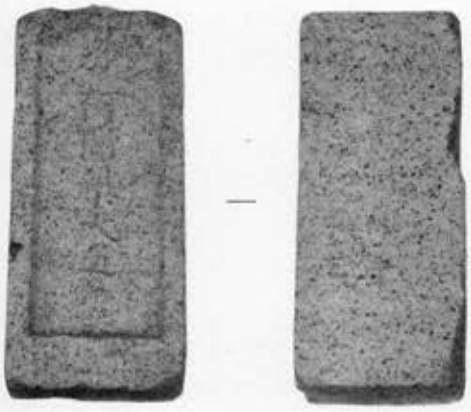
714

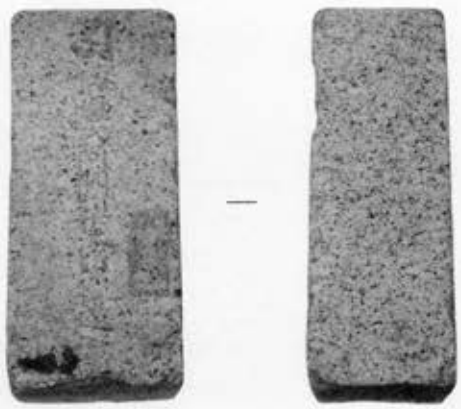
717

718

720

722


724


725

726

727

728

729

738

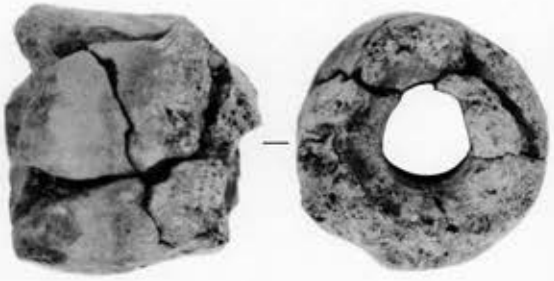
744

759

764

765

766


775

776

783

根　来　寺　坊　院　跡

—根来地区普通農道整備事業に伴う根来寺坊院跡発掘調査—

編　集　　(財)和歌山県文化財センター

発行日　　1989年3月

印　刷　　真　陽　社